

トノ町遺跡

阿南警察署庁舎改築工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第73集『トノ町遺跡』正誤表

頁・項目・差	誤	正
14頁・零真図版目次	図版17 遺物写真 (1) 1区 SA1001・SE1001・SK1006	図版17 遺物写真 (1) 1区 SA1001・SE1001・SK1002・ SK1005・SK1012
14頁・写真図版目次	図版26 遺物写真 (10) 2区 SP1440・SP1453・SD1026	図版26 遺物写真 (10) 2区 SP1440・SP1453・SD1026
4頁・18行目	研究員 墓治琢磨	研究補助員 墓治琢磨
23頁・6行目	わずか含まれている。	わずかに含まれている。
24頁・33行目	上方にく屈曲し、	上方に屈曲し、
24頁・35行目	平端を成す	平端面をなす
25頁・1行目	底部と体部の境は明瞭であるが、	底部と体部の境は明瞭であるが、
50頁・12行目	底部との境を明瞭にし、	底部との境を明瞭にし、
53頁・3行目	基部屈曲し、身部直線的である。	基部で屈曲し、下方に直線的に延びる。
54頁・15行目	放棄にヘラで起こしている。	ヘラで起こしたことによる。
55頁・12行目	テラス状の平端部を形成し、	テラス状の平坦部を形成し、
69頁・18行目	欠損しており、	欠損しており、
80頁・12行目	口縫部や外反、口縫端部を	口縫部はやや外反し、端部を
84頁・6行目	口縫部や外反、口縫端部は	口縫部はやや外反し、端部は
89頁・16行目	底部周縫に	底部周縫に
112頁・9行目	置き砂が砂付層している。	置き砂が付着している。
113頁・13行目	底部と体部の境は 境を不明瞭にしている。	底部と体部の境は 境を不明瞭にしている。
131頁・18行目	傳 (1区SD1003)	傳 (1区SD1003) 出土の
132頁・註②	久保友康	久保智康
207頁・写真図版14・下段	SD1026杭列 (近代、北から)	SD1026杭列 (近代、北から)

トノ町遺跡

阿南警察署庁舎改築工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

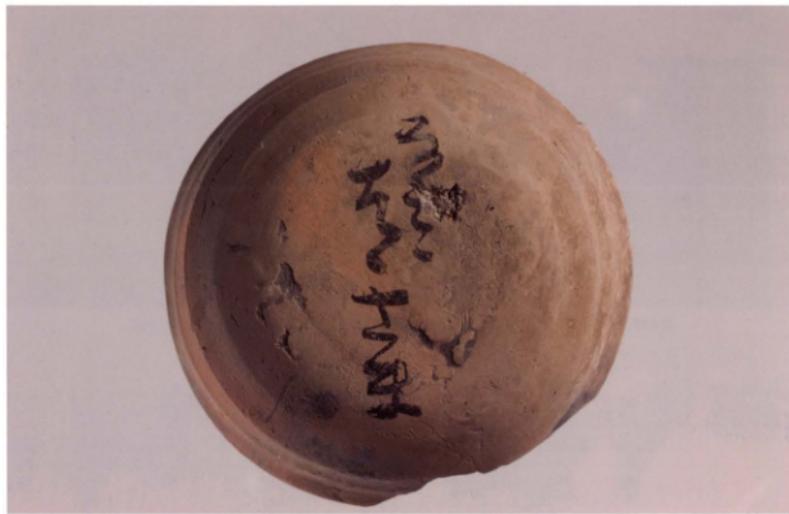


巻頭図版 1 幕末期の絵図（富岡村分間図（？） 阿南市史編さん室提供）

巻頭図版



巻頭図版 2 調査区遠景（上空より）



巻頭図版 3 墨書き土器（遺物番号 730）

序 文

この報告書は、阿南警察署庁舎改築に伴い、当センターが平成16～17年度に実施いたしました阿南市富岡町トノ町に所在するトノ町遺跡の発掘調査の成果を報告書にとりまとめたものであります。

当遺跡は、桑野川下流南岸に発展した阿南市の東部に位置します。現在、富岡町は阿南市の政治経済の中心地であり、蜂須賀氏の阿波入封以来、国内支配の要である阿波九城の一つとして家老である細川氏（のち賀島氏）が経営にあたり、近世から郷町富岡として阿波藩南部の中心都市として繁栄しました。

今回の調査では、中世から近世初頭の遺構や遺物が多く出土しました。それらの成果により中世牛牧莊から富岡城（牛岐城）、近世の郷町富岡を語る上で貴重な考古資料を得られたと思います。

そしてこの報告書が、埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となり、教育や調査研究の資料としてご活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査の準備や期間中、報告書の作成にあたり多くの関係機関並びに地元の皆様に多人の御援助・御協力を頂きました。ここに深く感謝の意を表すとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年3月31日

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤 勉

iii. 調査日誌抄

グリッド番号及び造構番号については、報告書掲載番号で表記する。（　）は調査時の表記である。

[第1次調査]

平成16（2004）年

12月1日 物品搬入

12月2日 測量作業（調査区確定）

12月3日 防塵ネット設置、測量作業

12月9日 コンクリートガラ処理（搬出作業）

1区（1-1区）機械掘削

12月13日 1区（1-1区）壁面整形・側溝掘削、

1区（1-1区）機械掘削

12月15日 1区（1-1区）側溝掘削・人力掘削

12月17日 1区（1-1区）第1面造構検出作業、
第1面造構検出状況撮影

12月24日 1区（1-1区）第1面造構掘削、

SD1003 (SD1003) 六花錐片出土

12月27日 1区（1-1区）第1面造構掘削

平成17（2005）年

1月27日 1区（1-1区）完掘状況撮影

1月29日 現地説明会（13:00～）参加者300名

2月5日 1区（1-1区）第1面作図

2月7日 1区（1-1区）埋め戻し開始、

2区機械掘削

2月8日 1区（1-1区）第1面造構掘削、

2区側溝掘削

2月9日 1区（1-1区）第1面造構掘削

SE1001 (SE1001)、2区人力掘削

2月10日 1区（1-1区）第1面造構掘削

SE1001 (SE1001)、

2区第1造構面検出、造構掘削

2月14日 1区（1-1区）第1面造構掘削

SD1003 (SD1003)、

2区第1造構面検出、完掘状況撮影

2月17日 1区（1-1区）埋め戻し完了、

2区第1面造構掘削

2月18日 1区（1-2区）機械掘削開始、

2区第1面造構掘削 SK1006 (SK1006)、

埋め戻し完了

2月22日 1区（1-2区）機械掘削、側溝掘削、

人力掘削、第1造構検出作業

2月24日 1区（1-2区）第1造構検出作業、

造構検出状況写真撮影

2月25日 1区（1-2区）第1面造構掘削

3月8日 1区（1-2区）完掘状況撮影

3月9日 1区（1-2区）第1面造構掘削

3月18日 1区（1-2区）埋め戻し完了

3月22日 調査内容とりまとめ

3月25日 調査事務所撤収

[第2次調査]

平成17（2005）年

4月4日 調査準備

4月14日 防塵ネット打設、

4月18日 アスファルト・コンクリガラ処理終了、
プレハブ設置

4月22日 機械掘削、壁面整形、側溝掘削

4月26日 2区（3-1区）第1包含層人力掘削、
第1造構面検出

4月28日 2区（3-1区）第1面造構検出、
第1面造構掘削

5月23日 2区（3-1区）第1面造構掘削、
第1面完掘状況撮影

5月26日 2区（3-1区）第1面造構掘削

5月30日 2区（3-2区）機械掘削

5月31日 2区（3-1区）埋め戻し、

2区（3-2区）壁面整形、側溝掘削

6月1日 2区（3-2区）第1包含層人力掘削、
第1造構面検出、検出状況撮影

6月13日 2区（3-2区）第1造構面精査、
完掘写真撮影

6月14日 2区（3-2区）作図、第1面造構掘削、
壁面精査

6月16日 2区（3-2区）作図、埋め戻し

調査内容とりまとめ

6月18日 2区（3-2区）埋め戻し

調査事務所撤収

例　言

1. 本書は、平成 16 年度（2004 年度）～平成 17 年度（2005 年度）に調査を実施した、阿南警察庁舎改築工事関連埋蔵文化財発掘調査の成果を記した報告書である。
2. 本書に収録した遺跡の調査年度は以下の通りである。

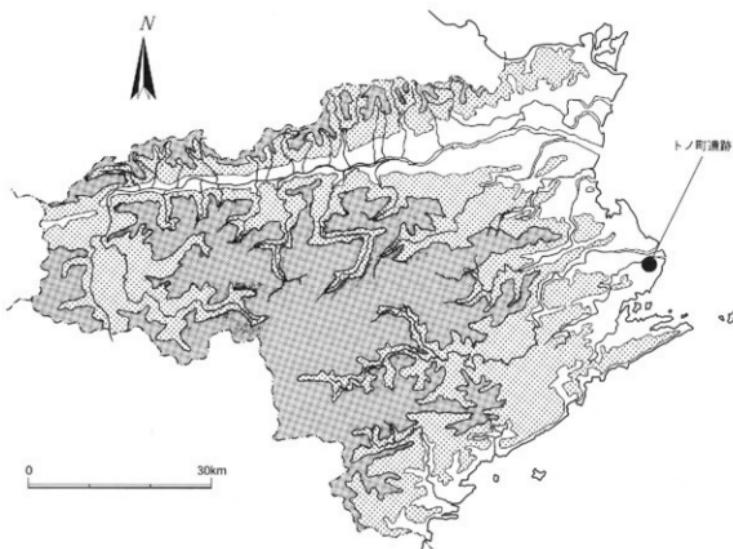
・発掘調査期間	試掘調査	平成 15 年 10 月、11 月（2 日間）
	本調査	平成 16 年 12 月 1 日～平成 17 年 6 月 30 日
・整理業務・報告書作成		平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日
3. 発掘調査は徳島県教育委員会からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
4. 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による記号を用いた。

凡例	S A　掘立柱建物	S D　溝状遺構	S E　井戸
	S K　土坑	S P　柱穴	S X　不明遺構
5. 図中の座標は世界測地系を、高さは東京湾標準潮位（T.P.）を表す。
6. 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 2002 年度版）に、また陶磁器の釉薬の色調は太田昭雄・川崎秀昭ほか『標準色彩图表 A』（日本色研事業株式会社 1981 年度版）によった。
7. 遺構番号及び遺物番号は全て通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
8. 発掘調査にあたっては、次の機関の御指導・御協力を得た。

徳島県教育委員会・国土交通省四国地方整備局・同那賀川河川事務所・徳島県阿南土木事務所
9. 報告書作成にあたっては、次の方々及び機関の御協力や御教示を得た。

阿南市役所・阿南市市史編さん室・岩片寿広・須藤茂樹・谷口栄・西本豊弘・宮本和宏（敬称略・五十音順）
10. 出土遺物の自然化学分析は貝の分析を徳島県立博物館の中尾賢一氏に依頼し、玉稿を賜った。また、墨書き器及び木簡について徳島市立徳島城博物館の須藤茂樹氏より助言を得た。記して感謝致します。
11. 本書の執筆は I - a. 辻佳伸、I - b. Ⅱ・Ⅲ 塩治琢磨・片山純州・藤川智之、Ⅳ - a. は中尾賢一が担当した。
12. 写真図版は、遺構については各調査担当者が撮影を行った。金属製遺物のエックス線は植地岳彦が、その他の遺物は服部靖が撮影した。

13. 本書に収録した遺物および写真などの記録の一切は、徳島県板野郡板野町大伏字平山86番2に所在する徳島県立埋蔵文化財総合センターに保管している。



第1図 調査地位置図

凡 例

1 本書に掲載された遺構は基本的には下記のようにした。ただし、大型遺構に関しては隨時縮尺を変更した例外もあるので、各遺構にはスケールを添付した。

掘立柱建物 (S A) : 1/40、1/80

井戸 (S E) : 1/40

溝 (S D) : 1/20、1/40、1/50

土坑 (S K) : 1/40

不明遺構 (S X) : 1/40、1/80

柱穴・小穴 (S P) : 1/20

2 遺物実測図は原則として下記のように縮尺を統一した。ただし、遺物によっては隨時縮尺を変更しているので各実測図にはスケールを添付した。

土器・陶器・磁器 : 1/4

土製品 : 1/2

鉄製品 : 1/2、1/4

銅製品 : 1/2

銭貨 : 1/1

石製品 : 1/3、1/8

木製品 : 1/4

3 本報告書の遺物実測図の断面の表現で、白抜きは土師質土器、黒塗りは須恵器・陶器・磁器、細かいドットは瓦器及び瓦質土器、斜線は石の断面、黒の濃淡は釉だれで表す。

また、上記以外の網掛けは次のように示す。



: 煤・コゲ



: 壊痕

4 遺物出土状況において土器は●、金属製品は□、石製品は○、木製品は■、骨は▲で示した。示した図版は次の通りである。

1 区 : 第 17 図 (SE1001)、第 50 図 (SD1002, SD1003)、第 58 図 (SD1010)、第 66 図 (SX1002)

2 区 : 第 167 図 (SD1017)、第 181 図 (SD1026)

5 掘立柱建物の計測部位に関しては以下のようにして行った。

- ・ 相対的に長さの長い方を桁行、短い方を梁間とする。
- ・ 柱間寸法は柱穴掘りかたの中心間の距離を計測した。
- ・ 主軸方位は、桁行の方向を主軸とする。計測方法は梁間の柱間寸法を二等分し、その点を通る直線と真北との角度を計測する。

本文目次

I	調査の経緯	3
a.	調査に至る経緯	3
b.	調査の経過	4
i.	調査の経緯	4
ii.	発掘の方法	4
iii.	調査日誌抄	6
II	遺跡の立地と環境	9
a.	地理的環境	9
b.	歴史的環境	9
III	調査成果	15
a.	基本層序	15
b.	遺物と遺構	15
i.	1区	20
	掘立柱建物	
	井戸	
	土坑	
	溝状遺構	
	性格不明遺構	
	小穴・柱穴	
	遺物包含層出土遺物	
ii.	2区	82
	掘立柱建物	
	土坑	
	溝状遺構	
	性格不明遺構	
	小穴・柱穴	
	遺物包含層出土遺物	
iii.	3区	112
	土坑	
	小穴・柱穴	
	遺物包含層出土遺物	
IV	自然化学分析	123
a.	トノ町遺跡から出土した貝殻について	
b.	トノ町遺跡出土動物遺存体	
V	まとめ	131

挿 図 目 次

第 1 図 調査地位置図	37
第 2 図 調査区位置図	37
第 3 図 グリッド配置図	37
第 4 図 調査地点および馬辺の遺跡	38
第 5 図 基本層序図	38
第 6 図 1区遺構配置図	39
第 7 図 2区遺構配置図	40
第 8 図 3区遺構配置図	40
第 9 図 1区SA1001遺構平・断面図	41
第10図 1区SP1081遺構平・断面図	42
第11図 1区SP1081出土遺物実測図	43
第12図 1区SP1084遺構平・断面図	44
第13図 1区SP1084出土遺物実測図	45
第14図 1区SP1114遺構平・断面図	48
第15図 1区SP1114出土遺物実測図	49
第16図 1区SA1002遺構平・断面図	50
第17図 1区SE1001遺構平・断面図	50
第18図 1区SE1001出土遺物実測図	50
第19図 1区SE1002遺構平・断面図	50
第20図 1区SE1002井戸跡状況図	51
第21図 1区SE1002出土遺物実測図(1)	52
第22図 1区SE1002出土遺物実測図(2)	54
第23図 1区SE1003遺構平・断面図	55
第24図 1区SK1004遺構平・断面図	56
第25図 1区SK1004出土遺物実測図	57
第26図 1区SK1005遺構平・断面図	57
第27図 1区SK1005出土遺物実測図	58
第28図 1区SK1012遺構平・断面図	59
第29図 1区SK1012出土遺物実測図	60
第30図 1区SK1016遺構平・断面図	61
第31図 1区SK1016出土遺物実測図	62
第32図 1区SK1017遺構平・断面図	62
第33図 1区SK1017出土遺物実測図	62
第34図 1区SK1028遺構平・断面図	62
第35図 1区SK1028出土遺物実測図	62
第36図 1区SK1047遺構平・断面図	62
第37図 1区SK1047出土遺物実測図	64
第38図 1区SK1048遺構平・断面図	64
第39図 1区SK1048出土遺物実測図	64
第40図 1区SK1049遺構平・断面図	64
第41図 1区SK1049出土遺物実測図	64
第42図 1区SK1050遺構平・断面図	64
第43図 1区SK1050出土遺物実測図	64
第44図 1区SK1051遺構平・断面図	64
第45図 1区SK1051出土遺物実測図	37
第46図 1区SK1055遺構平・断面図	37
第47図 1区SK1055出土遺物実測図	37
第48図 1区SD1001遺構平・断面図	38
第49図 1区SD1001出土遺物実測図	38
第50図 1区SD1002-1003遺構平・断面図	39
第51図 1区SD1002出土遺物実測図	40
第52図 1区SD1003出土遺物(1)	40
第53図 1区SD1003出土遺物実測図(2)	41
第54図 1区SD1003出土遺物実測図(3)	42
第55図 1区SD1003出土遺物実測図(4)	43
第56図 1区SD1003出土遺物実測図(5)	44
第57図 1区SD1003出土遺物実測図(6)	45
第58図 1区SD1010遺構平・断面図	48
第59図 1区SD1010出土遺物実測図	49
第60図 1区SD1012遺構平・断面図	50
第61図 1区SD1012出土遺物実測図	50
第62図 1区SD1015遺構平・断面図	50
第63図 1区SD1015出土遺物実測図	50
第64図 1区SX1001遺構平・断面図	51
第65図 1区SX1001出土遺物実測図	52
第66図 1区SX1002遺構平・断面図	54
第67図 1区SX1002出土遺物実測図	55
第68図 1区SX1003遺構平・断面図	56
第69図 1区SX1003出土遺物実測図	57
第70図 1区SX1003骨・土器出土状況図	57
第71図 1区SX1004遺構平・断面図	58
第72図 1区SX1004出土遺物実測図	59
第73図 1区SX1006遺構平・断面図	60
第74図 1区SX1006出土遺物実測図	61
第75図 1区SP1006遺構平・断面図	62
第76図 1区SP1006出土遺物実測図	62
第77図 1区SP1039遺構平・断面図	62
第78図 1区SP1039出土遺物実測図	62
第79図 1区SP1075遺構平・断面図	62
第80図 1区SP1075出土遺物実測図	62
第81図 1区SP1079遺構平・断面図	64
第82図 1区SP1079出土遺物実測図	64
第83図 1区SP1098遺構平・断面図	64
第84図 1区SP1098出土遺物実測図	64
第85図 1区SP1106遺構平・断面図	64
第86図 1区SP1106出土遺物実測図	64
第87図 1区SP1111遺構平・断面図	64
第88図 1区SP1111出土遺物実測図	64

第89图 1区 SP1120 遗構平·断面图	66	第134图 1区 SP1352 出土遗物实测图	74
第90图 1区 SP1120 出土遗物实测图	66	第135图 1区 SP1357 遗構平·断面图	75
第91图 1区 SP1127 遗構平·断面图	66	第136图 1区 SP1357 出土遗物实测图	75
第92图 1区 SP1127 出土遗物实测图	66	第137图 1区 SP1358 遗構平·断面图	75
第93图 1区 SP1141 遗構平·断面图	66	第138图 1区 SP1358 出土遗物实测图	75
第94图 1区 SP1141 出土遗物实测图	66	第139图 1区 SP1361 遗構平·断面图	75
第95图 1区 SP1146 遗構平·断面图	67	第140图 1区 SP1361 出土遗物实测图	75
第96图 1区 SP1146 出土遗物实测图	67	第141图 1区 SP1362 遗構平·断面图	75
第97图 1区 SP1155 遗構平·断面图	67	第142图 1区 SP1362 出土遗物实测图	75
第98图 1区 SP1155 出土遗物实测图	67	第143图 1区 SP1365 遗構平·断面图	77
第99图 1区 SP1156 遗構平·断面图	67	第144图 1区 SP1365 出土遗物实测图	77
第100图 1区 SP1156 出土遗物实测图	67	第145图 1区 SP1370 遗構平·断面图	77
第101图 1区 SP1171 遗構平·断面图	67	第146图 1区 SP1370 出土遗物实测图	77
第102图 1区 SP1171 出土遗物实测图	67	第147图 1区 SP1391 遗構平·断面图	77
第103图 1区 SP1201 遗構平·断面图	68	第148图 1区 SP1391 出土遗物实测图	77
第104图 1区 SP1201 出土遗物实测图	68	第149图 1区 SP1396 遗構平·断面图	77
第105图 1区 SP1206 遗構平·断面图	68	第150图 1区 SP1396 出土遗物实测图	77
第106图 1区 SP1206 出土遗物实测图	68	第151图 1区 SP1398 遗構平·断面图	79
第107图 1区 SP1220 遗構平·断面图	68	第152图 1区 SP1398 出土遗物实测图	79
第108图 1区 SP1220 出土遗物实测图	68	第153图 1区 SP1410 遗構平·断面图	79
第109图 1区 SP1226 遗構平·断面图	68	第154图 1区 SP1410 出土遗物实测图	79
第110图 1区 SP1226 出土遗物实测图	68	第155图 1区 SP1416 遗構平·断面图	79
第111图 1区 SP1227 遗構平·断面图	70	第156图 1区 SP1416 出土遗物实测图	79
第112图 1区 SP1227 出土遗物实测图	70	第157图 1区 SP1424 遗構平·断面图	79
第113图 1区 SP1236 遗構平·断面图	70	第158图 1区 SP1424 出土遗物实测图	79
第114图 1区 SP1236 出土遗物实测图	70	第159图 1区 遗物包含层出土遗物实测图	81
第115图 1区 SP1249 遗構平·断面图	70	第160图 2区 SA1003 遗構平·断面图	83
第116图 1区 SP1249 出土遗物实测图	70	第161图 2区 SK1061 遗構平·断面图	84
第117图 1区 SP1251 遗構平·断面图	70	第162图 2区 SK1061 出土遗物实测图	84
第118图 1区 SP1251 出土遗物实测图	70	第163图 2区 SK1070 遗構平·断面图	85
第119图 1区 SP1278 遗構平·断面图	72	第164图 2区 SK1070 出土遗物实测图	85
第120图 1区 SP1278 出土遗物实测图	72	第165图 2区 SK1073 遗構平·断面图	85
第121图 1区 SP1293 遗構平·断面图	72	第166图 2区 SK1073 出土遗物实测图	85
第122图 1区 SP1293 出土遗物实测图	72	第167图 2区 SD1017 遗構平·断面图	86
第123图 1区 SP1306 遗構平·断面图	72	第168图 2区 SD1017 出土遗物实测图 (1)	88
第124图 1区 SP1306 出土遗物实测图	72	第169图 2区 SD1017 出土遗物实测图 (2)	90
第125图 1区 SP1312 遗構平·断面图	72	第170图 2区 SD1017 出土遗物实测图 (3)	91
第126图 1区 SP1312 出土遗物实测图	72	第171图 2区 SD1017 出土遗物实测图 (4)	93
第127图 1区 SP1317 遗構平·断面图	74	第172图 2区 SD1007 出土遗物实测图 (5)	95
第128图 1区 SP1317 出土遗物实测图	74	第173图 2区 SD1017 出土遗物实测图 (6)	96
第129图 1区 SP1338 遗構平·断面图	74	第174图 2区 SD1017 出土遗物实测图 (7)	97
第130图 1区 SP1338 出土遗物实测图	74	第175图 2区 SD1017 出土遗物实测图 (8)	98
第131图 1区 SP1339 遗構平·断面图	74	第176图 2区 SD1017 出土遗物实测图 (9)	99
第132图 1区 SP1339 出土遗物实测图	74	第177图 2区 SD1018 遗構平·断面图	101
第133图 1区 SP1352 遗構平·断面图	74	第178图 2区 SD1018 出土遗物实测图	101

第179図 2区 SD1022 造構平・断面図	102	第195図 2区 SP1510 造構平・断面図	112
第180図 2区 SD1022 出土遺物実測図	102	第196図 2区 SP1510 出土遺物実測図	112
第181図 2区 SD1025・1026 造構平・断面図	103	第197図 2区 SP1512 造構平・断面図	112
第182図 2区 SD1026 出土遺物実測図	104	第198図 2区 SP1512 出土遺物実測図	112
第183図 2区 SD1026 出土遺物実測図(1)	105	第199図 2区 遺物包含層出土遺物実測図	113
第184図 2区 SD1026 出土遺物実測図(2)	106	第200図 3区 SK1074 造構平・断面図	115
第185図 2区 SX1007 造構平・断面図	109	第201図 3区 SK1074 出土遺物実測図(1)	116
第186図 2区 SX1007 出土遺物実測図	109	第202図 3区 SK1074 出土遺物実測図(2)	117
第187図 2区 SP1440 造構平・断面図	111	第203図 3区 SK1074 出土遺物実測図(3)	118
第188図 2区 SP1440 出土遺物実測図	111	第204図 3区 SK1077 造構平・断面図	119
第189図 2区 SP1453 造構平・断面図	111	第205図 3区 SK1077 出土遺物実測図	119
第190図 2区 SP1453 出土遺物実測図	111	第206図 3区 SP1570 造構平・断面図	119
第191図 2区 SP1456 造構平・断面図	111	第207図 3区 SP1570 出土遺物実測図	119
第192図 2区 SP1456 出土遺物実測図	111	第208図 3区 遺物包含層出土遺物実測図	120
第193図 2区 SP1465 造構平・断面図	111	第209図 1区 SX1003 骨の出土状況図	127
第194図 2区 SP1465 出土遺物実測図	111		

表 目 次

表1 トノ町遺跡出土の貝類一覧表	124	表27 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(5)…	154
表2 阿南市見能林町の水田畠場整備工事現場 から得られた完新世貝化石一覧表	126	表28 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(6)…	155
表3 骨の出土一覧表	127	表29 出土遺物観察表 上器・陶磁器・土製品(7)…	156
表4 検出遺構・観表 掘立柱建物	134	表30 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(8)…	157
表5 検出遺構一覧表 井戸	134	表31 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(9)…	158
表6 検出遺構一覧表 上坑(1)	134	表32 出土遺物観察表 上器・陶磁器・土製品(10)…	159
表7 検出遺構一覧表 下坑(2)	135	表33 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(11)…	160
表8 検出遺構一覧表 土坑(3)	136	表34 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(12)…	161
表9 検出遺構一覧表 溝	136	表35 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(13)…	162
表10 検出遺構一覧表 不明遺構	137	表36 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(14)…	163
表11 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(1)	138	表37 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(15)…	164
表12 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(2)	139	表38 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(16)…	165
表13 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(3)	140	表39 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(17)…	166
表14 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(4)	141	表40 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(18)…	167
表15 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(5)	142	表41 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(19)…	168
表16 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(6)	143	表42 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(20)…	169
表17 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(7)	144	表43 出土遺物観察表 上器・陶磁器・土製品(21)…	170
表18 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(8)	145	表44 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(22)…	171
表19 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(9)	146	表45 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(23)…	172
表20 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(10)	147	表46 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(24)…	173
表21 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(11)	148	表47 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(25)…	174
表22 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(12)	149	表48 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(26)…	175
表23 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(1)	150	表49 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(27)…	176
表24 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(2)	151	表50 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(28)…	177
表25 出土遺物観察表 上器・陶磁器・土製品(3)	152	表51 出土遺物観察表 鉄製品・スラグ(1)…	178
表26 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(4)	153	表52 出土遺物観察表 鉄製品・スラグ(2)…	179
		表53 出土遺物観察表 鉄製品・スラグ(3)…	180

表 54	出土遺物観察表 鉄製品・スラグ(4)	181	表 62	出土遺物観察表 石製品(2).....	186
表 55	出土遺物観察表 鉄製品・スラグ(5)	182	表 63	出土遺物観察表 石製品(3).....	187
表 56	出土遺物観察表 鉄製品・スラグ(6)	183	表 64	出土遺物観察表 木製品(1).....	187
表 57	出土遺物観察表 銅製品.....	183	表 65	出土遺物観察表 木製品(2).....	188
表 58	出土遺物観察表 錢貨.....	183	表 65	出土遺物観察表 木製品(3).....	189
表 59	出土遺物観察表 キセル.....	184	表 65	出土遺物観察表 木製品(4).....	190
表 60	出土遺物観察表 鉛.....	184	表 65	出土遺物観察表 木製品(5).....	191
表 61	出土遺物観察表 石製品(1).....	185	表 61	出土遺物観察表 骨製品.....	191

写真図版目次

卷頭図版 1	幕末期の絵図(富岡村分断図(?)		図版 11	2区西側完掘状況(西から).....	204
卷頭図版 2	調査区遠景(上空より)			2区東側完掘状況(南から).....	204
卷頭図版 3	墨書き鉛(遺物番号 730)		図版 12	SA1003 完掘状況(東から).....	205
図版 1	1区調査前風景(南から).....	194		SD1017 上層断面図(南から).....	205
	1区人挖掘のようす.....	194		SD1017 遺物出土状況(人形).....	205
図版 2	1区北側完掘状況(北から).....	195	図版 13	SD1018 土層断面図(南から).....	206
	1区南側完掘状況(北から).....	195		SP1456 柱根検出状況.....	206
図版 3	SE1001 断面図(東から).....	196	図版 14	SD1026 土層断面図(南から).....	207
	SE1001 井戸石積の棒(東から).....	196		SD1026 遺物出土状況(櫛).....	207
	SE1001 包丁出土状況.....	196		SD1026 杭列(近代、北から).....	207
図版 4	SE1002 井戸断面図(北から).....	197	図版 15	2区壁面土層・北壁(南から).....	208
	SE1002 井戸枠出土状況(北から).....	197		2区壁面土層・南壁(北から).....	208
	SE1002 貝出土壤状況(上から).....	197	図版 16	3区完掘状況(東から).....	209
図版 5	SE1003 井戸・梯断面図(北から).....	198		SK1074 土層断面図(東から).....	209
	SE1003 井戸梯検出状況(北から).....	198		SK1074 遺物出土状況.....	209
図版 6	SD1003 遺物出土状況(西から).....	199	図版 17	遺物写真(1) 1区 SA1001・SE1001・SK1005.....	210
	SD1003 鋼鏡出土状況.....	199	図版 18	遺物写真(2) 1区 SD1002・SD1003・SD1010.....	211
	SD1010 上層断面図(西から).....	199	図版 19	遺物写真(3) 1区 SX1001～1004.....	212
図版 7	SX1002 遺構検査状況(南から).....	200	図版 20	遺物写真(4) 1区 SX1006.....	213
	SX1003 貝出土壤状況(北から).....	200	図版 21	遺物写真(5) 1区 SP.....	214
図版 8	SX1004 遺物出土状況(東から).....	201	図版 22	遺物写真(6) 2区 SD1017 (1).....	215
	SX1006 完掘状況(北から).....	201	図版 23	遺物写真(7) 2区 SD1017 (2).....	216
図版 9	1区壁面土層・北壁(南から).....	202	図版 24	遺物写真(8) 2区 SD1017 (3).....	217
	1区壁面土層・東壁(西から).....	202	図版 25	遺物写真(9) 2区 SD1026.....	218
	1区壁面土層・西壁(東から).....	202	図版 26	遺物写真(10) 2区 SK1074.....	219
図版 10	2区調査前風景(南東から).....	203	図版 27	遺物写真(11) 鉄製品・銅製品・錢貨.....	220
	2区遺構検出作業(北東から).....	203	図版 28	遺物写真(12) 石製品・木製品・骨製品.....	221



I 調査の経緯



I. 調査の経緯

a. 調査に至る経緯

阿南警察署庁舎改築工事に伴う埋蔵文化財の有無とその取り扱いについての協議は、平成 14 年度に徳島県警察本部会計課（以下、会計課という。）から徳島県教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に対し、照会があった。

当該地は、阿南市富岡町の市街地にあり、埋蔵文化財包蔵地の把握については、従来必ずしも十分ではなかった。しかし、東側約 150 m の地点には、南北朝期の築城とされる阿波南部の有力国人新開氏の居城である牛岐城跡があり、周辺に関連する遺構の広がりが想定された。また、江戸時代初期には牛岐城（富岡城）が徳島城の支城として整備されており、江戸時代の古絵図からは、城下町が城跡の西側に広がることが看取された。このように当該地には、牛岐城跡に伴う中世から近世に至る埋蔵文化財包蔵地の存在が想定され、これを確認するための試掘調査が急務となった。

文化財課は、平成 14 年 8 月に開催された開発事業と文化財の調整会議において会計課に対し、埋蔵文化財の有無確認のための試掘調査が必要との判断を示し、試掘調査実施に向けての協議を始めた。

試掘調査は、現庁舎敷地及び新たに取得された隣接民有地を対象として、平成 15 年 10 月と 11 月に 2 日間、文化財課が実施した。試掘調査の結果、中世に属するとみられる土坑・柱穴・溝などが確認され、当該地に中世の集落跡が存在することが判明した。また、近世に属する遺構が同一面で重複することも確認された。

試掘調査の結果をうけて文化財課と会計課は再度協議を持ち、庁舎 1 階の建て方部分及び浄化槽設置部分の計約 2,380 m² が工事により影響を受ける範囲として、工事着手前に発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることで合意した。なお、当該地は、今回試掘調査で新たに確認された埋蔵文化財包蔵地であることから、遺跡名を所在地名からトノ町遺跡と呼称することとした（現徳島県遺跡地図 204-47）。

発掘調査は、県が財團法人徳島県埋蔵文化財センターに委託し、平成 16 年度に工期 4 ヶ月で 1,245 m²、平成 17 年度に工期 3 ヶ月で 1,138 m² をそれぞれ実施した。



第 2 図 調査区位置図

調査組織および整理体制は以下の通りである。

○総括・総務担当

理事長 松村通治（平成16・17年度）、佐藤 勉（平成19年度）
専務理事兼所長 浦上純二（平成16・17年度）、伊川政文（平成19年度）
常務理事兼事務局長 河野幸一（平成16・17年度）、多田升二（平成19年度）
次長兼総務課長 古田哲朗（平成16・17年度）、一宮一郎（平成19年度）
庶務係長 坂尾俊一（平成16・17年度）、新居謙輔（平成19年度）
総務課主任 川口治代（平成16・17年度）
浦川明美（平成17・19年度）、野田登記子（平成19年度）
事業第一課長 富本輝仁（平成16年度）、中妻敬二（平成17年度）
湯浅利彦（平成19年度）
事業第一係長 游徹（平成16・17年度）
事業第二係長 藤川智之（平成16・17年度）、豊田大之介（平成19年度）

○発掘調査担当

平成16年度 研究員 島田豊彰 研究員 北尾秀昭
平成17年度 研究員 島田豊彰 研究員 服部 靖

○整理担当

平成19年度 事業第一係長 藤川智之 研究員 塩冶琢磨

b. 調査の経過

i. 調査の経緯

トノ町遺跡は、平成15年度に実施された試掘調査の結果、旧警察庁舎駐車場と東側に隣接する旧家電跡地の2,383m²が発掘調査対象になった。

発掘調査は、平成16年度（平成16年12月1日～平成17年3月31日）と平成17年度（平成17年4月1日～平成17年6月30日）と2回に分けて実施された。調査期間中の平成17年1月29日には、検出した溝や井戸の中心に現地説明会を実施した。地元周辺の住民を中心に、県内外から約300名の参加者が集まり、地域の歴史への関心の高まりが窺われた。

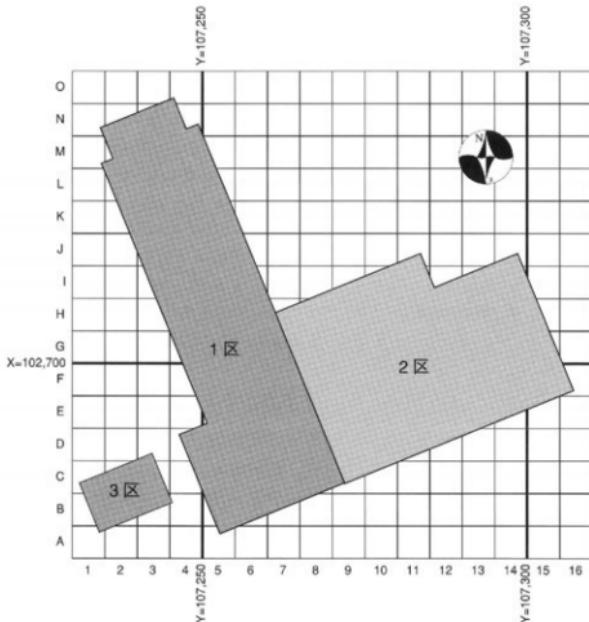
ii. 発掘調査の方法

平成16年度は、庁舎新築部分の西半分を発掘し、1区（1,149m²）とした。1区は、機械掘削土の仮置き場所を考慮して、北側（1-1区：約700m²）と南側（1-2区：約450m²）に分割した。1-1区終了後、浄化槽設置部分の2区（約96m²）を調査し、次に1-2区の順で行った。

平成17年度は、庁舎新築部分の東半分で3区（1,138m²）と名付けた。掘削土の廃土仮置き場のスペースが限られているため、3区の西側を3-1区（約800m²）、東側を3-2区（約340m²）の二つに分割し、3-1区から着手した。

遺構の所在地表示や出土遺物の取り上げ単位とするため、5m四方のグリッドを設定した。グリッドの配置は、世界測地系座標（新座標）の X=102,670.000 と Y=107,230.000 の交点を A - 1 グリッドの南西隅とし、5 mごとに北方向へ A・B・C…、東方向に 1・2・3…として、アルファベットと数字の組み合わせによってグリッドを表示した。なおグリッドの南西角のグリッド点をもってグリッド番号とした。

調査区の番号については、調査区の位置関係を考慮して整理作業の段階で再設定とした。まず調査時の 1 - 1 区、1 - 2 区を新たに 1 区と呼称し、以下同様に 3 - 1 区・3 - 2 区を 2 区に、2 区を 3 区とした。また遺構記号および遺構番号は遺構検出時に調査区ごとに付けられているが、整理作業において遺構の性格上変更の必要とされるものがあった。この場合、1 区から 3 区までの順に従い、遺構の種類ごとに通し番号を再設定したが、遺構の記号の変更是最低限にとどめた。なお、遺構記号は徳島県埋蔵文化財センターが定める基準による。



第3図 グリッド配置図

iii. 調査日誌抄

グリッド番号及び遺構番号については、報告書掲載番号で表記する。（　）は調査時の表記である。

[第1次調査]

平成 16 (2004) 年	
12月 1 日 物品搬入	2月 9 日 1区（1-1区）第1面遺構掘削 SE1001 (SE1001)、2区人力掘削
12月 2 日 測量作業（調査区確定）	2月 10 日 1区（1-1区）第1面遺構掘削 SE1001 (SE1001)、 2区第1遺構面検出、遺構掘削
12月 3 日 防塵ネット設置、測量作業	2月 14 日 1区（1-1区）第1面遺構掘削 SD1003 (SD1003)、 2区第1遺構面検出、完掘状況撮影
12月 9 日 コンクリートガラ処理（搬出作業）	2月 17 日 1区（1-1区）埋め戻し完了、 2区第1面遺構掘削
1区（1-1区）機械掘削	2月 18 日 1区（1-2区）機械掘削開始、 2区第1面遺構掘削 SK1006 (SK1006)、 埋め戻し完了
12月 13 日 1区（1-1区）壁面整形・側溝掘削、 1区（1-1区）機械掘削	2月 22 日 1区（1-2区）機械掘削、側溝掘削、 人力掘削、第1遺構検出作業
12月 15 日 1区（1-1区）側溝掘削・人力掘削	2月 24 日 1区（1-2区）第1遺構検出作業、 遺構検出状況写真撮影
12月 17 日 1区（1-1区）第1面遺構検出作業、 第1面遺構検出状況撮影	2月 25 日 1区（1-2区）第1面遺構掘削
12月 24 日 1区（1-1区）第1面遺構掘削、 SD1003 (SD1003) 六花鏡片出土	3月 8 日 1区（1-2区）完掘状況撮影
12月 27 日 1区（1-1区）第1面遺構掘削	3月 9 日 1区（1-2区）第1面遺構掘削
平成 17 (2005) 年	3月 18 日 1区（1-2区）埋め戻し完了
1月 27 日 1区（1-1区）完掘状況撮影	3月 22 日 調査内容とりまとめ
1月 29 日 現地説明会（13:00～）参加者300名	3月 25 日 調査事務所撤収
2月 5 日 1区（1-1区）第1面作図	
2月 7 日 1区（1-1区）埋め戻し開始、 2区機械掘削	
2月 8 日 1区（1-1区）第1面遺構掘削、 2区側溝掘削	

[第2次調査]

平成 17 (2005) 年	
4月 4 日 調査準備	5月 30 日 2区（3-2区）機械掘削
4月 14 日 防塵ネット打設、	5月 31 日 2区（3-1区）埋め戻し、 2区（3-2区）壁面整形・側溝掘削
4月 18 日 アスファルト・コンクリガラ処理終了、 プレハブ設置	6月 1 日 2区（3-2区）第1包含層人力掘削、 第1遺構面検出、検出状況撮影
4月 22 日 機械掘削、壁面整形、側溝掘削	6月 13 日 2区（3-2区）第1遺構面精査、 完掘写真撮影
4月 26 日 2区（3-1区）第1包含層人力掘削、 第1遺構面検出	6月 14 日 2区（3-2区）作図、第1面遺構掘削、 壁面精査
4月 28 日 2区（3-1区）第1面遺構検出、 第1面遺構掘削	6月 16 日 2区（3-2区）作図、埋め戻し
5月 23 日 2区（3-1区）第1面遺構掘削、 第1面完掘状況撮影	6月 18 日 2区（3-2区）埋め戻し 調査内容とりまとめ
5月 26 日 2区（3-1区）第1面遺構掘削	6月 30 日 調査事務所撤収



II 遺跡の立地と環境





II. 遺跡の立地と環境

a. 地理的環境

徳島県は四国の東部に位置し、総面積は4,144m²を占める。しかし総面積に占める山林の割合が8割を占め、県内の東部海岸地域に展開する河川流域の平野部に人口が密集している。

四国の地質構造は、吉野川河谷から愛媛県佐多岬北側に延びる中央構造線により北側を「内帯」、南側を「外帯」に分けられる。徳島県は2／3以上を外帯が占める。「内帯」には領家帯（和泉層群）が、「外帯」には三波川帯、御荷鉢帯、秩父帯、四万十帯と呼ばれる地層が南北に並ぶ。中央構造線の南に御荷鉢構造線、仏像構造線が東西方向に伸び、地質構造の境目をなしている⑩⑪。

河川も地質構造に影響を受けており、仏像構造線に沿う那賀川、中央構造線に沿う吉野川などがその例である。那賀川は四国山地の主峰劍山の南のジロウギュウ付近を源流に、全長約125km・流域面積874km²の県内第2の規模を持つ一級河川である。上流から河口部までの高低差があり、古来より度々と氾濫を起こし、流路が定まるのも近代以降のことである。上流の那賀郡木頭地域は年間降水量が3,000mmを超える多雨地帯で、スギ等の育成には適した環境である。室町時代には材木の供給地として、平島湊（現那賀川町）からスギ板材やヒノキが京都方面に移出され、江戸時代には藩有林の御林が広がり、後で下流まで流され、そこで商品化されていた。下流部では、上大野町・羽ノ浦町古毛付近を扇頂とする三角州性扇状地形を成し、傾斜は緩やかに河口部に向かう。那賀川河口から橋までの海岸線は砂州・砂丘が発達しているが、橋渉はおぼれ谷型のアリアス式海岸線の地形を呈する。

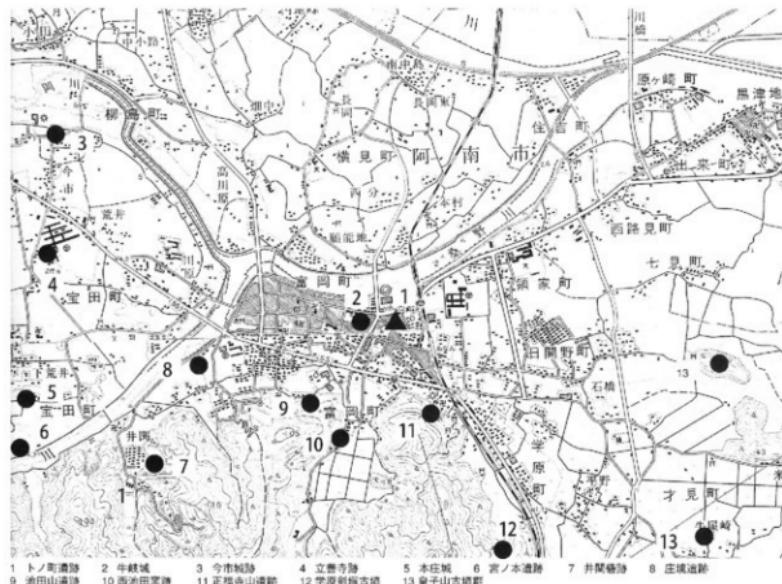
トノ町遺跡は那賀川によって形成された標高2.7m前後の沖積平野上に立地し、那賀川の支流である桑野川（全長約25km）下流南岸に発展した阿南市富岡町の東部に位置する。本遺跡の所在する富岡町は、四国の東海岸の中央部にあり、四国山地の東端が紀伊水道に臨んでいる地域である。主な河川は那賀川、桑野川、岡川（那賀川の支流）であり、平野部はこれらの河口に広がり、三角州性低地を作りなしている。表層地質は砂礫及び粘土層で、これは那賀川・桑野川の三角州堆積物によるものであると考えられる。

b. 歴史的環境

トノ町遺跡の所在する阿南市周辺の遺跡を概観すると、旧石器時代の遺跡は桑野町に所在する廿枝遺跡が見られる。出土品はチャート製のナイフ形石器・石核・細石刃・搔器・尖頭器などが採集されている。出土状況や層位は全く不明であるが、サスカイト製が主体を占める吉野川流域の旧石器とは、石材選択の面で際立った違いが見られる。

縄文時代の遺跡は、福井町の中蓮遺跡のみである。台風により福井川の氾濫で水田の表土が流され、そこから縄文後期の磨消繩文土器が出土したと報告されている。ただ中蓮遺跡に関する資料は喪失し、内容を知る手がかりはない。

弥生時代の遺跡については、遺構としての確認はなく、石器・土器片などの遺物が発見されたのみである。『阿南市史』で12か所の所在を明記している。その中に正福寺山遺跡と若杉山遺跡がある。正福寺山遺跡は津峰山塊の中腹、平野部との比高は約20メートルにある高地性集落で、公園の造成に伴い大量の土器が出土した。出土した土器は、壺形土器・甕形土器・高杯形土器、その他敲き石・砥石も紹介されているが、鉄器類は確認されていない。土器型式から弥生時代中期末から後期初頭の年代の集落と考えられている。若杉山遺跡は、太龍寺（四国靈場21番札所）から北西方向に延びる尾根の東斜



第4図 調査地点および周辺の遺跡

面に位置し、弥生時代末から古墳時代初頭の庄内式並行期の赤い顔料として用いられる辰砂の生産遺跡である事が確認された^⑤。この時期の生産遺跡として非常に貴重であるばかりではなく、吉野川下流域に展開する徳島市矢野遺跡・名東遺跡、板野郡板野町黒谷川郡頭遺跡において出土した朱の付着した石杵・土器片から、辰砂の生産に広範囲な集落が連携していることも注目されている。また、この若杉山遺跡の周辺には銅鐸の出土地が点在している。銅鐸の出土数については、徳島市西部を流れる鮎喰川流域は県下で屈指の地域であるが、阿南市の桑野川流域も銅鐸の出土地としてよく知られ、5遺跡7口の銅鐸が確認されている。このうち下大野町畑田の山林開闢時に発見されている。内突帯をもたない六区画表笠形銅鐸は重要文化財として千葉県の国立歴史民俗博物館に所蔵されている。山口町末広（通称：田村谷）の竹林の中から発見された流水文銅鐸は重要文化財に指定され、徳島県立博物館に展示されている。他にも中大野町の八貫渡から出土したと伝えられている八貫渡銅鐸、山口町北谷に新居家に宝として伝わる2口の伝長者ヶ原銅鐸（そのうち1号銅鐸には全面に朱が塗られており、2号銅鐸にも全体に薄く塗られていたようである）、椿町椿曲りから2口出土した曲り銅鐸が確認されている。朱の塗布された銅鐸は、若杉山遺跡との関連が推定される。

古墳時代は、前期から後期にかけて構築された約20基の古墳が点在する。まず唯一の前期古墳である国高山古墳^⑥が挙げられる。内原町の東福寺裏山の通称国高山に造営された前方後円墳である。埴丘は後円部径、東西22m、南北20mでやや偏平な形、前方部の長さ28m、最大幅18m、括れ部幅8m。主体部は堅穴式石室である。副葬品はかなり多く、内行花文鏡1面、石製刀子・土製勾玉・槍先・鉄斧・

鉄錆のほか、円筒埴輪等が出土している。部分的に朱が検出されている点でも注目される。後期の古墳として椿泊町鷺崎の沖 0.8km の島嶼に築かれた舞子島古墳群がある^⑤。島の南西部の海岸に 10 基が確認され、いずれも墳丘径 10 m 内外の円墳と報告されている。また八鉢山古墳群は、長生町宮内にある延喜式内社である八鉢神社の裏山に 3 基の古墳が確認されている。学原町にある剣塚古墳は、標高 40 m の位置する横穴式石室を主体部にもつ径 10 m の円墳である。日開野町王子山には、皇子山古墳群があり、独立丘陵上に 3 基の古墳が造営されている。横穴式石室の石材の一部が露出しているが、詳細は明らかではない。

古代の阿波には、「栗国」と「長国」の二つが存在したと考えられている。「長国」についての資料は非常に少ないが、その範囲は園瀬川流域だけでなく、勝浦川・那賀川・海部川にまたがる海岸線一帯に広がったものと考えられている。大化の革新以後に両国は合一し、二文字国名による「阿波国」ができる。それにより、9世紀中頃以降長国を阿波国内の 1 郡「那賀郡」として再編された。また、平安時代には大化の革新に伴った土地制度の改革が推進されていく。阿南市内には、条里制の名残とも言える「条」、「坪」などの地名が残されている。三条（下大野）、三反地（那賀川町）、五反地（富岡町・七見町・西路見町・横見町）、五反ヶ坪（見能林町）、六反地（橘町・長生町）、八反地（中林町）、八の坪・九の坪（下大野）、九反ヶ坪（日開野町）、一丁ヶ坪（長生町）などが条里制施行の遺跡の可能性を残している。さらに宝田町には、標高 4~5 メートルの沖積平野に白鳳時代に建てられた寺院立善寺跡が確認されている。この立善寺跡から出土した瓦が、内原成松窯跡から出土した軒丸瓦（八葉單弁蓮華文）と同形である事から、桑野川の船運を使っての流通経路が考えられている。しかも、この遺跡の東方の小字「郡（こおり）」が郡衙の所在地という説もあることから、立善寺跡との関連の可能性を指摘されている^⑥。

中世は、荘園の移りわりのなかで、那賀山庄・大野庄（大野本庄）・大野新庄・竹原庄・牛牧（岐）庄・桑野保（桑野御厨）・阿良多野庄・福井庄・平島庄の荘園が成立している。那賀山庄は後白河院領であったものが、長講堂領となり、やがて天童寺領となったものである。大野庄（大野本庄）・大野新庄は宝莊院領ではあるが、実質は宝莊院が本家、九条家が領家であった。のちには宝莊院が本家を保持しながらも執務を東寺に委ねている。大野庄（大野木庄）は現在の上大野町・中大野町・下大野町付近に比定されている。大野新庄は那賀川左岸の現羽ノ浦町岩脇付近から小松島市立江町付近に比定されるが、那賀川の流路の変遷との関連で考える必要がある。竹原庄は現長生町付近に比定される。12世紀には左大臣藤原頼長の荘園となつたが、保元の乱で敗れたため所領は没収され、後白河上皇の御院領に編入され、そのち仁和寺領となつた。牛牧庄は建仁 3（1203）年高野山金剛峰寺領、1295 年仁和寺領という記録がのこる。南北朝期の觀応 2（1351）年に足利義詮の臣、紀伊国守安宅彌後権守頼藤と一族の周參見氏が牛牧莊預かりとなる。だが南朝方に与したため、阿波南朝方の衰亡とともに紀伊国に引退したとされる。その後新開氏が牛岐城に居を構えたが、牛牧庄の地頭職に補せられたかどうか明らかではない（～1582 年）。荘域は現在の富岡・学原・領家・石塚・日開野一帯と比定され、那賀川河口や桑野川河口の港から海上への道も開ける、阿波国南方の要衝の地である。また、応永 7（1400）年の文書中に、「牛牧庄」に対して「ウシキ」の訓が付されている。これにより、牛牧から牛岐への連續性が推定されるとともに、牛牧庄の荘域についての推定も得られる。

中世の遺跡としては、中世の城郭が点在している。今回調査地の富岡を中心に見れば、牛岐城・西方城・岡星・今市星・本庄星・桑野星などが築城されている。牛岐城は現富岡町市街地の中心にある標高 20 m の小山に築かれた平山城である。本丸は城山の南端付近に、南側の麓に城主館があったと推定されて

いる。城の西方に城下町が広がり、面影をとどめている。南北朝時代から新聞氏が城主として支配をしていたが、天正 10（1582）年新聞道善が長宗我部元親に丈六寺で謀殺される。その後、天正 13（1585）年豊臣秀吉の四国平定により長宗我部元親も破れ、蜂須賀家政が阿波國の城主となる。

牛岐城は蜂須賀家の阿波入部以降、阿波九城のひとつとして家老細山帶刀政慶（のち賀島主水と改姓）が經營にあたった。城名を牛岐城から富岡城に改称するが、寛永 15（1638）年一国一城令によって廢城となる。郷町富岡は、牛岐城の西方を中心に発達している。寛文 12（1672）年の「那賀郡富岡新町内町佃町家数人牛馬御改之御帳」・「那賀郡表町石塚村第住町家数人牛馬御改之御帳」によると、家屋数 500 戸、男子 1156 人（女子の人口は不明）の規模を示している。町村の内訳は、新町 142 戸（男 388 人）、内町 78 戸（男 174 人）、佃町 40 戸（男 100 人）、仲町・第住町・石塚村合わせて 240 戸（男 494 人）となっている。なお、賀島氏の直接支配を受ける人々（特別な技能を持った職人や、単身の奉公人など）が存在していたようであるが、上記の人数には含まれていない。また、前掲した資料より職種を拾い出すと、町人・奉公人・耕屋・家来・医者・大工・木挽・鍛冶屋・桶屋・桧物屋が見られる。大多数が町人であり、町人の大部分が商人である。その郷町富岡は仁宇谷の物資・商品の集散地として栄え、また農村の生活に必要な物資の供給地として形成発展していったのである。17 世紀中頃には阿波南部最大の集落が形成され、経済活動の中心的役割を担っていたといえる^①。

引用・参考文献

注にあげる文献のほかに、河南市の歴史的環境については、以下の文献を参考にした

- ・阿南市 1987 「阿南市史 第 1 卷」
- ・阿南市 1995 「阿南市史 第 2 卷」
- ・徳島県農林水産部耕地課 1979 「土地分類基本調査 阿波富岡」
- ・阿南市教育委員会 1999 「河南市の文化財」
- ・菅原廉夫 1988 『日本の古代遺跡 37 徳島』 保育社
- ・角川書店 1986 『角川日本地名大辞典 36 徳島県』
- ・平凡社 2000 『日本歴史地名体系 37 徳島県の地名』
- ① 東潮編 1999 「川と人間－吉野川流域史－」 漢水社
- ② 中川襄三・須鉢和巳ほか 1966 「阿南市周辺の地盤地質について」
- 『総合学術調査報告 阿波富岡』郷土研究発表会紀要 第 12 号 阿波学会・徳島県立図書館
- ③ 徳島県立博物館 1997 「辰砂生産遺跡の調査－徳島県阿南市若杉山遺跡－」
- ④ 常松卓三 1999 「阿南の古代遺跡と文化」
- ⑤ 徳島考古学研究グループ 1983 「舞子島古墳群調査報告」「徳島考古」創刊号 徳島考古学研究グループ
- ⑥ 徳島県教育委員会・(財) 徳島県埋蔵文化財センター 1997
『立善寺跡遺跡－阿南工業高校電子機械科第 2 棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
(財) 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 17 集
- ⑦ 米田賀子ほか 1966 「阿南市富岡城下町の小研究」「総合学術調査報告 阿波富岡」郷土研究発表会紀要 第 12 号 阿波学会・徳島県立図書館



III 調査成果





III. 調査成果

a. 基本層序

平成 16 年度に調査を実施した 1 区・3 区とも旧地表面上に現代の市街化開発に伴う盛土があり、これについては重機で除去した。盛土の直下には地点によって現在の市街化以前の旧耕作土・床土層が残るが、大部分が近年の開発に伴う擾乱を受けており、遺物包含層も部分的にしか存在していない。標高 1.7 ~ 1.8m で造構面となる。造構面を形成するベースとなる土層は黄褐色粘質土である。地点によってグライ化している部分があったものの、造構埋土は暗灰黄色か黄灰色で検出に苦労しなかった。この造構面の下層について、遺跡の有無の確認のため掘削したが造構面ではなく確認された 1 面のみである。標高 1.3m から 0.4m はシルトもしくはシルトを多量に含む粘質土で、以下の層位は粘土層となる。井戸の掘削時に標高 -1.7 m まで粘土層を確認したが、湧水点にあったためそれ以下は確認できていない。

平成 17 年度に調査をした 2 区は、調査直前まで河南署の駐車場として利用されていたため、車庫の設備のほか、土間コンクリート・アスファルト舗装が残されていた。これらは機械掘削前にすべて撤去した。約 5cm 厚のアスファルトを撤去すると、60 ~ 80cm 厚の市街地化の際の盛土層が表れる。盛土層には山土が使われている。調査地の北側では、盛土層の下位 30cm 分に径 15cm 大のぐり石層が見られた。本層は運動場の下層に排水用として敷き詰められたものと考えられ、掘削時に多量の湧水が噴出した。この層位からの湧水は、少量ながら調査期間を通して見られた。

盛土層の直下は遺物包含層（暗灰黄色粘質土）となり、遺物包含層直下が造構面となる。造構面のベース土は粘性のやや弱い黄褐色粘質土である。造構面は標高 1.5m 前後で、江戸時代の造構 SD1017 以西はやや高く標高 1.7m 程度となる。平成 16 年度の調査区が標高 1.7 ~ 1.8m であることから、トノ町遺跡全体で見れば、東に向けて造構面が傾斜しているといえる。

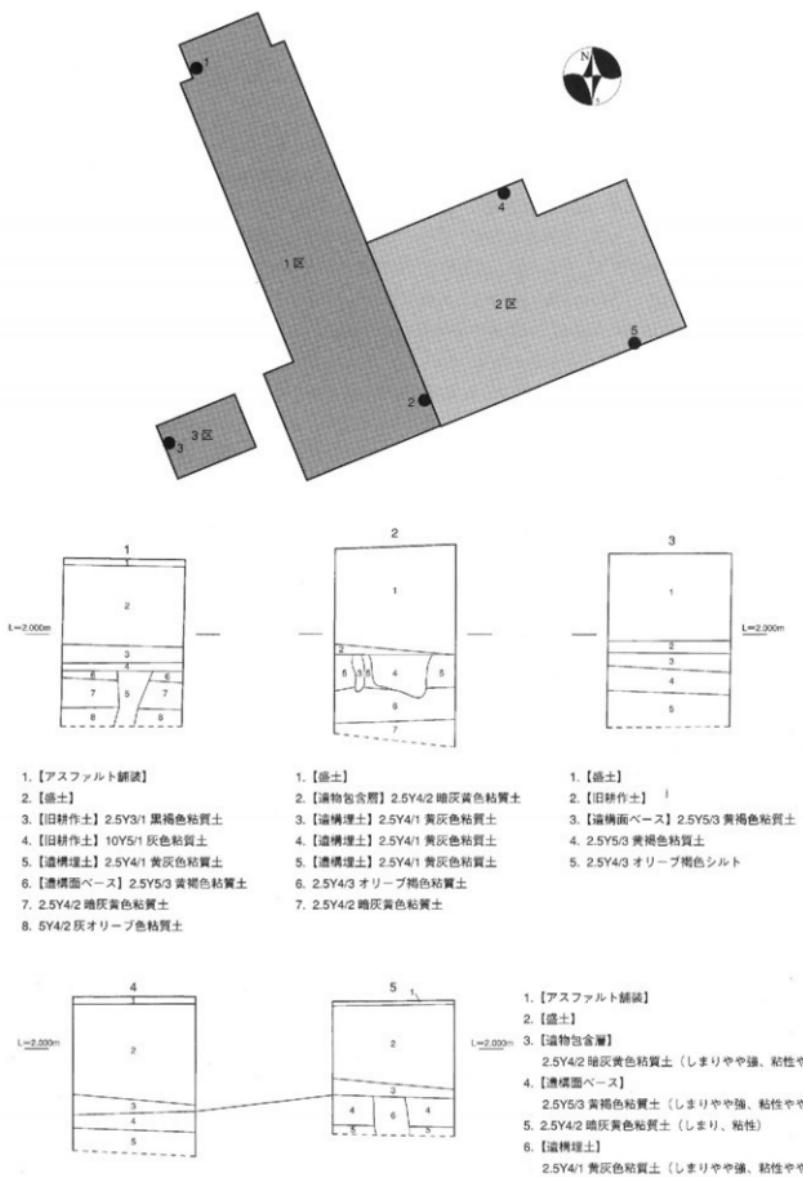
b. 遺構と遺物（第 6 ~ 8 図）

平成 16・17 年度の調査区内から検出された遺構は、第 6 図・第 7 図・第 8 図に示すとおりである。

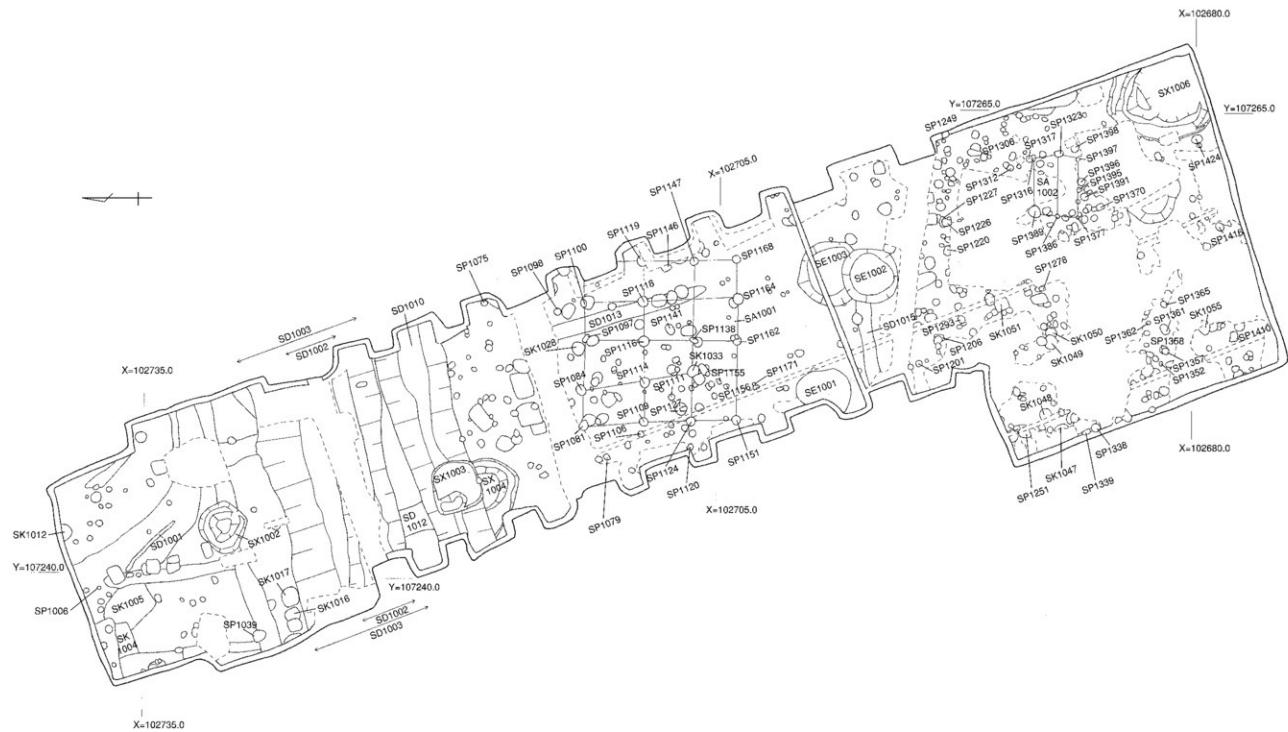
調査区は、桑野川河口の三角州地帯にある微高地に広がる市街地区域の東に位置する。検出された遺構の分布には近代以降の市街地化による破壊の影響が大きいものの、ある程度は遺跡の特徴を把握する事ができるものと考える。

調査で確認された帰属時期は、古代のものはわずかで、中心は鎌倉時代・室町時代・江戸時代初頭である。遺構に伴って出土した遺物は多いが、図化のできる遺物は多くはない。

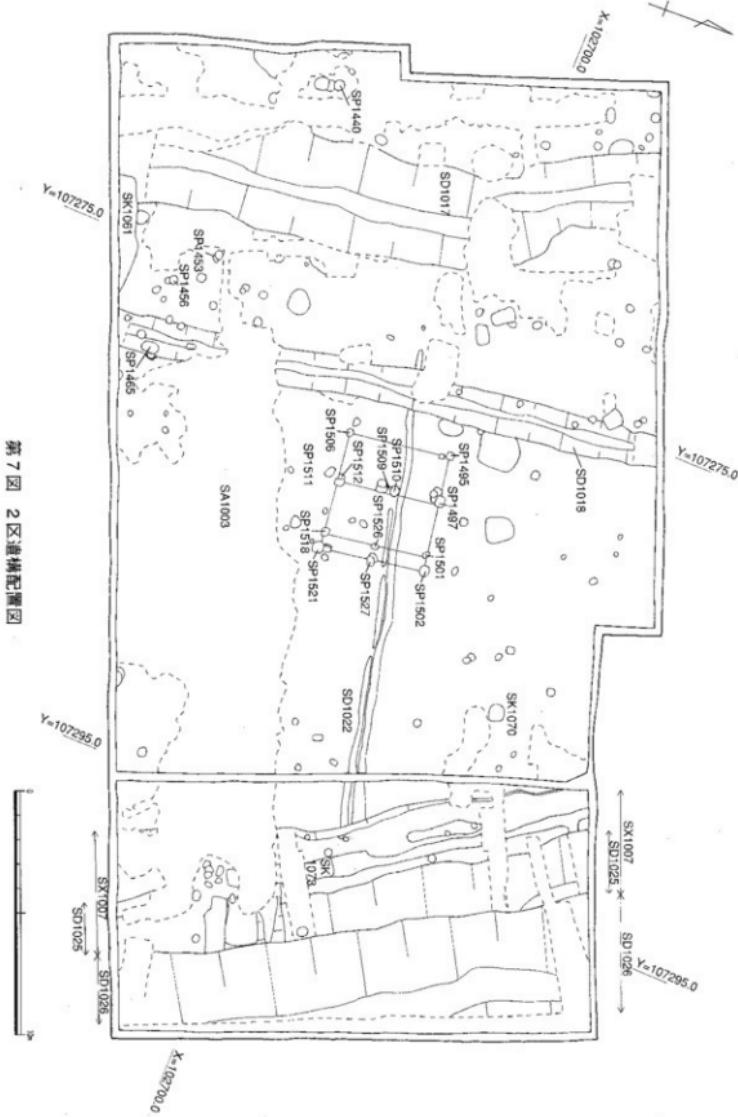
遺構数は掘立柱建物 3 棟、井戸 3 基、土坑 79 基、溝 28 条、不明遺構 7 基、小穴・柱穴 573 基を確認した。以下 1 区・2 区・3 区の順番に従い、調査区ごとに項目を立てて記述することにする。



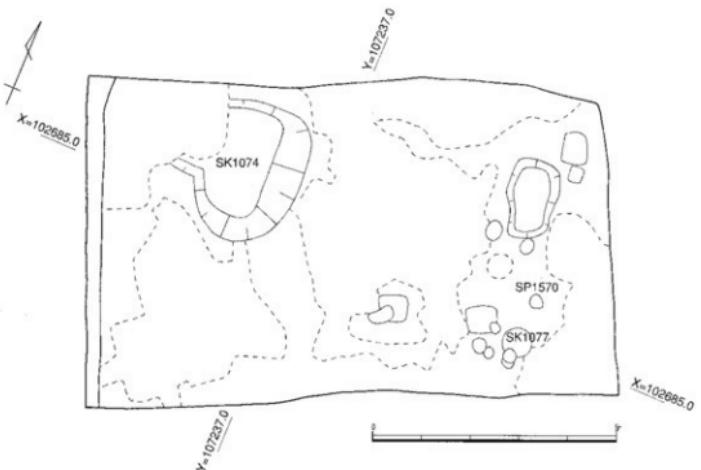
第5図 基本層序図



第6図 1区造構配置図



第7図 2区造林配図



第8図 3区遺構配置図

I. 1区

・1号掘立柱建物 (SA1001) (第9図)

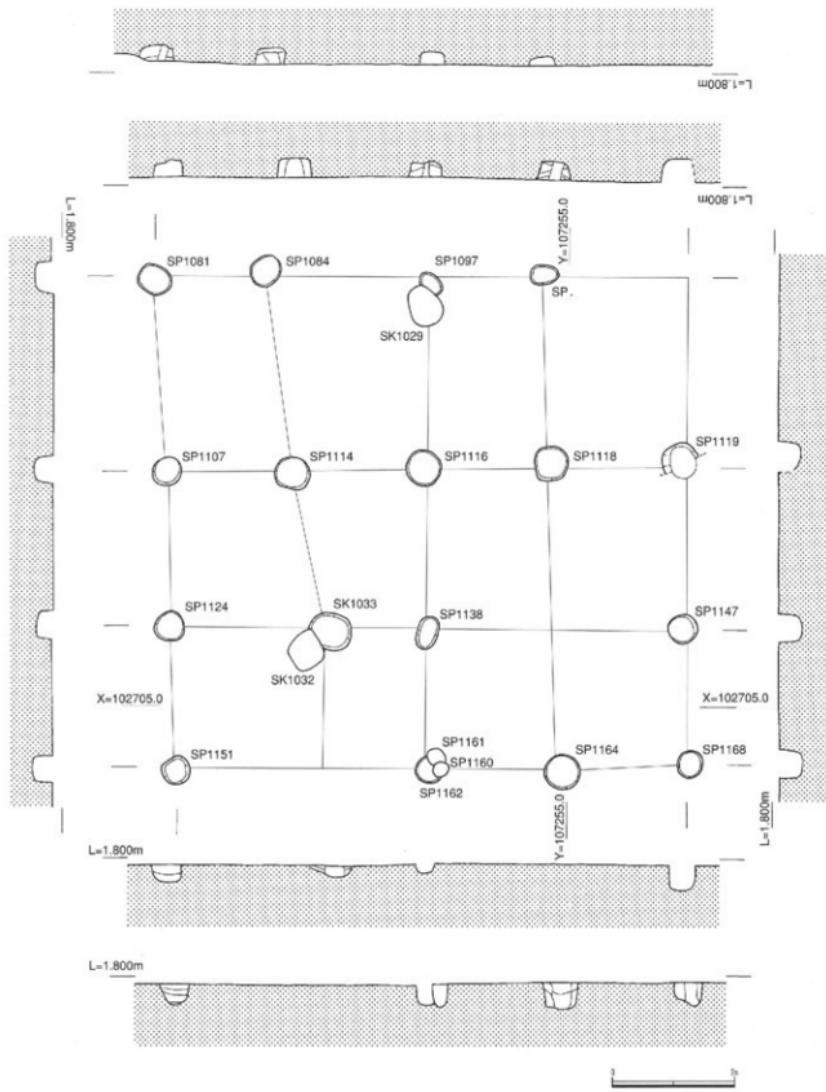
調査区のやや北よりの中央に位置する。検出グリッドは、H-I-J-4-5-6グリッドである。遺構の北東隅が調査区外に延びる。遺構規模は桁行4間×梁間4間を測る大型の総柱式の建物跡である。主軸はN-87°-Eを向き、ほぼSA1002、SA1003と同じ方向を示す。遺構はSK1025・SK1031・SD1003・SP1065を切り、SK1029・SK1032・SP11139・SP1160・SP1161に切られる。柱间距距離は桁行側では平均値213.3cm、梁間側で平均値200cm、床面積68.25m²を測る。平面規模からみて、庄屋クラスの建物ではないかと考えられる。SD1002とほぼ直行している位置にあると考えられる。

各柱穴の平面形状は円形もしくは隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。土層観察により、柱痕跡や抜き取りの痕跡は確認されていない。柱穴・土坑から土師質土器・須恵器・土師質の煮沸具・備前すり鉢・瓦器が出土している。SP1081・SP1084・SP1114より図化可能な遺物が出土しているが点数は少ない。

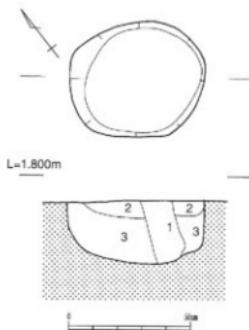
・81号小穴 (SP1081) (第10図・第11図)

調査区の中央よりやや西側に位置する。検出グリッドは、I-4グリッドである。遺構規模は長軸56cm、短軸46cm、深さ26cmを測る。遺構平面形状は不整円形を、断面形状は逆台形を呈す。埋土は3層に分層でき、1オリーブ灰色粘質土、2暗灰黄褐色、3オリーブ褐色粘質土である。土層観察では柱痕跡や抜き取りの痕跡は確認できなかった。遺物は土師質土器・瓦器・陶器・石製品などが12点出土しているが、図化することができたものはそのうち3点である。

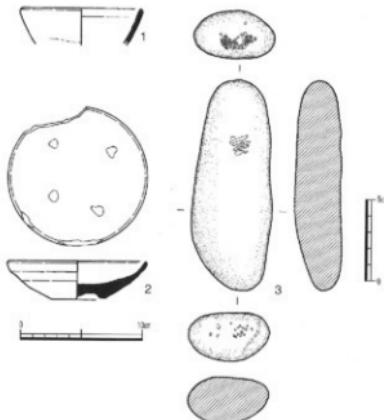
1は肥前系の陶器皿である。体部から口縁部は若干内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。外面体部下位は露胎である。釉薬は灰釉を施す。2は肥前系の陶器皿である。体部から口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部中位～底部は露胎であり、見込みに重ね焼きの胎土目



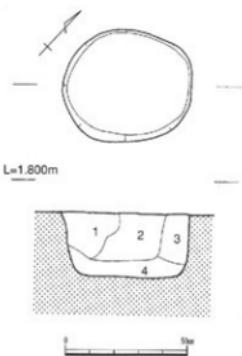
第9図 1区 SA1001 遺構平・断面図



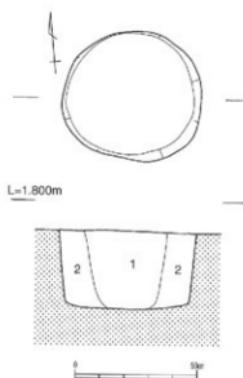
第10図 1区SP1081 遺構平・断面図



第11図 1区SP1081 出土遺物実測図



第12図 1区SP1084 遺構平・断面図



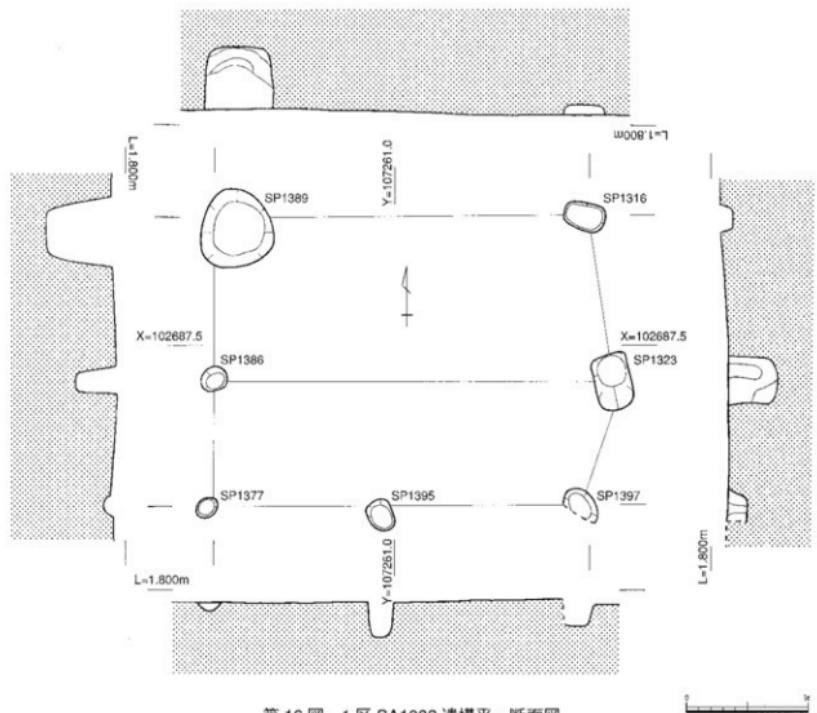
第14図 1区SP1114 遺構平・断面図



第13図 1区SP1084 出土遺物実測図



第15図 1区SP1114 出土遺物実測図



第16図 1区 SA1002 遺構平・断面図

が4ヶ所確認できる。皮鯨手の特徴を呈す。3は砂岩製の敲き石である。両端部に敲き痕が確認できる。

•84号小穴 (SP1084) (第12図・第13図)

調査区中央、SP1081の東に位置する。検出グリッドは、I-5グリッドである。遺構規模は長軸52cm、短軸46cm、深さ26cmを測る。遺構平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。埋土は4層に分層でき、1オリーブ褐色粘質土、2黄灰色粘質土、3暗灰黄色粘質土、4黄灰色粘質土である。第1・2・4層には炭化物が、第2・3・4層には焼土がわずか含まれている。土層観察では柱痕跡や抜き取りの痕跡は確認できなかった。遺物は須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦器などが19点出土しているが小片のため図化することができたものは1点である。

4は肥前系の陶器灰釉皿である。体部から口縁部は外上方に立ち上がり、端部をやや内湾気味に丸くおさめる。体部中位～下位は露胎、見込みに胎土目痕が確認できる。

・114号小穴（SP1114）（第14図、第15図）

調査区の中央に位置する。検出グリッドは、H-5グリッドである。遺構規模は長軸56cm、短軸54cm、深さ32cmを測る。遺構平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1灰色粘質土（炭化物片わずかに含む）、2灰オーリープ色粘質土（焼上わずかに含む）である。土層観察では柱痕跡や抜き取りの痕跡は確認できなかった。遺物は須恵器・土師質土器・瓦器・石・銅錢など45点出土しているが、多くが小片のため図化することができたものは1点である。

5は「天聖元寶」（北宋、1023年初鑄）の銅錢である。

・2号掘立柱建物（SA1002）（第16図）

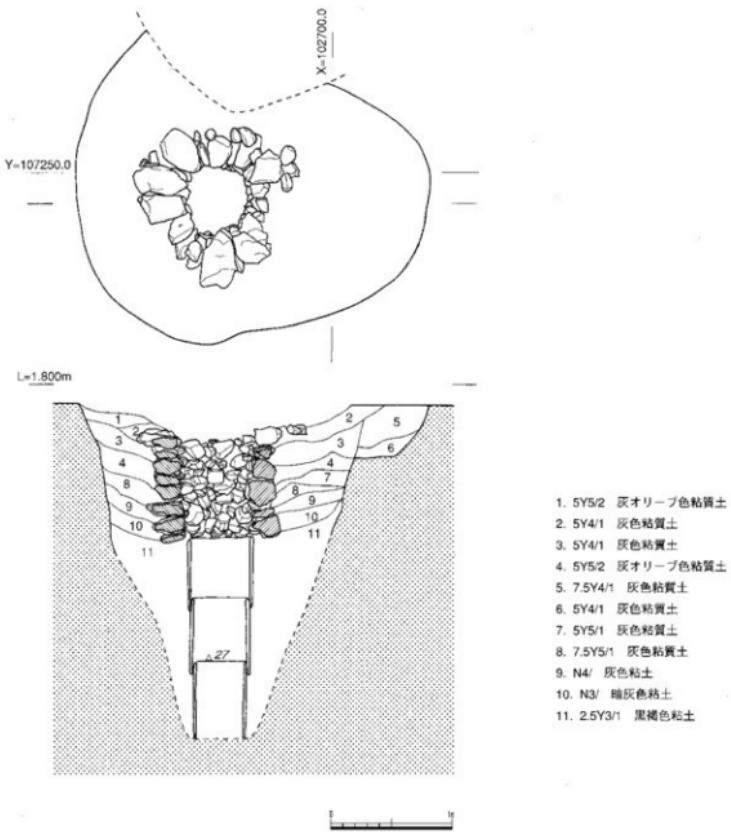
調査区の南側に位置する。検出グリッドは、D-6・7グリッドである。遺構規模は桁行2間×梁間2間を測る倒柱式の建物である。主軸はN-88°-Eを向き、SA1001・SA1003とはほぼ同じ方向を示すとみられる。柱間距離は桁行側では平均値194cm、梁間側114cm、床面積は8.85m²を測る。

各柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈するが、わずかに隅丸方形を呈すものもある。断面形状は逆台形を呈す。土層観察では柱痕跡や抜き取りの痕跡は確認できなかった。遺物は柱穴より須恵器・土師質土器・磁器・瓦器・平瓦・鉄滓が出土しているが、いずれも小片のため図化することはできなかった。

・1号井戸（SE1001）（第17図、第18図）

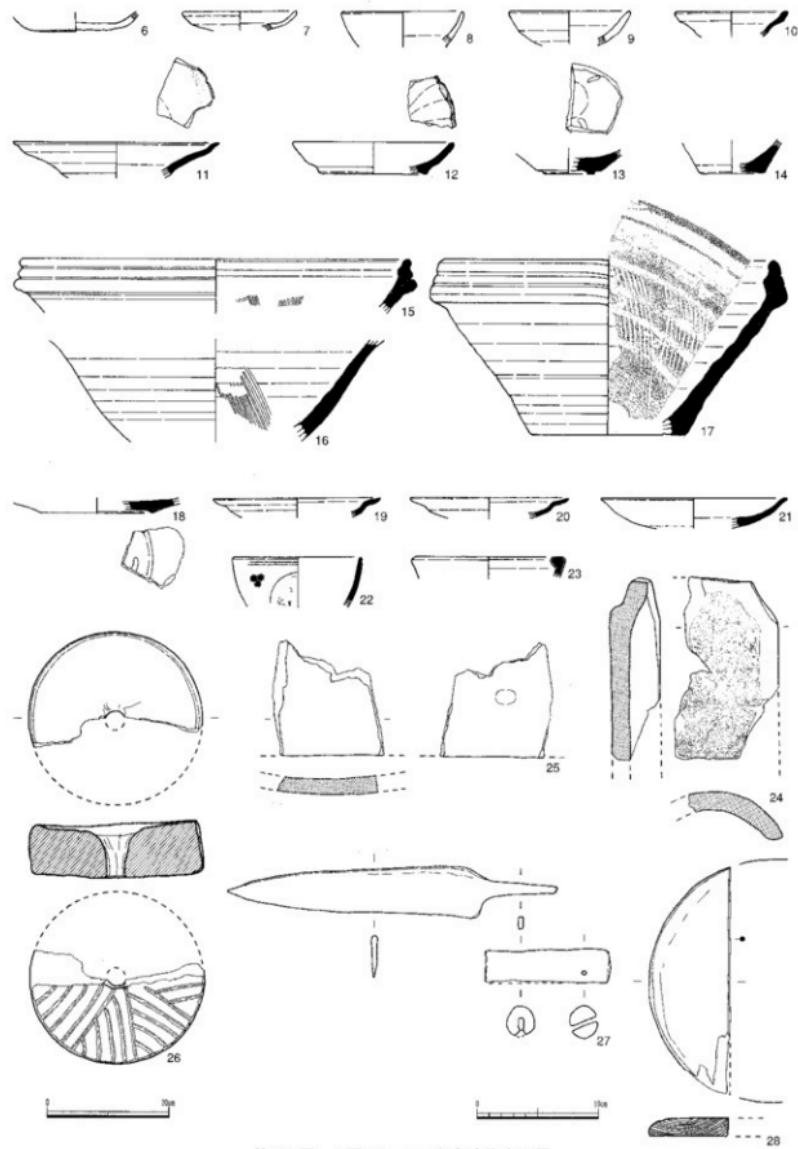
調査区の中央よりやや南西に位置する。検出グリッドは、F・G-4・5グリッドである。遺構西側の一部が調査区外に延びており、全体の形状・規模は不明瞭であるが、長軸（現存値）292cm、短軸234cm、深さ113.5cmを測る。遺構平面形状は不整楕円形、断面形状は湧水のため底部の検出ができず検出分で判断すると、船底形を呈す。掘り方検出面から下位へ25cm～120cmは、石組み構造でその遺存状態はよい。石組み下部には木桶を転用した井筒とする円形井筒を有する。木桶は竹製の籠で締められており、上から4段分まで確認できている。木桶の2段目と3段目の縫合部のレベル付近から包丁が1点出土している。包丁の下には編み籠のようなものが確認され、それに載せて包丁を埋置した可能性があると考えられる。4段目の確認はしたもの、以下の構造は湧水のため検出はできていない。遺物は、井筒内より須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦・石・木桶の外側より須恵器・土師質土器・陶器・瓦器・瓦・石が出土している。多くが小片のため図化できたのは、井筒内1点、井筒の外側22点である。

6は土師質土器の杯底部である。外面底部はナデにより切り離しの痕跡を消している。板目痕がみられる。7は土師質土器の皿である。短い口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部は摘み上げるようなヨコナデにより尖るようにおさめる。8は土師質土器の小椀である。井筒2段目外側埋土から出土している。体部から口縁部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部は摘み上げるようなヨコナデにより尖るようにおさめる。9は土師質土器の椀である。体部から口縁部は若干内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。器壁が厚く、体部下位には強いヨコナデにより段を有する。10は肥前系の陶器灰釉皿である。体部は外反し、口縁部下で上方に屈曲する。端部は肥厚し丸くおさめる。11は肥前系の陶器皿である。口縁部下で上方にく屈曲し、口縁端部を外反させる端反形を呈す。内面には鉄絵を施す。12は志野焼の皿である。内面に丸みのあるソギを施し、口縁部はヘラで切込みを入れて花弁状にする。口縁端部は擦り付けた様に釉を剥ぎ平縁を成す。口縁端面には煤が付着する。13は肥前系の陶器灰釉皿底部である。見込みに胎上目痕が確認できる。14は肥前系の陶器碗である。体部は



第17図 1区 SE1001 遺構平・断面図

外上方に立ち上がる。底部と体部の堺は明瞭であるが、底部内面のケズリが浅く、基筒底状に施す。15～17はすり鉢である。15は堺・明石系の陶器すり鉢である。口縁部を直立気味に上下に拡張し、口縁部外端面に凹線2条を形成する。内面にはすり目（3条/cm）を施す。16は備前窯すり鉢である。体部は外方に立ち上がり、内面にはすり目を施す。備前焼V期の桃山時代のものと考えられる。17は口縁部直立して立ち上がり、口縁部外端面に凹線2条を形成し、内面のすり目は1単位9条を呈す。備前焼V期の桃山時代のものと考えられる。18は志野焼の皿である。高台は貼り付け、外面底部に胎土目痕がある。鼠志野であろうか。19～21は肥前系の磁器皿である。19と20は器形が偏平で、口縁部下で大きく外反する鎧縁状を形成する。21は口縁部が外反し端部を丸くおさめる端反形を形成する。22は磁器碗である。体部内湾して上方に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。外面に染付けが施され、



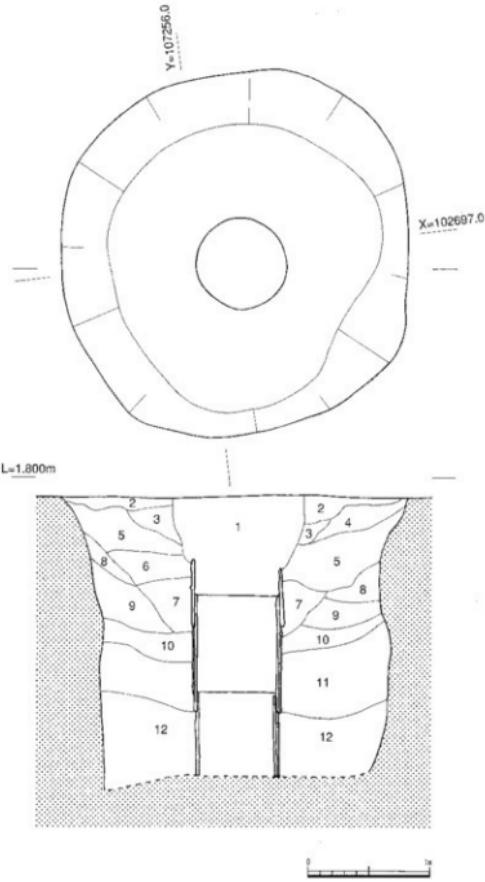
第18図 1区 SE1001 出土遺物実測図

肥前系であろうか。23は肥前系の線香立てである。24は丸瓦である。凸面はナデ調整で、凹面には吊り紐痕と平行した横筋のコビキ痕がみられ、中世後半のものであろうと考えられる。25は平瓦である。26は砂岩製の石臼である。井戸枠の石組みに使用されており、上面には煤が付着、底面にはすり目が確認できる。27は包丁である。刃は断面三角形を呈し、先端部は尖る。柄は差込の部分が柄の3分の2で、目釘穴が一ヶ所みられる。28は容器の底板である。周縁部は面取りを施し、側面に木釘が残存する。

・2号井戸（SE1002）（第19～22図）

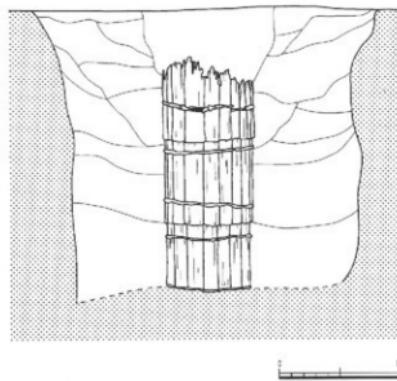
調査区の中央よりやや南に位置する。検出グリッドは、F-5・6グリッドである。遺構規模は長軸292cm、短軸286cm、深さ240cmを測る。遺構平面形状はほぼ円形、断面形状は湧水のため底まで検出できていないが、検出分から判断すれば逆台形を呈するとみられる。SD1003を切っている。掘り方の検出面から40cm以下に、木桶の転用である円形井筒を有する。木桶は竹製の籠で縛られており上から3段目まで確認できている。ただ掘り方検出面から下位へ2.3m（標高-60cm）で、SE1003方向からの湧水により、より下部の構造の検出ができなかった。遺物は、桶の中から多数の貝殻（表1を参照）・中世末の備前窯すり鉢・土師質土器・陶磁器・チャートが、木桶の外側からも多数の須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦器・瓦・チャートなどが出土しているが、國化できたものは井筒内13点、外側の埋土5点である。

29は肥前系の陶器灰釉皿である。体部は大きく外反し、口縁部下で「く」の字状に屈曲し、斜め上方に立ち上がる。口縁端部はやや尖り、見込みは凹面を形成する。30は中国から搬入した磁器の青花碗と考えられる。体部下位で内湾し、その後外方に直線的に延びる。口縁端部は尖り気味である。31は肥前系の大鉢である。体部は外上方に緩やかに立ち上がる。見込みに胎土目痕4ヶ所、外面には灰釉の釉だれが確認できる。32は陶器の取っ手付椀の類であろうか。伊賀か信楽のものであろうと考えられる。33は東播系のこね鉢である。体部は外上方にやや外反し、口縁部は若干上下に拡張し、やや尖り気味におさめる。34・35は備前窯のすり鉢である。34は口縁部が直立気味で上下に拡張し、口縁部外端面は凹線2条を巡らしている。片口部が残存する。時期はIV期後半に属するものと考えられる。35は内面のすり目は下から搔きあげるだけでなく斜め方向にも入り、底部にもすり目が施されている。時期はV期の桃山時代のものと考えられる。36は丸瓦である。凸面にはヘラミガキが施され、凹面には成形時の布目痕と切り取り時のわずかなコビキ痕がみられる。37はキセルの吸い口である。両縁部が欠損している。38は食事具の漆器椀である。遺存状態は悪い。39は荷札本筋の可能性が考えられる。一面に「いと五斗入」、もう一面に「安右衛門」の墨書が読み取ることができる。「いと」は糸のことを見ていると考えられ、その品物を納めた人名をもう一面に書いたもの。一端を尖らせており、荷物に刺したものと思われる。40は桶である。復元の直径11.2cm、高さ15cmを測る。41は曲げ物底板である。42～46は箸である。いずれも角柱状であったものを断面多角形に成形を施している。

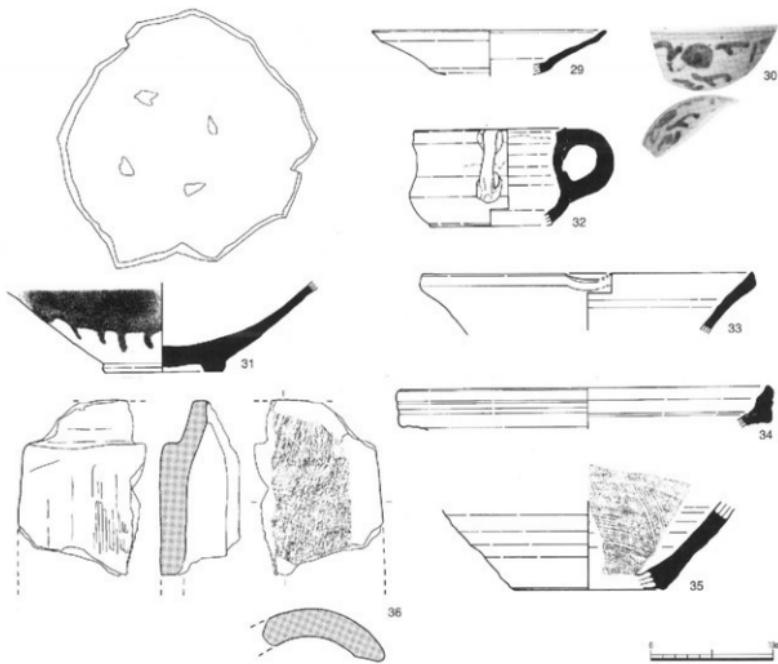


第19図 1区 SE1002 遺構平・断面図

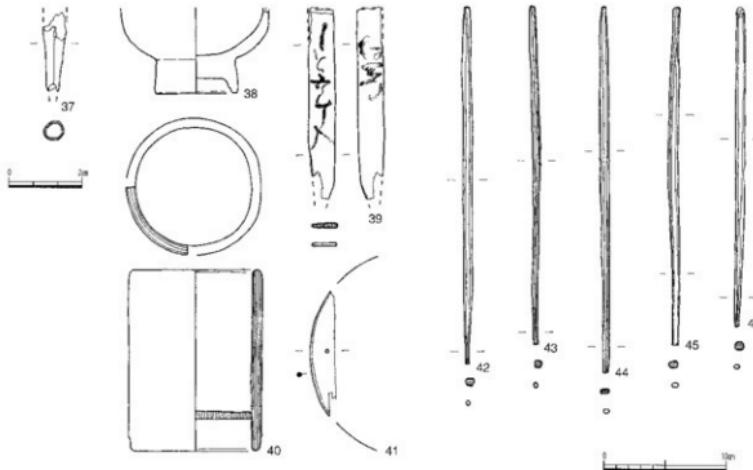
L=1.800m



第20図 1区 SE1002 井戸枠状況図



第21図 1区 SE1002 出土遺物実測図 (1)



第22図 1区 SE1002 出土遺物実測図 (2)

・3号井戸 (SE1003) (第23図)

SD1002の北に位置する。検出グリッドは、F・G-5・6グリッドである。南側をSD1002に切られ遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸(現存値)334cm、短軸282cm、深さ130cmを測る。遺構平面形状は不整円形を呈し、断面形状は検出分から船底形を呈すとみられる。この井戸は、一辺50cmの方形井筒を持ち、掘り方検出面から約3.2mの深さがある。この方形井筒は四隅に角柱を立て、横木を二ヶ所に組み、外側に鋪板を立てている。その下は木製の円形井筒があったが、湧水により詳細な検出はできていない。遺物は埋土より須恵器・土師質土器・備前窯すり鉢・国産磁器・羽釜の脚・瓦器など26点出土しているが、いずれも小片のため図化できていない。

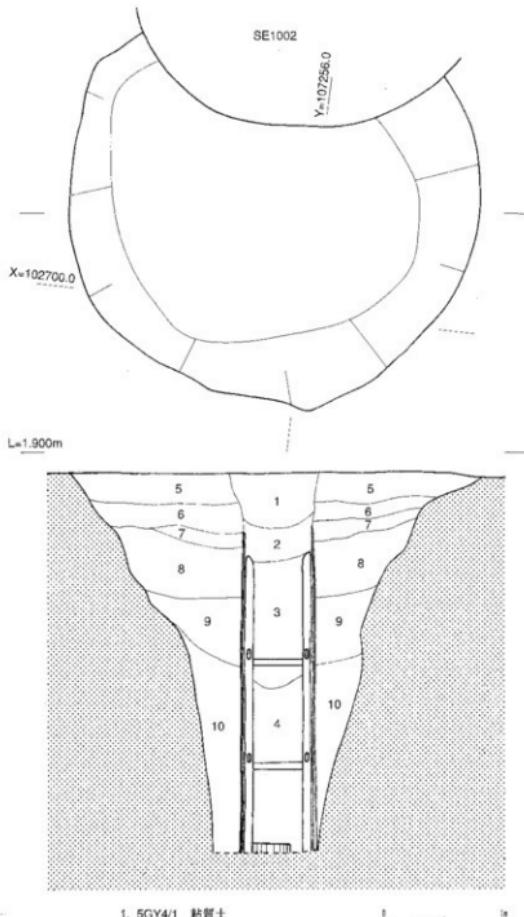
・4号土坑 (SK1004) (第24図、第25図)

調査区の北に位置する。検出グリッドは、N-2グリッドである。東側はSK1005を切っているが、西側をSD1006、北側をSD1003に切られている。そのため全体の規模・形状が不明瞭であるが、長軸(現存値)174cm、短軸106cm、深さ13cmを測る。遺構平面形状は隅丸方形を、断面形状は逆台形を呈すと推定される。埋土は2層に分層でき、1オーリーブ褐色粘質土、2暗灰黄色粘質土である。遺物は、土師質土器が5点出土しているが、図化できたものは1点である。

47は土師器の高台付皿である。古代のものと考えられる。

・5号土坑 (SK1005) (第26図、第27図)

調査区の北に位置する。検出グリッドは、M-2・N-2である。SX1001を切り、SK1003・SK1004・SD1007に切られている。そのため全体の規模・形状が不明瞭であるが、長軸(現存値)280cm、短軸206cm、深さ16cmを測る。遺構平面形状は不整隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。埋土は3層に



- 1. 5GY4/1 粘質土
- 2. 5GY5/1 粘質土 しまりやや弱い
- 3. 5GY5/1 粘質土 しまりやや強い
- 4. 7.5GY4/1 粘質土
- 5. 5YS2/1 灰オリーブ粘質土
- 6. 2.5Y4/1 黄灰色粘土
- 7. NSI 灰色粘土
- 8. N4 灰色粘土
- 9. 7.5Y5/1 灰色粘質土
- 10. 5B3/1 粘土

第23図 1区 SE1003 遺構平・断面図

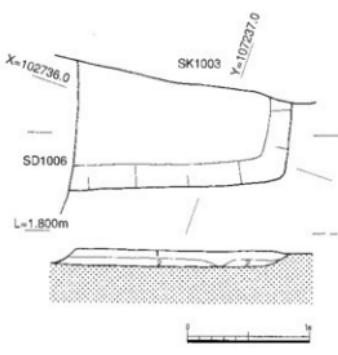
分層でき、1暗灰黄色粘質土、2暗灰黄色粘質土、3黒褐色粘質土である。遺物は土師質土器・須恵器・瓦器など88点出土しているが、小片であるため図化できたものは3点である。

48は須恵器の楕である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部はやや外反して端部を丸くおさめる。49は和泉型瓦器楕である。体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部がやや外反し端部を丸くおさめる。調整は外面ユビオサエ、内面のヘラミガキは磨滅のため不明瞭である。50は須恵器の長頸壺である。体部最大径18.3cmを測り、外面肩部には刺突文を施す。古墳時代後期のもの。

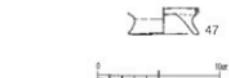
•12号土坑 (SK1012)

(第28図、第29図)

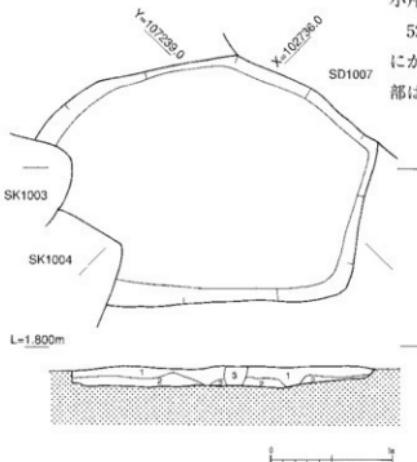
調査区の北に位置する。検出グリッドは、N-3グリッドである。遺構北側は調査区外に延びているため遺構全体の規模・形状が不明瞭であるが、長軸(現存値)88cm、短軸54cm、深さ20cmを測る。遺構平面形状は不整円形を呈すと考えられる。断面形状は不整逆台形を呈すと考えられる。埋土は2層に分層でき、1灰色粘質土、2灰オリーブ色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・瓦器・砥石



第24図 1区 SK1004 遺構平・断面図



第25図 1区 SK1004 出土遺物実測図



第26図 1区 SK1005 遺構平・断面図

転用窓など25点出土しているが、國化できたものは1点である。

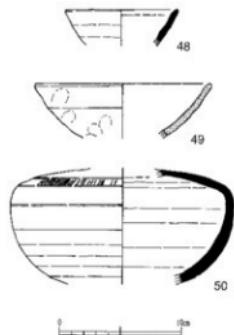
51は土師質土器の皿である。体部から口縁部はわずかに内湾しながら短く立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。底部は回転ヘラギリを施す。口縁部に煤が付着し、灯明皿に転用したものとみられる。

•16号土坑 (SK1016)

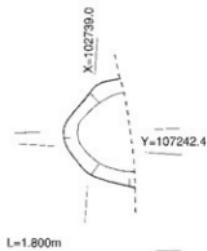
(第30図、第31図)

調査区の北西に位置する。検出グリッドは、L-2グリッドである。西側はSK1015に切られる。遺構規模は長軸76cm、短軸60cm、深さ46cmを測る。遺構平面形状は不整隅丸方形を呈す。断面形状は逆台形を呈す。埋土は5層に分層でき、1黄褐色粘質土、2暗灰黄色粘質土、3黒褐色粘質土、4暗灰黄色粘質土、5暗灰黄色粘質土である。遺物は須恵器、土師質土器が41点出土しているが、小片のため國化できたもの1点である。

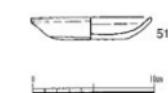
52は土師質土器の杯である。体部から口縁部にかけては外上方に直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味におさめる。胎土は精良である。



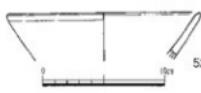
第27図 1区 SK1005
出土遺物実測図



1. 10Y6/1 灰色粘質土
2. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土
第 28 図 1 区 SK1012
遺構平・断面図



第 29 図 1 区 SK1012
出土遺物実測図



第 31 図 1 区 SK1016
出土遺物実測図

•17 号土坑 (SK1017) (第 32 図、第 33 図)

SK1016 の東に位置する。検出グリッドは、L - 2 グリッドである。遺構規模は長軸 100cm、短軸 90cm、深さ 60cm を測る。遺構平面形状はやや東に突出した隅丸方形を呈す。土坑東側底面にはピット状の落ち込みが存在する、不整逆台形を呈す。埋土は 8 層に分層でき、1 黒褐色粘土、2 黄灰色粘質土、3 黑褐色粘土、4 黄褐色粘質土、5 黄褐色粘質土、6 黄褐色粘質土、7 にぶい黄色粘質土、8 にぶい黄色粘質土である。1 層には炭化物が極わずか含まれている。遺物は土師器の椀 1 点、岡化できた。

53 は土師器の例である。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部はやや外反し端部を丸くおさめる。赤色塗彩を施す。9 ~ 10 世紀のものと考える。

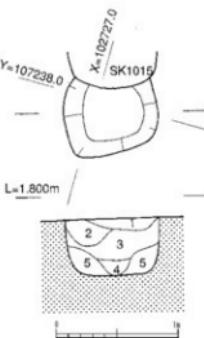
•28 号土坑 (SK1028) (第 34 図、第 35 図)

調査区の中央に位置する。検出グリッドは、I - 5 グリッドである。遺構規模は長軸 74cm、短軸 68cm、深さ 32cm を測る。遺構平面形状は不整隅丸方形、断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は 2 層に分層でき、1 暗灰黄色粘質土、2 黄灰色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・瓦・瓦器・石が 19 点出土しているが、岡化できたものは 2 点である。そのうちの 1 点は 1 层の上位中央で出土している。

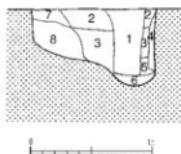
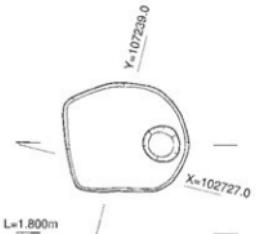
54 は備前窯の陶器壺である。底部にヘラ記号が記される。55 は龍泉窯系の青磁碗である。体部は緩やかに内湾して外上方に立ち上がる。外面部には鎬運弁を施す。底部の器壁が厚く、高台のみ露胎である。横田・森田編年の I - 5 類と考えられる。

•47 号土坑 (SK1047) (第 36 図、第 37 図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、D - 4 グリッドである。西側を搅乱により切られている。そのため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）80cm、短軸 34cm、深さ 30cm を測る。遺構平面形状は不整形、断面形状は船底形を呈す。埋土は 6 層に分層でき、1 黄灰色粘土質土、2 暗灰黄色粘質土、3 黄灰色粘質土、4 暗灰黄色粘質土、5 黄灰色粘質土、6 灰黄色シルトである。遺物は土師質土器皿・瓦器・



1. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
3. 2.5Y3/2 黑褐色粘質土
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
第 30 図 1 区 SK1016
遺構平・断面図



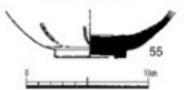
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘土
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
3. 2.5Y3/1 黒褐色粘土
4. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
5. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
6. 2.5Y5/4 黄褐色粘質土
7. 2.5Y6/3 にい黄褐色粘質土
8. 2.5Y6/3 にい黄褐色粘質土

第32図 1区SK1017
遺構平・断面図

第33図 1区SK1017
出土遺物実測図



第35図 1区SK1028
出土遺物実測図



石が20点出土しているが、図化できたものは1点である。

56は土師質土器の皿である。口縁部は大きく外反し、端部は尖りぎみにおさめる。底部は回転糸切りのち丁寧にナデを施す。

•48号土坑 (SK1048) (第38図、第39図)

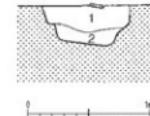
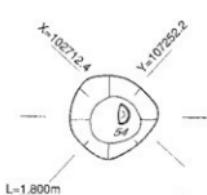
調査区の南西に位置する。検出グリッドは、D-4グリッドである。西側を暗渠に切られている。そのため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）59cm、短軸48cm、深さ29cmを測る。遺構平面形状は橢円形を呈すと推定される。断面形状は不整形を呈す。埋土は3層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2黄灰色粘質土、3黄褐色粘質土である。遺物は土師質土器・土製鉄型・陶磁器・瓦器・石が20点出土しているが、小片であるため図化できたものは1点である。

57は土製鉄型である。湯の当り部分の色調から鉄付きの鍋を製造するためのものであろうと考えられる。

•49号土坑 (SK1049) (第40図、第41図)

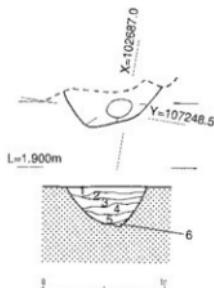
調査区南側の中央よりに位置する。検出グリッドは、D-5グリッドである。東側はSK1050を切り、南西側は搅乱に、北側はSP1268に切られている。長軸（現存値）75cm、短軸70cm、深さ59cmを測る。遺構平面形状は不整形、断面形状は南よりにピット状の落ち込みのある不整逆台形を呈す。埋土は5層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2暗灰黄色粘質土、3黄灰色粘質土、4灰オリーブ色粘質土、5オリーブ黒色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・備前のか壺・瓦器・鉄製品などが48点出土しているが、小片のため図化できたものは3点である。

58・59は鉄釘とみられる。58は頭部をL字形に折り曲げている。59は両端部を欠損する。60は鉄滓（スラグ）である。



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
2. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土

第34図 1区SK1028
遺構平・断面図



第36図 1区SK1047
遺構平・断面図



第37図 1区SK1047
出土遺物実測図

第39図 1区SK1048
出土遺物実測図

1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
5. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
6. 2.5Y6/2 灰黄色シルト

第36図 1区SK1047
遺構平・断面図

•50号土坑 (SK1050) (第42図、第43図)

調査区の南側に位置する。検出グリッドは、D - 5 グリッドである。西側を SK1049 に切られる。そのため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）62cm、短軸 56cm、深さ 40 cm を測る。遺構平面形状は不整円形で、断面形状は逆台形を呈すと考えられる。埋土は 3 層に分層でき、1 黄灰色粘質土、2 黄灰色粘質土、3 灰色シルトである。遺物は土師質土器・青磁碗・瓦器・鉄製品が 45 点出土しているが、小破片であるため図化できたものは 1 点である。

61 は鉄釘とみられる。頭部を L 字に折り曲げている。

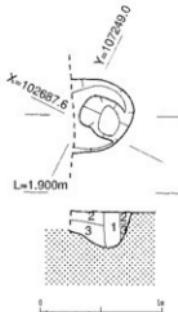
•51号土坑 (SK1051) (第44図、第45図)

調査区の南側に位置する。検出グリッドは、D-E - 5-6 グリッドである。SP1284・SP1285・SP1286・SP1289 を切り、暗渠に切られている。そのため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）72cm、短軸 64cm、深さ 44cm を測る。遺構平面形状は隅丸方形を呈するとみられ、断面形状は逆台形を呈す。埋土は灰色粘質土の 1 層である。遺物は須恵器・土師質土器・備前的小甌・白磁・瓦器・鉄製品・チャートなどが 75 点出土しているが、小片であるため図化できたものは 1 点である。

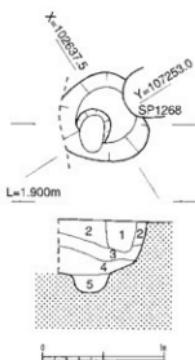
62 は頭部をやや拡張し、わずかに屈曲する鉄釘である。

•55号土坑 (SK1055) (第46図、第47図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、B - 5 グリッドである。SP1413 を切り、東側を搅乱に切られている。そのため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）66cm、短軸 64cm、深さ 34cm を測る。遺構平面形状は不整形を呈し、断面形状は逆台形を呈すと考えられる。埋土は、1 黄灰色粘質土、2 暗灰黄色粘質土、3 黄灰色粘質土、4 黄灰色粘質土で、第 4 層が

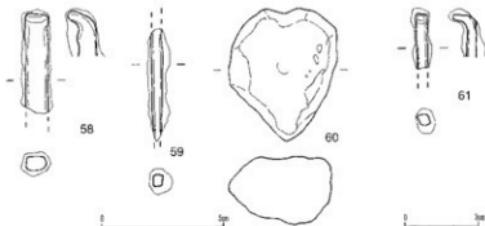


第38図 1区SK1048
遺構平・断面図



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
3. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
4. 5Y5/3 暗オーラープ色粘質土
5. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土

第40図 1区SK1049
造構平・断面図



第41図 1区SK1049
出土遺物実測図

第43図 1区SK1050
出土遺物実測図

第1・2・3層を包み込むように分層できる。遺物は土師質土器の皿・杯・碗・羽釜のほか、陶磁器・瓦・石・チャートが84点出土しているが、小片のため図化できたものは2点である。

63は土師質土器の杯である。体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反し端部をやや尖り気味におさめる。底部は丁寧なナデにより切り離しの痕跡を消している。全体に丁寧なつくりのものであり、中世後半のものと考えられる。64は土師質土器の羽釜である。体部は内湾気味に上方に立ち上がり、口縁部は肥厚し端部は上方にやや尖るようにおさめる。鶴は貼付で、断面三角形を呈す。外側体部に平行タキを施す。15世紀頃の播磨型のものとみられる。

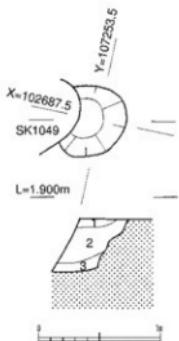
・1号溝 (SD1001) (第48図、第49図)

調査区の北に位置する。検出グリッドは、M・N - 3グリッドである。道構規模は全長3.66m、最大幅0.3mを測り、両端部は収束している。深さは4cm前後と非常に浅い。断面形は浅い楕円形である。道構はSX1001を切る。埋土は暗灰黄色粘質土1層である。遺物は須恵器・土師質上器、木製品が11点出土している。図化できたものは1点である。

65は薄板の木製品で、下端を尖らせる形状からみて舟串の類品であると考えられる。

・2号溝 (SD1002) (第50図、第51図)

調査区の北側に位置する。検出グリッドは、K - 4・5・6、L - 5・6・7グリッドである。主軸を東西方向に持ち、両端部は調査区外に延びる。調査区内での規模は全長11.05m、最大幅1.8m、深さ0.78m前後を測る。断面形状は船底形を呈す。道構はSD1003を切

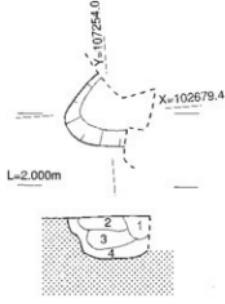


1. 10Y4/1 灰色粘質土
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
3. 7.5Y5/1 灰色シルト

第42図 1区SK1050
造構平・断面図



第44図 1区SK1051
遺構平・断面図



第46図 1区SK1055
遺構平・断面図



第45図 1区SK1051
出土遺物実測図

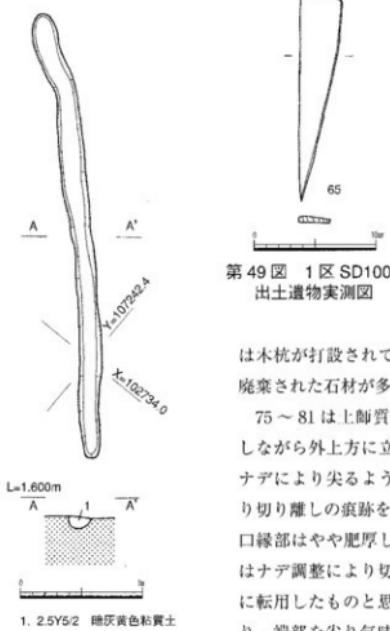
第47図 1区SK1055
出土遺物実測図

り、SD1003が埋められた後に掘り直されたものではないかとみている。埋土は8層に分層でき、1褐灰色粘質土、2黄灰色粘質土、3灰色粘質土、4黄灰色粘質土、5灰色粘質土、6黄灰色粘質土、7暗灰黄色粘質土、8褐灰色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・陶器・瓦・瓦器・チャート・銅錢・スラグが196点出土している。図化できたものは9点である。

66は磁器の白磁碗である。口縁部は口禿げで、高台は露胎である。「口禿げの白磁」と呼ばれている一群とみられ、森田編年のA群13~14世紀頃のものと考えられる。67は須恵器の壺である。頭部から口縁部は大きく外反し、口唇部に凹線を有す。口縁端部は上下に拡張し、やや平坦である。体部外面に平行タタキを施す。68は須恵器の壺である。頸部から口縁部は大きく外反し、口唇部に凹線を有す。口縁端部は上下に拡張し、やや平坦である。体部外面に平行タタキを施す。69は土製鋳型である。口径17cmの鉄製鍋を鋳造したものとみられる。70・71は土師質の管状土錠である。72は「皇宋通寶」(北宋、1039年初鑄)の銅錢である。73・74は鉄滓(スラグ)である。

・3号溝(SD1003)(第50図、第52図、第53図、第54図、第55図、第56図、第57図)

調査区の北側に位置する。検出グリッドは、K-2・3・4・5、J-3、L-2・3・4グリッドである。主軸を東西方向に持ち、両端部は調査区外に延びる。調査区内での規模は全長14.2m、最大幅5.8m、深さ1.24m前後を測る。断面形状は船底形を呈する。遺構はSD1005・SD1009・SD1012を切り、SD1002・SP1044に切られている。埋土は19層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2暗灰黄色粘質土、3暗灰黄色粘質土、4黄褐色粘質土、5暗灰黄色粘質土、6灰黄色粘質



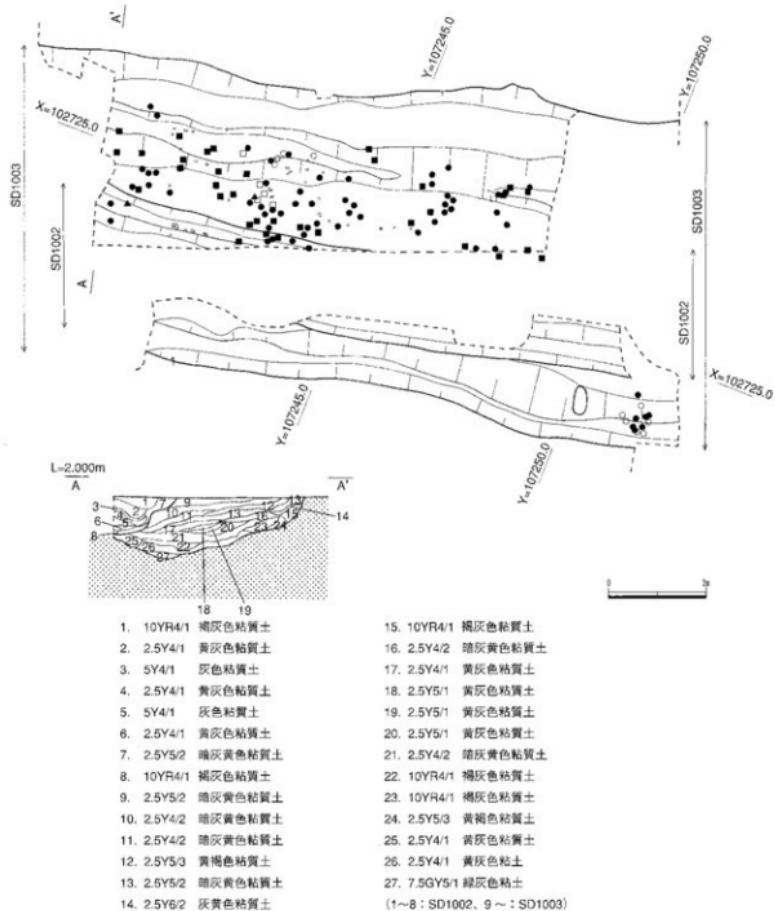
第48図 1区 SD1001
遺構平・断面図

81は「志」の文字が確認できる。82は土師質土器の上鍋である。口縁部下で「く」の字状に屈曲し、端部を下方に拡張するものである。調整は外面体部にタテハケ（3条/cm）、内面体部はヨコハケ（3条/cm）、口縁部板ナデを施す。83は土師質土器の羽釜である。口縁部が短く立ち上がり、ほぼ直下に断面三角形の突出の弱い鉢状の凸帯が巡る。調整は内外面とも体部はユビオサエのちナデ、口縁部はヨコナデを施す。在地のもので、中世後半のものと考えられる。84は土師器壺である。口縁部下で「く」の字状に屈曲し、口縁端部を上方に拡張、端面を平坦におさめる。古代のものと考える。85は土師質の焰燭である。体部が短く直立して立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底面はやや平坦であろうと考えられる。在地のものであろうか。86は和泉型瓦器碗である。体部は内湾しながら外方に延び、口縁部はやや外反、端部をやや丸くおさめる。調整は外面体部中位以下にユビオサエの痕跡を残し、口縁部ヨコナデ、内面見込みに平行線状ミガキを施す。時期的には尾上編年のⅢ期初め、13世紀前後のものと考えられる。87～92は陶器碗である。87は体部が内湾して上方に延び、口縁部はやや外反し端部を丸くおさめる。外面とも鉄釉を施す肥前系のものである。88は高台駒を回転ヘラケゼリで成形し、高台の一部露胎とする。釉薬は灰釉を施す。89は高台直上で大きく内湾、その後上方に立ち上がる。豊み付けは露胎であり、置き砂が付着する。京・信楽系のものであろうか。90は削り出し高

第49図 1区 SD1001
出土遺物実測図

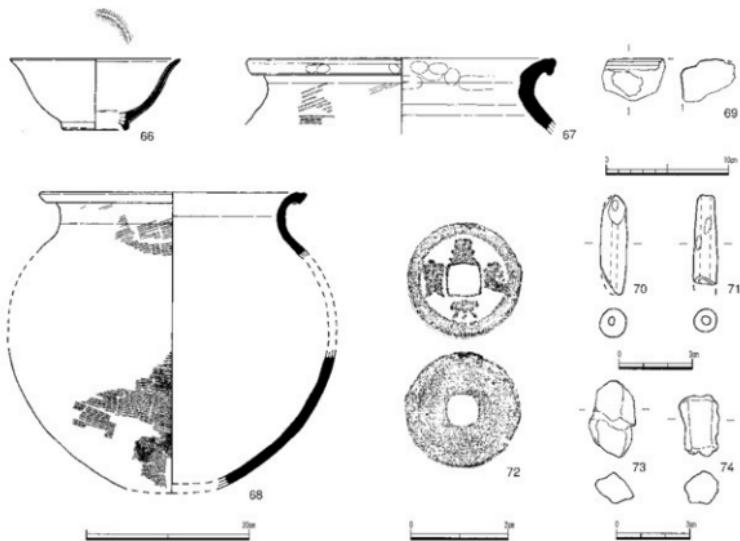
土、7褐灰色粘質土、8暗灰黄色粘質土、9黄灰色粘質土、10黄灰色粘質土、11黄灰色粘質土、12黄灰色粘質土、13暗灰黄色粘質土、14褐灰色粘質土、15褐灰色粘質土、16黄褐色粘質土、17黄灰色粘質土、18黄灰色粘土、19綠灰色粘土である。遺物は須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦・瓦器・チャート・石・鉄製品・木製品・六花鏡など合計約2000点が出土した。そのうち固化できたものは101点である。遺構西側の底面には木枕が打設されているが規則性は見出せず、またその周辺には廻棄された石材が多く見られる。

75～81は上師質土器の皿である。75は短い口縁部がやや内湾しながら外方に立ち上がり、口縁端部は摘み上げるようなヨコナデにより尖るようにおさめている小皿である。底部はナデにより切り離しの痕跡を消している。76は体部が外方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚して外反する。口縁端部は丸くおさめる。底部はナデ調整により切り離しの痕跡を消している。77・78は灯明皿に転用したものと思われる。77は短い口縁部が外方に立ち上がり、端部を尖り気味におさめる小皿である。78は体部が外方に立ち上がり、口縁部は外反し端部を丸くおさめる皿である。底部の調整はナデにより切り離しの痕跡を消している。79～81は外面底部に墨書きのある土器である。79は「しうか（志うか）」、80は「う」、

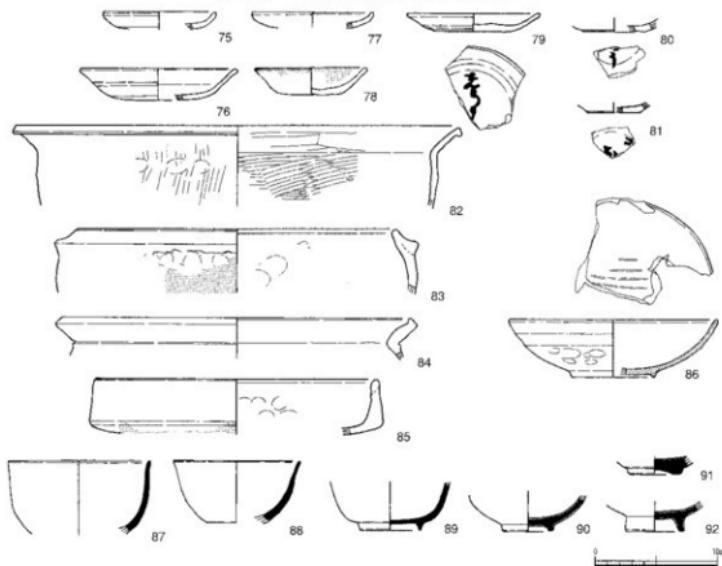


第50図 1区 SD1002・1003 遺構平・断面図

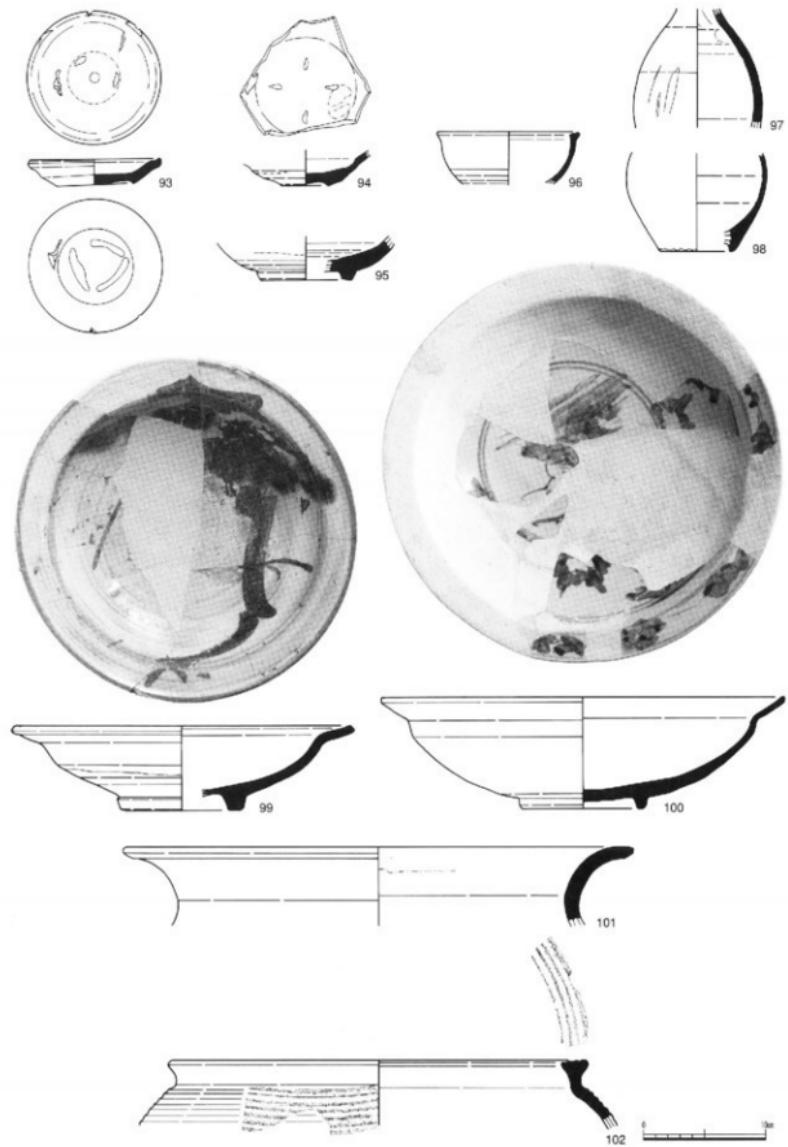
台は低く、豊み付けは露胎で胎土が付着している。釉薬は内面に灰釉、外面に鉄釉を施す。91は内面に鉄釉を施す。高台は露胎である。内面に墨痕があり、硯に転用したことが分かる。92は高台の削り出しは高く、豊み付けは露胎である。90～92は瀬戸窓のものである。93～95は陶器皿である。93は体部が外上方に立ち上がり、口縁部が外反し口唇部に溝を巡らせる溝縁皿である。底部は碁笥底で、砂目の痕跡をとどめ、見込みは蛇目ノ目釉剥ぎを施す。瀬戸窓のものであろう。94は削り出し高台は浅く、体部との境界が不明瞭である。内面は凹面を呈す。肥前系の灰釉皿とみられる。95も肥前系のもので



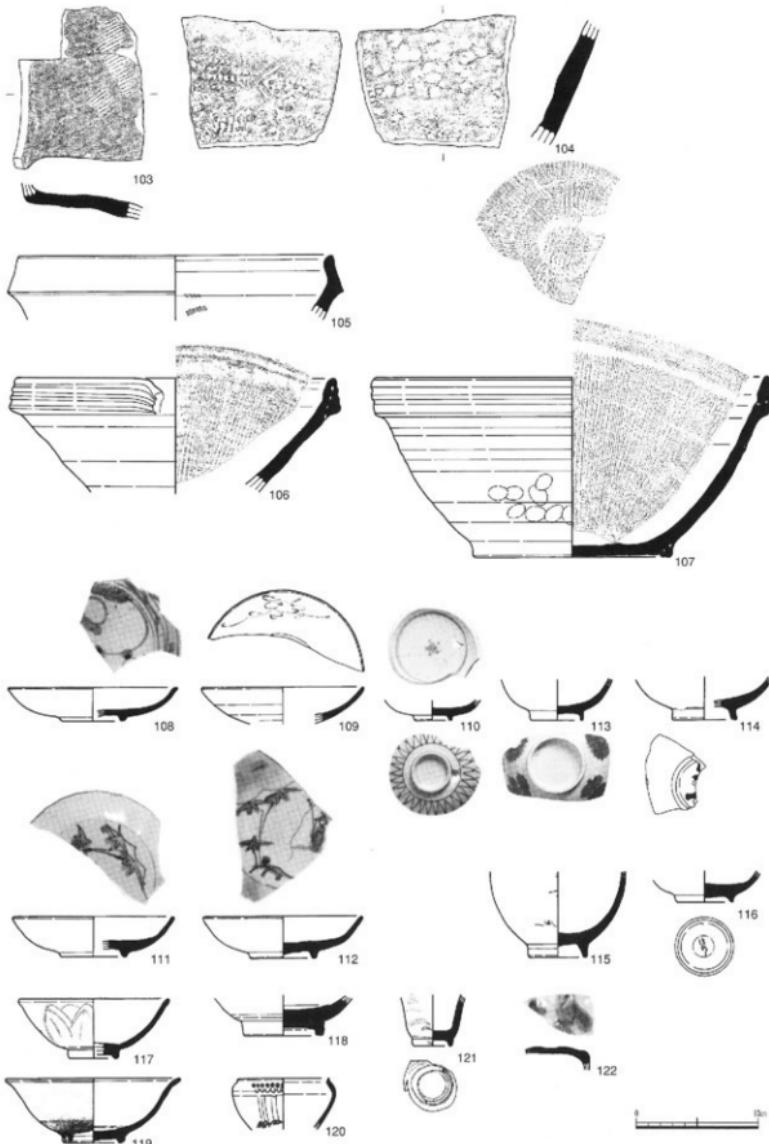
第51図 1区 SD1002 出土遺物実測図



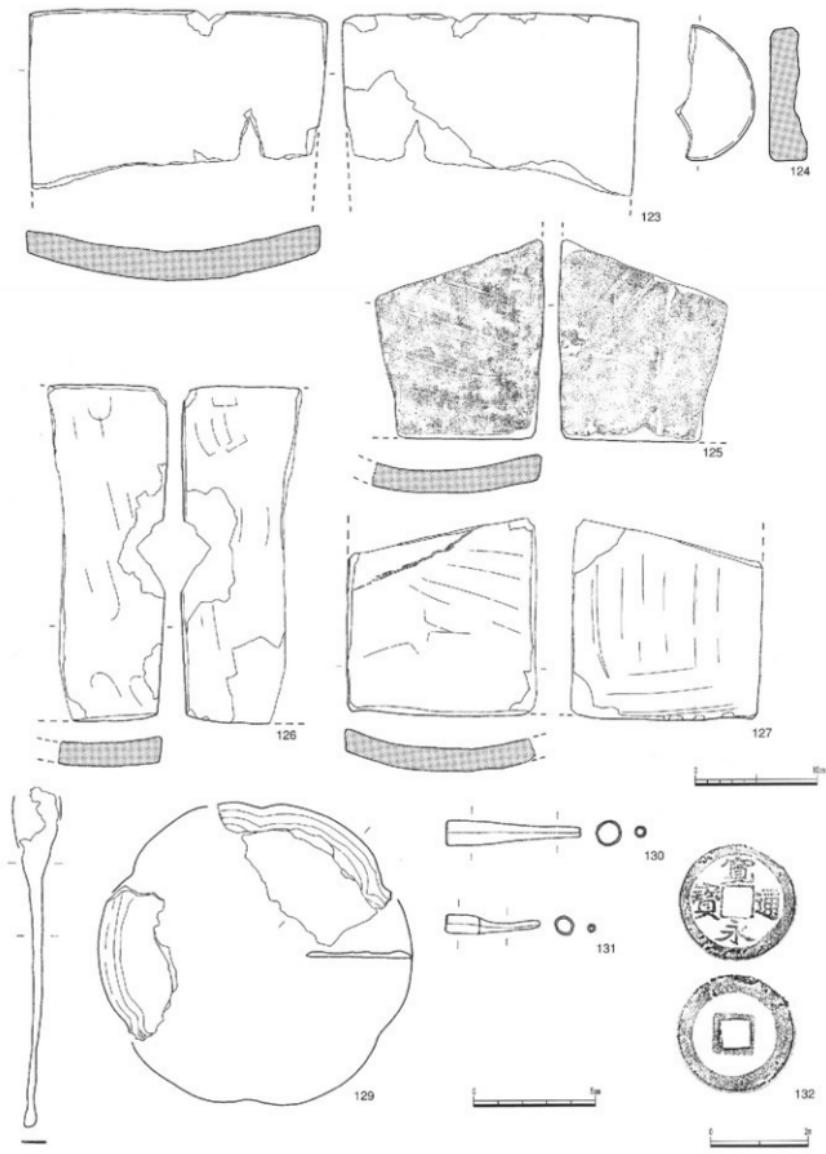
第52図 1区 SD1003 出土遺物実測図 (1)



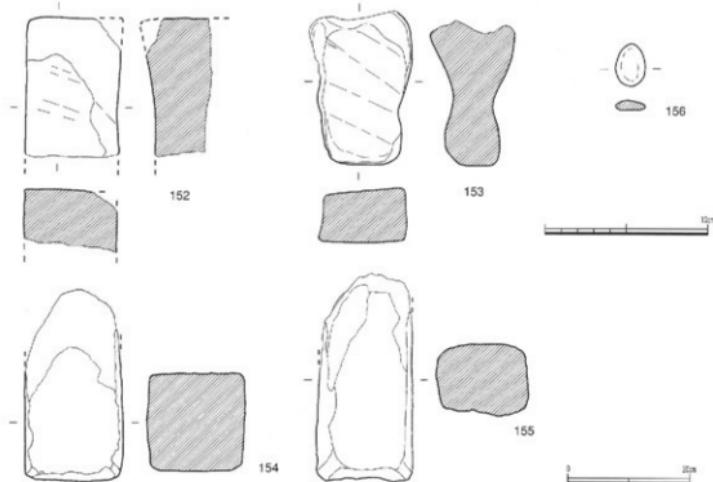
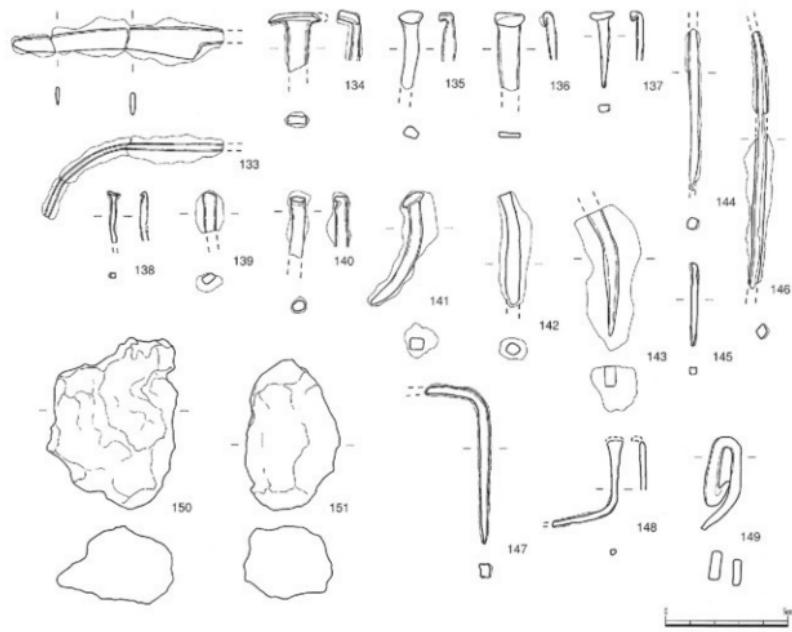
第53図 1区 SD1003出土遺物実測図(2)



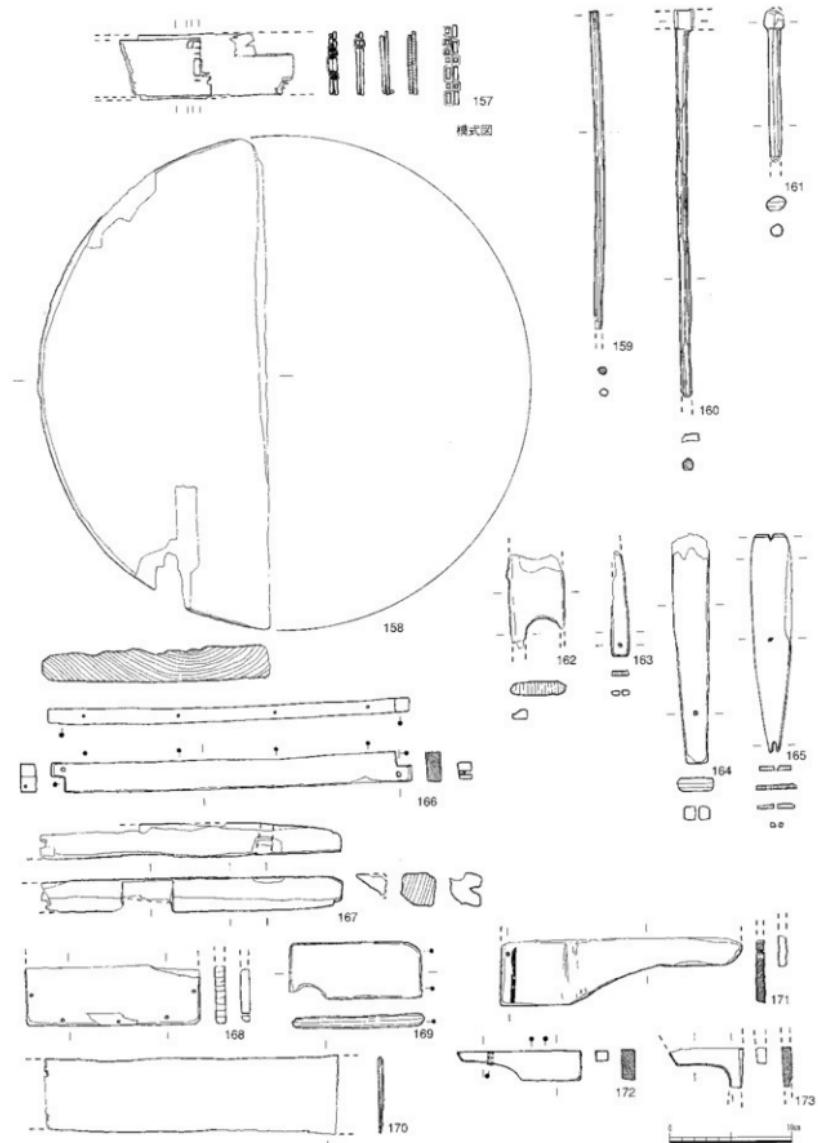
第54図 1区 SD1003 出土遺物実測図 (3)



第55図 1区 SD1003 出土遺物実測図 (4)



第56図 1区 SD1003 出土遺物実測図 (5)



第57図 1区 SD1003 出土遺物実測図 (6)

ある。器壁は厚く、削り出し高台は露胎で、逆台形を呈す。釉薬は内面に鉄釉を施す。96は陶器の鉢である。体部から口縁部は内湾し、端部外側に拡張し、上部端面は内面方向に傾き平坦である。97・98は徳利である。97は備前窯のもので外面に自然釉が掛かり、98は肥前系のもので、釉薬は縁みの白を発色する。99は唐津の陶器大皿、100は古伊万里の磁器大皿である。両皿とも、体部は緩やかに内湾し、口縁部下で「く」の字状に折れ、口縁部は若干内湾気味で端部を丸くおさめる。99は体部中位～高台まで露胎で、内面に二彩の松絵が描かれ、見込みに砂目痕が3ヶ所みられる。100は豊み付けの釉を剥ぎ、内面の染付けが施される。101は常滑窯の陶器壺である。口縁部下で大きく外反し、端部を丸くおさめる。時期は赤羽・中野編年の2型式、12世紀末と考えられる。102は信楽焼の陶器みずや壺である。体部は内湾し、口縁部下で直立して立ち上がる。口縁部は水平方向に拡張し、端面は平坦で凹線を3条巡らす。体部外面全体に規則的な凹凸を呈し、自然釉が掛かっている。103は常滑窯の壺である。外面には押印文が帯状連続施文され、自然釉が掛かる。101と同一個体ではないかと考えられる。104は陶器の壺である。体部内外面に格子タタキを施し、外面には自然釉が掛かる。常滑か瀬美窯のものか。105～107は陶器のすり鉢である。105は口縁部を上下に拡張し、先端部はやや外反し尖り気味におさめる。時期は備前焼Ⅳ期末のものと考えられる。106は口縁部を上下に拡張し、口縁部外端面に円線を3条巡らしている。すり日は内底面から放射状に施される。時期は備前焼V期、中世末から近世初頭にかけてのものと考えられる。107は堺・明石系のものである。体部は内湾しながらやや外上方に延び、口縁部は上下に拡張し、端部は丸くおさめる。口縁部外端面に四線2条を巡らしている。すり日は底部から放射線状に掻きあげるだけでなく、見込みにもすり日を1単位7条で施している。108～112は磁器皿である。108は体部中位から口縁部が短く外上方に立ち上がる。口縁部はやや外反し端部を丸くおさめる。豊み付けの釉を剥ぎ、置き砂が付着する。内面の染付けは唐草文を施す。初期伊万里とみられる。109は内面体部に草花文の染付けがなされ、見込みは蛇目釉剥ぎを呈す、肥前系の染付け碗である。110は外面に網目文と高台脇に圓線2条、内面見込みに圓線2条、中央にスタンプを施す。111は体部中位以上が短く外上方に立ち上がり、端部は方形状を呈し、輪花形に成形する。見込みの染付けは圓線1条と竹文を施す。初期伊万里とみられる。112は器形や染付けが111と同様であるが、112の方が輪花形の成形が明瞭ではない。113は肥前系のもので体部が内湾しながら上方に延びる。外面体部に菊花文の染付けが施されている。114は京焼で、削り出し高台は高く、高台は露胎である。高台内に墨書が確認できるが、内容は不明である。115は肥前系の碗で、削り出し高台は高く、豊み付けに置き砂が付着している。外面体部に染付けが施される。116は京・信楽系の灰釉碗である。高台は露胎で、高台内に刻印を施している。117・118は龍泉窯系の青磁碗である。117は体部下位で内湾、その後外上方に延び、口縁部はやや外反し端部をやや尖り気味におさめる。豊み付け～高台内は露胎である。調整は外面体部に籠蓮弁を施している。横田・森田編年のI～5類と考えられる。118は底部のみで、器壁は厚く豊み付け～高台内は露胎である。時期については調整が不明瞭であるため、確認できない。119は輸入磁器の白磁碗である。体部は内湾しながら外上方に延び、口縁部は外反して、やや尖り気味におさめる。削り出し高台は露胎である。口縁部は口禿げを呈す。森田編年のA群、14世紀のものと考えられる。120は白磁の小壺である。121は肥前系の小杯である。体部は染付けが施され、豊み付けは露胎である。122は水滴である。123～127は瓦である。123、125～127は平瓦、124は軒瓦である。125の凹面には板ナデの痕跡が、126・127の凹面には布目痕をナデで消す痕跡が確認できる。

128はサジ状銅製品である。両端に大小のスプーン状に幅広く延ばされている。129は青銅製の六花

鏡である。3片からなり、それぞれの破断面に歪みは少なく、鋳上がりは良好である。鏡面部は厚さ1.25～1.60mm、縁部分は断面カマボコ形で厚みは3.10～3.20mmである。外周部の径11.9cmに復元される。文様がなく無闇であり、中国南宋代に鑄造された湖州鏡とみられる。県内で始めてとなる出土である。130・131はキセルの吸い口である。132は「寛永通寶」(1635 初鋲)の銅錢である。

133は刀子とみられる。頭部欠損している。134～149は鉄釘である。134～138、140・141は頭部を折れ曲げ、水平方向に拡張しているものである。146は長さ21.0cmを測る大型の鉄釘である。147は体部を大きくL字状に折れ曲げた大型の鉄釘である。149は鉄釘が2つ折になっているものである。頭部を折れ曲げているものである。150・151は鉄滓(スラグ)である。

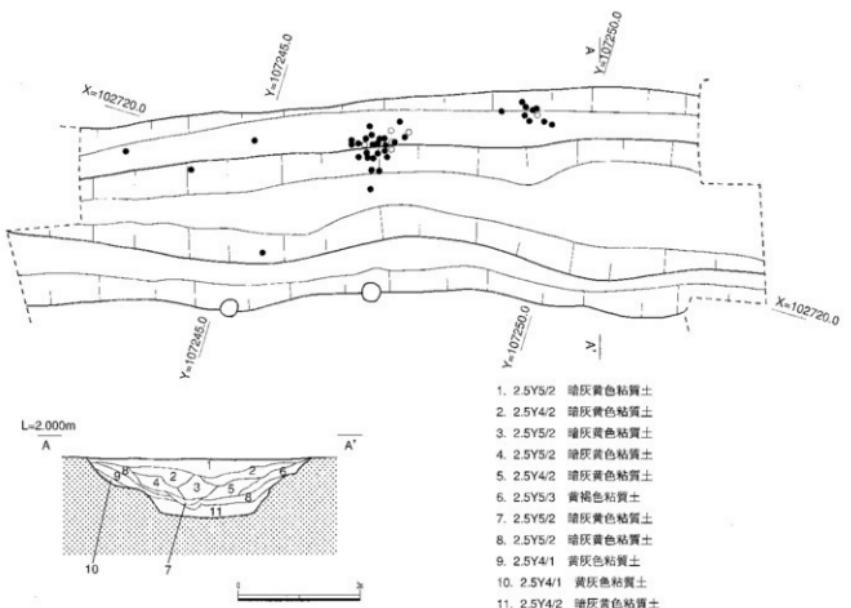
152・153は凝灰岩製の砥石で、153は3面を砥面として使用した痕跡が残っている。154・155は花崗岩の加工製品であろうが用途はわからない。156は蛇紋岩の募石である。

157は曲物側板である。側板を樺皮で綴じており、その穿孔が14ヶ所、側板内側に鋸引き線5本を確認できる。158は桶の底板である。復元径40.6cmを測る。159は箸である。160・161は題斐軸状の形態。162は円形の割り込みをもつて鉤、163は用途不明品。165は荷札木筒とみられる。上下両端の小口面にV字型に切り込みと中央の穿孔はこの木筒を止めるために使用されたものと考えられる。墨書きは一面に「米?」、もう一面に「おねつ四十斗」と読む事ができるが、また「四十斗」は「茶料」とも読める。164、166～169、171～173は丁寧な加工がされたもので、調度品として使用されたのではないかとみられる。170は板材、171～173は調度品の脚部か。

•10号溝 (SD1010) (第58図、第59図)

調査区のやや北側、SD1003のすぐ南に位置する。検出グリッドは、J・K - 3・4・5グリッドである。主軸を東西方向に持ち、両端部は調査区外に延びる。調査区内での規模は全長12.08m、最大幅3.7m、深さ0.96m前後を測る。北側と南側にそれぞれのテラス状の平壠部が形成され、一段落ちた底部は平坦である。断面形状は不整逆台形を呈す。遺構はSX1004・SP1052・SD1012を切り、SX1003・SP1045・SP1046に切られている。埋土は11層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2暗灰黄色粘質土、3暗灰黄色粘質土、4暗灰黄色粘質土、5暗灰黄色粘質土、6黄褐色粘質土、7暗灰黄色粘質土、8暗灰黄色粘質土、9黄灰色粘質土、10黄灰色粘質土、11暗灰黄色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・磁器・瓦・瓦器・石・チャート鉄製品など約3400点が出土しているが、中でも多数を占めるのは、中世の上師質土器・瓦器・磁器である。ただし、小片のために固化できたものは16点である。

174は土師質土器の皿である。体部から口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部を断面方形におさめる。外面底部は回転ヘラギリのちナデの調整を施している。175は土師質土器の鍋である。口縁部は体部より上方に立ち上がり、端部は若干水平方向に肥厚し平坦面を呈す。調整は外面体部に平行タタキ、内面は板ナデを施している。播磨型で中世後半のものと考えられる。176は土師質土器の羽釜である。やや内湾気味の口縁部下に断面方形の鐸を水平方向に巡らせるものである。調整は外面体部のタタキは磨滅で不明瞭、内面体部にはハケ(8条/cm)、口縁部にユビオサエを施している。播磨型のもので、時期は14世紀後半のものと考えられる。177は瓦質の羽釜である。体部から口縁部は外上方に立ち上がり、口縁部下に断面方形の鐸を巡らせるものである。時期は13世紀～14世紀前半のものと考えられる。178・179は土師質土器の甕である。178は口縁部下で「く」の字状に短く屈曲し、口縁端部を若干上方に拡張したものである。外面口縁部下に煤が付着している。時期は古代のものとみられる。179は口縁

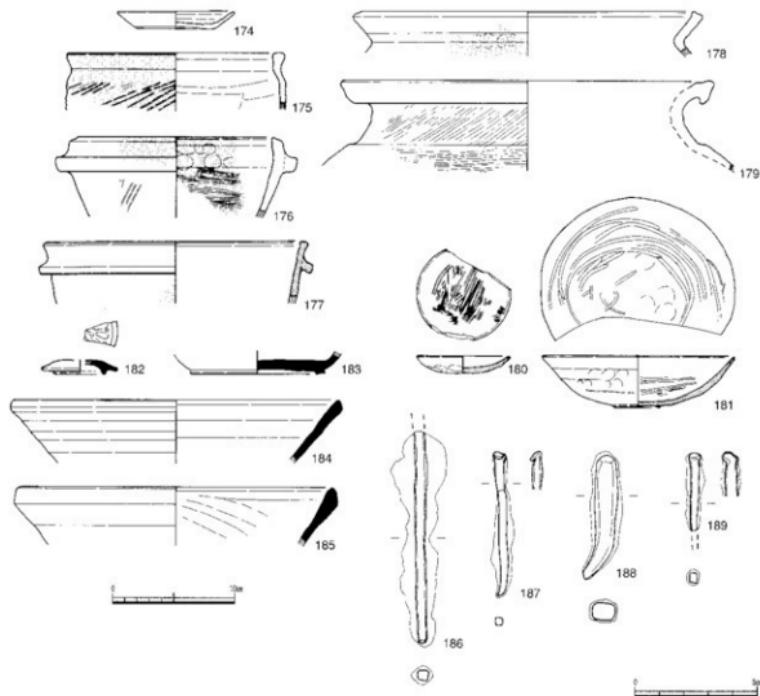


第 58 図 1 区 SD1010 遺構平・断面図

部が大きく外反し、端部をやや上下に拡張する。口唇部には四線を巡らしている。調整は頭部に斜め方向のハケ、体部がヨコハケを施している。遺存状態はあまりよくない。180 は和泉型瓦器の小皿である。体部～口縁部は内湾しながら緩やかに外上方に立ち上がり、口縁端部をやや尖り気味におさめる。調整は外面体部下にユビオサエ、口縁部ヨコナデ、内面は底部に平行線状のヘラミガキが施されている。尾上編年のⅢ期のものとみなされる。181 は和泉型瓦器碗である。体部は緩やかに内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反、端部はやや丸くおさめる。調整は体部外面にユビオサエ、口縁部ヨコナデ、内面はやや疎らな圓線状のヘラミガキが施される。時期は尾上編年のⅣ期と考えられる。182 は磁器の合子蓋である。183 は須恵器の高台付杯である。時期は 8 世紀のものと考えられる。184・185 は東播系のこね鉢である。184 は体部が外上方に直線的に立ち上がり、端部は方形状におさめる。森田稔の編年第Ⅱ期第 2 段階、12 世紀末～13 世紀初頭と考えられる。185 は端部が上方に拡張し、断面三角形状を呈する。184 と同様の時期と考えられであろう。186～189 は鉄釘である。187・189 は頭部を薄く伸ばした後に折り曲げたものである。

・12 号土坑 (SD1012) (第 60 図、第 61 図)

調査区の北西、SD1003 と SD1010 の間に位置する。検出グリッドは、J・K - 3 グリッドにある。北側を SD1003 に、南側を SD1010 に切られる。主軸を南北方向に持ち、調査区内での規模は全長 1.66m、



第59図 1区 SD1010出土遺物実測図

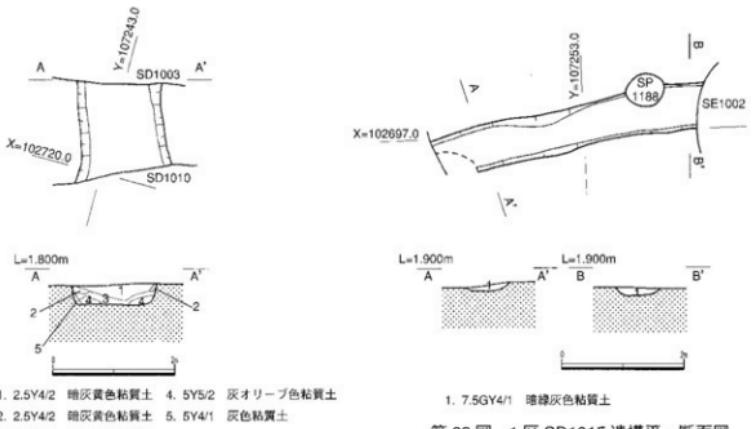
最大幅1.36m、深さ36cm前後を測る。断面形状は逆台形を呈す。埋土は5層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2暗灰黄色粘質土、3暗灰黄色粘質土、4灰オリーブ色粘質土、5灰色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・瓦器・チャート・石製品など約140点が出土している。図化できたものは1点である。

190は粘板岩の礎石（黒色）である。

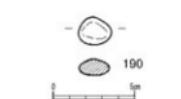
•15号土坑 (SD1015) (第62図、第63図)

調査区の中央よりやや南側に位置する。検出グリッドは、F-5・6グリッドである。主軸を東西方向に持ち、西側は調査区外に延び、東側はSE1002に切られ、東方向には延びていない。SP1088にも切られる。調査区内での規模は全長4.52m、最大幅0.74m、深さ12cm前後を測る。断面形状はレンズ状を呈す。埋土は暗緑灰色粘質土1層である。遺物は須恵器・土師質土器の皿等、繩の羽口・瓦器・石・チャートなど約50点出土しているが、図化できたものは2点である。

191は土師質土器の皿である。体部から口縁部は大きく外反、口縁端部はやや尖り気味におさめる。底部は丁寧なナデにより切り離しの痕跡を消している。192は土製の繩の羽口である。外面一部に煤が付着している。



第60図 1区 SD1012 造構平・断面図



第61図 1区 SD1012
出土遺物実測図

第62図 1区 SD1015 造構平・断面図

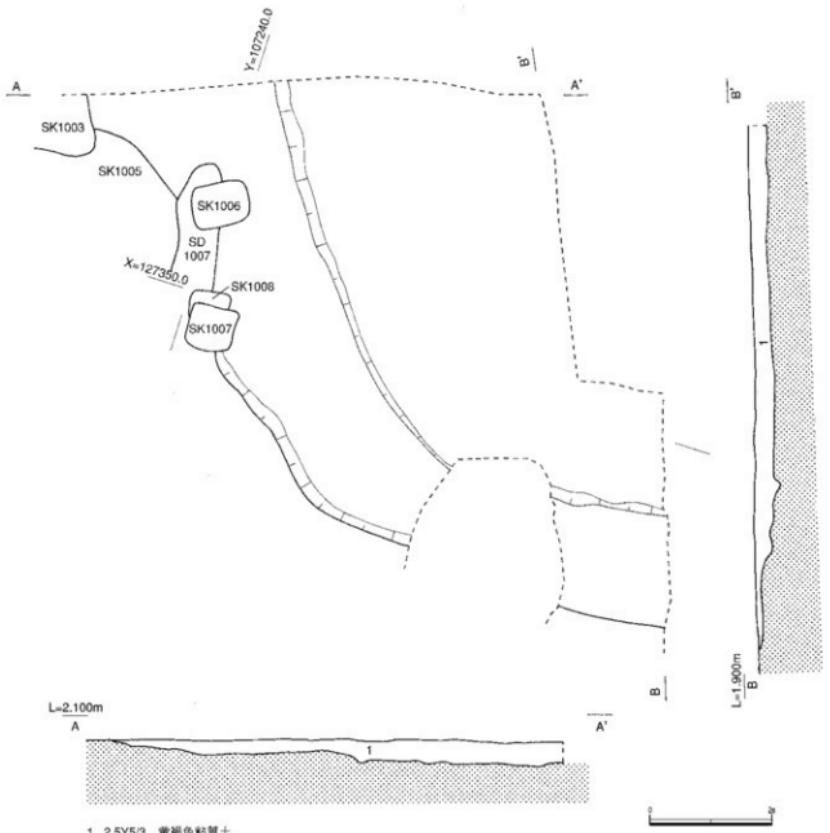


第63図 1区 SD1015 出土遺物実測図

・1号不明造構 (SX1001) (第64図、第65図)

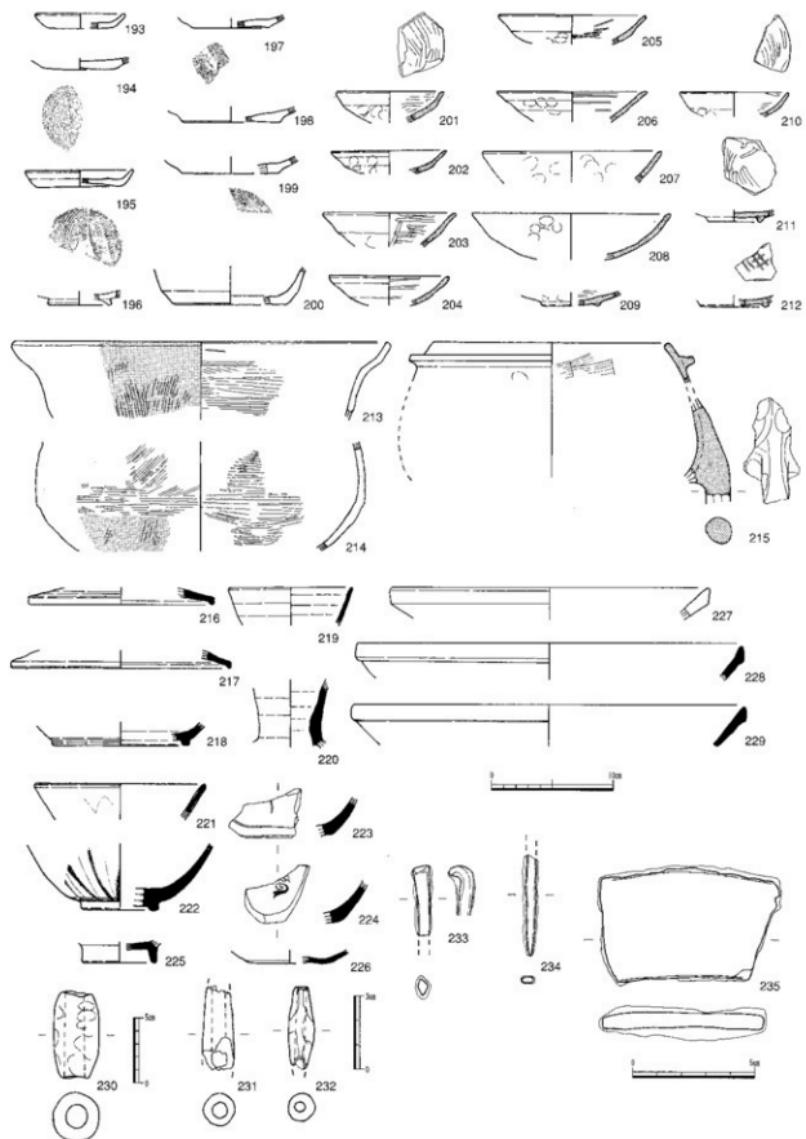
調査区の北東に位置する。検出グリッドは、M - 3・4、N - 2・3・4グリッドである。北側と東側が調査区外に延びており、造構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）7.70m、短軸5.82m、深さ0.2mを測る。造構平面形状は不整形、断面形状は不整逆台形を呈す。西側にテラス状の平緩部が形成され、さらに一段の落ち込みがあるが浅い。埋土は黄褐色粘土質、炭化物片極少量を含む1層である。遺物は須恵器・土師質土器・磁器・瓦器・石・鉄製品などが1760点出土しているが、小片のため固化できたものは43点である。

193～197は土師質土器の皿である。193は短い口縁部が外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる小皿である。底部は回転糸切りのち丁寧なナデにより切り離しの痕跡を消している。194は底部周縁部を強いヨコナデにより底部の境を明瞭にしている。底部は回転糸切りのち板目痕がみられる。195は短い口縁部が外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる小皿である。底部は回転糸切りのち板目痕がみられる。196は高台付皿である。底部周縁のヨコナデにより底部との堀を明瞭にしている。底部は回転糸切り後にヘラの圧痕がみられる。198～200は土師質土器の杯である。198～200とも底部周縁を強いヨコナデにより底部との境を明瞭にし、200では段を有している。外面底部の調整は、198が丁寧なナデにより切り離しの痕跡を消し、199は回転糸切り、200はナデを施している。201・202・210は和泉型瓦器の小皿である。体部は緩やかに内湾、口縁部はやや外反し端部をやや尖り気味におさめる。201・210は体部下位にユビオサエ、内面は圓線状のヘラミガキを施す。203～209、211・212は和泉



第64図 1区 SX1001 遺構平・断面図

型瓦器鉢である。203は外表面部下位にユビオサエ、内面にやや疎らな圓線状のヘラミガキを施している。204は外面上にはユビオサエの痕跡は見当たらず、内面に圓線状のヘラミガキが疎らに施されている。205は外表面部下位に若干のユビオサエ、内面にも圓線状のヘラミガキを施しているが、遺存状態はよくない。206も内面に圓線状のヘラミガキが疎らに施されている。207・208とも炭素が未吸着のため土師質土器の色合いで、遺存状態もよくなくヘラミガキの状態をうかがえない。209・211・212とも断面半円形の貼り付け高台を有し、調整は見込みにヘラミガキの痕跡を残すが遺存状態はよくない。213は土師質土器の土鍋口縁部、214は土師質土器土鍋の体部である。213は弱い「く」の字状に屈曲する口縁部を有し、端部を丸くおさめる。調整は外面上にタテハケ、内面にヨコハケを施している。214の調整



第65図 1区 SX1001 出土遺物実測図

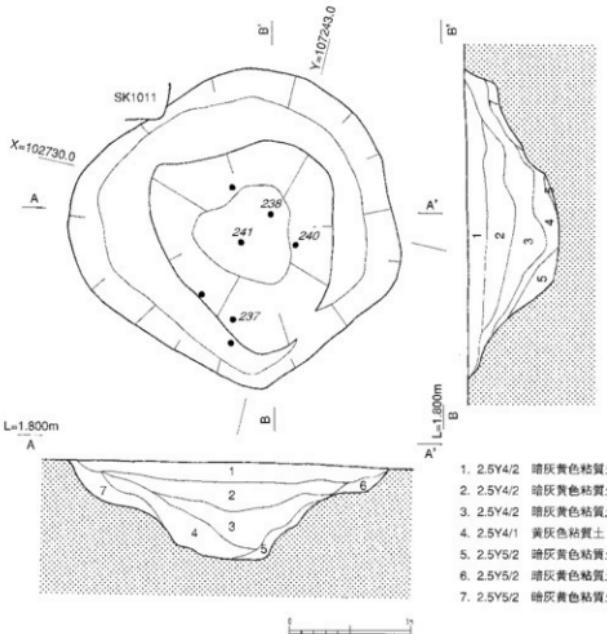
は外面体部がヨコハケ、内面もヨコハケを施している。215は瓦質の脚付羽釜である。体部から口縁部は内湾し、端部は断面方形を呈す。口縁部下に断面台形状の彫を巡らしている。調整は内面にヨコハケを施している。脚部は断面楕円形で、基部屈曲し、身部直線的である。216・217は須恵器杯蓋で、218は須恵器高台付き杯で、いずれも奈良時代のもの。219は須恵器の椀である。体部は外上方に直線的で、口縁部はやや外反し端部を丸くおさめる。220は須恵器の平瓶とみられる。外面に自然釉が掛かる。221～224は龍泉窯系青磁碗である。221・222は体部に錦運弁を施し、横田・森田編年のⅢ類と考えられる。224は内面に飛雲文を片彫りしている。225は白磁碗底部である。高台削り出しで、高台内は露胎である。226は須恵器上器皿である。炭素未吸着により上師質土器の色合いを呈す。227は土師質土器のこね鉢、228・229は須恵器の東播系こね鉢である。227は口縁端部を尖り気味におさめ、断面三角形を呈す。228は上下に拡張、229は下方に拡張する口縁部を成形する。重ね焼きの痕跡を残し、口縁部外面に自然釉が掛かっている。230は大型の土錘で、長さ7.2cm、重さ95.4gを量る。231・232は紡錘形の管状土錘である。233は頭部をL字形に折り曲げた鉄釘である。234は頭部が欠損している。235は長さ4.8cm、幅7.4cm、厚さ0.8cmを測る。鉄板であろうか、用途は不明である。

・2号不明遺構 (SX1002) (第66図、第67図)

調査区北の中央に位置する。検出グリッドは、L・M・3グリッドである。SD1004を切り、SK1011に切られる。遺構規模は長軸2.72m、短軸2.56m、深さ1.48mを測る。遺構平面形状は不整円形を呈す。断面形状は落ち込みにテラス状の平坦部をもち不整逆台形を呈す。埋土は7層に分層でき、1～3暗灰黄色粘質土、4黄灰色粘質土、5～7暗灰黄色粘質土である。SX1002は調査時に井戸の可能性を持つ土坑と考えられていたが、整理作業の中で決定付けるには到らず、性格が不明な遺構である。遺物は須恵器・土師質土器・瓦器・石・鉄製品など約170点出土している。図化できたものは15点である。

236は上師質土器の杯である。体部中位から口縁部は外上方に延び、端部をやや丸くおさめる。237は土師質土器の土鍋口縁部片である。口縁部下で「く」の字状に屈曲、端部は若干下方に拡張する。調整は外面がタテハケ、内面がヨコハケを施している。238～240は和泉型瓦器の小皿である。238の調整は外面体部下位にユビオサエ、内面のヘラミガキは不明瞭である。239は内面体部に疎らな圓線状ヘラミガキ、見込みに螺旋状ヘラミガキが施されている。240は外面体部下位にユビオサエ、内面体部には連結輪状風ヘラミガキ、見込みには螺旋状ヘラミガキが施されている。241～245は和泉型瓦器楕である。241・242は底部のみである。243は外底面にユビオサエ、内面体部に連結輪状風ヘラミガキが施されている。244は内面に圓線状のようないヘラミガキ、245は内面のヘラミガキが不明瞭で、外面にはユビオサエを施している。246は瓦質の小壺か壺の体部片と考えられるものである。247は瀬戸・美濃系の須恵器山茶碗である。高台脇から緩やかに内湾しながら外上方に延びる。見込みと高台内に墨痕がみられ、硯に転用したものとみられる。時期は口縁部が欠損しているため不明瞭であるが、その他の特徴から13世紀中頃のものとみられる。248・249は肥前系の陶器皿である。口縁部下で直立気味に内湾、端部はやや尖り気味におさめる。外面体部下位は露胎である。249は体部が緩やかに内湾、口縁部下で直立気味に立ち上がり端部を丸くおさめる。釉薬は内外面に白化粧土を疊み付け・高台内以外に施される。250は頭部をL字型に折り曲げた鉄釘とみられる。

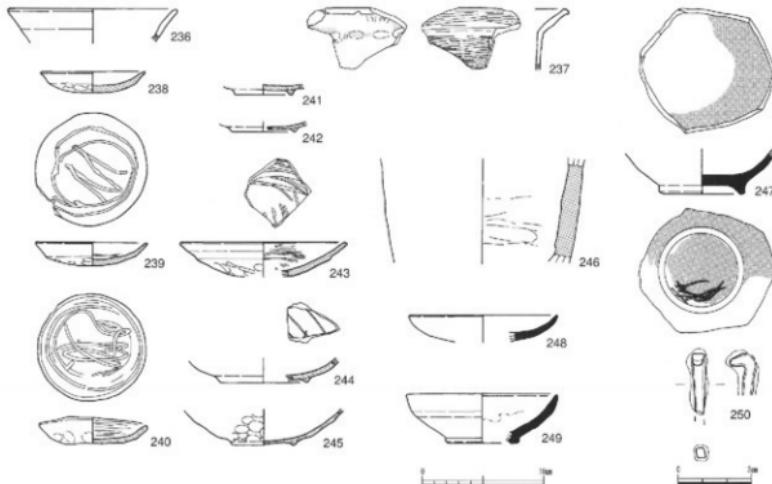
・3号不明遺構 (SX1003) (第68図、第69図、第70図)



第 66 図 1 区 SX1002 遺構平・断面図

調査区中央よりやや北に位置する。検出グリッドは、J - 3・4 グリッドである。SD1010・SX1004を切り、SP1045 に切られる。遺構規模は長軸 2.64 m、短軸 2.52 m、深さ 0.14 m を測る。遺構平面形状は不整隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。北西部に一段低い落ち込みがあるが、全体的に浅い。埋土は 2 層を分層でき、1 暗灰黄色粘質土、2 にぶい黄色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・磁器・瓦器・チャートなど約 350 点と動物の骨が出土している。動物の骨は大部分が牛で、馬が少数出土している。骨の部位はよく似た箇所が固まって捨てられており、遺骸をそのまま埋葬したものではなく、目的を持って使われた後に投棄されたものと考えられる（第 209 図参照）。出土遺物は小片のため図化できたものは 10 点である。

251～257 は土師質土器の皿である。251 は短い口縁部が外反して立ち上がり、口縁端部をやや平坦におさめる。調整は外面底部の切り離しをナデにより痕跡を消している。252・253 は体部が外上方に立ち上がり、口縁端部を摘み上げるような強いヨコナデにより尖らせ、その後ヘラで端部下を削り一部段を呈している。底部の切り離しはナデにより痕跡を消している。254・255 の成形も 252・253 と同様である。254 は底部を回転ヘラギリのちナデにより調整を施している。255 は京都系上師質土器を模倣した在地産とみられ、底部の調整は回転ヘラギリの後ナデにより切り離しの痕跡を消している。内面底部の歪みは故意にヘラで起こしている。256 は口縁部片であり、口縁端部を摘み上げるような強いヨコ



第 67 図 1 区 SX1002 出土遺物実測図

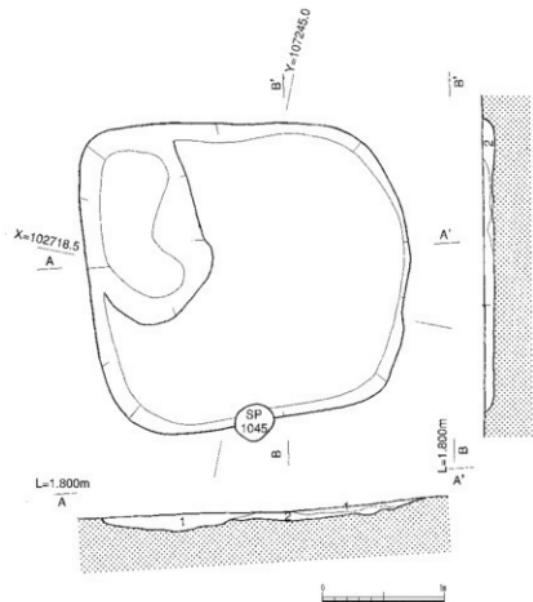
ナデにより端部を尖らせている。257 は底部片である。切り離しの痕跡をナデにより消している。252～256 の皿には内外面に煤のような黒斑が確認できる。258 は上師質上器の羽釜である。体部は内湾気味に上方に立ち上がり、やや上方に拡張した口縁部の下に僅かに鉗状の張り出しを巡らす。調整は外面部にユビオサエ、底部に格子目タタキ、内面にはユビオサエを施している。吉野川下流域の各遺跡で出土するものと同様の製作手法であり、在地産のものと考えられる。259 は備前窯のすり鉢片である。備前焼Ⅳ期のものと考えられる。260 は見込みを丸く削り取って成形したような加工円盤である。見込みには龍泉窯系の青磁にみられる片彫りの文様を施しているが、模倣した瀬戸焼ではないかとみられる。

・4 号不明遺構 (SX1004) (第 71 図、第 72 図)

調査区の中央寄り、SK1003 の南に位置する。検出グリッドは、J-3・4 グリッドである。SD1010・SK1003・SP1045 に切られ、遺構の一部は調査区外に延びる。そのため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）4.2m、短軸 2.2 m、深さ 0.9m を測る。遺構平面形状は不整形、断面形状は不整逆台形を呈す。落ち込みの一段目にテラス状の平端部を形成し、二段目の落ち込みの底部も平坦である。埋土は 7 層に分層でき、1～4 暗灰黄色粘質土、5 黄灰色粘質土、6 褐灰色粘質土、7 黄灰色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦器・石・鉄製品など約 400 点出土している。固化できたものは 5 点である。

261 は和泉型瓦器椀である。高台は貼り付けで、断面方形を呈す。262 は土師質土器の土鍋である。口縁部下で「く」の字状に屈曲し、口縁端部は平坦で断面方形を呈す。硬質に焼成しているが、調整は磨滅のため不明瞭である。263 は備前窯の陶器壺である。体部は外上方に立ち上がる。調整は体部下位が縱方向のケズリ、内面体部は板ナデ、底部ユビオサエを施している。

264・265は鉄釘とみられる。
頭部は欠損している。



1. 2.5Y4/2 曲灰黄色粘質土
2. 2.5Y6/3 にびい黄色粘質土

第68図 1区 SX1003 遺構平・断面図

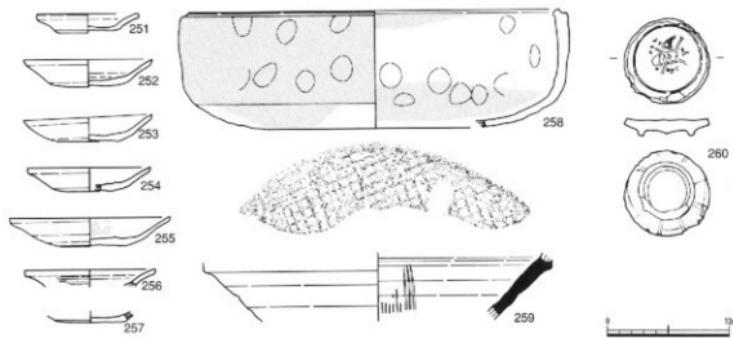
点出土している。遺物が小破片のため図化できたものは31点である。

266～277は土師質土器の皿である。266の小皿は、短い口縁部が外上方に立ち上がり口縁端部を丸くおさめる。底部は回転ヘラギリである。267～269の小皿は、体部から口縁部は外反し、口縁端部を摘み上げるようにヨコナデを施し、やや尖り気味におさめる。底部はナデにより切り離しの痕跡を消している。270～273、275～277は体部から口縁部は外反している。270・275は口縁端部を摘み上げるようなヨコナデにより先端を尖らせている。底部は切り離しの痕跡をナデにより消している。271は口縁部をやや丸くおさめ、底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消し、板目痕を呈している。272は口縁部をやや尖り気味におさめ、底部はナデにより切り離しの痕跡を消し、板目痕がみられる。273は口縁部をやや丸くおさめ、底部はナデにより切り離しの痕跡を消している。276・277は京都系を模倣した在地産であろう。体部は大きく外反し、口縁端部は丸くおさめられ、底部はナデにより切り離しの痕跡を消している。274は体部から口縁部は外上方に直線的に立ち上がり、端部の断面は方形状を呈す。底部は丁寧なナデにより切り離しの痕跡を消している。丁寧な作り方をしている。278は和泉型瓦器碗である。断面半円形の貼り付け高台を持ち、内面に連結輪状風のヘラミガキと平行線状ヘラミガキを施している。尾上編年のⅢ期におさまるものと考える。279・280は土師質土器の羽釜である。279は丸みのある口縁部外面下に短い鋸を巡らせる。調整は外面ヨコナデでユビオサエの

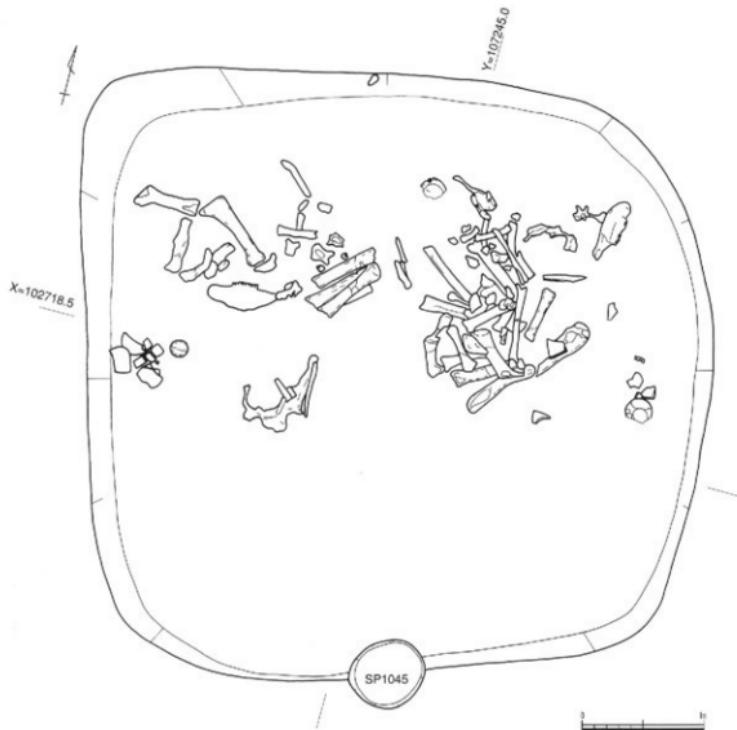
・6号不明遺構 (SX1006)

(第73図、第74図)

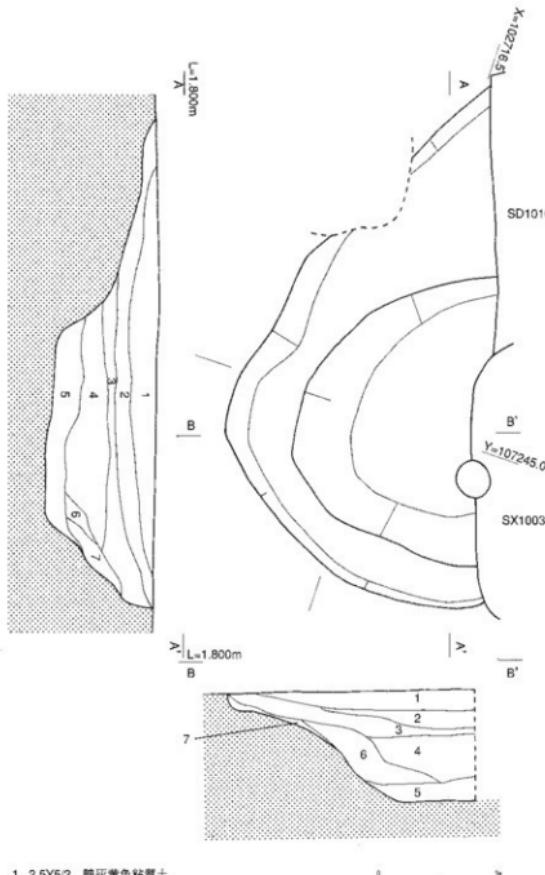
調査区の南東に位置する。検出グリッドは、B・C - 7-8グリッドである。遺構は西側・北西側の一部が搅乱に切られ、東側・南側は調査区外に延びる。そのため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸(現存値)5.08m、短軸4.12m、深さ1.76mを測る。遺構平面形状は不整円形を呈すと推定される。断面形状は船底形を呈す。北側から3段のテラス状の平坦部を、西側から1段のテラス状の平坦部を形成する。埋土は35層に分層することができた。遺物は須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦器・石・チャート・鉄製品など約5270



第69図 1区SX1003出土遺物実測図



第70図 1区SX1003骨・土器出土状況図

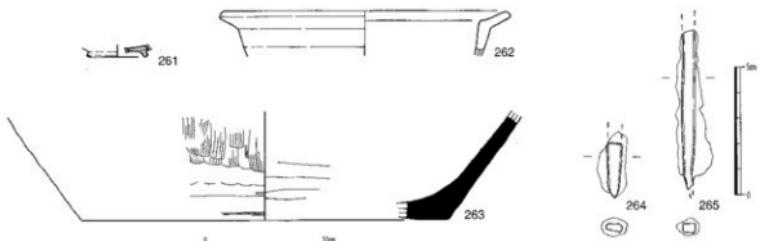


第 71 図 1 区 SX1004 遺構平・断面図

1. 2.5Y5/2 鷗灰黄色粘質土
2. 2.5Y5/2 鷗灰黄色粘質土
3. 2.5Y4/2 鷗灰黄色粘質土
4. 2.5Y4/2 鷗灰黄色粘質土
5. 2.5YS/1 黄灰色粘土
6. 10YR4/1 桃灰色粘質土
7. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土

い。内面のすり目は下方からだけでなく斜め方向からもはいる。備前焼のV類、桃山時代に属するものと考えられる。285・286は紡錘形の管状土錐である。287は土製鉢型であり、熱による赤化範囲からみて鶴あるいは鉢の製作のためのものとみられる。288は丸瓦である。凹面に成形時の布目痕が、凹面にはつり紐痕がみられる。289は泥岩の砥石である。上面に使用痕が残っている。290～293は鉄釘と考えられる。291の頭部が円形に曲がり、290が貫通している状態である。292は頭部がL字形に

痕跡を残し、内面は横方向への板ナデを施している。280は体部から口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口縁部外側下の鍔は退化により口縁端部との間に凹線を巡らせる。内外面の調整はユビオサエの痕跡を残す。281は上師器の壺である。口縁部が大きく外反し、口縁端部は上下に拡張し、端面に凹線1条を巡らしている。古代のものであろう。282は瀬戸・美濃系の陶器壺である。口縁部が受け口で断面「N」字状を呈す。外側体部には押印文はない。赤羽・中野 1994「生産地における編年」によれば6a型式、13世紀第3四半期に相当すると考えられる。283は備前窯の陶器壺である。口縁部は外に折り曲げ玉縁状に作り、先端を丸くおさめる。調整は外側体部ヨコハケ、内面にナデを施す。284は備前窯のすり鉢である。口縁部は直立気味に立ち上がり、上下に拡張するが、口縁部外端面の凹線はな



第 72 図 1 区 SX1004 出土遺物実測図

屈曲し、断面方形を呈す。295 は円形曲物である。側板高 8.2cm、曲物厚み 0.2cm、内面に 0.2mm~0.5mm 間隔の縱方向の切れ目がみられる。296・297 は曲物底板である。297 には側面に木釘が残存する。

•6 号小穴 (SP1006) (第 75 図、第 76 図)

調査区北側の中央に位置する。検出グリッドは、N - 2 グリッドである。SX1001 を切る。遺構規模は長軸 25cm、短軸 20cm、深さ 24cm を測る。遺構平面形状は楕円形、断面形状は U 字形を呈す。埋土は 2 層に分層でき、1 オリーブ黒色粘質土、2 オリーブ黒色粘質土である。遺物は土師質土器・瓦器が 6 点出土しているが、図化できたものは 1 点である。

298 は和泉型瓦器椀であるが炭素未吸着のため土師質土器の色合いを呈す。体部はやや内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁部は外反、口縁端部はやや尖り気味におさめる。調整は不明瞭であるが、尾上編年のⅢ期のものであろう。

•39 号小穴 (SP1039) (第 77 図、第 78 図)

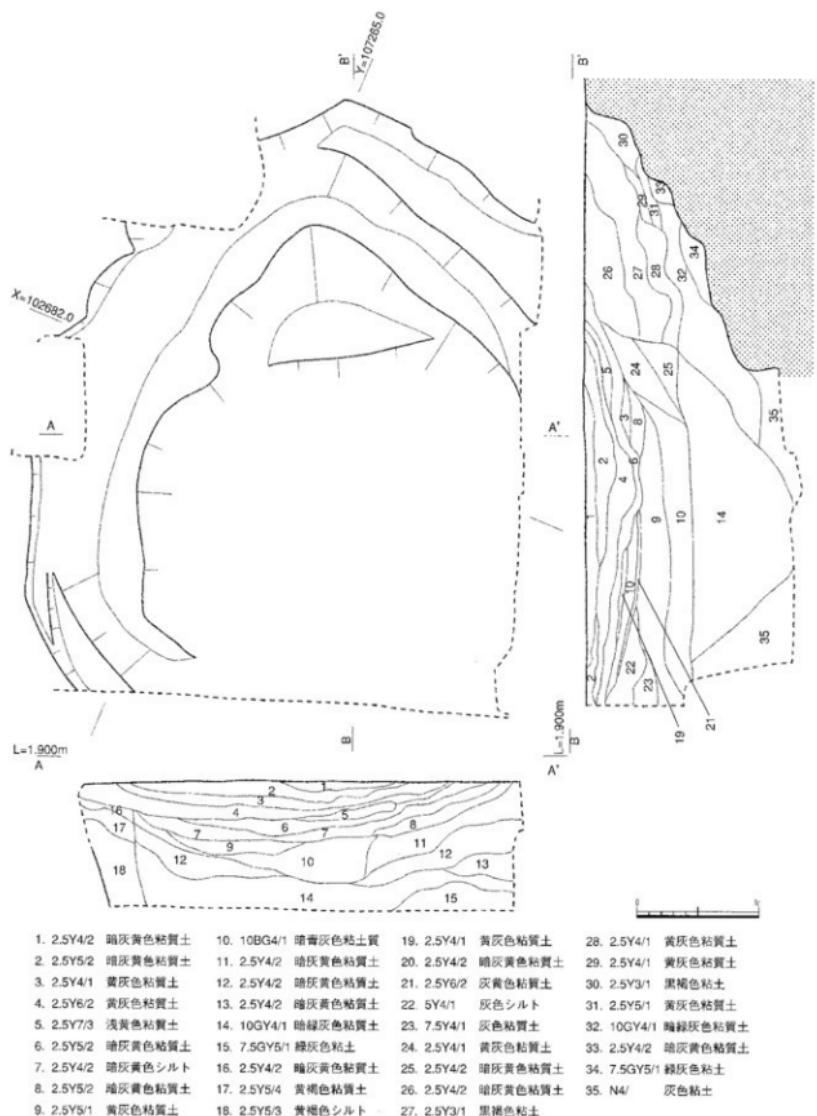
調査区の北西に位置する。検出グリッドは、L - 2 グリッドである。SD1004・SD1006 を切る。遺構規模は長軸 68cm、短軸 60cm、深さ 78cm を測る。遺構平面形状は不整圓丸方形、断面形状は中央に柱穴状の落ち込みをもち不整逆台形を呈す。埋土は 5 層に分層でき、1 暗灰黄色粘質土、2 暗灰黄色粘質土、3 黄褐色粘質土、4 暗灰黄色粘質土、5 暗灰黄色粘土である。中央の 1 層は柱抜き取り痕跡を示す可能性がある。図化できた遺物は 1 点である。

299 は土師質土器の焙烙である。体部から口縁部は上方に直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は外側体部下位にユビオサエ、底部にナデを施す。型作りであろうか、在地産のものと考えられる。

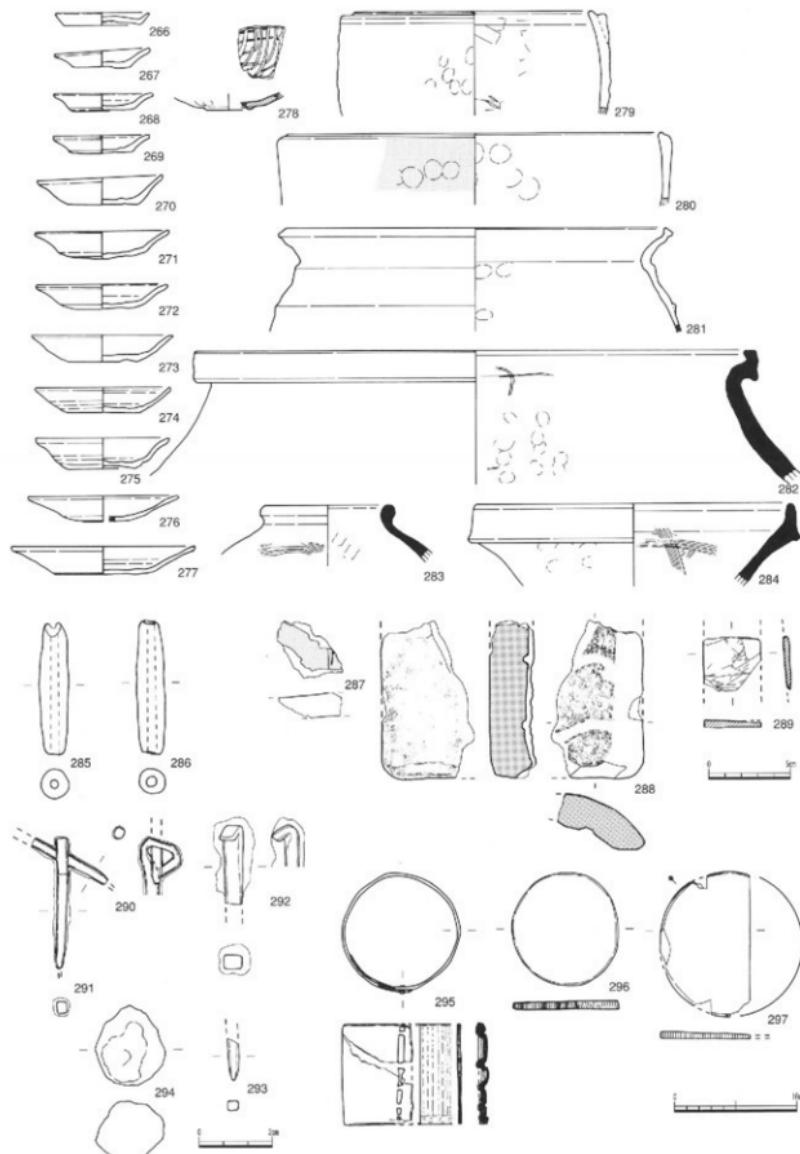
•75 号小穴 (SP1075) (第 79 図、第 80 図)

調査区中央の東に位置する。検出グリッドは、J - 5 グリッドである。遺構規模は長軸 38cm、短軸 30cm、深さ 20cm を測る。遺構平面形状は楕円形、断面形状は逆台形を呈す。埋土は 5 層に分層でき、1 暗灰黄色粘質土、2 黄灰色粘質土、3 黄灰色粘質土、4 暗灰黄色粘質土、5 黑褐色粘質土である。1~3 層は柱抜き取り痕跡か。遺物は、土師質土器・鉄製品が 4 点出土している。図化できたものは 1 点である。

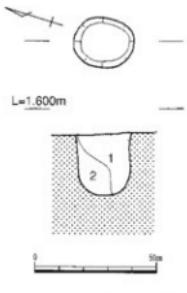
300 は頭部を折り曲げた鉄釘である。先端部が欠損している。



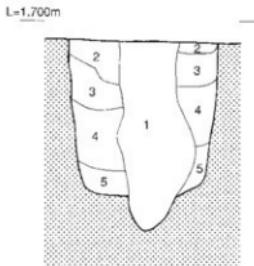
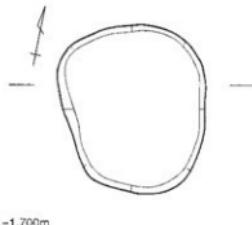
第73図 1区SX1006 遺構平・断面図



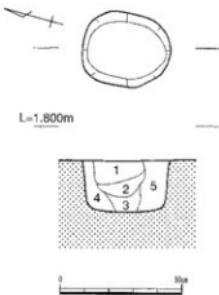
第74図 1区 SX1006 出土遺物実測図



第75図 1区SP1006
遺構平・断面図



第77図 1区SP1039 遺構平・断面図



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
3. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
5. 2.5Y3/2 黑褐色粘質土

第78図 1区SP1075
遺構平・断面図



第79図 1区SP1075
出土遺物実測図



第80図 1区SP1075
出土遺物実測図

・79号小穴 (SP1079) (第81図、第82図)

調査区中央の西寄りに位置する。検出グリッドは、I - 4 グリッドである。遺構規模は長軸 34cm、短軸 32cm、深さ 10cm を測る。遺構平面形状は隅丸方形、断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は灰色粘質土の 1 層である。遺物は土師質の煮沸具・瓦器碗・鉄製品など 11 点出土しているが、小片のため図化

できたものは1点である。

301は針状の銅製品。先端部は細く尖り、断面楕円形を呈す。

•98号小穴 (SP1098) (第83図、第84図)

調査区の中央に位置する。検出グリッドは、I-5グリッドである。遺構規模は長軸40cm、短軸38cm、深さ22cmを測る。遺構平面形状はほぼ円形、断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1黒褐色粘質土、2オリーブ褐色粘質土である。遺物は土師質土器・瓦器が3点出土している。団化できたものは1点である。

302は和泉型瓦器楕である。体部はやや内湾しながら上方に立ち上がり、口縁部はやや外反し、口縁端部をやや尖り気味におさめる。調整は外面体部にユビオサエ、口縁部にヨコナデ、内面は見込みや体部の区別なくランダムな方向にヘラミガキを密に施している。時期は尾上編年のⅡ期であろう。

•106号小穴 (SP1106) (第85図、第86図)

調査区中央、西に位置する。検出グリッドは、H-4グリッドである。遺構規模は長軸32cm、短軸32cm、深さ28cmを測る。遺構平面形状は円形、断面形状は土層上位の南西側を暗渠に切られているが、逆台形を呈すと考えられる。埋土は4層に分層でき、1オリーブ灰色粘質土、2暗オリーブ灰色粘質土、3オリーブ灰色粘質土、4オリーブ黄色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器が9点出土している。団化できたものは1点、埋土の中位より出土している。

303は土師質土器の皿である。体部から口縁部は大きく外上方に延び、口縁端部は摘み上げるような強いヨコナデにより尖る。底部は切り離しの痕跡をナデにより消している。在地産のものであろう。

•111号小穴 (SP1111) (第87図、第88図)

調査区中央の西よりに位置する。検出グリッドは、H-4グリッドである。遺構規模は、長軸32cm、短軸32cm、深さ13cmを測る。遺構平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2暗灰黄色粘質土である。遺物は土師質土器・鉄製品が3点出土している。団化できたものは1点である。

304は楔とみられる鉄製品である。

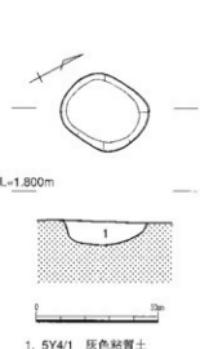
•120号小穴 (SP1120) (第89図、第90図)

調査区中央の西に位置する。検出グリッドは、H-4グリッドである。西側が調査区外に延びる。遺構規模は長軸34cm、短軸31cm、深さ30cmを測る。遺構平面形状は不整円形、断面形状は逆台形を呈す。埋土は黄灰色粘質土の1層である。遺物は備前窯すり鉢・土師質土器・瓦器・石製品など15点出土しているが、小片のため団化できたものは1点である。

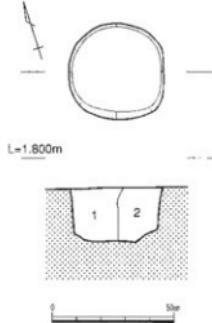
305は泥岩製の硯である。裏面を砥石として再利用している。

•127号小穴 (SP1127) (第91図、第92図)

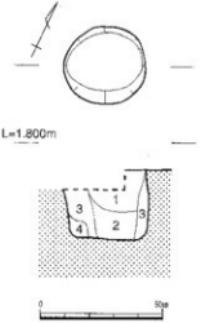
調査区中央からやや西に位置する。検出グリッドは、H-4グリッドである。SP1126に切られる。遺構規模は長軸70cm、短軸66cm、深さ33cmを測る。遺構平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈



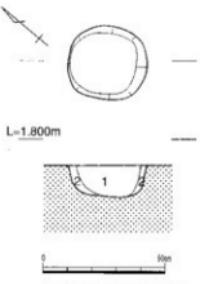
第 81 図 1 区 SP1079
遺構平・断面図



第 83 図 1 区 SP1098
遺構平・断面図



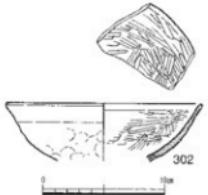
第 85 図 1 区 SP1106
遺構平・断面図



第 87 図 1 区 SP1111
遺構平・断面図



第 82 図 1 区 SP1079
出土遺物実測図



第 84 図 1 区 SP1098
出土遺物実測図



第 86 図 1 区 SP1106
出土遺物実測図



第 88 図 1 区 SP1111
出土遺物実測図

す。埋土は3層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2黄灰色粘質土、3黃灰色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・白磁・鉄滓・石製品などが37点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。306は泥岩製の砥石である。研削による使用痕がみられる。

•141号小穴 (SP1141) (第 93 図、第 94 図)

調査区の中央に位置する。検出グリッドは、H - 5 グリッドである。遺構規模は長軸 59cm、短軸

46cm、深さ25cmを測る。造構平面形状は梢円形を呈す。断面形状は南西側に落ち込みをもつ、不整逆台形を呈す。埋土は4層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2黄灰色粘質土、3暗灰黄色粘質土、4黄灰色粘質土である。遺物は土師質土器・瓦器椀・石・鉄製品など22点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

307は鉄釘とみられる。頭部を薄く延ばし、L字型に折り曲げている。

•146号小穴 (SP1146) (第95図、第96図)

調査区中央の東に位置する。検出グリッドは、H-6グリッドである。東側は調査区外に延びているため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸(現存値)49cm、短軸27cm、深さ13cmを測る。造構平面形状は隅丸方形を呈すと思われる。断面形状は北側の掘り込みが浅く南側に落ち込みがあるが、南側の落ち込み部分で浅い楕形を呈す。埋土は2層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2灰オリーブ色粘質土である。遺物は瓦器椀・瓦質の煮沸具が2点出土している。うち図化できたものは1点である。

308は和泉型瓦器椀である。体部から口縁部は緩やかに内湾しながら外上方に延び、口縁端部を丸くおさめる。調整は外面にユビオサエ、口縁部ヨコナデ、内面体部は連結線状風のヘラミガキが、見込みに疎らな格子状ヘラミガキ施されている。尾上編年のⅢ期と考えられる。

•155号小穴 (SP1155) (第97図、第98図)

調査区中央のやや南西に位置する。検出グリッドは、G-H-5グリッドにある。遺構規模は長軸30cm、短軸22cm、深さ30cmを測る。造構平面形状は不整隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。埋土は3層に分層でき、1～3黄灰色粘質土である。土層観察では1が柱抜き取りとみられる。遺物は土師質土器・白磁・瓦器が14点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

309は土師質土器の小皿である。短い口縁部が内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部は回転糸切りのちナデを施し、板目痕がみられる。

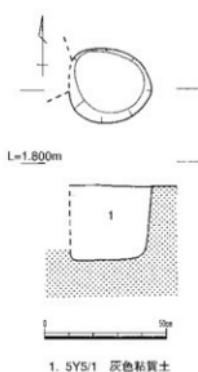
•156号小穴 (SP1156) (第99図、第100図)

SP1155に隣接する。検出グリッドは、G-5グリッドである。造構規模は長軸26cm、短軸24cm、深さ20cmを測る。造構平面形状は不整隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1黄灰色粘質土、2黄褐色粘質土である。土層観察では柱痕跡や抜き取りの痕跡は確認できなかった。遺物は須恵器・土師質土器・瓦器が20点出土しているが、小片のため図化できたのは2点である。

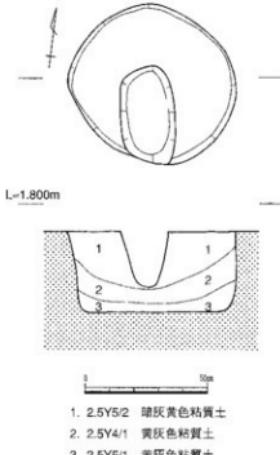
310は土師質土器の皿である。短い口縁部が外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部は回転糸切りのちナデを施している。311は和泉型瓦器椀である。体部は内湾気味に外上方に延び、口縁部はやや外反、口縁端部を丸くおさめる。調整は外面体部下位にユビオサエ、口縁部ヨコナデ、内面は平行線状のヘラミガキを疎らに施している。尾上編年のⅢ期と考えられる。

•171号小穴 (SP1171) (第101図、第102図)

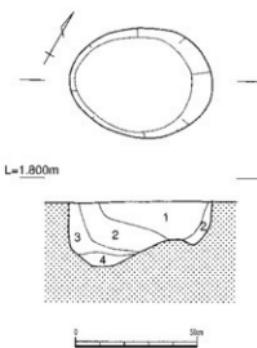
調査区中央からやや南西に位置する。検出グリッドは、G-5グリッドである。SP1170に切られているため遺構全体の規模・形状が不明瞭であるが、長軸(現存値)20cm、短軸18cm、深さ20cmを測る。造構平面形状は円形、断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は黄灰色粘質土の1層である。土層観察では



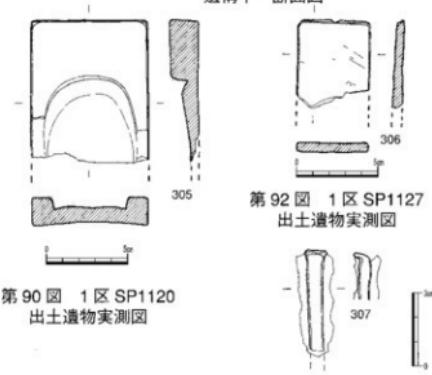
第 89 図 1 区 SP1120
遺構平・断面図



1. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土



第 93 図 1 区 SP1141
遺構平・断面図



第 92 図 1 区 SP1127
出土遺物実測図

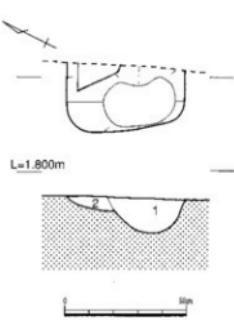
第 90 図 1 区 SP1120
出土遺物実測図

1. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
2. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
4. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土

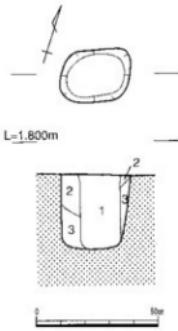
第 94 図 1 区 SP1141
出土遺物実測図

柱痕跡や抜き取りの痕跡は確認できなかった。遺物は土師質土器・瓦器碗の2点が出土しており、図化できたものは1点である。

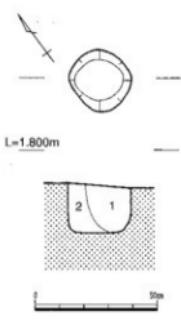
312は和泉型瓦器碗である。体部はやや内湾しながら外上方に延び、口縁部はやや外反、端部は丸くおさめる。調整は外面全体にエビオサエ、口縁部ヨコナデ、内面は体部に圓線状のヘラミガキ、見込みは平行線状のヘラミガキが施されている。尾上編年のⅢ期と考えられる。



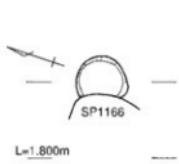
第95図 1区SP1146
遺構平・断面図



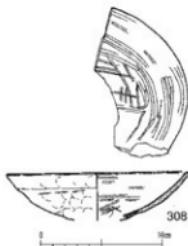
第97図 1区SP1155
遺構平・断面図



第99図 1区SP1155
遺構平・断面図



第101図 1区SP1171
遺構平・断面図



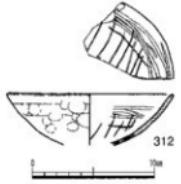
第101図 1区SP1171
出土遺物実測図



第98図 1区SP1155
出土遺物実測図



第100図 1区SP1156
出土遺物実測図

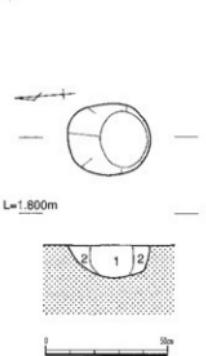


第102図 1区SP1171
出土遺物実測図

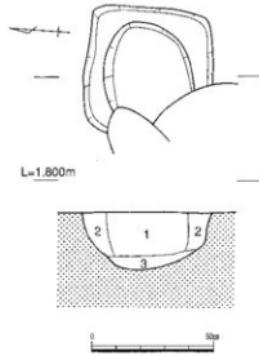
・201号小穴 (SP1201) (第103図、第104図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、E - 5グリッドである。遺構規模は長軸34cm、短軸29cm、深さ12cmを測る。遺構平面形状は楕円形、断面形状は逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1灰色粘質土、2灰オリーブ色粘質土である。土層観察では柱痕跡はみられないが、1層は抜き取りの痕跡の可能性がある。遺物は土師質土器・瓦器・石が10点出土しているが、図化できたものは1点である。

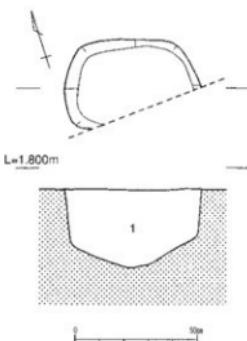
313は土師質土器の小皿である。短い口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部



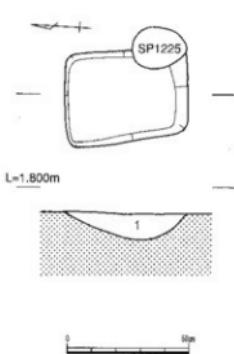
第 103 図 1 区 SP1201
遺構平・断面図



第 105 図 1 区 SP1206
遺構平・断面図



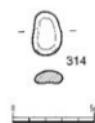
第 107 図 1 区 SP1220
遺構平・断面図



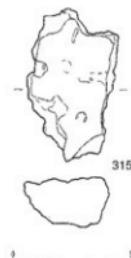
第 109 図 1 区 SP1226
遺構平・断面図



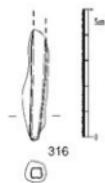
第 104 図 1 区 SP1201
出土遺物実測図



第 106 図 1 区 SP1206
出土遺物実測図



第 108 図 1 区 SP1220
出土遺物実測図



第 110 図 1 区 SP1226
出土遺物実測図

は回転ヘラギリである。

•206 号小穴 (SP1206) (第 105 図、第 106 図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、E - 5 グリッドである。SK1041、SP1205 に切られ、遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）54cm、短軸 52cm、深さ 24cm を測る。遺構平面形状は隅丸方形を呈すと推定され、断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は 3 層に分層でき、1 黄灰色粘

質土、2暗灰黄色粘質土、3黄褐色粘質土である。土層觀察では柱痕跡や抜き取りの痕跡は確認できなかった。遺物は須恵器・土師質土器・磁器・瓦器梶・石製品など42点出土しているが、小片のため図化できたのは1点である。

314は粘板岩製の碁石である。

•220号小穴 (SP1220) (第107図、第108図)

SE1002の南に位置する。検出グリッドは、E-6グリッドである。SP1222を切り、搅乱に切られている。そのため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）54cm、短軸36cm、深さ30cmを測る。遺構平面形状は不整隅丸方形を呈すと推定される。断面形状は中央の落ち込みをもつが、不整逆台形を呈す。埋土は黄灰色粘質土の1層である。土層觀察では柱痕跡や抜き取りの痕跡は確認できなかった。遺物は須恵器・土師質土器・瓦器梶・鉄滓が17点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

315は鉄滓（スラグ）である。

•226号小穴 (SP1226) (第109図、第110図)

SE1002の南に位置する。検出グリッドは、E-6グリッドである。SP1227を切り、SP1225に切られる。遺構規模は長軸50cm、短軸38cm、深さ10cmを測る。遺構平面形状は隅丸方形、断面形状はレンズ状を呈す。埋土は灰色粘質土の1層である。遺物は備前窯（体部中位片）・須恵器・土師質土器・鉄製品が8点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

316は鉄釘とみられる。頭部を欠損しおり、断面方形を呈す。

•227号小穴 (SP1227) (第111図、第112図)

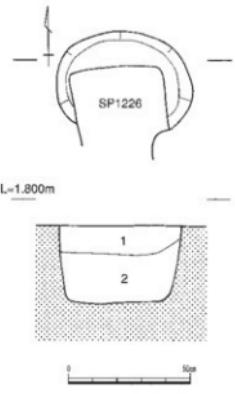
SE1002の南に位置する。検出グリッドは、E-6グリッドである。SP1228を切り、SP1226に切られる。そのため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）55cm、短軸40cm、深さ31cmを測る。遺構平面形状は梢円形を、断面形状は逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1・2層とも黄褐色粘質土である。遺物は土師質土器・瓦器・石・チャート・鉄滓など10点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

317は鉄滓（スラグ）である。重さ82.9gを量る。

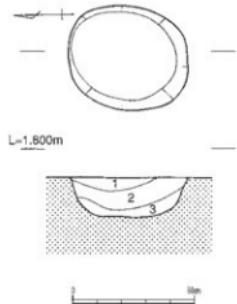
•236号小穴 (SP1236) (第113図、第114図)

調査区の南東に位置する。検出グリッドは、E-7グリッドである。遺構規模は長軸50cm、短軸43cm、深さ16cmを測る。遺構平面形状は梢円形を、断面形状は逆台形を呈す。埋土は3層に分層でき、1灰色粘質土、2灰オリーブ色粘質土、3灰色粘質土である。遺物は土師質土器・瓦器・石など8点ほど出土しているが、図化できたものは1点である。

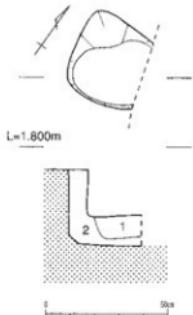
318は土師質土器の杯である。体部から口縁部は内湾気味に上方に延び、口縁端部を丸くおさめる。体部から口縁部は器壁が厚い。外面体部は強いヨコナデにより段を有し、底部は丁寧なナデにより切り離しの痕跡を消している。



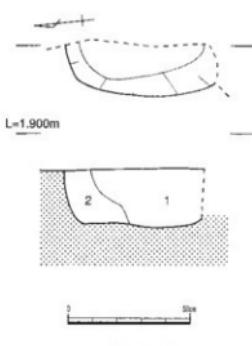
第 111 図 1 区 SP1227
造構平・断面図



第 113 図 1 区 SP1236
造構平・断面図



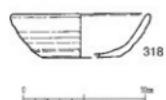
第 115 図 1 区 SP1249
造構平・断面図



第 117 図 1 区 SP1251
造構平・断面図



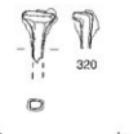
第 112 図 1 区 SP1227
出土遺物実測図



第 114 国 1 区 SP1236
出土遺物実測図



第 116 国 1 区 SP1249
出土遺物実測図



第 118 国 1 区 SP1251
出土遺物実測図

•249号小穴 (SP1249) (第 115 図、第 116 図)

調査区の南東に位置する。検出グリッドは、E - 7 グリッドである。東側が調査区外に延びているため造構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）36cm、短軸 30cm、深さ 30cm を測る。造構平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈すと考えられる。埋上は 2 層を分層でき、1 暗青灰色粘質土、

2灰褐色粘質土である。遺物は土師質土器・磁器が4点出土している。図化できたものは1点である。

319は白磁碗である。輸入磁器とみられる。高台は削り出しで高く断面逆台形を呈し露胎である。釉薬はうすい黄緑を発色している。

•251号小穴 (SP1251) (第117図、第118図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、D-4グリッドである。東側を暗渠に切られているため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）60cm、短軸30cm、深さ24cmを測る。遺構平面形状は梢円形、断面形状は逆台形を呈すと考えられる。埋土は2層に分層でき、1・2層とも黄灰色粘質土である。遺物は土師質土器・瓦器・鉄製品・チャートなど16点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

320は鉄釘である。頭部は水平に拡張し、L字型に折り曲げている。

•278号小穴 (SP1278) (第119図、第120図)

調査区南側の中央に位置する。検出グリッドは、D-6グリッドである。SP1279を切る。遺構規模は長軸34cm、短軸22cm、深さ10cmを測る。遺構平面形状は不整隔丸方形を、断面形状は逆台形を呈す。埋土は暗灰黄色粘質土の1層である。遺物は土師質土器・瓦器が24点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

321は土師質土器の小皿である。短い口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部は回転ヘラギリである。

•293号小穴 (SP1293) (第121図、第122図)

調査区南側の中央に位置する。検出グリッドは、E-5グリッドである。SP1294を切る。遺構規模は長軸48cm、短軸35cm、深さ31cmを測る。遺構平面形状は東側にやや突出している不整隔丸方形を呈す。断面形状は逆台形を呈す。埋土は5層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2オリーブ褐色粘質土、3黄灰色粘質土、4黄褐色粘質土、5黄褐色シルトである。遺物は土師質土器・瓦器・鉄滓などが18点出土している。図化できたものは2点である。

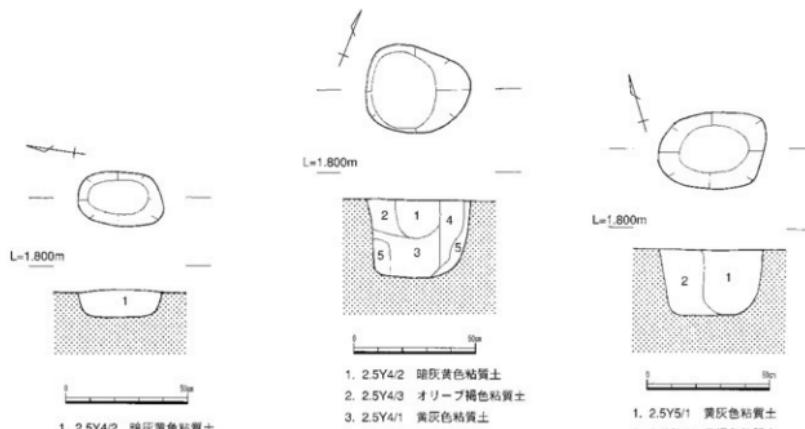
322は土師質土器の小皿である。短い口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部をやや丸くおさめる。底部は回転糸切りで、一部板ナデを施す。底部周縁を強いヨコナデを施すことにより高台状の張り出しが作っている。323は鉄滓（スラグ）である。

•306号小穴 (SP1306) (第123図、第124図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、E-7グリッドである。遺構規模は長軸42cm、短軸34cm、深さ36cmを測る。遺構平面形状は不整隔丸方形を、断面形状は逆台形を呈す。埋土は2層を分層でき、1黄灰色粘質土、2黄褐色粘質土である。遺物は土師質土器・瓦器・磁器が5点出土しているが、図化できたものは1点である。

324は肥前系の磁器小杯である。釉薬はあかるいグレイを発色している。

•12号小穴 (SP1312) (第125図、第126図)



調査区の南東に位置する。検出グリッドは、D - 7 グリッドである。SP1312 を切る。遺構規模は長軸 36cm、短軸 35cm、深さ 16cm を測る。遺構平面形状は不整隅丸方形を、断面形状は逆台形を呈す。埋土は 2 層を分層でき、1 黄灰色粘質土、2 暗灰黄色粘質土である。遺物は須恵器、土師質土器、瓦器、鉄製品など 28 点が出土しているが、小片のため図化できたものは 2 点である。

325 は鉄釘である。頭部は丸く先端部尖り気味である。326 は頭部を L 字形に折れ曲げた鉄釘である。

・317号小穴 (SP1317) (第 127 図、第 128 図)

調査区の南東に位置する。検出グリッドは、D - 7 グリッドである。南側を SP1316 に切られる。遺構規模は長軸 33cm、短軸 28cm、深さ 15cm を測る。遺構平面形状は円形を、断面形状は東が浅く西側に落ち込みがある不整形を呈す。埋土は 2 層に分層でき、1 灰オリーブ色粘質土、2 黄灰色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器が 5 点出土している。図化できたものは 1 点である。

327 は土師質土器の小皿である。短い口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部を尖り気味におさめる。調整は外面体部下位にユビオサエ、口縁部ヨコナデ、底部はユビオサエを施す手捏ねである。京都系の搬入品であろうと考えられる。

・338号小穴 (SP1338) (第 129 図、第 130 図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、C・D - 4 グリッドである。SK1046 を切る。西側は調査区外に延びているため遺構全体の規模・形状が不明瞭であるが、長軸（現存値）50cm、短軸 44cm、深さ 30cm を測る。遺構平面形状は楕円形、断面形状はやや深めの椀形を呈すと考えられる。埋土は 3 層に分層でき、1・2 黄灰色粘質土、3 暗灰黄色粘質土である。遺物は土師質土器・陶器・瓦器・石製品など 13 点出土しているが、小片のため図化できたものは 1 点である。

328 は粘板岩の基石（黒色）である。

・339号小穴 (SP1339) (第 131 図、第 132 図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、D - 4 グリッドである。南側を SK1046 に切られ、西側は調査区外に延びている。そのため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）44cm、短軸 30cm、深さ 40cm を測る。遺構平面形状は不整形を、断面形状は U 字形を呈す。埋土は 5 層に分層でき、1 灰色粘質土、2 灰オリーブ色粘質土、3 灰色粘質土、4 灰オリーブ色粘質土、5 灰色粘質土である。遺物は土師質土器・磁器・瓦器が 20 点出土しているが小片のため図化できたのは 1 点である。

329 は土師質土器の杯である。体部から口縁部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁端部をやや尖り気味におさめる。底部は丁寧なナデにより切り離しの痕跡を消している。器壁は厚い。

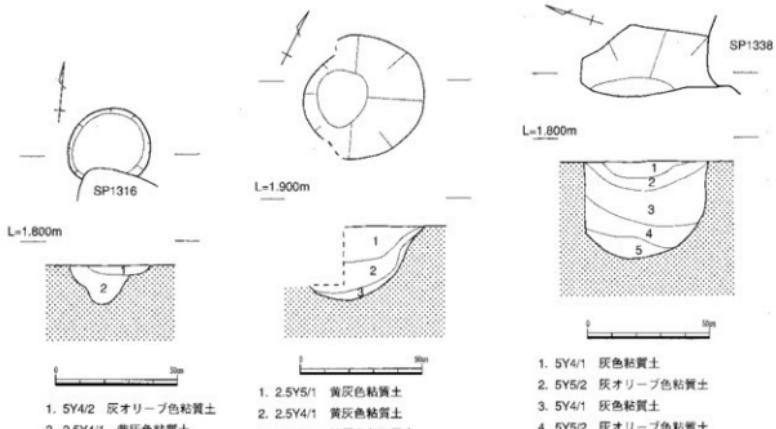
・352号小穴 (SP1352) (第 133 図、第 134 図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、C - 5 グリッドである。遺構規模は長軸 26cm、短軸 20cm、深さ 26cm を測る。遺構平面形状は楕円形を呈す。断面形状は逆台形を呈す。埋土は 2 層に分層でき、1・2 層とも暗灰黄色粘質土湿度である。土層観察では柱痕跡や抜き取りの痕跡は確認できなかった。遺物は土師質土器・瓦器・石が 22 点ほど出土しているが、図化できたものは 1 点である。

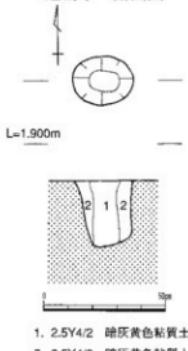
330 は土師質土器の椀である。体部から口縁部はやや内湾しながら外上方に延び、口縁端部をやや丸くおさめる。外面体部中位以上には強いヨコナデにより段を有す。底部はナデにより切り離しの痕跡を消している。硬質に焼成されている。在地産のもので、時期は中世後半のものと考えられる。

・357号小穴 (SP1357) (第 135 図、第 136 図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、C - 5 グリッドである。SP1358 を切る。遺構規模は長軸 35cm、短軸 32cm、深さ 20cm を測る。遺構平面形状は円形を、断面形状は逆台形を呈す。埋土は 2 層

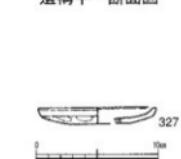


第127図 1区 SP1317
造構平・断面図

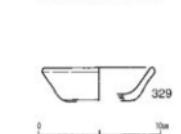


第133図 1区 SP1352
造構平・断面図

第129図 1区 SP1338
造構平・断面図



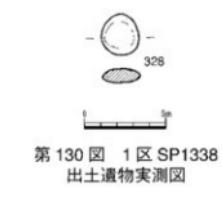
第128図 1区 SP1317
出土遺物実測図



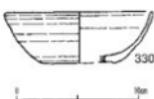
第132図 1区 SP1339
出土遺物実測図

1. 5Y4/2 灰オリーブ色粘質土
2. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土
3. 5Y4/1 灰色粘質土
4. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土
5. 5Y4/1 灰色粘質土

第131図 1区 SP1339
造構平・断面図



第130図 1区 SP1338
出土遺物実測図



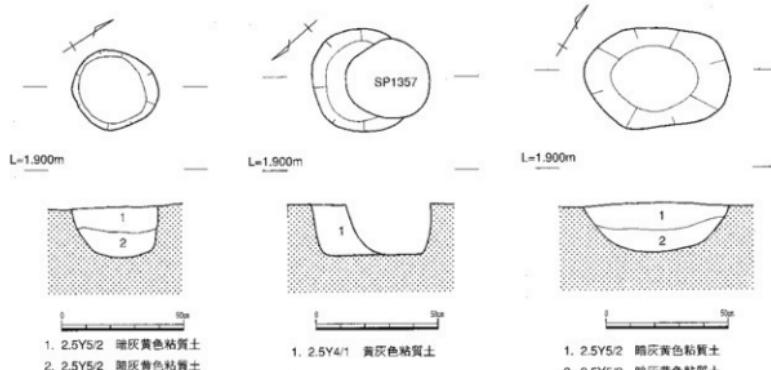
第134図 1区 SP1352
出土遺物実測図

に分層でき、1・2層とも暗灰黄色粘質土である。遺物は土師質土器・石・チャートなど30点ほど出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

331は土師質土器の羽釜である。上方に拡張した口縁部下に、わずかの鉢状の凸帯を巡らせる。調整は外面内面ともユビオサエのちヨコナデ、口縁部にヨコナデを施している。

*358号小穴 (SP1358) (第137図、第138図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、C - 5グリッドである。南西側をSP1357に切られているため造構全体の規模と・形状は不明瞭であるが、長軸（現存値）44cm、短軸34cm、深さ20cmを測る。

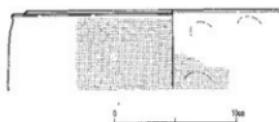
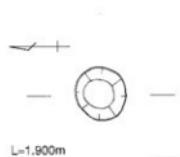


第135図 1区SP1357
遺構平・断面図

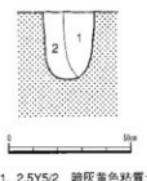
第137図 1区SP1358
遺構平・断面図

1. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土

第139図 1区SP1361
遺構平・断面図



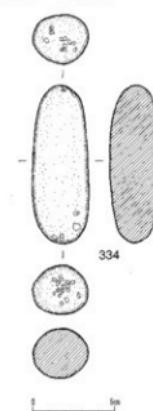
第136図 1区SP1357
出土遺物実測図



第138図 1区SP1358
出土遺物実測図



第140図 1区SP1361
出土遺物実測図



第142図 1区SP1362
出土遺物実測図

第141図 1区SP1362
遺構平・断面図

遺構平面形状は楕円形、断面形状は逆台形を呈すると考えられる。埋土は黄灰色粘質土の1層である。
遺物は土師質土器の皿、杯、瓦器、石が14点出土しているが、固化できたものは1点である。

332は土師質土器の皿である。体部から口縁部は外上方に直線的に延び、口縁端部を丸くおさめる。
底部はナデにより切り離しの痕跡を消している。

・361号小穴 (SP1361) (第139図、第140図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、C - 5グリッドである。遺構規模は長軸60cm、短軸40cm、深さ26cmを測る。遺構平面形状は不整楕円形を呈す。断面形状は浅い椀形を呈す。埋土は2層

に分層でき、1・2層とも暗灰黄色粘質土である。遺物は土師質土器・磁器・瓦器が21点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

333は土師質土器皿の口縁部片である。体部から口縁部は大きく外反して、端部を丸くおさめる。胎土は精良である。

•362号小穴 (SP1362) (第141図、第142図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、C-5グリッドである。遺構規模は長軸22cm、短軸20cm、深さ24cmを測る。遺構平面形状は楕円形を、断面形状はU字形を呈す。埋土は2層に分層でき、1・2層とも暗灰黄色粘質土である。遺物は土師質土器の皿・杯・瓦器椀・石製品が34点ほど出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

334は砂岩製の敲石である。両端に敲き痕がみられる。

•365号小穴 (SP1365) (第143図、第144図)

調査区のやや南西に位置する。検出グリッドは、C-5・6グリッドである。SK1056を切る。遺構規模は長軸35cm、短軸32cm、深さ8cmを測る。遺構平面形状はほぼ円形を、断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1黄灰色粘質土、2黄褐色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・瓦器椀が16点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

335は和泉型瓦器椀である。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。調整は外面体部には若干のユビオサエ、口縁部ヨコナデ、内面は体部連結線状ヘラミガキ、見込みは疊らな渦巻き状のヘラミガキを施している。尾上編年のIV期と考えられる。

•370号小穴 (SP1370) (第145図、第146図)

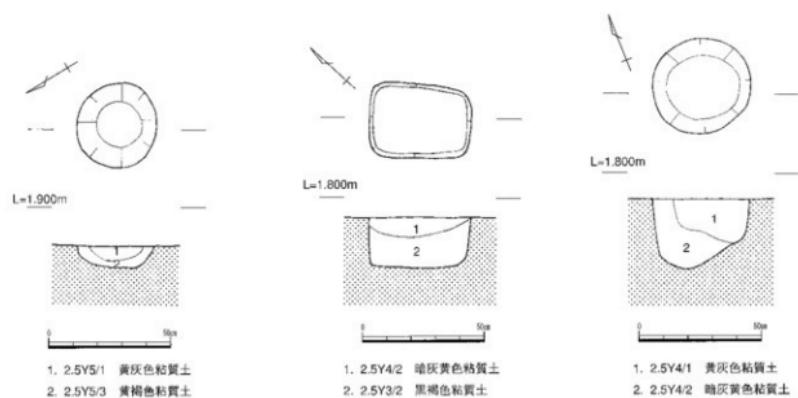
調査区南の中央に位置する。検出グリッドは、C-D-6・7グリッドである。遺構規模は長軸42cm、短軸30cm、深さ20cmを測る。遺構平面形状は隅丸方形を、断面形状は逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2黒褐色粘質土である。遺物は土師質土器・磁器碗が28点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

336は土師質土器の小皿である。短い口縁部が外上方に立ち上がり、端部は摘みあげるように成形しやや尖る。底部回転糸切りで、板目痕がみられる。

•391号小穴 (SP1391) (第147図、第148図)

調査区のやや南東に位置する。検出グリッドは、D-7グリッドである。遺構規模は長軸42cm、短軸40cm、深さ28cmを測る。遺構平面形状は円形を、断面形状は内側に落ち込みのある不整逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1黄灰色粘質土、2暗灰黄色粘質土である。遺物は土師質土器・磁器・瓦器・石などが31点出土しているが、小片のため図化できたものは3点である。

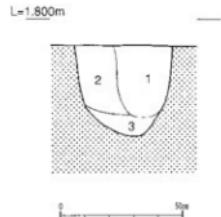
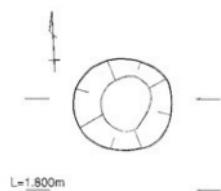
337は土師質土器の小皿である。短い口縁部が内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。底部は回転糸切りのちナデにより切り離しの痕跡を消している。体部と底部の境目が明瞭である。338は土師質土器の小皿である。短い口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。畿内系の模倣により手捏ねであるが、粗雑である。339は土師質土器の皿である。体部は外反、口縁部はやや上方に



第143図 1区 SP1365
遺構平・断面図

第145図 1区 SP1370
遺構平・断面図

第147図 1区 SP1391
遺構平・断面図



1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
2. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土

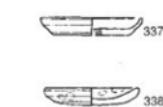
第149図 1区 SP1396
遺構平・断面図



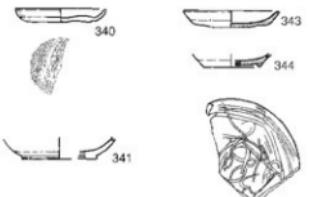
第144図 1区 SP1365
出土遺物実測図



第146図 1区 SP1370
出土遺物実測図



第148図 1区 SP1391
出土遺物実測図



第150図 1区 SP1396
出土遺物実測図

立ち上がり、口縁端部は肥厚して丸くおさめている。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。京都系の模倣であろうと考えられる。

•396号小穴 (SP1396) (第149図、第150図)

調査区のやや南西に位置する。検出グリッドは、D-7グリッドである。東側は搅乱に切られる。遺構規模は長軸40cm、短軸38cm、深さ38cmを測る。遺構平面形状は円形を呈す。断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は3層に分層でき、1黄灰色粘質土、2黄褐色粘質土、3暗灰黄色粘質土である。遺物は土師質土器の杯・碗、瓦器碗等が101点出土しているが、小片のため図化できたものは6点である。

340は土師質土器の小皿である。短い口縁部が内湾しながら外方に立ち上がり、口縁端部をやや尖り気味におさめる。底部は回転糸切りで、板目痕がみられる。341は土師質土器の皿である。底部周縁に強いヨコナデを施すことにより高台の形状を作りだしている。底部は回転糸切りである。342は土師質土器の皿である。体部は外方に立ち上がり、口縁部はやや外反、口縁端部を丸くおさめる。外面の底部から口縁部にかけて強いヨコナデにより段を有す。底部は回転ヘラギリのちナデ調整を施している。

343は泉型瓦器の小皿である。短い口縁部が外方に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。炭素未吸着であり、内面のヘラミガキも不明瞭である。344は和泉型瓦器碗の底部である。貼り付け高台は断面逆三角形を呈す。炭素未吸着であり、内面のヘラミガキも不明瞭である。345は和泉型瓦器碗である。体部から口縁部は内湾しながら外方に延び、口縁端部をやや丸くおさめる。調整は外面体部中位以下にユビオサエ、口縁部ヨコナデ、内面体部は連結輪線状ヘラミガキ、見込みには渦巻状風のヘラミガキが施されている。高台はない。時期は尾上編年のIV期におさまると考えられる。

•398号小穴 (SP1398) (第151図、第152図)

調査区の南東に位置する。検出グリッドは、D-7グリッドである。東側は調査区外に延びている。そのため遺構規模は長軸(現存値)42cm、短軸38cm、深さ16cmを測る。遺構平面形状は円形を呈すと考えられる。断面形状は逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2灰オリーブ色粘質土である。遺物は土師質土器・瓦器・磁器が17点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

346は龍泉窯系青磁碗である。高台は削り出しで露胎である。体部には鎬蓮弁文をもち、横田・森田編年のI-5類、13世紀中頃のものと考えられる。

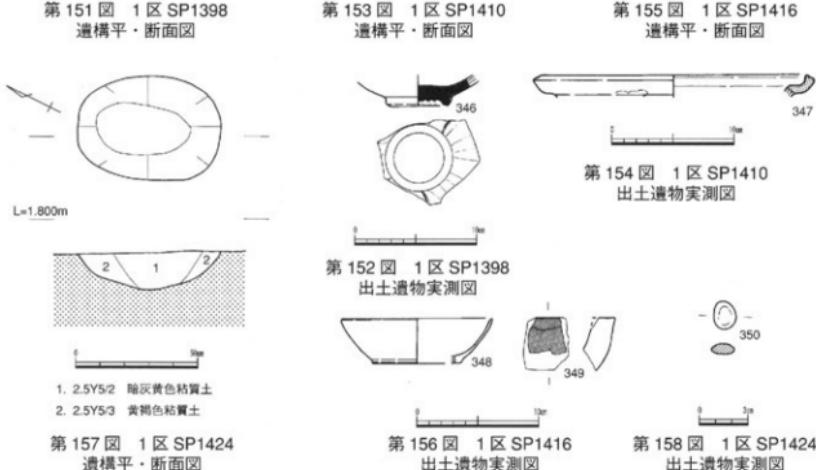
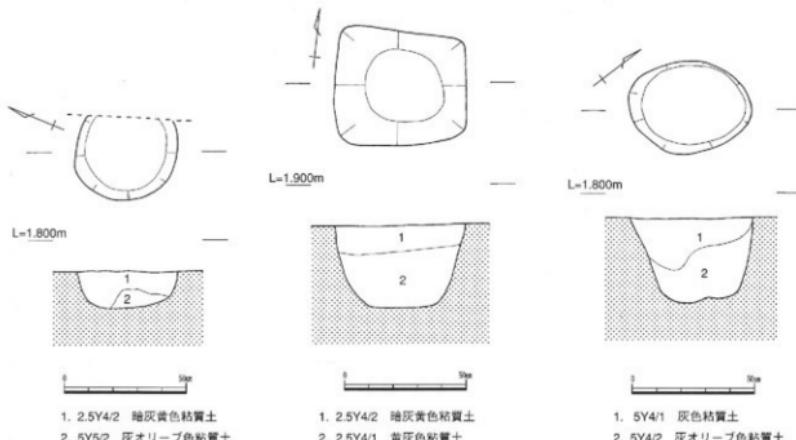
•410号小穴 (SP1410) (第153図、第154図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、B-5グリッドである。遺構規模は長軸54cm、短軸50cm、深さ34cmを測る。遺構平面形状は隅丸方形を、断面形状は逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2黄灰色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・瓦質鍋・こね鉢・瓦器・石・チャートなどが111点出土しているが、小片のため図化できたものは1点である。

347は瓦質の鍋である。口縁部は内湾、口縁端部は内側に拡張し、端面は平坦である。堺・和泉系と考えられる。

•416号小穴 (SP1416) (第155図、第156図)

調査区南の中央に位置する。検出グリッドは、B-6グリッドである。遺構規模は長軸50cm、短軸38cm、深さ32cmを測る。遺構平面形状は梢円形を、断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1灰色粘質土、2灰オリーブ色粘質土である。遺物は土師質土器杯・碗、磁器・土製鋳型など



61点出土しているが、小片のため図化できたものは2点である。

348は土師質上器の杯である。体部はやや内湾しながら外上方に延び、口縁部は若干外反し、口縁端部は尖る。底部は回転糸切りを施している。底部周縁に強いヨコナデを施すことにより高台の形状を作り出している。349は土製鋳型であり、湯の当たる面の形態からみて鍋鋳型とみられる。

•424号小穴 (SP1424) (第157図、第158図)

調査区の南東に位置する。検出グリッドは、B・C - 7グリッドである。遺構規模は長軸58cm、

短軸43cm、深さ14cmを測る。造構平面形状は隅丸方形を、断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2黄褐色粘質土である。遺物は土師質土器、石製品・石が6点出土しているが、図化できたものは1点である。

350は粘板岩製の碁石である。

・遺物包含層出土遺物（第159図）

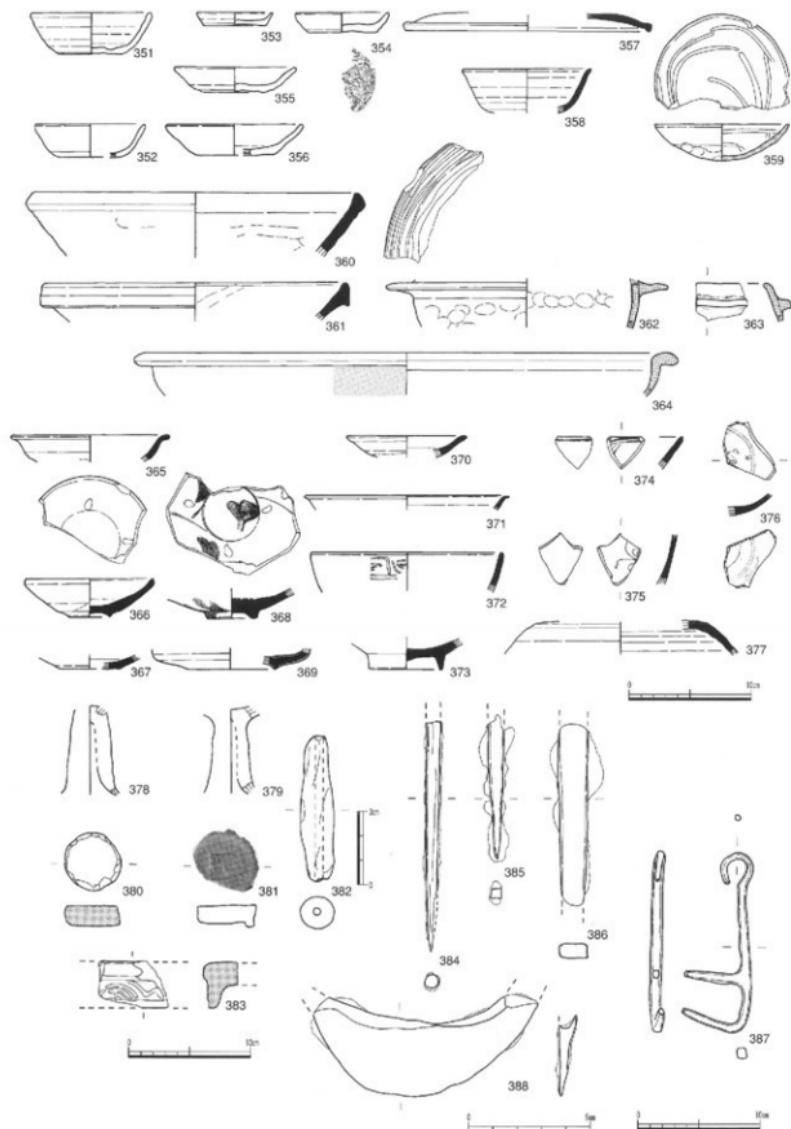
351・352は土師質土器の杯で、丁寧な作りである。351は体部が外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部は回転ヘラギリのあとナデにより切り離しの痕跡を消している。352は体部が外上方に立ち上がり、口縁端部を尖り気味におさめる。底部は丁寧なナデにより切り離しの痕跡を消している。353～356は土師質土器の皿である。353・354は短い口縁部が外上方に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる小皿である。底部は回転糸切りを施し、354には板目痕がみられる。355・356は底部の調整が回転ヘラギリのあとナデにより切り離しの痕跡を消している。357は須恵器の蓋である。古代のものとみられる。358は須恵器の杯と思われる。体部が外上方に立ち上がり、口縁部や外反、口縁端部をやや丸くおさめる。359は和泉型瓦器碗である。体部は内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。高台がなく丸底である。外底面にユビオサエ、内面には疎らに連結輪状ヘラミガキが施されている。時期は尾上編年のⅣ期と考えられる。360・361は東播系こね鉢である。口縁部は360が上方に、361が上下に拡張し、先端部を丸くおさめている。口縁部外面には重ね焼きの痕跡が残り、自然釉が掛かっている。362は瓦質の茶釜と考えられる。体部に水平に長く延びる断面三角形の鈎をもつ。調整は外面の鈎上面に密なヘラミガキが施され、体部はユビオサエ、内面はユビオサエのあとナデを施している。363は瓦質の羽釜である。口縁部下に水平方向に延びる断面方形形状の鈎を巡らしている。播磨型のものであろう。364は瓦質の焙烙である。外に開き下端が突出した口縁部を持つ。外面に煤が付着している。

365～368は陶器皿である。365は端反形の口縁部を持つもの、366は一般に丸皿と呼ばれるもので、見込みに胎土目痕を残すもの、367は瀬戸窯の灰釉皿である。368は絵唐津である。鉄絵による草文を施している。時期は17世紀初頭のものと考えられる。369は志野焼の碗であろうか。

370は肥前系の白磁小皿片である。見込みに釉剥ぎを施している。371は肥前系の白磁碗である。口縁部が外反する端反形のものである。釉薬はグレイムの黄緑を発色している。372は龍泉窯系青磁碗である。口縁部は若干内湾気味で、口縁端部をやや尖り気味におさめる。外面口縁部下に雷文帯を持つものである。上田分類のC群、14世紀後半～15世紀初頭と考えられる。373は白磁碗である。体部下位～高台内は露胎である。374・375も龍泉窯系青磁碗片である。374は蓮弁文、375は片彫りの文様を持つものである。376は青花磁器碗とみられ、内面見込みに圈線2条、中央部に染付け、外面体部下位に圈線2条、染付けが施されている。外底面は露胎で砂付着している。377は白磁の四耳壺とみられる。378は古代の高杯脚、379は弥生土器の高杯脚である。380は瓦の加工円盤である。381は龍泉窯系青磁碗を転用した加工円盤で、見込みに「勘定造範」の刻印がある。

382は紡錘形の管状土錐である。383は軒平瓦である。

384～386は鉄釘とみられる。384・385は頭部を、386は両端部を欠損している。387は吊り金具ではないかと考えられる。388は鉄製の鋤先である。



第159図 1区遺物包含層出土遺物実測図

ii. 2区

・3号掘立柱建物 (SA1003) (第 160 図)

調査区の中央に位置する。検出グリッドは、F・G - 10・11 グリッドである。遺構規模は桁行 3間×梁間 2間を測る側柱式の建物で、東側の一面には 1/3 間幅の庇をもつ。主軸は N - 85° - E を向き、ほぼ SA1001・SA1002 と同じ方向を示し、また SD1018 に直交する位置にある。SD1019・SD1020 を切る。柱間距離は桁行側では平均値 210.0cm、梁間側で平均値 210.0cm、床面積は 17.64m² を測る。平面形状がほぼ方形の床に庇が併設されている。

各柱穴の遺構平面形状は円形もしくは隅丸方形を、断面形状は逆台形を呈す。柱穴から須恵器・土師質土器・瓦器・陶器・石・チャートが出土しているが、図化できるものはなかった。

・61号土坑 (SK1061) (第 161 図、第 162 図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、C - 9、D - 9・10 グリッドである。遺構は SP1444 を切り、南側は調査区外に延びる。そのため遺構全体の規模・形状が不明瞭であるが、長軸（現存値）480cm、短軸 76cm、深さ 84cm を測る。遺構平面形状は不整梢円形を呈すと考えられる。断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は 6 層に分層でき、1 暗灰黄色粘質土、2 黄灰色粘質土、3 暗灰黄色粘質土、4 ~ 6 灰色粘土である。遺物は須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦器など 27 点が出土しているが、図化できたものは 2 点である。

389 は肥前系の陶器灰釉皿である。体部から口縁部は外上方に立ち上がり、端部をやや丸くおさめる。外面の体部中位～高台まで露胎である。見込みは凹面を呈し、重ね焼きの胎土目痕が 4ヶ所みられる。390 は備前窯のつる首徳利口縁部である。

・70号土坑 (SK1070) (第 163 図、第 164 図)

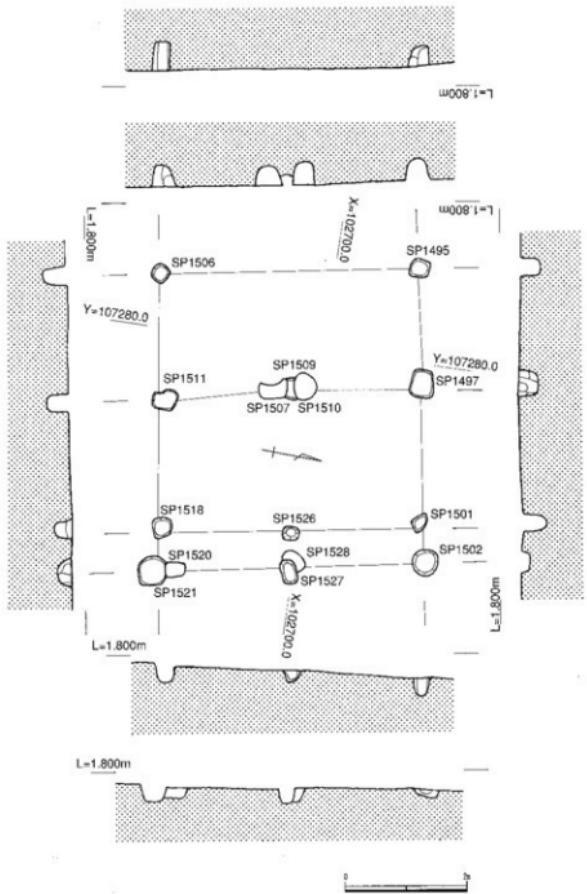
調査区中央よりやや北東に位置する。検出グリッドは、H - 12 グリッドである。遺構規模は長軸 66cm、短軸 64cm、深さ 10cm を測る。遺構平面形状は不整隅丸方形を、断面形状は逆台形を呈す。埋土は暗灰黄色粘質土の 1 層である。遺物は陶器のすり鉢・磁器・鉄製品など 5 点出土しているが、小片のため図化できたものは 1 点である。

391 は頭部が水平方向に拡張する鉄釘である。

・73号土坑 (SK1073) (第 165 図、第 166 図)

調査区の東に位置する。検出グリッドは、G - 14 グリッドである。SD1024 を切り、東西側で SX1007 に、南側で搅乱に切られている。そのため遺構全体の規模・形状は不明瞭であるため、長軸（現存値）112cm、短軸 76cm、深さ 41cm を測る。遺構平面形状は隅丸方形を、断面形状は逆台形を呈す。埋土は 5 層に分層でき、1 ~ 2 黄褐色粘質土、3 ~ 5 暗灰黄色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・瓦器・陶器・石など 25 点出土している。図化できたものは 1 点である。

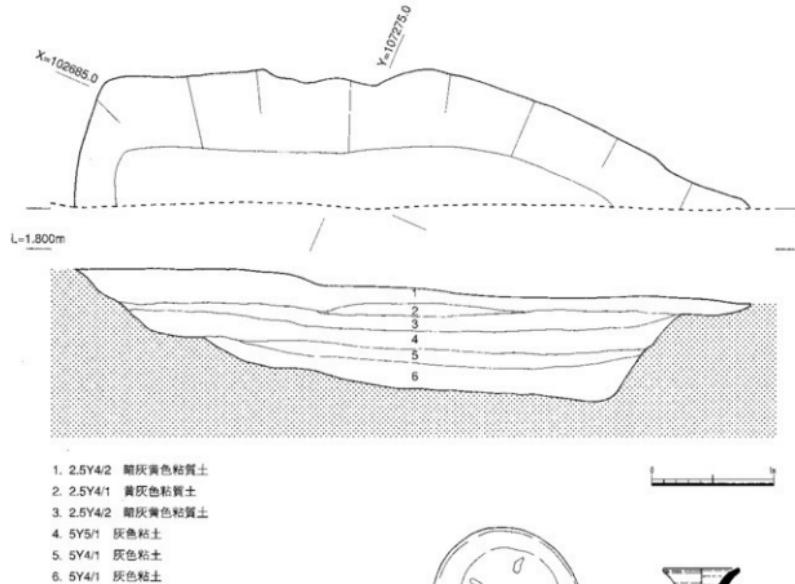
392 は大谷焼の徳利底部である。外面に自然釉が掛かっている。



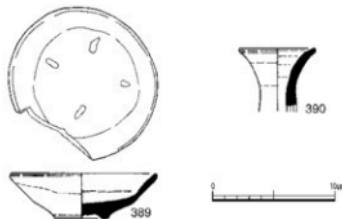
第 160 図 2 区 SA1003 遺構平・断面図

・17 号溝 (SD1017) (第 167 図、第 168 図、第 169 図、第 170 図、第 171 図、第 172 図、第 173 図、第 174 図、第 175 図、第 176 図)

調査区の西に位置する。検出グリッドは、D・E・F - 8・9、G - 7・8・9、H - 7・8 グリッドである。SK1060 を切り、SK1061 に切られ、南北両側は調査区外に延びる。主軸を南北方向にもち、調査区内での規模は全長 20.80m、最大幅 4.7m を測る。深さは 1.74m 前後を測る。遺構断面形状は船底形を呈す。遺構は北側でクランク状に屈曲する。屈曲部から北側は幅が 3 m 前後と狭いため、出入り口にしていた可能性があると考えられる。埋土はしまりの弱い粘土や粘質土であり、また木の枝・葉などの植



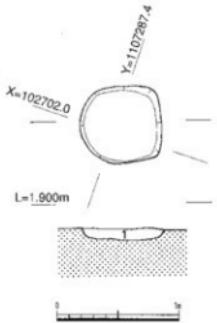
第161図 2区SK1061遺構平・断面図



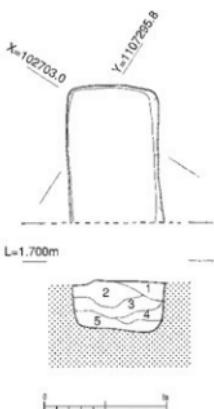
第162図 2区SK1061出土遺物実測図

物遺体を多く含む層も見られることから、早い流水があったとは言えない。遺物は須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦器・鉄製品・銅製品・銅錢・木製品に加え、骨や貝の生活残滓などバラエティーに富んでおり、約2700点出土している。小片が多いため図化できたものは215点である。時代は、近世初頭のものが多い。

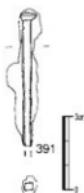
393～412は土師質土器の皿である。393は灯明皿に転用されたものであろう。短い口縁部が外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部はナデにより切り離しの痕跡を消している。394も灯明皿に転用されたもので、体部が外上方に直線的に立ち上がり、口縁部や外反、口縁端部は摘み上げたようなヨコナデにより尖らせている。底部は回転ヘラギリのちナデを施している。395も灯明皿に転用の可能性を持ち、体部から口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部は摘み上げたようなヨコナデにより尖らせている。底部は板ナデやナデにより切り離しの痕跡を消している。396は口縁端部を尖らせるタイプのもので、底部は糸切りのちナデを施している。397は灯明皿に転用したものであり、体部から口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。398は体部が外上方に直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。底部は回転



第163図 2区SK1070
遺構平・断面図



第165図 2区SK1073
遺構平・断面図

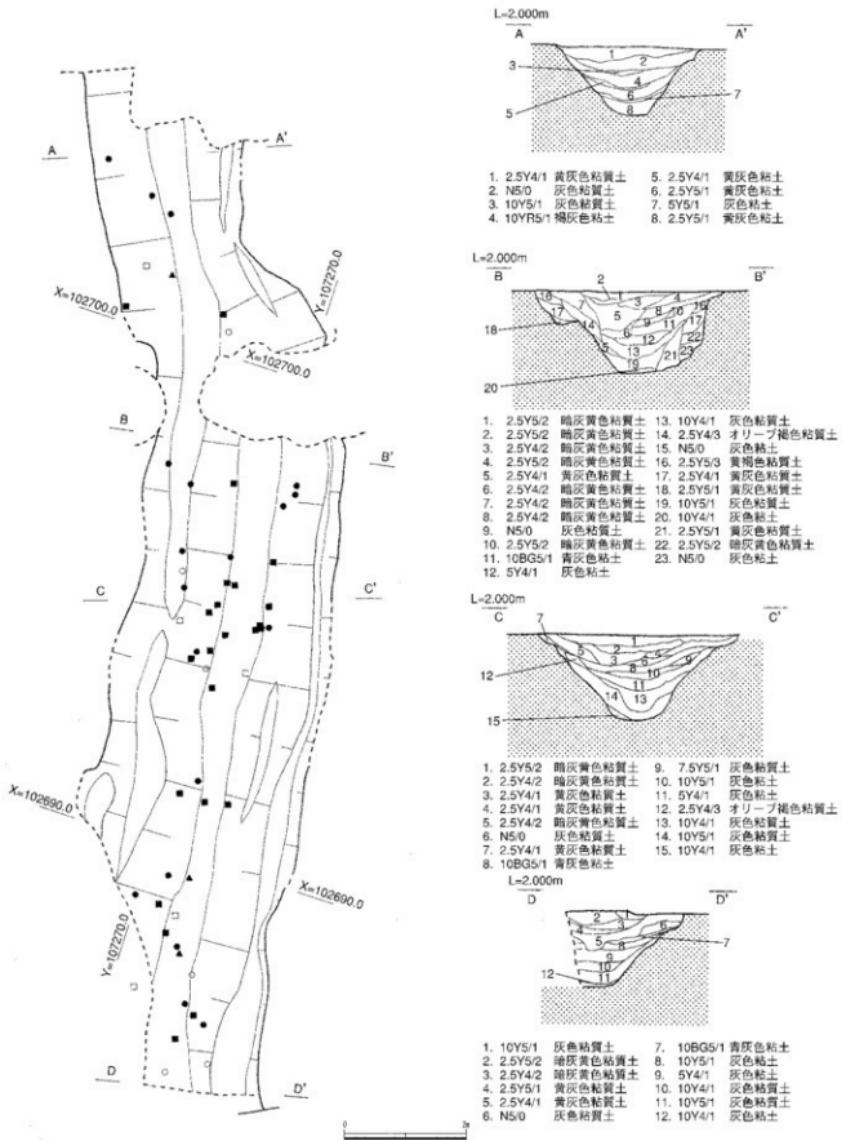


第164図 2区SK1070
出土遺物実測図



第166図 2区SK1073
出土遺物実測図

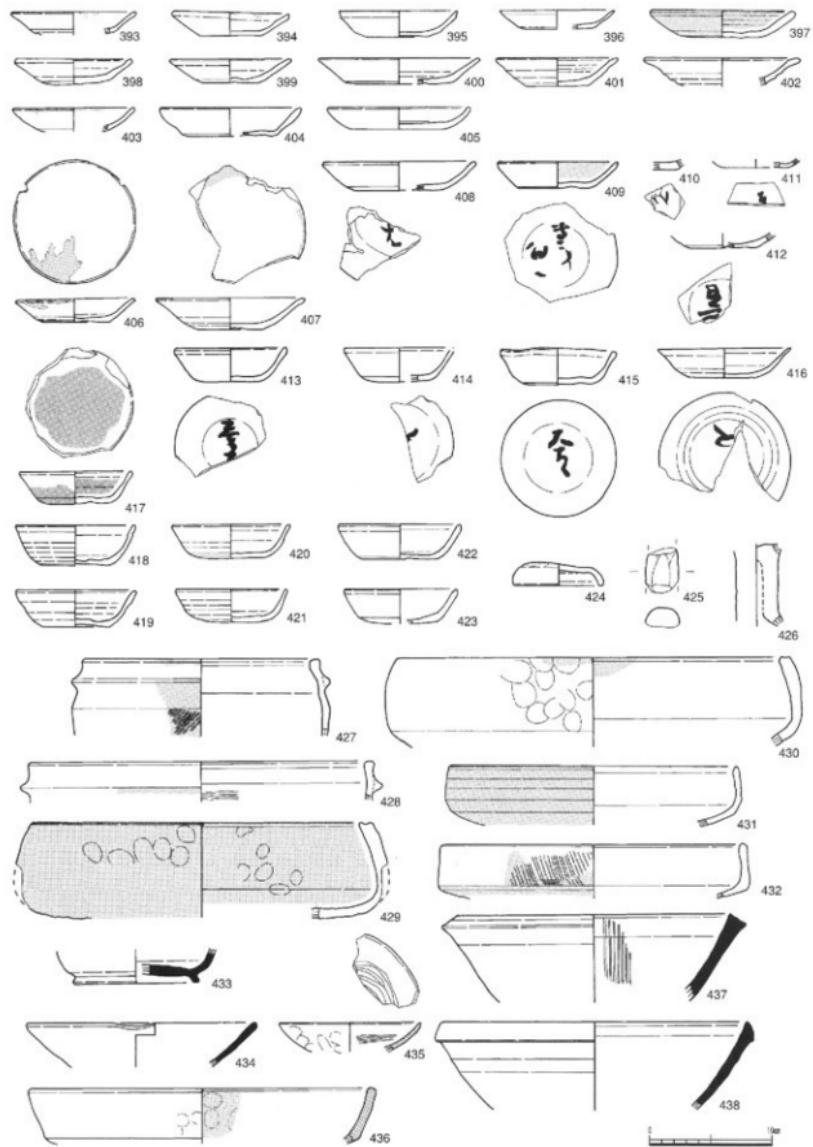
ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。399は体部から口縁部が外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。400は体部から口縁部が大きく外上方に立ち上がり、口縁端部をやや丸くおさめる。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。401は口縁部がやや外反し、口縁端部を若干尖り気味におさめる。底部はナデにより切り離しの痕跡を消している。402は口縁部が外反し、口縁端部を丸くおさめるものである。底部から体部中位にかけ、強いヨコナデを施すことにより段を有している。403は体部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。灯明皿に転用の可能性がある。404は口縁部の器壁が厚く、口縁端部をやや丸く仕上げる。底部はヘラギリのちユビオサエやナデの調整を施している。405は短い口縁部が内湾しながら上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部は回転糸切りのちナデにより切り離しの痕跡を消している。硬質に焼成されている。406は口縁部やや外反し、口縁端部を断面方形に仕上げる。底部は回転ヘラギリのちナデを施している。灯明皿に転用のものであろう。407は口縁部がやや外反し、口縁端部を丸くおさめるものである。底部は回転ヘラギリのちナデを施している。口縁部に墨痕がみられ、灯明皿に転用の可能性がある。408～416は外底面に墨書が記されたものである。408は体部から口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部を断面方形に仕上げたものである。墨書は「は」と読むことができる。409は口縁部をやや尖り気味におさめたもので、底部は回転ヘラギリのち丁寧なナデを施している。墨書は「きうの いた」と読むことができるが、「と」は墨書の可能性で読むが、文字でない可能性もある。「きのう いた」とも考えられる。410は底部が回転ヘラギリのちナデを施し墨書をしているが、文字は不明である。411・412も底部片で、回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。411の墨書は不明である。412の墨書は「送」と読むことができる。413～423は土師質土器の杯である。



第167図 2区SD1017構造平・断面図

413・414は口縁部の器壁が厚く、口縁端部をやや丸くおさめるものである。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。413の墨書は「志（し）う」と読むことができ、414は不明である。415は口縁部がやや外反、口縁端部をつまみ上げるようなヨコナデによりやや尖らせる。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消し、そこに墨書している。墨書は「大ちち」と読むことができる。416は口縁部が外反し、口縁端部を尖り気味におさめる。底部は板ナデやナデにより切り離しの痕跡を消し、墨書している。墨書は不明である。417は体部から口縁部が外上方に直線的に立ち上がり、口縁端部をやや尖り気味におさめている。底部は回転ヘラギリのちナデを施している。内外面の墨痕から灯明皿への転用をうかがわせる。418は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部や外反、口縁端部を丸くおさめている。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。外面体部は底部から口縁部にかけて強いヨコナデ成形により段を有している。419は口縁部がやや外反し、口縁端部を丸くおさめるものである。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。板日の痕跡を残している。418と同様に体部に段を有している。420は口縁部がやや外反し、口縁端部を丸くおさめる。底部は回転ヘラギリのち丁寧なナデを施し、板日の痕跡がみられる。421は体部が外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。外面体部にはヨコナデにより弱い段を有している。422は体部が外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部は回転糸切りのちナデを施す。423は口縁端部がやや尖り気味におさめる。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消し、板日痕をがみられる。424は土師質の焼塙蓋である。425は古代の土師器脚、426は古代の土師器高杯脚である。427～430は土師質土器の羽釜である。427は口縁端部を方形状におさめ、口縁部下に断面三角形の鋸を巡らしている。外面体部に平行タキを施す。岡田・長谷川の分類・福年の播磨型B系列のI A、15世紀前半頃と考えられる。428は口縁端部を方形状におさめ、口縁部下に断面三角形の短い鋸を巡らしている。播磨型と考えられる。429は体部が内湾気味に上方に立ち上がり、やや上方に拡張した口縁部の下に弱い突出の鋸状の張り出しを巡らす。調整は外面体部にユビオサエ、底部の格子目タキは不明瞭、内面にはユビオサエを施している。在地産のものと考えられる。430は鋸の退化にともない口縁上端部に凹線を巡らす形態のものである。調整は外面体部にユビオサエを施し、内面は磨滅のため不明瞭である。431・432は土師質土器の焙烙で、436は瓦質の焙烙である。431はやや内傾に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部周縁の胎土は回転を利用した切り取りの痕跡がみられる。432は体部がやや内傾し、口縁端部をやや平坦におさめる。調整は体部外面を工具で左上がりに搔き上げたあと回転ナデを施している。底部周縁の余った胎土は回転を利用して切り取っている痕跡がみられる。431、432とも在地産のものと考えられる。436は体部が外上方に立ち上がり、口縁端部は肥厚しやや平坦におさめている。内外面とも体部はユビオサエのち回転ナデを、底部はヘラケズリを施している。433は須恵器の高台付杯で、古代のものであろう。434・438は東播系のこね鉢である。434は体部が外上方に立ち上がり、口縁端部は肥厚し丸くおさめる。片口が残存している。時期は森田稔の編年により、Ⅲ期第1段階、13世紀前半～後半のものと考えられる。438は体部がやや内湾気味に外上方に延び、口縁部は若干下方に拡張し、断面三角形を呈す。森田稔の編年Ⅲ期第3段階におさまるものと考えられる。

435は楠葉型の瓦器輪である。体部は緩やかに内湾、口縁部は直線的で、端部はやや丸くおさめる。調整は外面体部ユビオサエ、口縁部ヨコナデ、内面は圓線状ヘラミガキが疎らに施されている。時期は尾上編年のⅣ期、13世紀後半と考えられる。437は備前窯のすり鉢である。体部は外上方に立ち上がり、

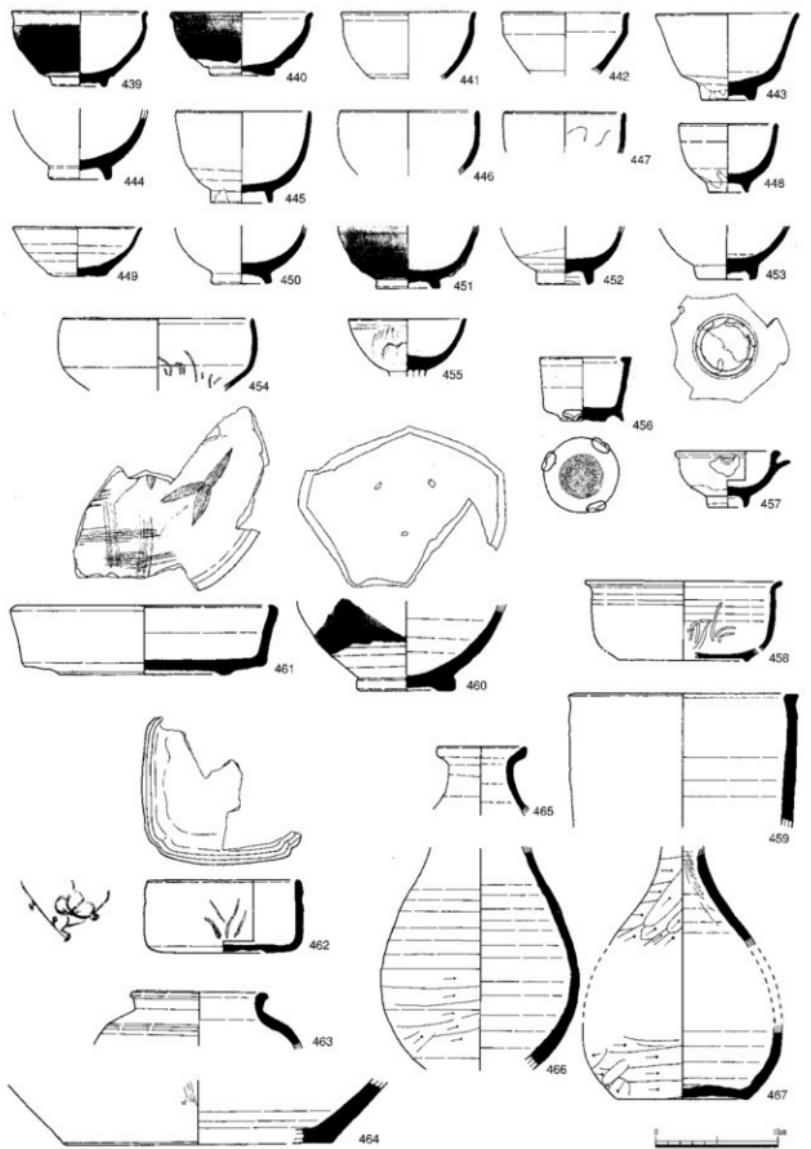


第168図 2区 SD1017 出土遺物実測図(1)

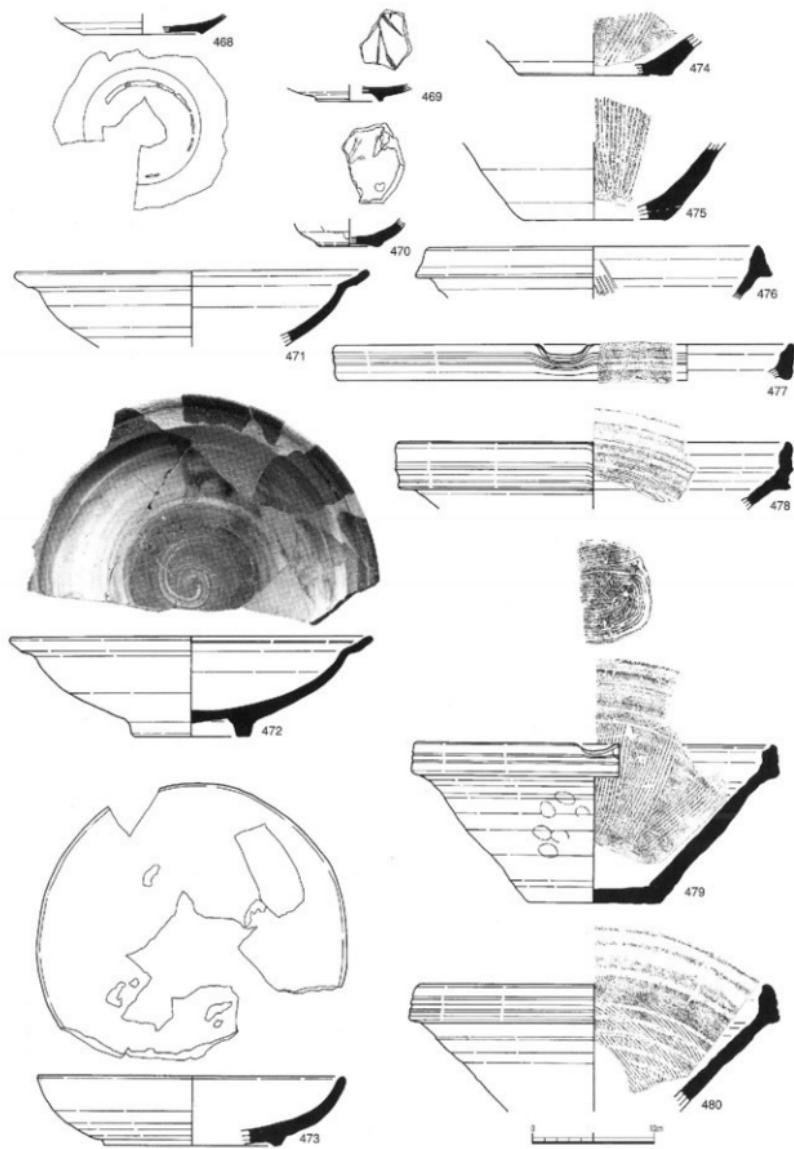
口縁端部は断面方形状におさめたものである。時期は備前焼Ⅲ期と考えられる。

439～442は瀬戸窯の天目碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部の下方で「く」の字形に屈曲し口縁端部が外反し丸くおさめるものである。釉薬は鉄釉を内外面に掛けたものである。443～445、447～453は肥前系の陶器碗である。443は体部が外上方に立ち上がり、口縁部がやや外反、口縁端部を尖り気味におさめる。高台～高台内は露胎である。444は高台直上から内湾しながら上方に延びる。骨み付け～高台内は露胎である。釉薬は内外面とも灰釉である。445は口縁部が直線的で、口縁端部を丸くおさめる。豊み付け・高台内は露胎である。447は体部が上方に延び、口縁部は若干外反し、口縁端部を丸くおさめる。448は小碗で、口縁部は直線的で、口縁端部を丸くおさめる。削り出し高台は断面逆三角形を呈し、高台～高台内は露胎である。449は体部が緩やかに内湾、口縁部が僅かに外反し、口縁端部を丸くおさめたものである。底部は平底で、砂目痕が3ヶ所みられる。450～453は高台脇から内湾しながら外上方に延びる。450では豊み付けのみ露胎である。451は高台直上に釉だまりがみられ、452は高台直上に横方向のケズリを施し、外面体部中位～高台内は露胎である。釉薬は内面に鉄釉、外面に白化粧土を施している。453は骨み付けに置き砂が付着している。446は京都・信楽系の陶器碗とみられる。釉薬はうすい黄を発色している。454は瀬戸窯の碗とみられるものである。体部下位から直立気味に立ち上がり、口縁部でやや内傾し端部を丸くおさめる。釉薬は内外面に灰釉を施している。455は仏壇器の皿部である。外面の口縁部と底部周縁にに巻線2条と1条、体部中央に文様が施されている。456は備前窯の三足付き香炉である。口縁部が内面に拡張し、口径7.4cmを測る。外面底部に窯印がみられる。457は陶器の片口の付いた鉢である。口縁部は外折れし、小型の片口を成形する。釉薬は内外面とも鉄釉を施す。458は瀬戸窯の鉢とみられる。口縁部は外折れし、口縁端部を丸くおさめる。底部は高台内を浅くケズリ、低い高台を呈す。内面体部下位に片彫りの文様が施され、釉薬は黄みの白を発色している。459は備前窯の鉢である。体部が直立し、口縁端部を外方に拡張するものである。外面に自然釉が掛かる。460は肥前系の鉢とみられる。体部は内湾しながら外上方に立ち上がる。高台内のケズリを浅く、豊み付けが広い安定的な高台を持つ。外面体部に鉄絵の上に灰釉を施している。見込みに胎土目痕3ヶ所みられる。461は志野焼の丸鉢であろうか。体部はやや外上方に立ち上がり、口縁端部が内湾し、尖り気味におさめる。見込みに竹文が描かれ、長石釉を掛けている。462は志野焼の四方に入り隅にした向付である。底部は碁笥底状のケズリを施し、外面体部には鉄絵（梅花と草花）を描き、長石釉を掛けている。463は備前窯の壺である。口縁部が丸く折り曲げられ玉線状を呈し、肩部に2条の沈線を巡らしている。備前焼Ⅳ期のものと考えられる。464も備前窯の壺底部である。外面に自然釉が掛かる。465～467は備前窯の徳利である。465は口縁部のみである。466は体部下位に横方向のケズリを施し、火拂が施されるつる首徳利の体部である。467は外面体部に横方向のケズリ、内面の頸部に絞り痕がみられる。

468は瀬戸窯の鉢底部である。碁笥底風の底部に胎土が輪状に付着している。重ね焼きの痕跡であろう。469・470は絵唐津と考えられる。内面体部から見込みに植物文様の鉄絵が描かれている。471・472は肥前系の大皿である。口縁部下で「く」の字形に外反し、口縁端部はやや内湾、先端部を丸くおさめるものである。471は口唇部に弱い沈線をめぐらし、内面は刷毛目に鉄絵を施している。472は内面の文様は刷毛目の上に鉄釉（茶）と銅絵釉（緑）で松の絵を描いている二彩唐津である。見込みに砂目痕4ヶ所がみられる。474～480は陶器のすり鉢で、475は堺・明石系、476～480は備前窯のものである。474は底部片で内面のすり目は1単位6条を数える。475は体部が外上方に立ち上がる。内面



第169図 2区 SD1017 出土遺物実測図 (2)



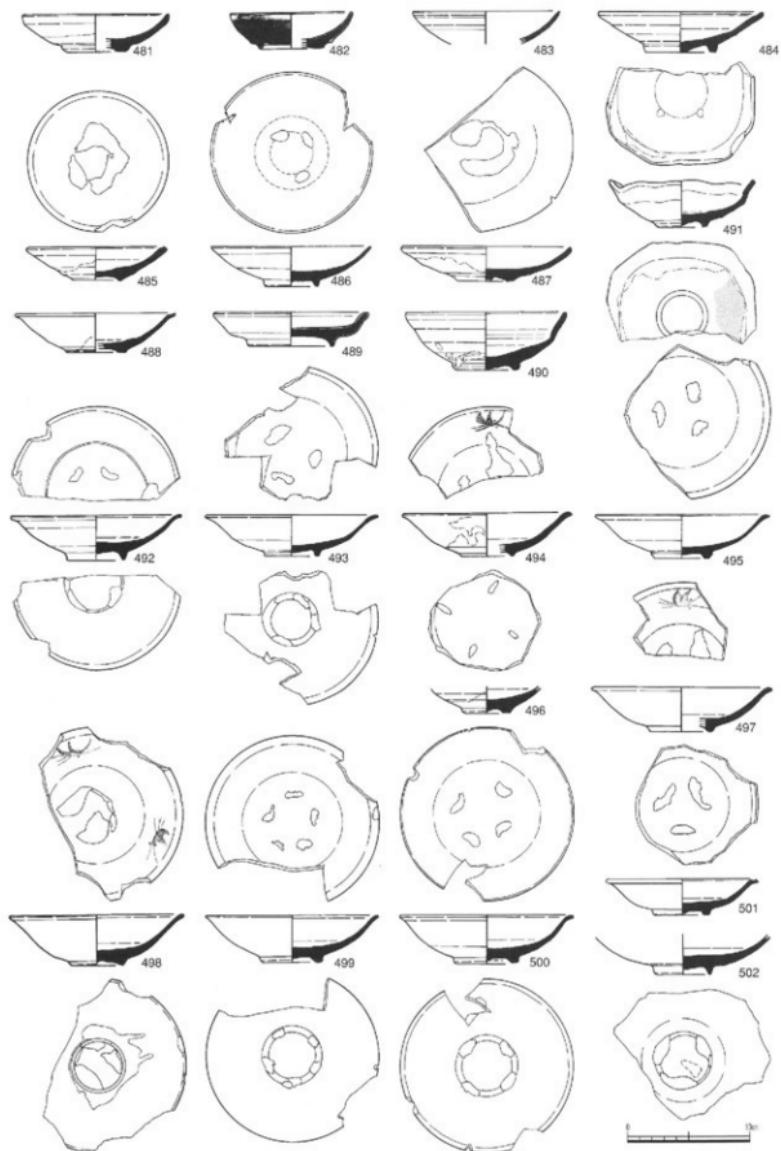
第170図 2区 SD1017出土遺物実測図(3)

のすり目は1cmに3条を数え、使用頻度の多いことが確認できる。476は口縁部が上下に拡張し、下端部は尖り気味におさめる。すり目は放射状に入る。備前焼Ⅳ期のものと考えられる。477は片口の付いた口縁部である。口縁端部は上下に拡張し、口縁外端面には凹線2条を巡らしている。口縁部外面に窯印がみられる。備前焼V期のものであると考えられる。478は口縁部が上下に大きく拡張し、口縁端部を丸くおさめる。口縁部外端面には凹線3条を巡らす。すり目は1cmに3条を数え、放射線状に入る。備前焼V期の桃山時代のものと考えられる。479は体部が外上方に立ち上がり、口縁部が上下に拡張し、口縁外端面に凹線2条を巡らせ、端部を丸くおさめる。内面のすり目は1cmに4条を数え、見込みにもすり目を施している。備前焼V期のものとみられる。480は口縁部を上下に拡張し、口縁外端面に凹線3条、内面口唇部に1条を巡らしている。内面のすり目は1cmに3条を数える。外面口縁部下に重ね焼きの痕跡が見られる。備前焼V期、桃山時代のものと考えられる。

481～488、490～502は肥前系の陶器皿である。489は志野焼の皿である。肥前系の皿は大きく分けて、①体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がるもの、②高台脇から内湾し立ち上がり口縁部が大きく外反する折縁皿、③もう一つは折縁皿の口唇部に溝を巡らす溝縁皿に分けられる。①にあたるものに481～483、486、487がある。485は口縁部が①の特徴を持つものであるが、口唇部に溝を巡らせているものであることから、③の特徴も兼ね備えたものである。481は見込みに胎土目痕3ヶ所みられ、482は低い高台の脛み付けに回転糸切り痕が残されている。483は内面の釉薬がにぶい黄緑を発色している。486は見込みに蛇ノ目剥ぎを施し、砂目痕が3ヶ所みられる。487は見込みの砂目が輪状に置かれている。②には492～500がある。この中で494・497・498は見込みに鉄釉で植物文様を描いている絵唐津と呼ばれているものである。17世紀初頭のものと考えられる。492・493・495・500とも見込みと脛み付けに砂目痕が、499は胎土目痕がみられる。③は484・488・501がある。484は釉薬を外面に灰釉、内面に鉄釉の掛け分けをしたものである。488は脛み付けに回転糸切りの痕跡を残し見込みに砂目痕がみられる。501は脛み付けのみ露胎で、見込みに砂目痕が3ヶ所みられる。490は肥前系の皿で、口縁部下で外上方に屈曲し、口縁端部を丸くおさめる。釉薬は内面と外面体部中位まで白化粧土を掛け、高台脇に釉だまりを呈す。491は肥前系の皿で、四隅の口縁部及びその中間部も軽く内側に成形している。変形皿であろうか。内面に鉄絵が描かれ、見込みに胎土目痕が見られる。489は志野焼の皿である。短い口縁部から端部は外反し丸くおさめている。脛み付けのみ露胎である。

508・509は肥前系の灰釉皿である。体部は高台脇から緩やかに内湾し、口縁部が外反、口縁端部を丸くおさめる。見込みは凹面を呈し、見込み及び脛み付けに置き砂が付着している。503～507、510～512は磁器の皿である。503は体部から口縁部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部をやや尖り気味におさめる。内面の口縁部に圓線1条、蔓草文が染め付けられている。504は口縁部が外反するもので、高台は露胎である。505は口縁部が直線的で端部をやや尖り気味におさめる。内面外面の口縁部と底部に圓線を巡らしている。土器の割れ口には漆を使って補修の痕跡がみられる。506・507は口縁部下でS字状に屈曲するタイプのものである。見込みを凹面に呈し、釉薬はグレイミの黄緑を発色している。510は内面の口縁部に圓線2条、見込みに草花文を染め付けている。脛み付けに砂目の痕跡がみられる。511・512は体部が外上方に延び、口縁部は直線的で端部をやや尖り気味におさめている。内面に染付けが施されている。513・514は肥前系伊万里焼の小杯である。

515～520は磁器の碗である。515は体部がやや内湾しながら上方に立ち上がり、口縁部がやや外反し端部を丸くおさめる。外面体部に網目文と口縁部下に圓線1条を染め付けている。516は初期伊万里



第 171 図 2 区 SD1017 出土遺物実測図 (4)

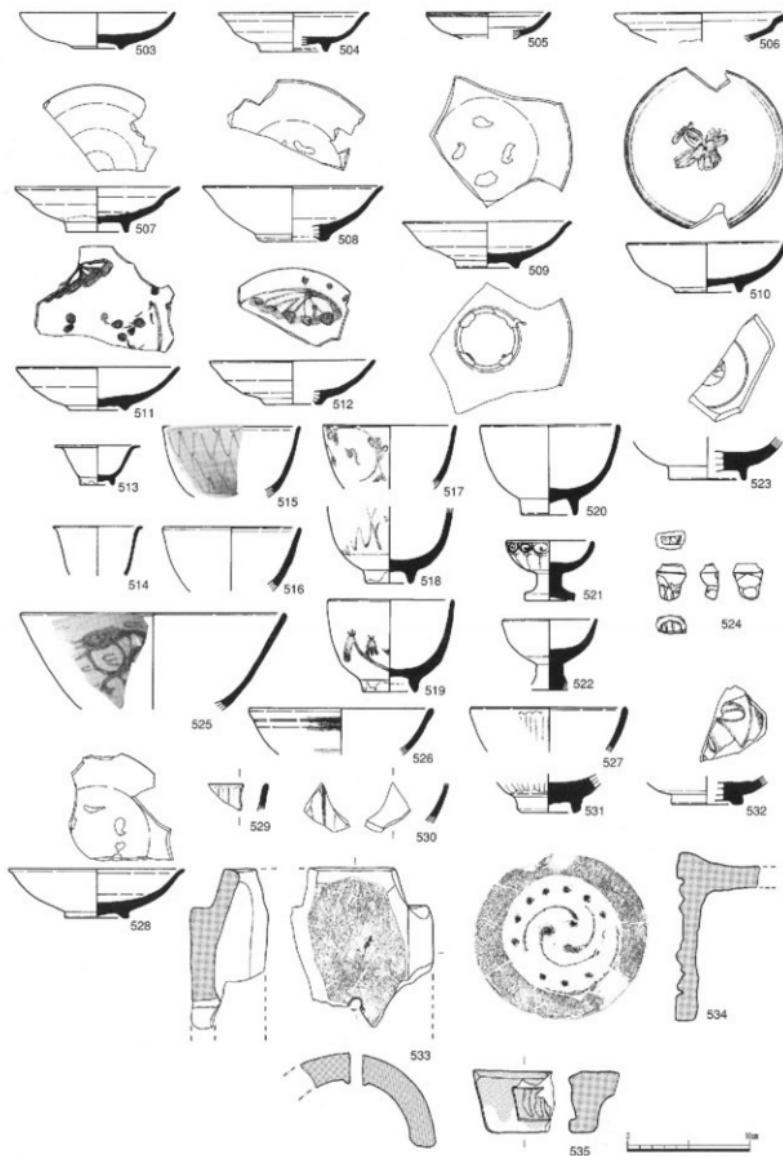
で、釉薬はうすい黄緑を発色している。517～520は外向体部に染付けされた碗である。517は蔓草文、518は体部下位に圓線1条と網目文、519は草花文、520は圓線2条と折枝竹文が施されている。高台のケズリが深く、高台内は露胎である。521・522は仏教器である。521に輪宝繫文が染め付けられている。522は伊万里焼のもので、高台の底部は回転糸切りの痕跡がみられる。523は底部の器壁が厚く、見込みに文様が施されている。524は伊万里焼の香炉の脚である。動物の脚であろう。525は肥前系伊万里焼の鉢である。体部から口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。外面の口縁部に圓線2条と体部に龍文が染め付けられている。526は龍泉窯系の青磁碗である。外面口縁部下に雷文帯をもつもので、上田分類のC群、15世紀前後と考えられる。527も龍泉窯系の青磁碗である。外面体部に細線蓮弁文を持つもので、上田分類のB群-IV、15～16世紀の時期と考えられる。528は磁器の灰釉皿であるが、高麗か李朝時代の搬入品ではないかと考えられる。高台脇から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反し端部を尖り気味におさめる。見込みに砂目痕5ヶ所、疊み付けに置き砂が付着している。529・530は龍泉窯系の青磁碗口縁部片である。体部外面に529は細線蓮弁文が、530には鎬蓮弁文が片彫りされている。531も龍泉窯系青磁碗の底部である。底部の器壁が厚く、体部外面には鎬蓮弁文が施され、高台内は露胎である。横田・森田編年のI-7類またはII類と考えられる。532は龍泉窯系青磁碗である。底部の器壁は厚く、高台内の削り出しは浅い。見込みに草花文を片彫りしている。533～535は瓦である。533は丸瓦で、凹面には布目痕が残る。胴部に瓦固定用の釘穴がある。534は軒丸瓦である。三巴文に連珠10を施す。535は軒平瓦片である。ナデ調整を施している。

536は陶器の人形である。537～546は加工円盤と考えられる。用途は不明とされている。537～539、541～543は陶器製品を加工したものである。ちなみに537・538・542は瀬戸窯、539・543は肥前系唐津のものである。544～546は瓦を加工したものである。547は紡錘形の管状土錐である。

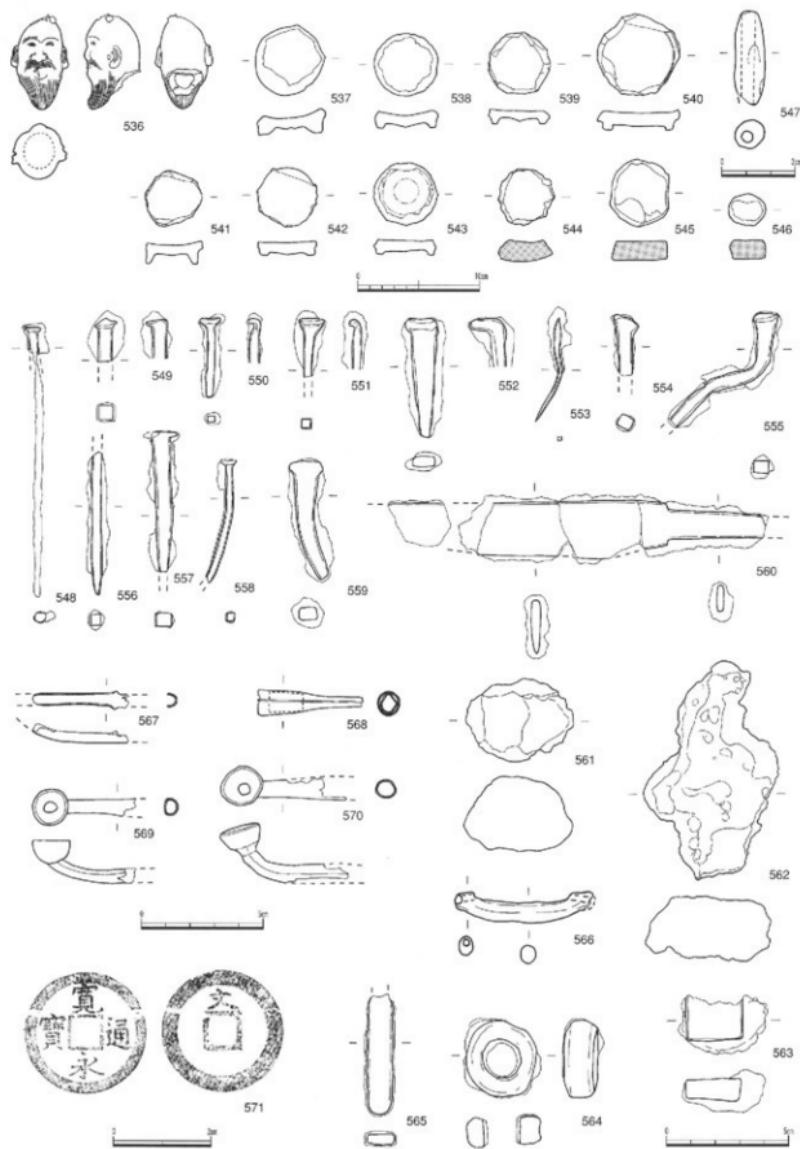
548～559は鉄釘と考えられる。548～552・557は頭部を水平方向に拡張し、L字形に折り曲げたものである。554・555・558・559は頭部を拡張したものである。560は刀子であり、長さ24cm、幅2.4cmを測る。刃先はやや丸みを持つ。561・562は鉄滓（スラグ）である。563は用途不明の鉄製品である。564はドーナツ形状の鉄製品であるが、用途は不明である。565は長さ4.8cm、幅1.1cm、厚み0.5cmを測る、用途不明の鉄製品である。566は鉛の製品と考えられる。取っ手と考えられる。567～570は銅製品のキセルである。567は遺存状態がよくなく、568はキセルの吸い口、569・570はキセルの先端部である。571は銅錢の「寛永通宝」（新寛永、背文）である。

572は粘板岩製の硯である。平面形は梢円形を呈す。573～579は砥石である。573は凝灰岩製で、他の3面も使用の痕跡がみられる。574は泥質片岩製で、他の三面も使用の痕跡がみられる。575凝灰岩製のもので、両側面も使用の痕跡がみられる。576は泥質片岩製で、裏面の使用の痕跡がみられる。577～579は砂岩製で、表裏面で使用痕がある。580は粘板岩製の基石、581・582は石英製の基石である。583は花崗岩製の礪白である。下面にはすり日が明瞭に残る。584は花崗岩製の石塔である。五輪塔の火輪であろうと考えられる。585は花崗岩製の加工品である。用途不明であるが、墓石として使われた可能性も考えられる。

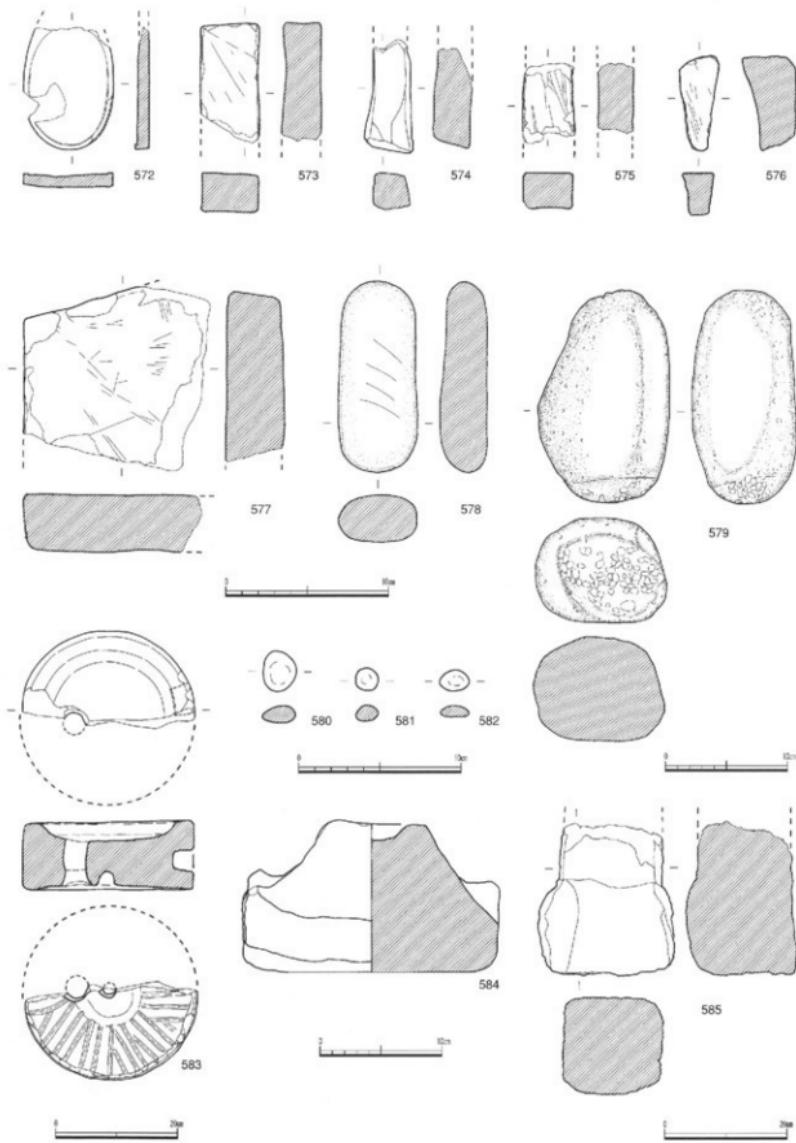
586～592は漆器挽である。内外面とも黒漆の上に赤漆を塗り、仕上げをしている。586は内面の絵付けを黒漆で描いたものである。587は復元口径13cmを測る。遺存状態がよくない。588は高台内に家紋らしきものがある。遺存状態は悪い。588・589には、削り出しによる低い高台が付されている。590は復元径16.2cmを測り、高台は破損している。外面体部に家紋が記されている。591は全体的に漆が剥



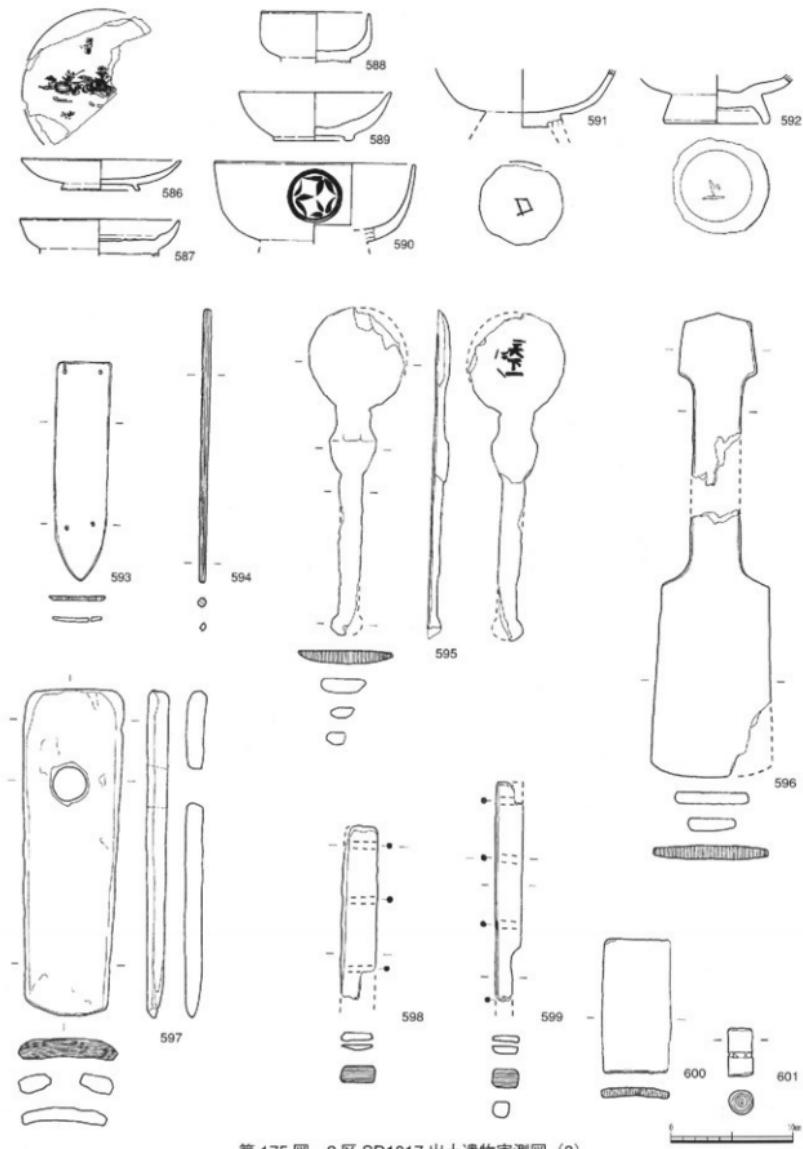
第172図 2区 SD1017 出土遺物実測図 (5)



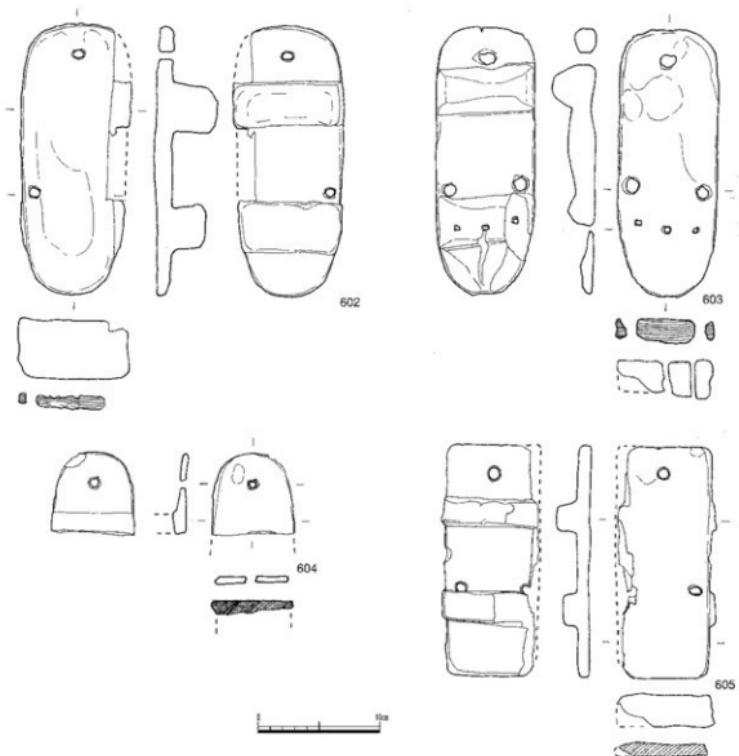
第173図 2区SD1017出土遺物実測図(6)



第174図 2区SD1017出土遺物実測図(7)



第 175 図 2 区 SD1017 出土遺物実測図 (8)



第176図 2区 SD1017 出土遺物実測図(9)

離している。高台内に家紋が記されている。592は高台を高く削り出す。内外面とも黒漆で仕上げられ、高台内には赤漆で「上」と記されている。593は木札木筒であろうか。四隅に穿孔がある。594は箸である。595は食事具のおたまじやくしと考えられる。長さ26.8cmを測り、先端部分の裏側に「天下一」と刻まれている。596はヘラのようなものと考えられる。長さ37.9cm（ただし推定を含む）、幅10cm、厚み1.1cmを測る。597は平鉗である。ほぼ完形で、長さ26.7cm、幅8.3cm、厚み1.7cmを測る。柄を差し込む穴もみられる。先端部がやや尖り気味に施されている。598は用途不明品であるが、

釘穴が6ヶ所あり、一つは貫通している。599は部材である。貫通した釘穴が4ヶ所ある。600は用途不明の木製品である。長さ11.0cm、幅5.6cm、厚さ0.8cmを測る。601は蘿編みなどに用いる木錘ではないかと考えられる。樹皮が付着している。

602～605は下駄である。602は左足用であろう。鼻緒を通す穿孔が2ヶ所みられる。右側面が欠損している。前頭には指圧痕がみられる。603は右足用であろう。鼻緒を通す穿孔が3ヶ所みられ、踝側に横一列3ヶ所の穿孔がみられる。この用途は不明である。604は右足用の先端部分のみである。親指の指圧痕と鼻緒の穿孔1ヶ所が確認できる。605は右足用と考えられ、四角い下駄である。鼻緒の穿孔3ヶ所と親指の指圧痕がみられる。

606は骨製の箸である。607は牛の頸骨左中間部分である。のこぎりの痕跡から、賽子を作ったのではないかと考えられる。

•18号溝（SD1018）（第177図、第178図）

調査区のSD1017より東へ5mに位置する。検出グリッドは、D・E・F・G-10、H-9・10グリッドである。SK1067・SK1068・SP1494を切り、SK1066・SP1460・SP1461・SP1462・SP1463・SP1464・SP1465・SP1466・SP1479・SP1480・SP1484・SP1485・撹乱に切られ、南北側は調査区外に延びている。主軸を南北方向にもち、調査区内の規模は全長22.8m、最大幅1.54mを測る。深さは0.76m前後を測る。遺構断面形状は不整船底形である。埋土は8層に分層でき、1～4暗灰黄色粘質土、5黄褐色粘質土、6暗灰黄色粘質土、7暗灰黄色粘質土、8オリーブ褐色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦器・瓦・鉄製品・石製品など約2000点が出土しているが、小片のため固化できたものは5点である。608は土師質土器の皿である。短い口縁部が外上方に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味におさめる。外面底部周縁に強いヨコナデを施すことにより体部と底部の境目を明瞭にしている。底部は回転糸切りである。609は束縛系こね鉢である。体部は外上方に立ち上がり、口縁部は若干上下に拡張し、断面三角形を呈す。森田編年の第三期第1段階と考えられる。610は鉄釘であろうか。611は針金であろうと考えられる。断面方形である。612は砂岩製の砥石である。赤色を呈すのは、熱を受けたためであろう。

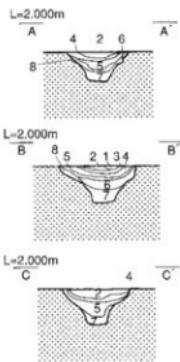
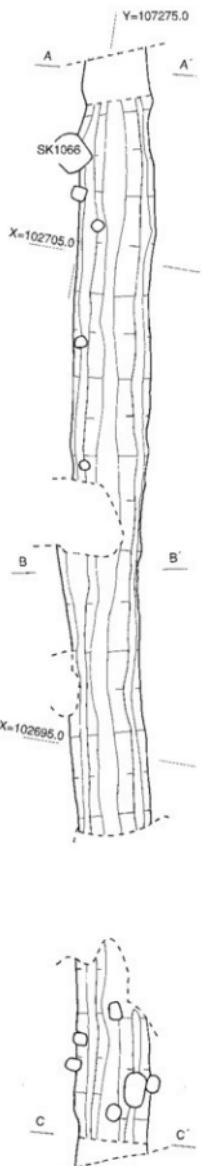
•22号溝（SD1022）（第179図、第180図）

調査区中央の東よりに位置する。検出グリッドは、G-12・13グリッドである。東端をSX1007に切られる。主軸を東西方向に持ち、両端部は収束している。遺構規模は全長7.6m、最大幅0.36mを測る。深さは0.1mを測る。遺構断面形状は浅い椀形を呈す。埋土は暗灰黄色粘質土の1層である。遺物は土師質土器・陶器が5点と少ない。固化できたものは1点である。

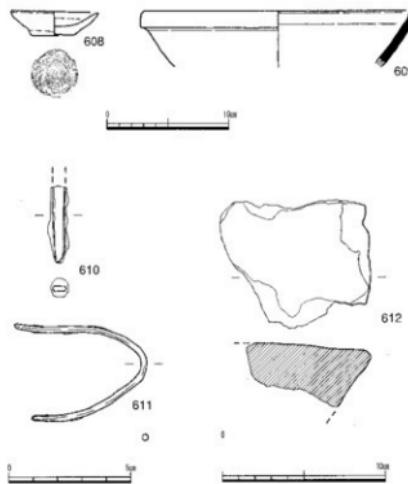
613は備前窯の壺底部小片である。外面底部にヘラ記号がみられる。

•25号溝（SD1025）（第181図、第182図）

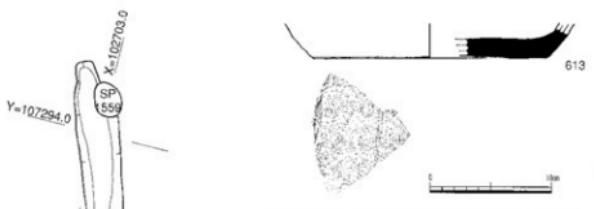
調査区の東に位置する。検出グリッドは、G-13、H・I-13・14グリッドである。SD1024を切り、SX1007・SD1026・SD1027・SP1556・撹乱に切られている。主軸を南北方向にもち、北側は調査区外に延び、南側は東に向け屈曲しSD1026に切られる。調査区内の規模は全長12.68m、最大幅8.58mを測る。深さは0.7m前後を測る。遺構断面形状は不整形を呈す。埋土は5層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2黄灰色粘質土、3暗灰黄色粘質土、4暗灰黄色粘質土、5褐灰色粘質土である。遺物は須恵器・



第177図 2区 SD1018 遺構平・断面図



第178図 2区 SD1018 出土遺物実測図



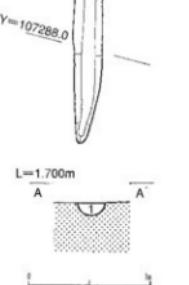
第180図 2区SD1022出土遺物実測図

土師質土器・陶磁器・瓦・瓦器・チャート・鉄製品・石製品・銅鏡など約700点出土している。図化できたものは13点である。

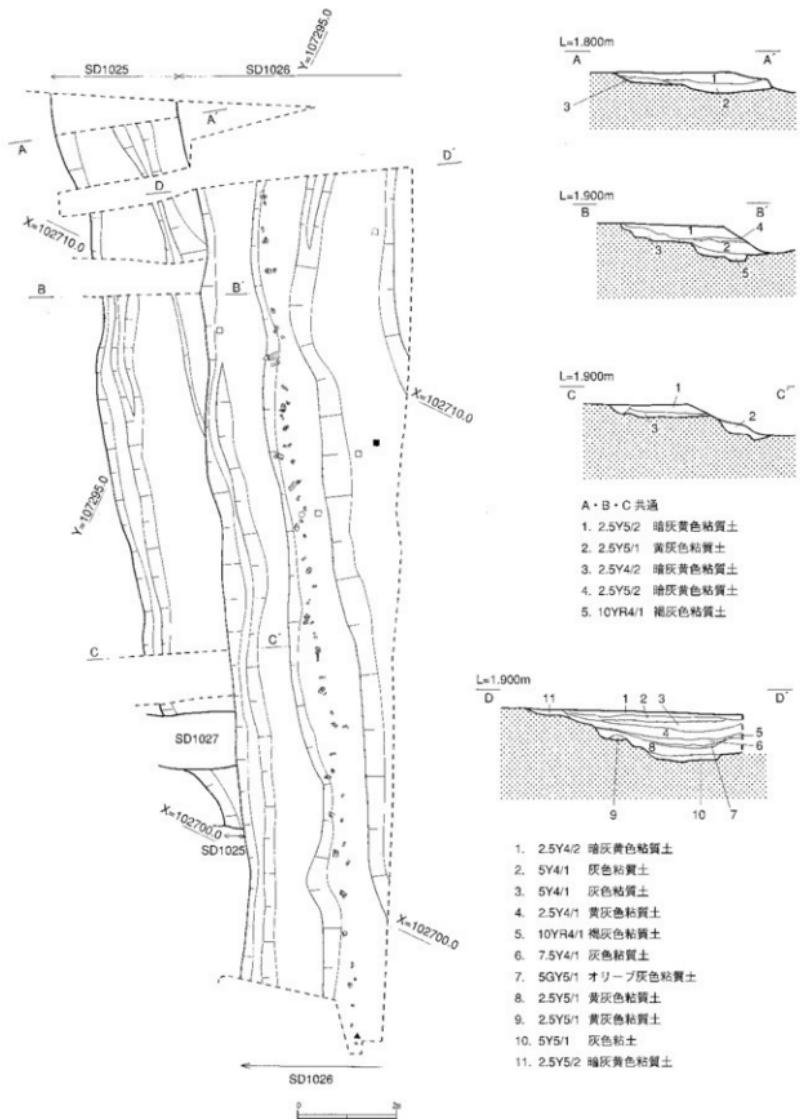
614は磁器の合子蓋である。615は土師質土器の杯である。体部は外上方にやや外反するように立ち上がる。底部は回転ヘラギリが施され、板目痕がみられる。616は伊万里焼の小杯である。見込みに草花文、高台内にスタンプ印がみられる。617は和泉型瓦器椀である。体部は内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反し、口縁端部を尖らせる。調整は外面体部から底面にはユビオサエ、内面は連結輪状風のヘラミガキがやや密に施されている。尾上編年のⅡ-2期、12世紀のものと考えられる。618は土師質土器の羽釜である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、弱い内帶も見られず口縁端部と一体化したもので凹線を巡らしている。外面体部はユビオサエ、口縁部はヨコナデの調整を施す。619は大型の土鉢である。620は銅鏡の「寛永通寶」(古寛永)である。621は砂岩製の砥石である。左側面も使用の痕跡がみられる。622は泥岩製の砥石である。他三面も孤面に使用の痕跡がみられる。623は鉄滓(スラグ)である。624～625は鉄釘とみられる。624は頭部をL字形に折り曲げているものである。

・26号溝(SD1026)(第181図、第183図、第184図)

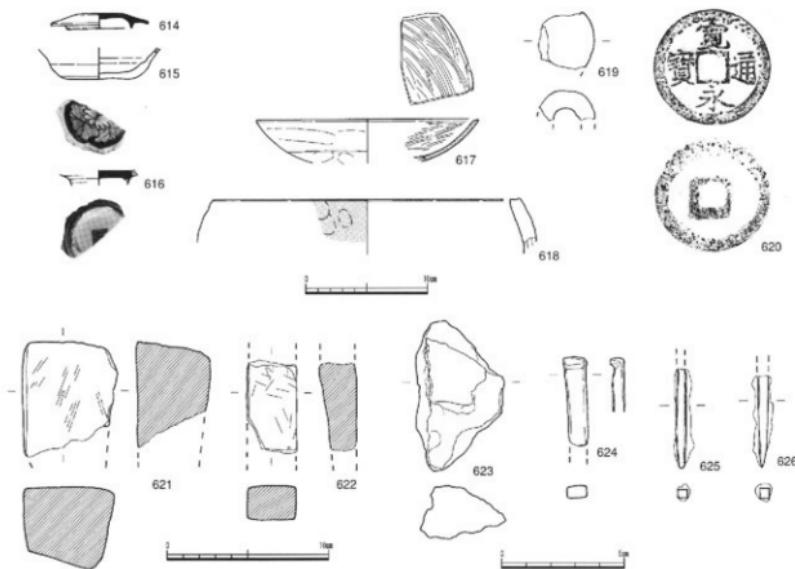
調査区の東に位置する。検出グリッドは、F-15・16、G-14・15、H-14・15、I-13・14・15グリッドである。SX1007・SD1025・SD1027・SK1072を切り、SK1071に切られる。主軸を南北方向にもち、南側北側と東側は調査区外に延びる。調査区内的規模は全長19.32m、最大幅4.32mを測る。深さは0.98mを測る。埋土は11層に分層でき、1暗灰黄色粘質土、2灰色粘質土、3灰色粘質土、4黄灰色粘質土、5褐灰色粘質土、6灰色粘質土、7オリーブ灰色粘質土、8黄灰色粘土、9黄灰色粘質土、10灰色粘土、11暗灰黄色粘質土である。遺物は須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦・瓦器・チャート・鉄製品・石製品・木製品など1150点出土している。また斜面に護岸用と見られる木杭が打設されているが、これらは近代以降と考えられる。つまりこの造構は近世から近代に存続した溝である事がわかる。図化できたものは61点



第179図 2区SD1022
造構平・断面図



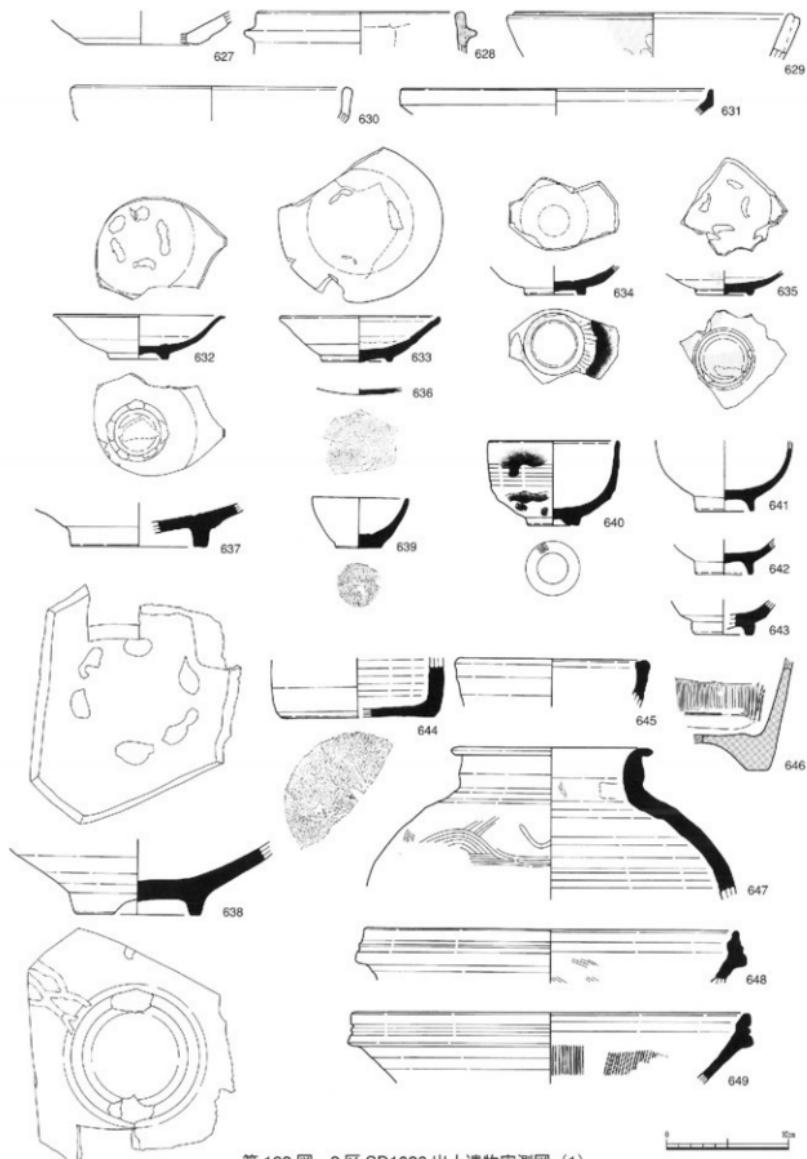
第181図 2区 SD1025-1026 遺構平・断面図



第182図 2区 SD1025出土遺物実測図

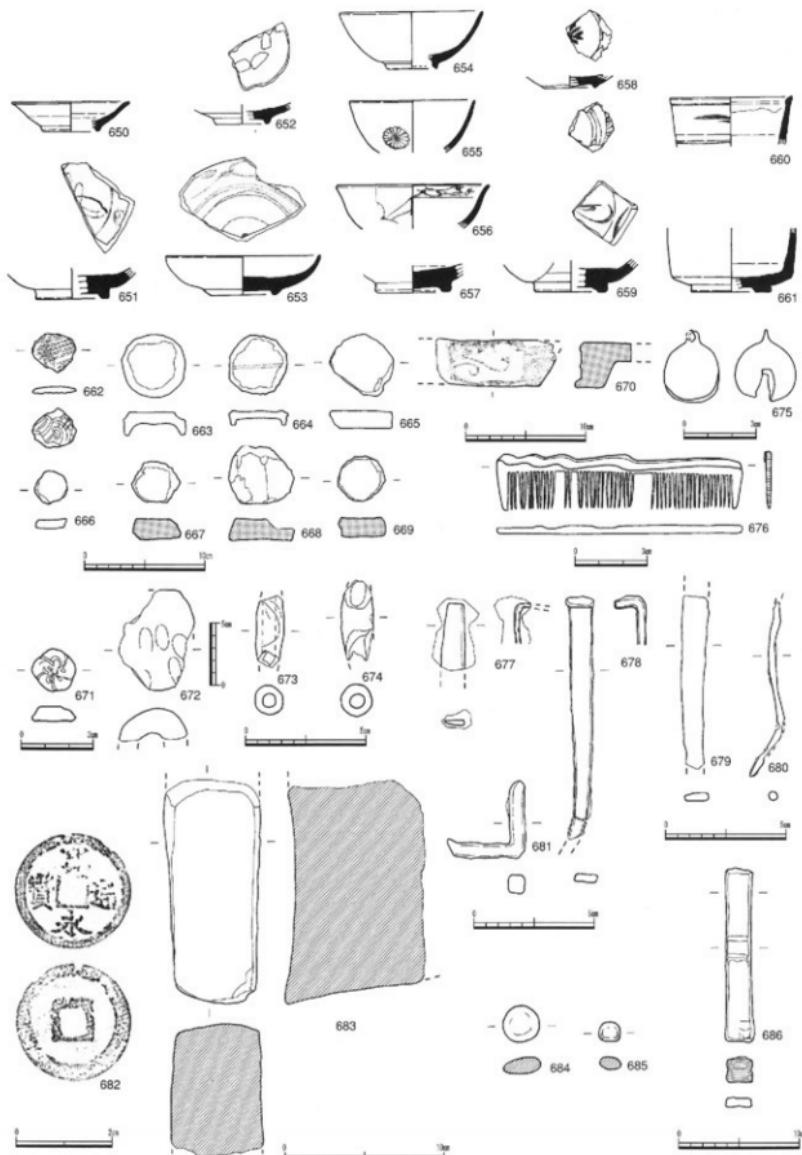
である。

627は土師質土器のすり鉢底部片である。外面体部はヨコナデ、底部はヘラギリのち粗いナデ、内面はヨコナデ調整を施している。628は瓦質の羽釜である。口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は断面方形を呈し、端面に凹線を巡らし、口縁部下に断面三角形の鈎を巡らしている。調整は外面鈎下にタテのハケ目、内面は板ナデである。炭素未吸着のため土師質土器の色合いを呈す。629は土師質土器の羽釜である。鈎の退化により、口縁部は一体化し凹線を巡らしている。調整は外面体部がユビオサエ、口縁部はヨコナデ、内面ヨコナデ、ナデを施している。在地産と考えられる。630は土師質土器の焰壺である。口縁部は直線的で端部を丸くおさめる。631は東播系のこね鉢である。口縁端部が上方に拡張し、断面三角形を呈す。外面口縁部下に重ね焼きの痕跡がみられる。森田稔の編年よりⅢ期第2段階の14世紀の前半と考えられる。632～638は陶器皿である。632は口縁部を外反する端反形のものである。内面の見込みは凹面状を呈し、胎土目痕が4ヶ所みられる。肥前系の灰釉皿である。633も肥前系の灰釉皿で、口唇部に溝を巡らす溝縁皿と呼ばれるものである。見込みに砂目痕3ヶ所にみられ、釉薬も器の半分ほどに掛かるのみである。634は見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施している。釉薬も外面に灰釉が高台脇にたまり、内面は銅緑釉で掛け分けている。635は高台脇を横方向のケズリ、高台内は露胎である。内面は見込みが凹面を呈し、胎土目痕が4ヶ所みられる。肥前系の古唐津であろう。637は高台脇から外上方に立ち上がる。高台の削り出しが深く、安定している。置み付けに切り離しの糸切り痕がみられる。内面は刷毛目を施し、胎土目痕1ヶ所、墨跡がみられる。638は高台脇から外上方に直線的に立ち上がる。高台は安定的で、透かしが2ヶ所、釉だれがみられる。内面は砂目痕が6ヶ所にみられる。肥前系の大



第183図 2区 SD1026 出土遺物実測図 (1)





第184図 2区 SD1026出土遺物実測図(2)

皿である。639は陶器の小杯である。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。外面は体部中位～底部が露胎で、底部は回転糸切りを施している。肥前系の山唐津とみられる。640～643は陶器碗である。640は瀬戸窯の碗である。体部下位で上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。外面体部に沈線3条、豊み付けが広く、窯印が刻まれている。釉薬は外面の口縁部に灰釉薬、体部～高台まで鉄釉を、内面に灰釉を施している。641は瀬戸窯か信楽系の碗で、642、643は肥前系のものである。644は備前窯の壺である。体部は上方に立ち上がる。外面底部周縁はヘラで成形し、底部に窯印が刻まれている。645は信楽か丹波窯の鉢とみられる。体部は上方に立ち上がり、口縁部は肥厚、端面は弱い凹面を呈す。口縁部に自然釉が掛かる。646は瓦質の箱型火鉢である。外面体部はヘラミガキ、底部はユビオサエで、内面体部はタテハケ、底部もハケで調整を施している。在地産のものであろうか。647は備前窯の壺である。口縁部は直立し、口縁端部は大きく外反するのみで、玉縁状を呈さない。調整は外面体部に擣状のもので文様を施している。外面には自然釉が掛かる。備前焼Ⅰ期、鎌倉時代初期のもので、口縁部が玉縁状を呈する以前の形と考えられる。648、649は備前窯のすり鉢である。648は口縁部が直立し、口縁端部は上下に拡張、外端面に凹線2条を巡らしている。外面には自然釉が掛かる。備前焼Ⅴ期の桃山時代のものと考えられる。649は体部が外上方に直線的に立ち上がり、口縁部が上下に拡張、外端面に凹線2条を巡らしている。内面のすり目は1cmに4条を数える。備前焼Ⅴ期のものと考えられる。

650は口縁部が外反し端部を尖り気味におさめた陶器皿と考えられる。陶胎磁器と考えられるかもしれない。高台は露胎で、高台脇には砂が多く付着、見込みは釉を剥いでいる。651は龍泉窯系青磁碗である。底部の器壁厚く、豊み付け～高台内は露胎であり、見込みには片影りの草花文がみられる。横田・森田編年のI～4類にあたると考えられる。652は磁器皿の底部片とみられる。見込みに砂目痕がみられる。653は波佐見の磁器皿である。口縁部が外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。豊み付けのみは露胎であり、内面は体部に草花文と圓線2条の染付けが施され、見込みは蛇ノ目釉剥ぎを呈している。654～656は磁器碗である。654は清朝期の皮鰐手タイプのものと考えられる。655、656は伊万里焼の碗である。655は外面体部にスタンプの菊花文が施され、656は外面体部に雁文、内面の口縁部に唐草文が染め付けられている。657、658も龍泉窯系青磁碗である。底部の器壁厚く、高台内は露胎である。658は見込みに片影りの文様がみられる。横田・森田編年のI～4類ではないかと考えられる。660、661は磁器の線香立てである。660は体部が直立気味に外上方に立ち上がり、口縁部がやや肥厚し、口縁端部を若干尖らせている。外面体部に圓線1条と文様が染め付けられている。661は高台外面と豊み付けが露胎であり、高台脇に釉だまりがみられる。662～669は加工円盤である。662は須恵器で外面に平行タキ、内面に青海波紋が施されている。663～665は陶器、666は磁器、667～669は瓦を利用した加工円盤である。670は軒平瓦である。内外面の調整はナデである。671は土製品の泥面である。花をかたどったものであろうか。672は大型の土鍾である。673、674は紡錘形の管状土鍾である。両端部が欠損している。

675は銅製品の鉈である。高さ2.9cm、幅2.3cmを測る。676は骨製品の櫛である。装饰品として櫛齒の上部に銅製の装飾が貼り付けられている。総3cm、横幅10cm、厚み0.3cmを測る。677は刀子である。刃先はやや尖り気味である。678は頭部をL字状に折り曲げた鉄釘である。断面長方形で大型の釘である。679は鉄釘、680は針金とみられる。681は鉄製品の鉈と考えられる。682は銅錢「寛永通寶」(古寛永)である。683は砂岩製の砥石である。砥面に擦痕が規則正しく残っている。684は砂岩製の碁石、

685 は石英製の基石である。686 は木製品の部材である。

・7 号不明遺構 (SX1007) (第 185 図、第 186 図)

調査区の東に位置する。検出グリッドは、E - 14、F - 14・15、G - 13・14・15、H - 12・13・14、I - 12・13・14 グリッドである。遺構は SD1019・SD1022・SD1024・SD1025・SD1027・SD1028・SK1071・SK1072・SK1073・SP1544・SP1555・SP1561 を切り、SD1023・SD1026・SP1557・SP1558・SP1559・SP1560・SP1562・SP1563・搅乱に切られる。遺構の南北側と東側は調査区外に延びる。調査区内的規模は長軸 19.4m、短軸は 6.92m、深さ 0.12m を測る。遺構面は東の SD1026 に向かって落ち込んでおり、断面から鉄分を含む層を確認できたため、落ち込み部分を整地して水田へと造成したものかと思われる。遺構平面形状は長方形を、断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は暗灰黄色粘質土の 1 層である。遺物は須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦・瓦器・チャート・鉄製品・銅銭など約 100 点が出土している。図化できたものは 13 点である。

687 は上師質土器の皿である。体部から口縁部にかけては外反し、口縁端部を丸くおさめる。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。688 は志野焼の向付である。体部は下位で内傾し、口縁部は上方に立ち上がる。口縁端部を丸くおさめる。外面体部に鉄釉で網目文風の文様が施される。689 は京焼の陶器碗である。体部はやや内湾し上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。690 は肥前系伊万里の青磁碗である。体部は緩やかに内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁端部をやや丸くおさめる。釉薬はグレイミの黄緑を発色している。691 は陶器片を利用した加工円盤であろう。692 は肥前系の大皿である。体部は外上方に立ち上がり、口唇部に溝を巡らす溝線皿である。内面は刷毛目を施す。693 は土製品の土玉である。直径が 2.0cm、重さ 2 g を量る。

694 は鉛製の弾丸で、火縄銃の弾と考えられる。695～698 は鉄釘と考えられる。695～697 は頭部をやや拡張し、若干折り曲げているものである。698 は頭部を欠損している。699 は銅銭の「寛永通寶」(古寛永)である。

・440 号小穴 (SP1440) (第 187 図、第 188 図)

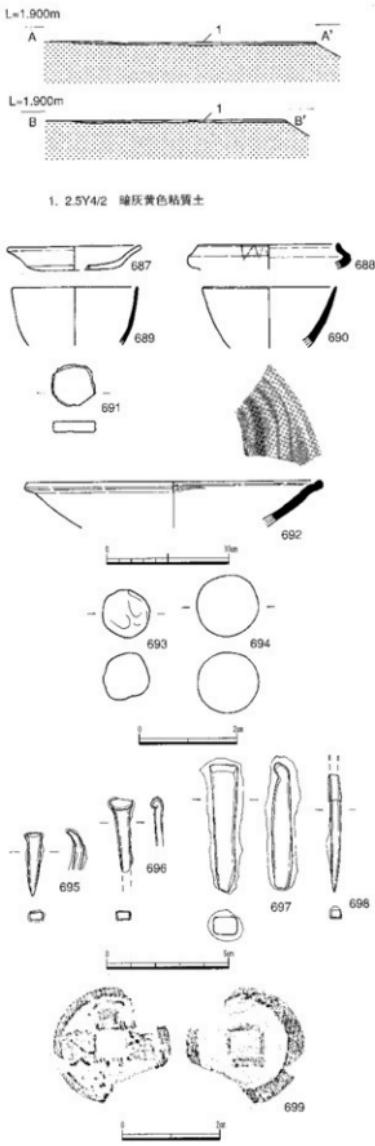
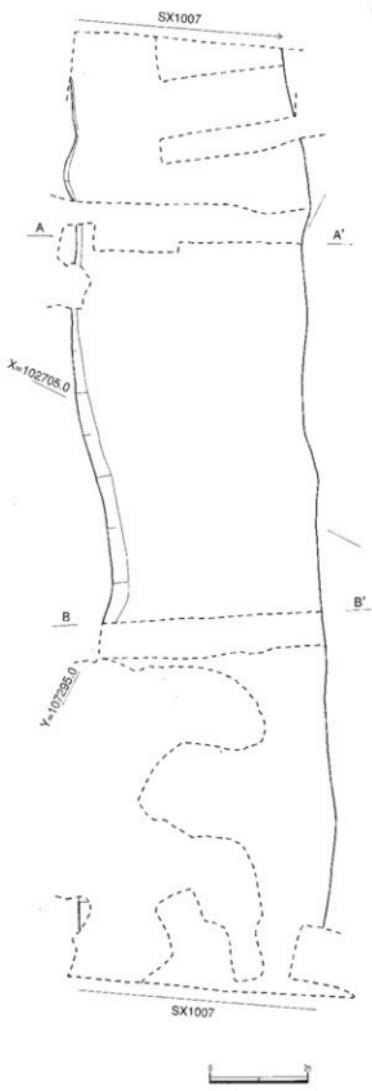
調査区の西に位置する。検出グリッドは、E - 8 グリッドである。SP1441 を切る。遺構規模は長軸 50cm、短軸 41cm、深さ 22cm を測る。遺構平面形状は梢円形を、断面形状は中央に落ち込みを持つ不整逆台形を呈す。埋土は 2 層に分層でき、1 暗灰黄色粘質土、炭化物片を少量含む 2 灰黄色粘質土である。土層観察では柱痕跡や抜き取りの痕跡は確認できなかった。遺物は土師質土器・瓦器・鋳型が 10 点出土している。図化できたものは 1 点である。

700 は鋳型である。鍋か釜の鋳型と考えられる。

・453 号小穴 (SP1453) (第 189 図、第 190 図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、D - 9 グリッドである。SP1452 に切られ、そのため遺構全体の規模・形状が不明瞭であるが、長軸（現存値）36cm、短軸 18cm、深さ 8cm を測る。遺構平面形状は梢円形を呈すと推定される。断面形状は浅い椭形を呈す。埋土は暗灰黄色粘質土の 1 層である。遺物は土師質土器・陶磁器・チャートなど 8 点出土している。図化できたものは 2 点である。

701 は土師質土器の杯である。体部は内湾して上方に立ち上がり、口縁部はわずかに外反し、端部を



第185図 2区 SX1007 遺構平・断面図

第186図 2区 SX1007 出土遺物実測図

やや丸くおさめる。外面体部は強いヨコナデにより段を有し、底部は丁寧なナデにより切り離しの痕跡を消している。702は磁器碗である。体部から口縁部は直線的に上方に延び、口縁端部を丸くおさめる。外面口縁部に圓線2条、体部下位に圓線1条と体部に竹文がで染め付けられている。

•456号小穴 (SP1456) (第191図、第192図)

調査区の南西に位置する。検出グリッドは、D - 10 グリッドである。SP1457を切る。遺構規模は長軸33cm、短軸33cm、深さ51cmを測る。遺構平面形状は円形を、断面形状は逆台形を呈す。1層から柱と思われる木片が検出され、柱に使用されたものであるとみられる。その周辺は搅乱が多く、掘立柱建物跡の確認までには到らなかった。埋土は4層に分層でき、1・2層灰黄色粘質土、3・4層灰黄色粘質土である。遺物は柱と思われる木片・上師質土器・磁器・チャート・鉄製品など17点出土している。図化できたものは2点である。

703は柱材で、底部の一部のみ本来の面が残存し、その他は風化により摩滅している。本来の径は29.5cmに復元できる。704は頭部をL字状に折り曲げた鉄釘である。

•465号小穴 (SP1465) (第193図、第194図)

調査区のやや南西に位置する。検出グリッドは、D - 10 グリッドである。SD1018・SP1466を切る。遺構規模は長軸70cm、短軸42cm、深さ70cmを測る。遺構平面形状は隅丸方形を呈す。断面形状は南に一段テラス状の平坦部を成し、さらに落ち込みを持つ不整逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1層灰黄色粘質土、2層暗灰黄色粘質土である。土層観察では柱痕跡や抜き取りの痕跡を確認できなかった。遺物は土師質土器・陶磁器・石・鉄製品など33点出土している。図化できたものは4点である。

705は肥前系の陶器皿である。口縁部は外反し、口縁端部をやや尖り気味におさめる。706は陶器の加工円盤である。707はキセルの吸い口である。708は頭部がL字状に折れ曲げた鉄釘と考えられる。断面長方形で幅が広く、木質が残存している。

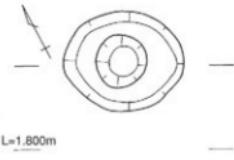
•510号小穴 (SP1510) (第195図、第196図)

調査区の中央に位置する。検出グリッドは、F - 11 グリッドである。SP1509を切る。遺構規模は長軸44cm、短軸38cm、深さ34cmを測る。遺構平面形状は不整梢円形を、断面形状は不整逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき、1・2層とも灰色粘質土である。土層観察では柱痕跡や抜き取りの痕跡を確認できなかった。遺物は須恵器・土師質土器・瓦器・鉄製品など10点出土している。図化できたものは1点である。

709は頭部が横方向に若干拡張し、L字状に折れ曲げる鉄釘である。

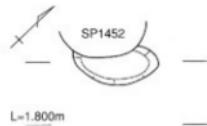
•512号小穴 (SP1512) (第197図、第198図)

調査区の中央に位置する。検出グリッドは、F - 11 グリッドである。SP1511に切られ、遺構全体の規模・形状は不明瞭であるが、長軸(現存値)24cm、短軸22cm、深さ25cmを測る。遺構平面形状は不整隅丸方形を呈すと推定される。断面形状は南側に低い段差を持つ不整逆台形を呈す。断面図には描かれていないが、柱痕が南側において確認された。埋土は2層に分層でき、1層暗灰黄色粘質土、2層灰黄色粘質土である。遺物は土師質土器・金属製品が4点ほど出土している。図化できたものは1点である。

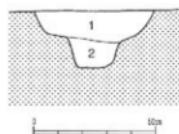


1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土

第 187 図 2 区 SP1440
遺構平・断面図

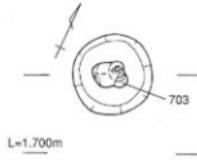


L=1.800m

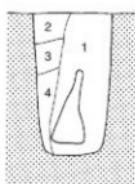


1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土

第 189 図 2 区 SP1453
遺構平・断面図

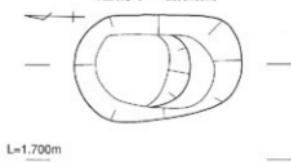


L=1.700m



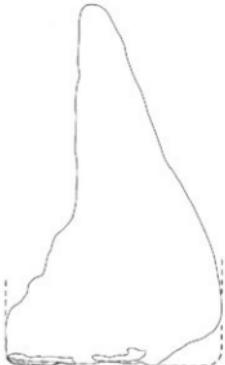
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
2. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土

第 191 図 2 区 SP1456
遺構平・断面図

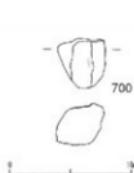
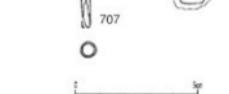
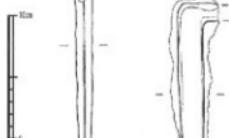
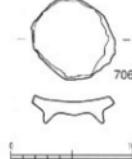


1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土

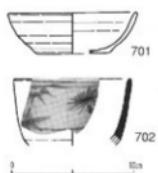
第 193 図 2 区 SP1465
遺構平・断面図



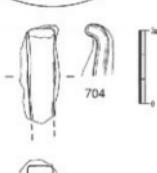
703



第 188 図 2 区 SP1440
出土遺物実測図

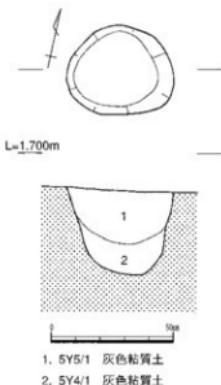


第 190 図 2 区 SP1453
出土遺物実測図

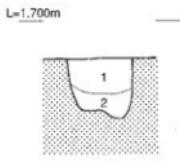
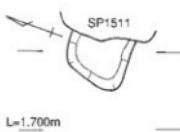


第 192 図 2 区 SP1456
出土遺物実測図

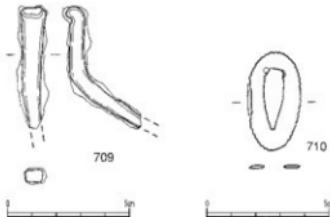
第 194 図 2 区 SP1465
出土遺物実測図



第195図 2区 SP1510
造構平・断面図



第197図 2区 SP1512
造構平・断面図



第196図 2区 SP1510 第198図 2区 SP1512
出土遺物実測図 出土遺物実測図

710は長さ4.0cm、幅2.1cm、厚さ0.1cmを測る、切羽である。

・遺物包含層出土遺物（第199図）

711は肥前系の灰釉皿である。体部から口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。外面体部は横方向のケズリで段を有し、体部中位～高台内まで露胎である。見込みに胎土目痕が4ヶ所みられる。712は磁器の輪花のような皿である。口縁部がやや内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部をやや尖り気味におさめる。内面に区画のある草花文を染め付けしている。豊み付けは露胎で、置き砂が砂付着している。

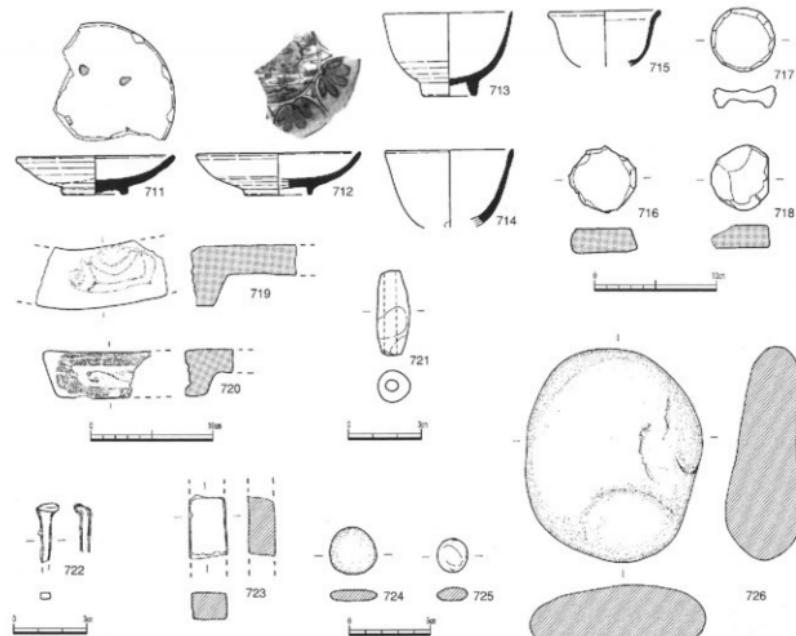
713～715は磁器の碗である。713・714は体部～口縁部が内湾しながら上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめるもので、715は口縁部が外反し、口縁端部を丸くおさめるものである。713は外面体部下位に横方向のケズリで段を有している。714は伊万里の青磁碗である。715は中国からの搬入品ではないかと考えられる。716、718は瓦製の加工円盤、717は陶器製の加工円盤である。719は軒平瓦である。調整は上面がミガキ、裏面がヨコナデを施している。720も軒平瓦である。調整は上面がミガキ、裏面はユビオサエやナデを施している。721は紡錘形の管状土錐である。全体にユビオサエやナデの調整がみられる。

722は頸部をやや拡張し、L字形に折り曲げている鉄釘と考えられる。723は凝灰岩製の砥石である。他三面も砥面として利用の痕跡がみられる。724は砂岩製のおはじきと考えられる。全体によく磨かれているものである。725は石英製の碁石である。726は砂岩製の砥石である。裏面も砥面として使用の痕跡がみられる。

iii. 3区

・74号土坑（SK1074）（第200図、第201図、第202図、第203図）

調査区の北西に位置する。検出グリッドは、B・C - 1・2グリッドである。西側を搅乱に切られ、遺構全体の規模・形状が不明瞭である。長軸（現存値）288cm、短軸242cm、深さ100cmを測る。遺構平



第199図 2区遺物包含層出土遺物実測図

面形状はやや西のほうに突出したL字形を呈すると考えられる。断面形状は逆台形を呈す。埋土は23層に分層できた。14灰色粘質土、16オーリーブ黒色粘質土、17緑灰色粘質土では、多少の木片が確認されている。遺物は木片に混じって、加工木や木製品が多く出土している。他に須恵器・土師質土器・陶器・磁器・瓦・瓦器・金属製品など約600点出土している。図化できたものは69点である。

727～730は墨書き土器である。727は土師質土器の皿底部分である。外面底部は回転ヘラギリのち板ナデやナデにより切り離しの痕跡を消している。外部底面の墨書は「平」と読める。728は土師質土器の皿である。体部から口縁部がやや外反し、口縁端部は摘み上げたようなヨコナデでにより尖る。底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。墨書は「ちいさま」と読める。729は土師質土器の杯である。体部から口縁部はやや内湾気味に上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。外面体部は強いヨコナデにより段を有し、底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。外部底面の墨書は「□さくま」と読める。730は土師質土器の杯である。口縁部がやや外反し、口縁端部を丸くおさめる。外面体部は強いヨコナデにより段を有し、底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。底部と体部の堺はナデにより丸みを持たせ、堺を不明瞭にしている。外面底部の墨書は「ゑみははさま」と読める。

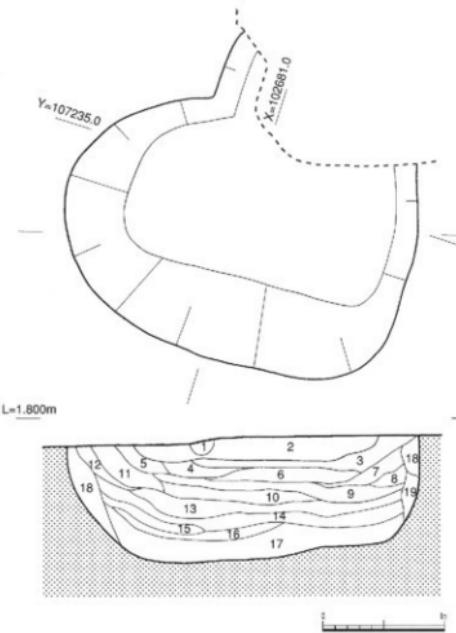
731は土師質土器の皿である。外面体部に強いヨコナデにより段を有す。底部は回転ヘラギリのちナ

デにより切り離しの痕跡を消している。732は土師質土器の灯明皿である。体部から口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。外面底部は回転ヘラギリのちナデにより切り離しの痕跡を消している。板目痕がみられる。733も灯明皿であろう。口縁部がやや外反し、口縁端部を丸くおさめる。底部はナデにより切り離しの痕跡を消している。734は土師質土器の茶釜である。口縁部は直立気味で、口縁端部を断面方形状に仕上げる。調整は外面ヨコナデ、内面はユビオサエのちヨコナデを施している。内面に煤が付着している。在地産のものと考えられる。735は焼塙壺の蓋である。736は焼塙壺の本体である。輪積み成形により内外面ヨコナデの調整を施している。

737～745は陶器の皿である。737・738は肥前系の溝縁皿である。釉薬は灰釉を施している。740は体部から口縁部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。内面には鉄絵らしきものに灰釉が掛かっている。741・742は肥前系の溝縁皿である。741は見込みを凹面に仕上げ、外面は高台まで釉だれがみられる。742は見込みに胎土目痕が3ヶ所みられる。743・744・745とも肥前系の灰釉の皿である。743は体部中位～高台内まで露胎で、見込みに砂目痕が3ヶ所みられる。744は高台が露胎で、見込みに胎土目痕が4ヶ所みられる。745は体部下位～高台内まで露胎で、見込みに砂目痕が3ヶ所みられる。747は備前窯のすり鉢である。体部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁部は上下に拡張し、外端面に凹線2条を巡らしている。外面口縁部下に重ね焼きの痕跡を残している。備前焼V期、桃山時代のものと考えられる。748・749は備前窯の壺である。748は体部が外上方に立ち上がる。749は体部がやや内湾気味に上方に延びる。体部はロクロナデ、底部は回転ヘラギリのちナデ、内面はユビオサエのちロクロナデやナデで調整している。750は肥前系の磁器碗である。高台脇から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部をやや丸くおさめる。内面の体部に草花文、見込みに松文を染め付けている。751は紡錘形の管状土錐である。752～757は加工円盤である。752、754、756は瀬戸窯の陶器、757は肥前系の陶器、753は瓦製、755は肥前系の磁器をそれぞれ加工している。758は泥質片岩製の硯、759は泥岩製の砥石である。

760～763は漆器椀である。木取りは横木取りである。760、761は内外面とも黒漆を塗り、仕上げに赤漆を塗る。760は外面体部の3ヶ所に家紋がみられる。762、763は外面が黒漆で仕上げられている。764～767は箸である。外面を多角形に削ろうとする痕跡が見られる。768は円形曲物と底板である。復元径24.3cm、木釘を4ヶ所みられる。769は部材と考えられる。表裏両面とも無数の刃物痕があり、上部左右に切込みがみられる。770・771、774～776、778は調度品の一部ではないかと考えられる。772には釘穴2ヶ所、773は上部に切り込み2ヶ所あり、部材と考えられる。777は右側欠損しているが、査申であろう。779は右足用の下駄と考えられる。形は梢円形を呈し、指圧痕がみられる。

780～787は荷札木簡の可能性が考えられる。墨書が残されているが遺存状態がよくない。780の墨書は、一面に「五斗 せんもん了」と読め、もう一面は不明である。782は一面に「船 (?) 千 (利) 寿書□」かもしくは、ひらがなの可能性もある。「寿」の部分は「斗」とも読めるので荷札と見るべきかもしれない。もう一面は不明である。「せんもん」は千文であろう。783・784の墨書は不明である。785の墨書は一面に「□□□□□納」、もう一面は「二□□」と読める。「二」の次には「斗」が入る可能性もあり、納める作物とのその単位を示す荷札木簡と考えられるであろう。786は遺存状態が悪く、判読することができない。787の墨書は、一面に「も」、もう一面に「六□□□」と読め、「六」の下一字も「斗」の可能性を考えられる。一端が尖っているものが多く荷物に突き刺して用いる荷札木簡とみられる。788は網籠の一部である。網代縞で3本とびのものである。



- | | | |
|-------------|--------------|------------------|
| 1. カクラン | 11. 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘質土 |
| 2. 5Y4/1 | 12. 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘質土 |
| 3. 2.5Y4/1 | 13. 10BG4/1 | 青灰色粘質土 |
| 4. 5Y6/1 | 14. 5Y4/1 | 灰色粘質土（多量の木片） |
| 5. 2.5Y5/2 | 15. 2.5GY4/1 | 暗オリーブ灰色シルト |
| 6. 10BG5/1 | 16. 10Y3/1 | オリーブ黒色粘質土（多量の木片） |
| 7. 5Y5/1 | 17. 7.5GY4/1 | 緑灰色粘土（少量の木片） |
| 8. 2.5Y4/1 | 18. 5Y4/1 | 灰色粘質土 |
| 9. 10BG4/1 | 19. 10BG5/1 | 青灰色粘質土 |
| 10. 2.5Y4/1 | | |

第 200 図 3 区 SK1074 遺構平・断面図

化できたものは 1 点である。

796 は頭部がやや拡張し、L 字形に折れ曲げた鉄釘と考えられる。下部は欠損している。

• 570 号小穴 (SP1570) (第 206 図、第 207 図)

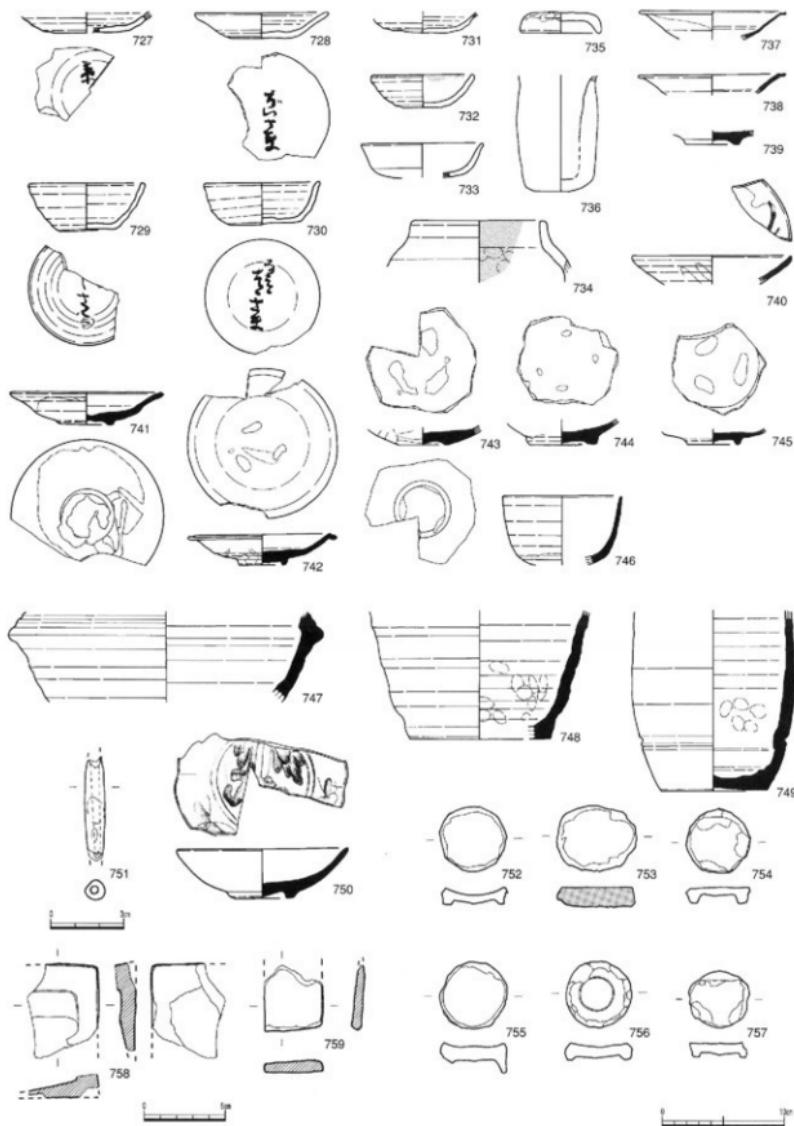
調査区の南東に位置する。検出グリッドは、C - C 3 グリッドである。遺構規模は長軸 29cm、短軸 26cm、深さ 19cm を測る。遺構平面形状は不整開丸方形を呈す。断面形状は逆台形を呈す。埋土は黄灰色粘質土の 1 層である。遺物は土師質土器・金属など 40 点出土しているが、小片のため図化できたものは 1 点である。

789 は銅製品のコップのようなものと考えられる。口縁部下に雷文帯を巡らしている。790 は銅製容器の小壺である。791 ~ 794 は鉄釘と考えられる。791 は頭部をやや拡張し、L 字形に曲げているものである。792 は頭部を L 字形に、793 は L 字より深く折り曲げているものである。794 は、頭部が欠損、先端部が尖っている。795 は輸入の銅錢「熙寧元寶」(北宋、初鑄 1068 年) である。

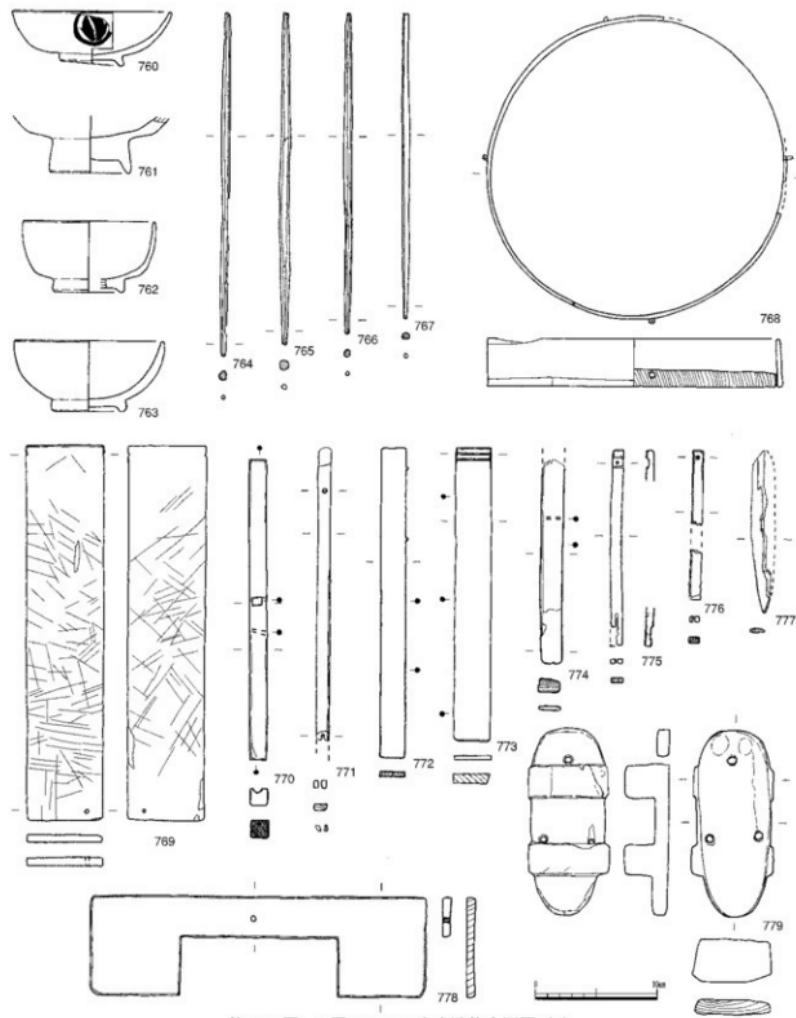
• 77 号土坑 (SK1077)

(第 204 図、第 205 図)

調査区は南東に位置する。検出グリッドは、B - C - 3 グリッドである。南側を SP1568 に切られる。遺構規模は長軸 60cm、短軸 60cm、深さ 30cm を測る。遺構平面形状は円形、断面形状は椀形を呈す。埋土は 2 層に分層でき、1 オリーブ褐色粘質土、2 黄灰色粘質土である。土層観察では柱痕跡や抜き取りの痕跡を確認できなかった。遺物は土師質土器・瓦器・瓦・鉄製品など 70 点出土しているが、小片のため図



第201図 3区 SK1074 出土遺物実測図 (1)

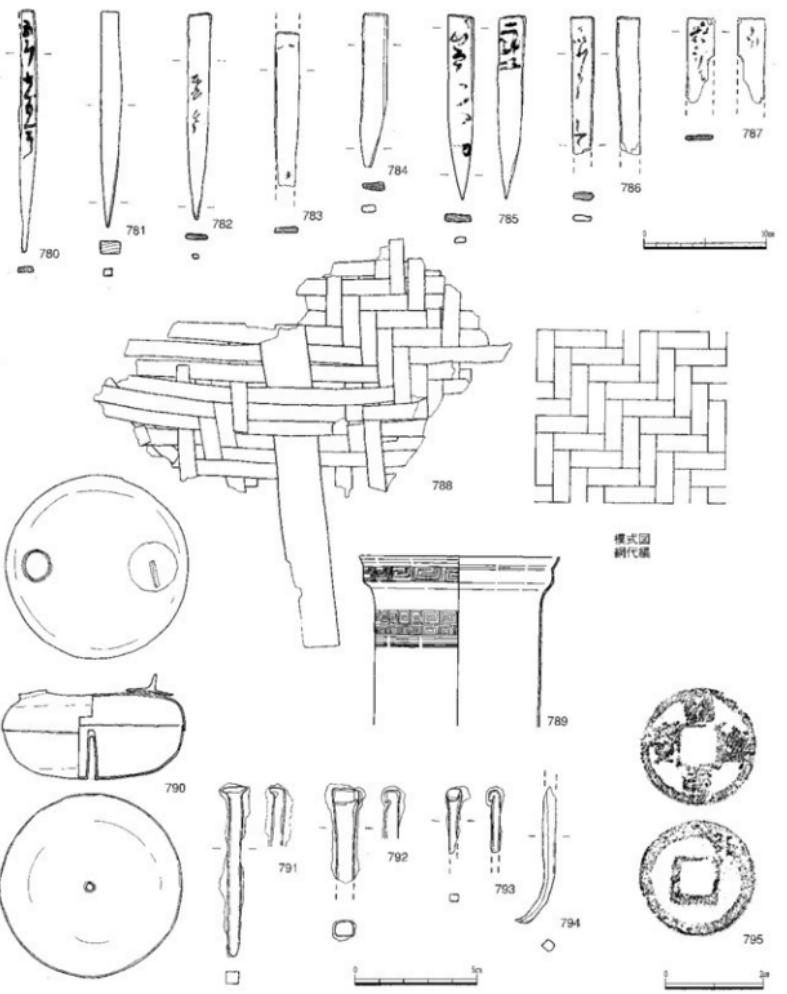


第202図 3区SK1074出土遺物実測図(2)

797は鉄滓(スラグ)である。

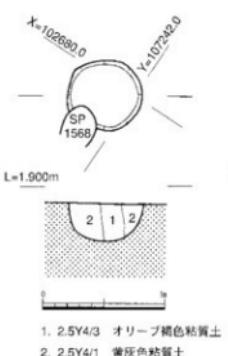
・遺物包含層出土遺物(第208図)

798は肥前系の陶器皿である。体部が緩やかに内溝し立ち上がる。底部周縁は横方向のケズリを施し、

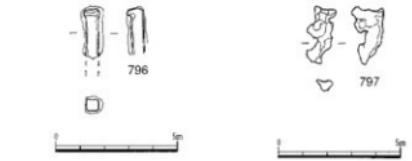


第203図 3区SK1074出土遺物実測図(3)

見込みは凹面を呈し、砂目痕3ヶ所みられる。799は肥前系の磁器皿である。体部は高台脇から緩やかに外上方に立ち上がる。脛み付けは軸を剥ぎ、置き砂の付着がみられる。内面は草花文の染付けがされ、最も古い古伊万里と考えられる。800は瓦質の火鉢である。体部はやや内傾して直立気味に立ち、口縁部は断面方形を呈す。調整は外面部にヘラミガキ、内面は回転ナデのちナデを施している。在地産の



第 204 図 3 区 SK1077
遺構平・断面図



第 205 図 3 区 SK1077
出土遺物実測図

第 207 図 3 区 SP1570
出土遺物実測図

ものであろうと考えられる。

801は刀子とみられる。刃先はやや丸みを持っている。802は頭部が拡張し先端部が尖る鉄釘である。803は鉄線であろうか。804はドーナツ状の鉄製品である。用途不明である。805はキセルの先端部分である。遺存状態はよくない。

注

本報告書の記述は、下記の資料の分類と編年に基づいて行った。

東播系須恵器

・森田稔 1992 「東播磨」『東に日本における古代・中世窯業の諸問題』

　　大戸窯検討のための「会津シンポジウム」資料

常滑焼

・赤羽一郎・中野晴久 1994 「生産地における編年について」

　　『シンポジウム 中世常滑焼をとって』

瓦器

・尾上 実 1983 「南河内の瓦器概」

　　『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』

備前焼

・間壁忠彦 1977 「備前」『世界陶磁全集3(日本中世)』小学館

青磁碗

・上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」

　　『貿易陶磁の研究No.2』貿易陶磁研究会

白磁碗

・森田勉 1982 「14～16世紀の白磁碗の分類」

　　『貿易陶磁の研究No.2』貿易陶磁研究会

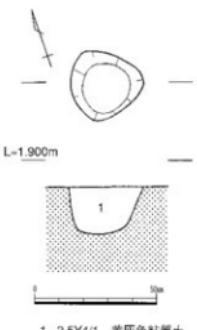
その他の貿易陶磁器

・横田賢次郎・森田勉 1978

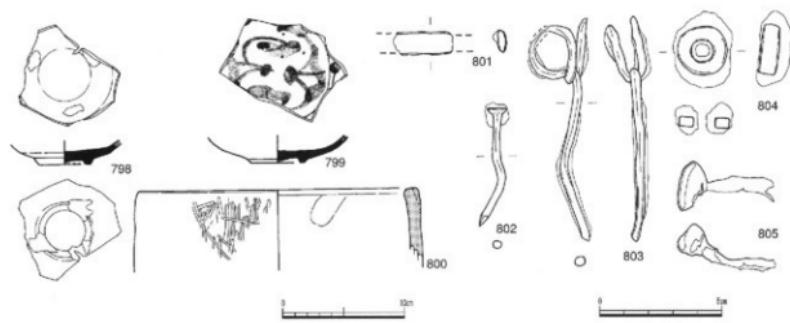
　　『太宰府出土の輸入中国陶磁器について』

　　『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

また、墨書きの祭壇については、徳島市立龜山城博物館学芸員
須藤茂樹氏による。



第 206 図 3 区 SP1570
遺構平・断面



第208図 3区遺物包含層出土遺物実測図



IV 自然科学分析





IV. 自然科学分析

a. トノ町遺跡から出土した貝殻について

中尾賢一（徳島県立博物館、学芸員（地学担当））

トノ町遺跡の井戸の中より出土した貝殻は、遺跡からの出土品としては保存状態がきわめてよい。たとえばハマグリやヤマトシジミ・オオタニシなどの殻皮がほぼ完全に残っており、褪色しやすいクボガイの緑色の滑層も良好に保存されている。保存状態の良さの理由は、比較的新しい中世の遺跡であることに加えて、井戸の中という特殊な出土状態によるものかもしれない。

出土した貝類を分析し、合計 18 種の貝類を種レベルで識別した。種類と個体数を第 1 表に示す。個体数の多い順にハマグリ・マシジミ・オオタニシ・イボニシ・スガイ・イシダタミであり、残りの種はすべて全体の 1%未満である。貝類の生息域で区分すると、大きく①潮間帯の岩礁に生息する種、②内湾の砂泥干潟に生息する種、③淡水域に生息する種の 3 群に分かれる。このような貝類組成は地層中の自然貝層には決してみられないものであり、当然のことながら、人間の選択が大きく関わって形成された貝類群であることを示している。徳島県立博物館には、阿南市見能林町の水田圃場整備現場から得られた完新世貝化石が収蔵されている（第 2 表）。下位（地下 60cm 以深）は砂泥質の干潟で形成された地層であり、上位は水田土壤を含む淡水成の地層である。ともにトノ町遺跡から得られた貝類との共通種がみられ、とくにトノ町遺跡で個数の多い方から 3 種までがこの中に揃っている。このことは、トノ町遺跡の貝類が周辺の干潟や淡水域からもたらされたものであることを強く示唆する。一方、マガキやアサリなど見能林で多産し、トノ町遺跡からは出土しない（またはわずかしか検出されない）食用種も存在する。このことは、採集者が貝類を無作為ではなく、意識的に選択した上で遺跡に搬入したことを意味する。

以下、多産種および特徴のある種について種ごとに特徴や分布を述べる。なお遺跡や遺物に関する情報は、貝塚データベース（及川昭文研究室・総合研究大学院大学：http://aci.soken.ac.jp/page_030.html）から得た。

・ハマグリ

トノ町遺跡の井戸中より最も多く出土した種であり、全産出個体数の 42.6% を占める。潮間帯～水深 20m ほどの海域の砂泥底に潜って生息している。かつては非常に多く生息したのにもかかわらず全国的に個体数および生息場所が激減している種としても知られている^①。県下でも沖積層の化石として、また貝塚の貝として多産するが、現在では吉野川などのごく限られた干潟で少数生息している。

遺跡から出土する可能性のある近縁種にチョウセンハマグリがあり、ハマグリとは生息場所が異なるほか、貝殻の厚みや外形にも相違点がある。チョウセンハマグリに確実に同定される貝殻はトノ町遺跡では確認していない。

ハマグリは北海道函館周辺から沖縄県久米島までの極めて広い範囲の遺跡から報告されている。県内からは、新田神社裏 1 号岩陰遺跡・森崎貝塚^②・城山貝塚・三谷遺跡・庄遺跡・田宮遺跡^③など多くの遺跡から出土している^④。とくに三谷遺跡^⑤と庄遺跡からは多数の貝殻が出土した。沖積層の自然貝層中にも多く含まれている^{⑥⑦⑧}。

今回得られた貝の中でハマグリと同様な場所に生息する種に、シオフキ・マテガイがある。これらはどれも食用となるが、個体数はあまり多くないので、これらがもし生貝として搬入されたのであれば、

ハマグリの混獲物かもしれない。

・マシジミ

トノ町遺跡ではハイガイに次いで多く、16.3%を占めた。徳島市内の遺跡から出土する可能性のあるシジミ類 (*Corbicula* 属) には、汽水性のヤマトシジミ (*C. japonica*) と淡水性のマシジミ (*C. leana*) がある。両者は生息環境や生息様式がかなり異なるものの、殻の形態はよく似ている。ここでは田村の研究^⑨に基づき、両者の識別点となるいくつかの形質の観察を行った。その結果、検討した約10個体のすべてにマシジミの形質（巻丘の縦の彫刻）があり、反対にヤマトシジミの形質を示す個体は確認できなかった。この結果から、トノ町遺跡出土のシジミ類の大半はマシジミと判断される。

本種は河川や水路、ため池などの純淡水域に生息する。食用にすることもあるが、生息密度が低く、市場に出ることはほとんどない^⑩。県内の遺跡ではマシジミは加茂谷川岩陰遺跡より報告されている^⑪。

なお1個だけ得られたイシガイは、マシジミと同所的に生息することがあるので、マシジミに混じって持ち込まれたものだろう。

第1表 トノ町遺跡出土の貝類一覧表

番号	種類	個数	遺構	出土地点	収集地	生息環境
1	ハマグリ	637	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	砂泥干潟
2	イボニシ	192	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	岩礁
3	スガイ	129	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	岩礁
4	イシダラミ	28	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	岩礁
5	オキシジミ	9	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	砂泥干潟
6	クボガイ	7	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	岩礁
7	シオフキ	7	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	砂泥干潟
8	クマノコガイ	4	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	岩礁
9	レシガガイ	1	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	岩礁
10	ベッコウガサ	1	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	岩礁
11	アカニシ	1	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	砂泥干潟
12	アマガイ	1	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	岩礁
13	サザエ	1	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	岩礁
14	マガキ	1	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	岩礁,砂泥干潟
15	イシガイ	1	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	淡水域
16	カワニナ	3	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	淡水域
17	マシジミ	244	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	淡水域
18	オオタニシ	232	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	淡水域
19	胎児殻	138	SE1002	検出面から~230cm(標高-60cm)	徳島県阿南市富岡町	淡水域

*SE1002…直径3.2mm、直径75cmの円形弁殻をもつ井戸。

二枚貝は右殻・左殻で区別せず、同定可能なものをすべて1個体として扱ったので、巻貝と比較して個体数を過大に評価している可能性がある。

・オオタニシ

トノ町遺跡では淡水性巻貝の、タニシ類が数多く（全体の16.3%）産出した。これらのタニシ類は殻高約4cmと比較的大型であること、螺層があまり丸くならないこと、胎児殻の螺塔が高いことからオオタニシに同定される。

オオタニシは流れの穏やかな河川や用水路、ため池、湖などのわずかに湧水のある安定した場所に生息する^⑫。

一部のオオタニシの殻内には胎児殻がみられた。殻内の胎児殻の存在は、その個体が食用として使わ

れなかったことを示している。水が暖かい季節には、オオタニシは胎児をもち、その時期の肉は不味だという^①。井戸の中にはオオタニシはふつう生息しないため、一部の個体は何らかの理由で、軟体部や胎児殻がついたまま井戸の中に破棄された可能性がある。

・イボニシ、スガイ、イシダタミ

これらの種は、どれも潮間帯の岩礁に生息する巻貝である。磯の比較的目につきやすいところに生息しており、特別な道具を使わず容易に採集できる。なお同時に得られているベッコウガサ、クボガイ、クマノコガイも同様の場所に生息する。

・アカニシ

1個体が得られている。ハマグリ同様、内湾潮間帯の砂泥底に生息する貝である。北海道から鹿児島までの遺跡で発見されているほか、現在でも食用として販売されている。

今回得られたアカニシには、体層に大きく2個所の穴が開けられている。自然状態ではこのような大型の穴が開く状況は考えにくく、実際に徳島県立博物館に収蔵されている化石で同様の状態を示すものはない。したがって人為的に開けられた穴であることはほぼ確かである。一般に巻貝は殻の内部に貝殻と筋肉とが付着する箇所があり、そこを破壊すると軟体部を取り出しやすくなる。この事例もそのような食用を目的とした破壊である可能性がある。

引用・参考文献

- ①和田忠次（編） 1996 「日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状」
『WWF Japan サイエンス レポート』3 182p
- ②鳴門市教育委員会 1972 『鳴門森崎貝塚』
- ③徳島県教育委員会・（財）徳島県埋蔵文化財センター 2005 『田宮遺跡』
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第65集
- ④笠井新也 1922 『阿波國貝塚概説』『阿波名勝』2 56-69p
- ⑤徳島市教育委員会 1995 『企画展 徳島の繩文貝塚』第15回埋蔵文化財資料展
阿波を掘る－最近の発掘調査と徳島の繩文貝塚 6-14p
- ⑥奥村 清・横山達也・大塚啓二郎・戸田理人 1990. 徳島平野北部、大谷川および姫田より発見された貝化石群とその¹⁴C年代. 地学研究, 39 (1), 37-55.
- ⑦奥村 清・濱田美穂. 1996. 徳島市及び鳴門市から産出した徳島平野地下の完新世貝類遺骸群集. 徳島県立博物館研究報告, (6), 97-127.
- ⑧中尾賢一 2001 『徳島平野南部、西須賀町の海成沖積層から得られた貝化石群とその¹⁴C年代』
『徳島県立博物館研究報告』11 105-121p 徳島県立博物館
- ⑨田村 実 1980 「観と汽水環境と貝塚」『熊本地学会誌』63 2-15p 熊本地学会
- ⑩増田 修・内山りゅう 2004 『日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類』
ビーシーズ生態写真図鑑シリーズ2 240 p 株式会社ビーシーズ
- ⑪同志社大学文学部文化学科 1999 徳島県三好郡三加茂町所在 加茂谷川岩陰遺跡群
同志社大学文学部考古学調査報告 第10冊 120p + 20図版
- ⑫注(10) 文献と同じ
- ⑬山下欣二. 1998 海の味－異色の食習慣探訪－ 255p 八坂書房

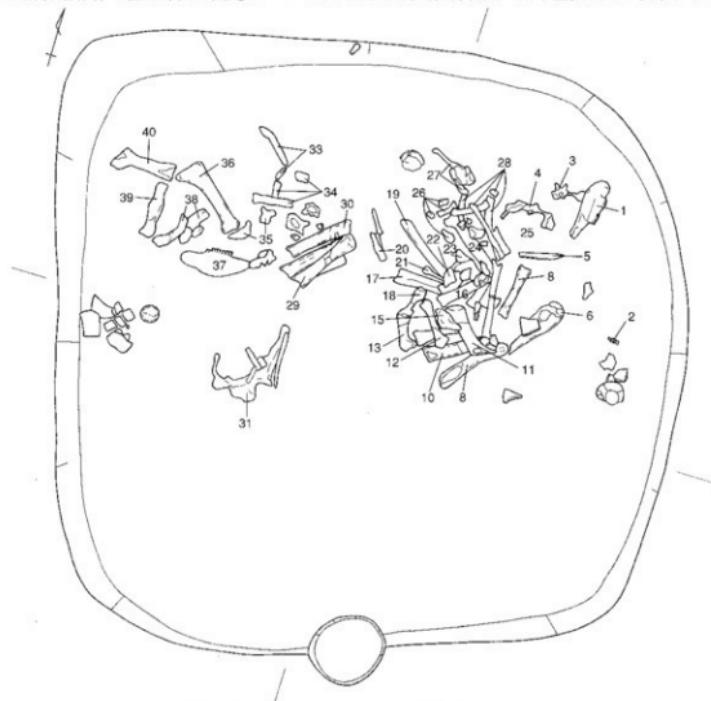
第2表 阿南市見能林町の水田圃場整備工事現場から得られた完新世貝化石一覧表

共通種	種類	学名	個数	採集地および層準 資料番号
○	オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i>	2	上部の水田土壤 GFI2017
○	カワニナ	<i>Semisulcospira leberthina</i>	5	上部の水田土壤 GFI2018
○	マシジミ	<i>Corbicula leana</i>	7	上部の水田土壤 GFI2031
	ヒメコザワ?	<i>Patelloidea (Asteracmea) pygmaea</i>	1	地下60cm以浅 GFI2012
	イボキサゴ?	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>	2	地下60cm以浅 GFI2013
○	スガイ	<i>Lunella coronata coreensis</i>	5	地下60cm以浅 GFI2014
	イシマキガイ	<i>Clithon retropictus</i>	1	地下60cm以浅 GFI2015
	カワザンショウ類	<i>Assiminea sp.</i>	1	地下60cm以浅 GFI2016
	ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>	2	地下60cm以浅 GFI2019
ウミニナ属 桂小明		<i>Batillaria spp.</i>	39	地下60cm以浅 GFI2020
	イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i>	3	地下60cm以浅 GFI1947
	ホソウミニナ	<i>Batillaria cumingii</i>	1	地下60cm以浅 GFI1948
	ヘナタリ	<i>Cerithideopsis cingulata</i>	5	地下60cm以浅 GFI2021
	ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i>	1	地下60cm以浅 GFI2022
	サルボウ?	<i>Scapharca kagoshimensis</i>	1	地下60cm以浅 GFI2023
	ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>	2	地下60cm以浅 GFI2024
	クログチガイ	<i>Vigintiduora atrata</i>	1	地下60cm以浅 GFI2025
	ナミマガシワ	<i>Anomia chinensis</i>	16	地下60cm以浅 GFI2026
○	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	70	地下60cm以浅 GFI2027
	ウメノハナガイ	<i>Piliolina pisidium</i>	1	地下60cm以浅 GFI2028
	ユウシオガイ	<i>Moerilla rutila</i>	1	地下60cm以浅 GFI2029
	ウナネシトマヤガイ	<i>Trapezia liratum</i>	2	地下60cm以浅 GFI2030
	イオウハマグリ	<i>Pitar sulfureum</i>	1	地下60cm以浅 GFI2032
	アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>	19	地下60cm以浅 GFI2033
○	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	8	地下60cm以浅 GFI2034
○	すきシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>	2	地下60cm以浅 GFI2035
	ショウガイ	<i>Anomalocardia squamosa</i>	2	地下60cm以浅 GFI2036
	オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>	1	地下60cm以浅 GFI2037

※二枚貝は右殻・左殻を区別せず、同定可能なものをすべて1個体として扱った

b. トノ町遺跡出土動物遺存体

以下、動物遺存体の種と部位の固定については、国立歴史民俗博物館 西本豊弘氏のご教示による。



第209図 1区 SX1003骨の出土状況図

第3表 骨の出土一覧表(番号は第209図中のものと一致)

番号	種類	部位
1	牛	頭
2	牛	齒 上顎
3	牛	頸椎 等?
4	?	骨片
5	?	不明
6	?	頭?
7	?	頭?
8	牛	體骨 (右)
9	牛	尺骨 (右)
10	牛	體骨 尺骨(左)
11	牛	體骨 (右)
12	牛	體骨 尺骨(左)
13	牛	上腕骨(左下)
14	不明	人腿骨?
15	不明	體骨?
16	不明	體骨?
17	牛	輪骨 尺骨(左下)
18	牛?馬?	膝骨?
19	?	肋骨
20	不明	

番号	種類	部位
21		
22	小明	
23	馬	上腕骨(左下)
24	牛	大鶴骨(左)一本
25	不明	
26	不明	
27	不明	
28	牛?馬?	中段骨?肋骨3本合
29	牛?馬?	肋骨2本、他不明
30	牛?馬?	肋骨2本重なる
31	?	頭下頸(左右不明)、歯片含む
32	不明	
33	不明	
34	不明	
35	不明	
36	牛	頭骨(右、下下)
37	馬	下頸、肉合む(乳歯かも?)
38	不明	
39	牛?馬?	肋骨
40	?	大腸骨





V まとめ





V. まとめ

トノ町遺跡の発掘調査は、阿南市富岡町の市街地内で初めて実施されたものである。中世・近世についての成果が大きいため、中世、近世及び中世以前に分けて遺跡の概略を記し、まとめに代える。

中世以前

鎌倉時代以前の成果として、弥生時代後期・古墳時代後期・奈良時代・平安時代の遺物がある。これらは断片的なものであり明瞭な遺構を伴っていない。それぞれの年代の遺跡は「II b. 歴史的環境」でもみたように、周囲に点在している。今回の調査範囲内でみられなかったものの遺物からみる時代に大きな空白期はなく、継続性のある遺跡の存在を想像することができる。

中世

中世には13世紀前半を中心とする鎌倉時代の遺構と15世紀室町時代の遺構が混在している。鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物（2区SA1003）および周囲の溝（1区SD1010）などがある。掘立柱建物は2間×2間の総柱構造で1／3間幅の庇が東側にとりつく。遺構面全体のレベルは西から東に傾斜しており、集落の縁辺部の施設であろう。後述する溝（1区SD1002・1003）は幕末期の絵図と一致をみると、鎌倉期の溝（1区SD1010）もそれと同方向であることが注目される。灌漑用水路は水利の緻密な計画と労働力の結集が不可欠である。県内のこれまでの用水路の調査状況から見て、近世の絵図に描かれる用水路を現代のものと比較すると中世にさかのほるものが多い^①。水路の継承の過程は地域ごとに異なるし、面的な開発過程は不明であるが、富岡の町の本格的な形成は鎌倉時代に溝（1区SD1010）が開削されたことにより始まったと言ってもよいだろう。

注目すべき遺物として、溝（1区SD1003）湖州鏡があげられる。徳島県内で初めてとなる出土である。トノ町遺跡の場合、近世の遺構内で確認されたが、同型式の銅鏡が12～13世紀に南宋で鋳造されており、このころにもたらされたものと考えられる。従来の研究で中国・四国以西では六花鏡が多く、中国・四国以東では方形鏡が主流を占め、鏡の形態ごとの流通経路の違いが想定してきた^②。しかし、四国での近年の出土事例からはさらに多様な流通経路も考慮されるようになっている^③。いずれにしても、中国鏡入手の主体となる領主層の存在は見逃せない。

さて、上記の遺構の性格は中世莊園「牛牧庄」との関連で検討できる。文献史料にみる牛牧庄は13世紀初頭に初出し、領家を変えながらも14～15世紀にもその存続が確認される。莊園の比定地については十分な根拠を持たないが、史料上の牛牧庄と遺構からみる盛期の一一致から、牛牧庄の一部であったとみてよいだろう。

15世紀代の遺構は明瞭なものは少ないが、1区南半の小穴の多くはこの時期に属するものとみられる。この段階では新開氏が牛牧城に居城したとされるが、近代以降の市街化による擾乱が著しく集落の実態は不明である。

近世

近世の遺構のうち主要なものは、掘立柱建物（1区SA1001）およびその周囲の溝（1区SD1002・1003、2区SD1017・1025）、井戸（1区SE1001～1003）などがある。

幕末期の絵図（巻頭カラー参照）と比較すると、調査地点は「本覚寺」の東側の一角にあたる。東西に流れる溝（1区 SD1003）は、那賀川からまっすぐ東へ伸び富岡城の外周からさらに東の田畠への灌漑水路に一致するものと考えられる。掘立柱建物は4間×3間の総柱式のものであり、南に隣接して井戸を持つことから、集落内で中心的な役割を果たす施設であろう。これの東側に隣接する溝（2区 SD1017）とは方位はほぼ一致し、その北半でクランク状の弱い折れ曲がりとともに幅を狭めている。この部位を SA1001 との関係でみると、このクランクが集落の入り口であった可能性がある。絵図でのこの地点は、屋敷地の境界の可能性のある生け垣が表現されるものの建物は描かれていない。江戸時代初期とみられる掘立柱建物（1区 SA1001）以降に集落が継続しなかったことを示すのであろうか。

南北方向の溝（2区 SD1017）以東は同時期の遺構は減少する。溝（2区 SD1025）は絵図には表されないものであり、集落に伴うものよりも農業用水として機能したものとみられる。現在の富岡町の基礎となる郷町富岡は、蜂須賀家の阿波入部に伴い細川帯刀が富岡城に配されたことによる。その後、阿波南部の山間部と沿岸部とをつなぐ物資の拠点として発展することになるが、その繁栄は絵図に基づく限り城山の西方に中心をおく。城山の東方に生け垣とそれに伴う家屋が描かれているが、家屋の規模や密度は西方とは比較にならない。しかしながら、検出された遺構・遺物からみると区画溝の内部に井戸を伴う掘立柱建物がみられることから、絵画資料が有効であることを示していても万全でないことをも示している。

出土遺物では、荷札木簡が複数の遺構から出土しており、注目される。形態上の特徴は、薄板の一端を鋭利に加工し、荷物に突き刺す使用法のものである。物品の品名、数量や差出人など不明な部分も多いが、出土地が徳島城下ではなく郷町であることも考慮すれば、阿波の活発な商業活動の一端を知る好資料だと言える。

江戸時代初期以降は、目立った遺構は乏しくなる。1区 SD1003 そのものも機能維持のための再掘削は度々行われていた様子が確認できるが、埋没後には多少の流路の変更を経て溝（1区 SD1002）として再び機能する。近世初期に開削されたとみられる溝（2区 SD1025）も同様に、同方向の溝として機能を継続させる（2区 SD1026）。SD1026 の上面は整地土（2区 SX1007）によって覆われる。この整地は東への傾斜地を耕作地化するためのものとみられ、大正期に想定される SD1026 の埋没以降、現代の都市開発までの期間、周辺地点は耕作地として活用されていたと考えられる。

①平井松午・藤田裕嗣 1995 「吉野川支流の鮎喰川扇状地における土地開発と灌漑システムの成立」

『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』No.2

②久保友康 1999 「中世・近世の鏡」 日本の美術 No.394 至文堂

③廣田佳久 2000 「湖州方鏡について」『光永・岡ノ下遺跡』

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 55 集

遺物・遺物一覧表凡例

土器・陶器・磁器

- ・遺物番号：本文の掲載番号を指す。
 - ・法 量：()内の数値は口径～底径が復元値、器高は残存値を示す。造構台帳の【】内の数字は、造構が調査区外に延びている場合や、搅乱や暗渠に切られて全体形状が不明である場合に検出分のみ測定した数値である。
 - ・色 調：小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2002年度版と太田昭雄・川崎秀昭『標準色彩図表A』日本色研事業株式会社 1981に掲った。
 - ・胎 土：肉眼観察で判別した胎土中に含まれる鉱物を以下の略号で示した。
石=石英、長=長石、雲=雲母、角=角閃石、片=結晶片岩、赤=赤色斑粒
 - ・成形・調整の記入方法で、／は のち を示すものである。
- 例 回転ナデ／ナデ は 回転ナデ のち ナデ を示す。

第10表 検出遺構一覧表 不明遺構

調査区 本報告 調査時	遺構番号 木報告 調査時	位 置	遺構規模(cm) 長軸 短軸 深度	平面形	断面形	出土 遺物	備 考		
							SX1001-SX1004を参考		
1区 1-1区	SX1001-SX1001	M3-4, N-2-3-4	[770] [582]	20	不整形	不整造台形	塊状土、上鉢質土器、瓦器、石製品(瓦)、石 100-100×100-100×30-40cm 傾斜に沿うる	SK1003-1055～1008-1023-1013 SK1003-1055～1007-1008-SD1001 1001-1007-1008-1009-1010-1011 傾斜に沿うる	
1区 1-1区	SX1002-SX1008	L3-M-3	272 256 148	不整形	船底形	塊状土、土鉢質土器、瓦器、石	SX1001に引かれる。SD1004を参考		
1区 1-1区	SX1003-SX1002	J-3-4	264 252 14	不整形	造台形	塊状土、上鉢質土器、瓦器、チャート	SP1002に引かれる。 SD1003-SX1004を参考		
1区 1-1区	SX1004-SX1003	J-3-4	420 230 90	不整形	小整造台形	青磁器、大鉢質土器、陶器、磁器、石	SP1005-SD1006に引かれる。 SX1003		
1区 1-2区	SX1005-SX1073	C-6-7	[310] [142]	200	不整形	船底形	青磁器、大鉢質土器、羽目、瓦器、鐵製便器、磁器、 瓦器、石、土器、土器、土器	傾斜に沿うる	
1区 1-2区	SX1006-SX1004	B-7-8 C-7-8	[508] [412]	176	不整形	船底形	亞泥器(こね器)、土鉢質土器(須、羽目等)、陶器 (すり鉢)、瓦器、瓦器、瓦、土器、石、チャート、土塊	傾斜に沿うる	
2区 3-2区	SX1007-SX1001	M-14-F-14-45 G-12-F-12-45 H-12-F-12-44 I-12-F-12-44	1940 [692]	12	不整形	不整造台形	塊状土、上鉢質土器、瓦器、青磁、陶器、鐵製品(瓦)、 鐵器(白面)、瓦器、瓦器、瓦、土器、石、チャート	SD1005-SD1006, SF1007～1009-1010-1010-1011 SD1009-SD1010-1005-1007-1008-SD1011- 1012-1013, SP1004-1025-1026-1015-1016	

第11表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(1)

調査区	通報番号	位 置	遺構概要(cm)			出土遺物	備 考	
			長軸	短軸	深度			
I区	I-1区 SP1001	SP1001	N-2	38	27	16	土師質土器	側面に切られ、SK1001を認る
I区	I-1区 SP1002	SP1002	N-2	44	38	15	土師質土器	SK1002を認る
I区	I-1区 SP1003	SP1003	N-2	34	30	14		SX1001を認る
I区	I-1区 SP1004	SP1004	N-2	38	27	13		SX1004を認る
I区	I-1区 SP1005	SP1005	N-2	28	25	19		SK1001を認る
I区	I-1区 SP1006	SP1006	N-2	25	20	24	土師質土器	SX1001を認る
I区	I-1区 SP1007	SP1007	N-2	30	24	19	土師質土器	SX1001を認る
I区	I-1区 SP1008	SP1008	N-3	26	21	16	土師質土器(直腹丸等)、瓦器(陶)	SX1001を認る
I区	I-1区 SP1009	SP1009	N-3	30	27	11	土師質土器、瓦器、チベット	SX1001を認る
I区	I-1区 SP1010	SP1010	N-3	22	20	11		SX1001を認る
I区	I-1区 SP1011	SP1011	N-3	34	33	9		SX1001を認る
I区	I-1区 SP1012	SP1012	N-3	26	20	18		SX1001を認る
I区	I-1区 SP1013	SP1013	N-3	34	27	6		SX1001を認る
I区	I-1区 SP1014	SP1014	N-3	58	52	10		SX1001を認る
I区	I-1区 SP1015	SP1015	N-3	19	13	15		SX1004を認る
I区	I-1区 SP1016	SP1016	N-3	34	24	15		SD1014・SX1001を認る
I区	I-1区 SP1017	SP1017	N-3	32	28	17		SX1001を認る
I区	I-1区 SP1018	SP1018	N-3	18	14	12		SX1001を認る
I区	I-1区 SP1019	SP1019	M-3-4	47	36	10		SX1001を認る
I区	I-1区 SP1020	SP1020	M-4,N-4	62	56	9	土師質土器、瓦器(陶)、チベット	SX1001を認る
I区	I-1区 SP1021	SP1021	N-2	22	20	22		SK1003を認る
I区	I-1区 SP1022	SP1022	M-2,N-2	26	14	8		側面に切られ、SD1006を認る
I区	I-1区 SP1023	SP1023	M-2	50	25	19		側面に切られ、SK1001・SD1006を認る
I区	I-1区 SP1024	SP1024	M-2	25	18	14		SP1025・SK1001・SD1006を認る
I区	I-1区 SP1025	SP1025	M-2	26	24	12		SP1026・SK1001・SD1006を認る
I区	I-1区 SP1026	SP1026	M-2	41	29	22		SD1006・SK1002を認る
I区	I-1区 SP1027	SP1027	M-2	40	28	27		
I区	I-1区 SP1028	SP1028	M-2	30	34	46		SP1029に認める。地中に認められる
I区	I-1区 SP1029	SP1029	M-2	28	28	36		SP1029に認めれる。地中に認められる
I区	I-1区 SP1030	SP1030	M-2	45	34	15		
I区	I-1区 SP1031	SP1031	M-2	22	20	10		
I区	I-1区 SP1032	SP1032	M-2	34	32	25	土師質土器	
I区	I-1区 SP1033	SP1033	M-2	32	28	23		
I区	I-1区 SP1034	SP1034	M-2-3	49	30	16		
I区	I-1区 SP1035	SP1035	N-2-3	38	24	26	土師質土器(陶)	SD1007を認める
I区	I-1区 SP1036	SP1036	N-2-3	26	21	30		SD1007を認める
I区	I-1区 SP1037	SP1037	M-3	26	25	28		SD1001を認める
I区	I-1区 SP1038	SP1038	M-3	26	26	34		SD1001を認める
I区	I-1区 SP1039	SP1039	L-2	68	60	78	土師質(粘土質)	SD1004・SD1006を認む
I区	I-1区 SP1040	SP1040	L-2	52	38	50	土師質土器	SD1006に認める
I区	I-1区 SP1041	SP1041	L-3	38	18	22		表面に認められる
I区	I-1区 SP1042	SP1042	L-3	28	23	21		
I区	I-1区 SP1043	SP1043	M-4	42	40	42		SD1005を認める
I区	I-1区 SP1044	SP1044	K-5	60	26	14	瓦器等	SD1003を認める
I区	I-1区 SP1045	SP1045	J-4	32	26	14	瓦器等、土師質土器等、etc	SK1003・SX1004を認める
I区	I-1区 SP1046	SP1046	J-4	31	30	20	土師質土器、瓦器	SD1010を認める
I区	I-1区 SP1047	SP1047	J-4	27	27	19		
I区	I-1区 SP1048	SP1048	J-4	42	36	22		
I区	I-1区 SP1049	SP1049	J-4	17	13	24		SK1018を認める
I区	I-1区 SP1050	SP1046	J-4	34	28	24	土師質土器、瓦器等	

第12表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(2)

調査区	遺構番号	位置	遺構規模(cm)	出土遺物	備考
木箱付	調査時	本報告	調査時		
I区	1-1区 SP1051 SP1047	J5	26 20 26 長軸 短軸 厚度	土師質土器	
I区	1-1区 SP1052 SP1048	J5	40 32 36 土師質土器,瓦器		SK1010に記される
I区	1-1区 SP1053 SP1049	J5	42 30 30		
I区	1-1区 SP1054 SP1052	I4	40 34 10 土師質土器(杯,皿)		
I区	1-1区 SP1055 SP1063	I4	26 20 14 土師質土器,瓦器(陶)		
I区	1-1区 SP1056 SP1054	I4	35 32 12 土師質土器		
I区	1-1区 SP1057 SP1055	J4	38 29 12		SP1056を認る
I区	1-1区 SP1058 SP1056	J4	56 54 20 瓦器		SP1057を認められ, SK1019が記す
I区	1-1区 SP1059 SP1057	J4	28 20 28		SK1018が認る
I区	1-1区 SP1060 SP1058	J4	23 22 17		SK1018が認る
I区	1-1区 SP1061 SP1059	J4	41 33 30 土師質土器(杯),瓦器(陶)		SK1020を認める
I区	1-1区 SP1062 SP1060	J4	41 33 44		
I区	1-1区 SP1063 SP1061	J4	36 34 30 土師質土器(杯,瓶,直筒高)		
I区	1-1区 SP1064 SP1062	J4	32 24 16 土師質土器		
I区	1-1区 SP1065 SP1063	J4	31 24 15		
I区	1-1区 SP1066 SP1064	J5	28 22 25		
I区	1-1区 SP1067 SP1065	J5	35 29 29 土師質土器?		
I区	1-1区 SP1068 SP1066	J5	46 34 44		
I区	1-1区 SP1069 SP1067	J5	24 23 7 土師質土器(杯,瓶)		
I区	1-1区 SP1070 SP1068	J5	37 36 20		SP1071を認む
I区	1-1区 SP1071 SP1069	J5	38 24 24		SP1070に記される
I区	1-1区 SP1072 SP1070	J5	26 22 22 土師質土器(杯,皿)		SP1071を認め, 亂層に記される
I区	1-1区 SP1073 SP1071	J5	30 22 24 土師質土器(杯,皿)		SP1071に記される
I区	1-1区 SP1074 SP1072	J5	29 24 20		
I区	1-1区 SP1075 SP1073	J5	38 30 20 土師質土器,瓦器(陶)		
I区	1-1区 SP1076 SP1186	I4	30 32 24 土師質土器		SK1021を認む
I区	1-1区 SP1077 SP1187	I4	34 34 22 土師質土器(杯,皿),土師質(直筒高)		直筒に記される
I区	1-1区 SP1078 SP1074	H-4	36 28 33 土師質+杯(杯,皿),瓦器(陶)		
I区	1-1区 SP1079 SP1075	I4	34 32 10 土師質土器(直筒高),瓦器(陶)		
I区	1-1区 SP1080 SP1076	H-4	42 31 18 土師質土器(杯,皿),瓦器(陶)		直筒に記される
I区	1-1区 SP1081 SP1077	I4	56 46 26 土師質土器(杯,皿),瓦器(陶)		SK1024を認め, 瓦器に記される
I区	1-1区 SP1082 SP1078	I4	36 28 10 直筒部, 財器		SK1025-1026を認む
I区	1-1区 SP1083 SP1079	I4	40 34 18 直筒部, 土師質土器, 瓦器(中柱), 瓦器, 瓦器		瓦器に記される
I区	1-1区 SP1084 SP1080	I-4	52 46 26		
I区	1-1区 SP1085 SP1081	I4	40 34 30		
I区	1-1区 SP1086 SP1082	I-4.15	24 18 8		SK1027を認む
I区	1-1区 SP1087 SP1083	I4	54 28 26 土師質土器,瓦器		SK1027を認む
I区	1-1区 SP1088 SP1084	I5	18 16 5		
I区	1-1区 SP1089 SP1085	I5	49 40 24 土師質土器(杯,皿),瓦器		SP1090を認む
I区	1-1区 SP1090 SP1086	I5	56 56 12		SP1089-1090を認む
I区	1-1区 SP1091 SP1087	H-5.15	24 17 16 土師質土器		
I区	1-1区 SP1092 SP1088	I5	29 22 30 土師質土器, 楕円形丸柱		SP1091を認む
I区	1-1区 SP1093 SP1089	I5	24 16 46 深窓部, 土師質土器		SP1090に記される
I区	1-1区 SP1094 SP1090	I5	34 26 18 土師質土器		
I区	1-1区 SP1095 SP1091	I5	32 26 15		
I区	1-1区 SP1096 SP1092	I5	36 32 48 土師質土器, 瓦器(陶), 瓦		
I区	1-1区 SP1097 SP1093	I5	42 26 20 土師質土器, 瓦器(陶)		SK1028に記される
I区	1-1区 SP1098 SP1094	I5	40 38 22 土師質土器, 瓦器		
I区	1-1区 SP1099 SP1095	I5	22 15 17		
I区	1-1区 SP1100 SP1096	I5	46 33 14		SK1091を認む

第13表 検出構造一覧表 柱穴・小穴(3)

調査区	遺構番号	季号	位 置	遺構規範(cm)	出土遺物	備 考
本報告調査時				大輪 小輪 深度		
I区	I-1区 SP1101	SP1097	I-6	54 18 18		側面に切られる
I区	I-1区 SP1102	SP1098	I-6	70 [45] 54	灰陶器、土器質上器、瓦器(青磁)、瓦器	側面に切られる
I区	I-1区 SP1103	SP1099	I-6	22 21 10		側面に切られる
I区	I-1区 SP1104	SP1100	I-5	40 36 14		SP1013を切る
I区	I-1区 SP1105	SP1101	H-4	20 6	瓦器	
I区	I-1区 SP1106	SP1102	H-4	32 32 28	灰陶器、十輪瓦十筋(中筋)	側面に切られる
I区	I-1区 SP1107	SP1103	H-4	45 45 26	土器質土器、瓦器、砂岩(灰青に擦りぬ)	
I区	I-1区 SP1108	SP1104	H-4	28 24 33	土器質土器、瓦器、ナット	
II区	I-1区 SP1109	SP1105	H-4	28 24 27	十輪瓦十筋、瓦器	
II区	I-1区 SP1110	SP1106	H-4	22 29 33		側面に切られる
I区	I-1区 SP1111	SP1107	H-4	32 32 15	土器質七芯、瓦製品	
II区	I-1区 SP1112	SP1108	H-4.5	22 22 10		
I区	I-1区 SP1113	SP1109	H-4.5	24 17 9	土器質上器	
I区	I-1区 SP1114	SP1110	H-5	56 54 32	灰陶器、十輪瓦十筋、瓦器、石	
I区	I-1区 SP1115	SP1111	H-5	28 24 16		
I区	I-1区 SP1116	SP1112	H-5	59 57 24	灰陶器、土器質上器、陶器(底部の擦れけ)	
I区	I-1区 SP1117	SP1113	H-5	54 51 4		
I区	I-1区 SP1118	SP1114	H-5	56 56 30	灰陶器、土器質上器(裏の山等)	SP1013を切る
I区	I-1区 SP1119	SP1115	H-6	37 58 38	土器質十筋	側面に切られる
I区	I-1区 SP1120	SP1116	H-4	34 31 30	十輪瓦十筋、陶器(側面十筋、中筋浅手)、瓦器	側面に切られる
II区	I-1区 SP1121	SP1117	H-4	37 33 3	土器質上器	側面に切られる
I区	I-1区 SP1122	SP1118	H-4	38 36 20	瓦器、十輪瓦十筋	
I区	I-1区 SP1123	SP1119	H-4	40 37 41	灰陶器(古墳時代の頃)、土器質上器、瓦器(黄)	
I区	I-1区 SP1124	SP1120	H-1	50 50 26	灰陶器、土器質上器(黄)、瓦器(灰)、チャート	側面に切られる
I区	I-1区 SP1125	SP1121	H-4	50 42 7	十輪瓦十筋(高台付)	側面に切られる
I区	I-1区 SP1126	SP1122	H-4	40 22 28	土器質土器、石	SP1027を切る
I区	I-1区 SP1127	SP1123	H-4	70 66 33	灰陶器、土器質上器、白陶、瓦器、瓦片、石	SP1026に切られる
I区	I-1区 SP1128	SP1124	H-5	32 28 31	十輪瓦十筋、瓦器、石、チャート、石	
I区	I-1区 SP1129	SP1125	H-5	28 [24] 10	土器質(直筒身)	SP1130が切る、SK103に切られる
I区	I-1区 SP1130	SP1126	H-5	26 23 17	瓦器(黄)	SP1128が切る
I区	I-1区 SP1131	SP1127	H-5	26 24 18	十輪瓦十筋	SP1132が切る、SP1129とSP1131を切る
I区	I-1区 SP1132	SP1128	H-5	[48] 48 10	土器質土器(灰、白、黒、墨等)	SP1133が切る、SP1134に切られる
I区	I-1区 SP1133	SP1129	H-5	[29] [20] 8	土器質上器(灰、白)	SP1130が切る、SK103とSP1134とSP1133に切られる
I区	I-1区 SP1134	SP1130	H-5	20 18 5		SP1135が切る
I区	I-1区 SP1135	SP1131	H-5	42 32 36	直筒器、土器質上器(鉗等)、瓦器(灰)、焼いた針手等	SP1134に切られる
I区	I-1区 SP1136	SP1132	H-5	31 24 26	直筒器、土器質上器	SP1137が切る
II区	I-1区 SP1137	SP1133	H-5	26 [21] 14		SP1138が切れる
I区	I-1区 SP1138	SP1134	H-5	53 31 18	土器質上器(小鉗等)	SP1139が切る
I区	I-1区 SP1139	SP1135	H-5	50 [20] 18	土器質上器	SP1138が切れる
I区	I-1区 SP1140	SP1136	H-5	80 58 23	十輪瓦十筋(小鉗)、瓦器の瓦棒具(並行クサキ)、瓦器	
I区	I-1区 SP1141	SP1137	H-5	59 46 25	土器質上器、瓦器(灰)、石	
I区	I-1区 SP1142	SP1138	H-5	24 22 5		
I区	I-1区 SP1143	SP1139	H-5	20 17 5		
I区	I-1区 SP1144	SP1140	H-5	28 21 16	土器質土器(灰、白)	SP1145, SD1014が切る
I区	I-1区 SP1145	SP1141	H-5	24 22 23	土器質上器	SP1144が切る
I区	I-1区 SP1146	SP1142	H-6	49 [27] 13	瓦器(灰)、瓦器の瓦棒具(溝?)	側面に切られる
I区	I-1区 SP1147	SP1143	H-6	48 36 36	直筒器、瓦器	
I区	I-1区 SP1148	SP1144	H-6	44 42 26	土器質土器、瓦器	SK103が切る(SK103は複数に切られる)
I区	I-1区 SP1149	SP1145	H-6	28 22 20	土器質上器	
I区	I-1区 SP1150	SP1146	G-4	24 22 16	十輪瓦十筋、瓦器	側面に切られる

第14表 掘出遺構一覧表 柱穴・小穴(4)

調査区	遺構番号	位番	堆積高幅(cm)	出土遺物	備考	
					長軸	短軸
I区	I-IK SP1151 SP1147	G-4	48 46 33	上部質土器、瓦器(陶)		複数に切られる
I区	I-IK SP1152 SP1148	G-4,H-4	31 27 24	下部質土器、瓦器(陶)		
I区	I-IK SP1153 SP1149	H-5	33 31 14	漆器胎、土漆質土器、陶器、瓦		SP1154を切る
I区	I-IK SP1154 SP1150	H-5	36 26 14			SP1153に切られる
I区	I-IK SP1155 SP1151	G-3,H-5	30 22 30	上部質土器、C形、A器		
I区	I-IK SP1156 SP1152	G-5	26 24 20	漆器胎、土財質土器、瓦器		
I区	I-IK SP1157 SP1153	H-5	27 [24] 16	上部質土器(小葉)等	SE1034を切る(SK1046とSP1158を切る)	
I区	I-IK SP1158 SP1154	H-5	22 [16] 3		SK1034に切れる(SK1046とSP1157, SK1033等でR-N)	
I区	I-IK SP1159 SP1155	G-5	26 24 15	土財質土器		
I区	I-IK SP1160 SP1156	G-5	26 23 42	上部質土器(杯、環等)	SP1161-1162を切る(SP1161とSP1160を切る)	
I区	I-IK SP1161 SP1157	G-5	[32] 26 30	下部質土器(小葉)等	SP1160-1161に切られる(SP1161とSP1160を切る)	
I区	I-IK SP1163 SP1158	G-5	46 [34] 36	土財質土器(杯)、瓦器、石	SP1160-1161に切られる(SP1161とSP1160を切る)	
I区	I-IK SP1163 SP1159	G-5	22 22 7	上部質土器、瓦器(小葉)		
I区	I-IK SP1164 SP1160	G-5,6	58 36 40	漆器胎、土財質土器	SP1165を切る	
I区	I-IK SP1165 SP1161	G-5	52 [34] 40	上部質土器(杯、環等)、土財質(直角貝)、瓦器(陶)、瓦器	SP1164に切られる	
I区	I-IK SP1166 SP1162	G-6	24 24 34			
I区	I-IK SP1167 SP1163	G-6	18 18 8			
I区	I-IK SP1168 SP1164	G-6	44 42 38	上部質土器(杯、環、直角貝)、瓦器、チャート		
I区	I-IK SP1169 SP1165	G-4	39 35 42			
I区	I-IK SP1170 SP1166	G-5	49 25 19	土財質土器、瓦器(陶)	SP1171を切る、複数に切られる	
I区	I-IK SP1171 SP1167	G-5	20 [18] 20	上部質土器、瓦器	SP1170に切られる	
I区	I-IK SP1172 SP1168	G-5	38 19 28	漆器胎(古代)、瓦器	SP1173を切る	
I区	I-IK SP1173 SP1169	G-5	36 32 24	土財質土器、瓦器	SP1172に切られる	
I区	I-IK SP1174 SP1170	F-5	[17] [10] 9	上部質土器、瓦器(同)	複数に切られる	
I区	I-IK SP1175 SP1171	G-5	32 21 21			
I区	I-IK SP1176 SP1172	G-5	50 40 16			
I区	I-IK SP1177 SP1173	F-5	[34] 34 11			複数に切られる
I区	I-IK SP1178 SP1174	G-6	27 21 22			
I区	I-IK SP1179 SP1175	G-6	24 22 20			
I区	I-IK SP1180 SP1176	G-6	16 16 16			
I区	I-IK SP1181 SP1177	G-6	22 22 36			
I区	I-IK SP1182 SP1178	G-6	[60] [23] 18		SK1034を切る、複数に切られる	
I区	I-IK SP1183 SP1179	G-6	22 18 22			
I区	I-IK SP1184 SP1180	G-7	26 [17] 17			
I区	I-IK SP1185 SP1181	G-7	24 [16] 8			
I区	I-2区 SP1186 SP1188	F-5	26 [16] 20	上部質土器、瓦器(陶)、兼業		
I区	I-2区 SP1187 SP1189	F-5	24 20 3	漆器胎(透)、平底チャコ		
I区	I-2区 SP1188 SP1190	F-5	64 54 60	漆器胎、土財質土器(古代)、瓦器、竹器(竹付蓋)、チャート	SD1054を切る	
I区	I-2区 SP1189 SP1191	F-5	[19] [12] 13		SK1033を切れる	
I区	I-2区 SP1190 SP1192	F-6	22 20 15	土財質土器、瓦器		
I区	I-2区 SP1191 SP1193	F-6	61 39 28	土財質土器、瓦器	SE1008を切れる	
I区	I-2区 SP1192 SP1194	F-6	68 [36] 37	上部質土器、粘器(古字)、瓦器、チャート	SE1002を切る、複数に切られる	
I区	I-2区 SP1193 SP1195	F-6	46 34 28	土財質土器、瓦器、瓦器		
I区	I-2区 SP1194 SP1196	F-6,7	[32] 28	土財質土器	複数に切られる	
I区	I-2区 SP1195 SP1197	F-7	44 43 24	上部質土器、瓦器、瓦		
I区	I-2区 SP1196 SP1198	F-7	41 36 30	土財質土器、瓦器	SP1197を切る	
I区	I-2区 SP1197 SP1199	F-7	26 [18] 16	瓦器	SP1196に切られる	
I区	I-2区 SP1198 SP1200	F-7	22 21 10	上部質土器、瓦器		
I区	I-2区 SP1199 SP1201	F-7	20 17 10	上部質土器		
I区	I-2区 SP1200 SP1202	E-5	28 [21] 26	土財質土器(横厚)、瓦器	複数に切られる	

第15表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(5)

調査区	遺構番号	位位置	遺構規模(cm) 長軸 短軸 深度	出土遺物	備考
本報告 調査時	本報告 調査時				
I区	I-2区 SP1201 SP1203	E5	34 29 12	土師質土器(小鉢等)、瓦器、石	
II区	I-2区 SP1202 SP1204	E5	22 18 7		
III区	I-2区 SP1203 SP1205	E5	30 20 16		SK104を切る
IV区	I-2区 SP1204 SP1206	E5	32 26 6		SP1205, SK104を切る(SK104はSP1206を切る)
V区	I-2区 SP1205 SP1207	E5	[26] 26 11	土師質土器、瓦器	SK104, SK104に切られる, SP1206を切る
VI区	I-2区 SP1206 SP1208	E5	54 52 24	瓦器、土師質土器、瓦器(陶器)、石	SP1205, SK104に切られる
VII区	I-2区 SP1207 SP1209	E5	46 [20] 15	土師質土器	複数に切られる
VIII区	I-2区 SP1208 SP1210	E5	22 [14] 20	瓦器(陶器)	複数に切られる
IX区	I-2区 SP1209 SP1211	E5	68 [40] 49	十輪瓦十筋、瓦器、瓦器、石器、石、チャート	SP1210を切る、複数に切られる
X区	I-2区 SP1210 SP1212	E5	26 [20] 6		SP1209に切られる
XI区	I-2区 SP1211 SP1213	E5	41 [34] 35	土師質土器、瓦器、瓦器	複数に切られる, SP1212を切る
XII区	I-2区 SP1212 SP1214	E5	30 [29] 8	土師質土器	SP1213に切られる
XIII区	I-2区 SP1213 SP1215	E5-6	38 36 5	土師質土器、瓦器	
XIV区	I-2区 SP1214 SP1216	E5-6	38 28 12	十輪瓦十筋、瓦器(陶器)、チャート	
XV区	I-2区 SP1215 SP1217	E6	36 34 18	瓦器、土師質土器、瓦器	
XVI区	I-2区 SP1216 SP1218	E6	32 18 30	瓦器(古代の物)	複数に切られる
XVII区	I-2区 SP1217 SP1219	E6	68 57 44	瓦器、土師質土器、瓦器、瓦器、瓦器、石器	
XVIII区	I-2区 SP1218 SP1220	E6	32 [24] 23	土師質土器、瓦器	複数に切られる
XIX区	I-2区 SP1219 SP1221	E6	24 22 11		
XX区	I-2区 SP1220 SP1222	E6	51 36 30	瓦器、土師質土器、瓦器(陶器)、瓦器	複数に切られる, SP1222を切る
XXI区	I-2区 SP1221 SP1223	E6	32 [28] 20		複数に切られる, SP1222を切る
XXII区	I-2区 SP1222 SP1224	E6	[24] [24] 6		SP1220-1221, 複数に切れる
XXIII区	I-2区 SP1223 SP1225	E6	24 20 10	土師質土器、石	
XXIV区	I-2区 SP1224 SP1226	E6	22 20 10	土師質土器、瓦器	
XXV区	I-2区 SP1225 SP1227	E6	22 18 12 6		SP1226を切る
XXVI区	I-2区 SP1226 SP1228	E6	50 38 10	瓦器、土師質土器、陶器(瓦筒・筒瓦、中間・中筋)、鉢形器(有)	SP1227を切る, SP1228を切る
XXVII区	I-2区 SP1227 SP1229	E6	56 [40] 31	土師質土器、瓦器、石、チャート	SP1228を切る, SP1226を切れる
XXVIII区	I-2区 SP1228 SP1230	E6	44 30 44	十輪瓦十筋、瓦器	SP1227, SP1243に切られる
XXIX区	I-2区 SP1229 SP1231	E6	24 [18] 4		複数に切られる
XXX区	I-2区 SP1230 SP1232	E7	30 21 21	土師質土器	SP1231を切る
XXXI区	I-2区 SP1231 SP1233	E6-7	49 44 19	十輪瓦十筋	SP1230-1231に切る
XXXII区	I-2区 SP1232 SP1234	E7	36 [45] 22	土師質土器、瓦器、破壊(青磁)、石	複数に切られる
XXXIII区	I-2区 SP1233 SP1235	E7	22 18 9		
XXXIV区	I-2区 SP1234 SP1236	E7	28 20 13	+輪瓦土器(瓦等)	
XXXV区	I-2区 SP1235 SP1237	E7	18 16 16	土師質土器	
XXXVI区	I-2区 SP1236 SP1238	E7	50 43 16	土師質土器、瓦器、石器	
XXXVII区	I-2区 SP1237 SP1239	E7	32 28 31	土師質土器(古墳時代式), 瓦器、石	
XXXVIII区	I-2区 SP1238 SP1240	E7	20 18 25	土師質土器	
XXXIX区	I-2区 SP1239 SP1241	E7	50 46 32	+輪瓦十筋、瓦器、チャート	SP1240-1241を切る
LX区	I-2区 SP1240 SP1242	E7	32 [30] 20	土師質土器、瓦器	SP1240-1241に切れる
LXI区	I-2区 SP1241 SP1243	E7	24 22 50	+輪瓦十筋、瓦器	
LXII区	I-2区 SP1242 SP1244	E7	22 20 25	瓦器、土師質土器、瓦器	SP1239-1240に切れる
LXIII区	I-2区 SP1243 SP1245	E7	50 [43] 25	瓦器、土師質土器、瓦器(青磁), 瓦器	複数に切られる
LXIV区	I-2区 SP1244 SP1246	E7	34 28 14	+輪瓦十筋、瓦器	
LXV区	I-2区 SP1245 SP1247	E7	38 30 38	土師質土器、瓦器	SP1246を切る
LXVI区	I-2区 SP1246 SP1248	E7	30 [16] 32	土師質土器、瓦器	SP1245-1246に切れる
LXVII区	I-2区 SP1247 SP1249	E7	22 [16] 8		複数に切れる
LXVIII区	I-2区 SP1248 SP1250	E7	22 20 13		
LXIX区	I-2区 SP1249 SP1251	E7	36 [30] 30	土師質土器、瓦器(白磁質白付)	複数に切れる
LXX区	I-2区 SP1250 SP1252	D4	66 [58] 10	土師質土器	SP1253を切る, 瓦器、複数に切れる

第16表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(6)

調査区	遺構番号	位置	直径 幅 深度	遺構規模(cm)	出土遺物	備考	
本報告調査時	本報告調査時						
I区 1-2区	SP1251 SP1253	D4	[60] [30]	24	土師質土器,瓦器,灰陶片(灰),チャート	複数に切られる	
II区 1-2区	SP1250 SP1254	D4	26	24	20	土師質土器	
III区 1-2区	SP1253 SP1255	D4	38	30	41	土師質土器,瓦器	SP1250,複数に切られる,SP1254を切る
III区 1-2区	SP1254 SP1256	D4	[38]	16	22	土師質土器	SP1253,複数に切られる
III区 1-2区	SP1255 SP1257	D4	34	[27]	18	土師質土器,瓦器	複数に切られる
I区 1-2区	SP1252 SP1258	D4	32	28	13	土師質土器(瓦器等),瓦器	
II区 1-2区	SP1257 SP1259	D4	28	28	15	土師質土器,瓦器	
I区 1-2区	SP1258 SP1260	D5	33	28	44	土師質土器,瓦器	
I区 1-2区	SP1259 SP1261	D4	30	20	5		SP1260を切る
I区 1-2区	SP1260 SP1262	D4-E5	26	22	6		SP1261を切られる
I区 1-2区	SP1261 SP1263	D5	41	42	26	土師質土器,瓦器	SP1262を切る
II区 1-2区	SP1262 SP1261	D5	[28]	16	3		SP1263に切られる
I区 1-2区	SP1263 SP1265	D4-E4	[36]	[16]	8		
I区 1-2区	SP1264 SP1266	D5	20	20	8		
II区 1-2区	SP1265 SP1267	D5	22	21	19	土師質土器	SP1268を切る
I区 1-2区	SP1266 SP1268	D5	[28]	[22]	2	土師質土器	SP1269,複数に切られる
I区 1-2区	SP1267 SP1269	D5	20	19	6		
I区 1-2区	SP1268 SP1270	D5	32	44	30	土師質土器,陶器(青磁板),瓦器,石	SK1099を切る,複数に切られる
II区 1-2区	SP1269 SP1271	D5	36	30	12	土師質土器,瓦器	
II区 1-2区	SP1270 SP1272	D4	24	22	36	土師質土器,瓦器,石	
II区 1-2区	SP1271 SP1273	D5	38	28	22	灰陶器(古代),土師質土器,瓦器,灰	
I区 1-2区	SP1272 SP1274	D5	40	26	13	土師質土器,瓦器	
I区 1-2区	SP1273 SP1275	D5	35	32	14	土師質土器,稻飯(白磁板),瓦器	SP1274を切る
I区 1-2区	SP1274 SP1276	D5	[36]	[28]	12	土師質土器,瓦器	SP1275に切られる
I区 1-2区	SP1275 SP1277	D6	38	34	14	土師質土器,瓦器	SP1276を切る,SK1098に切られる
I区 1-2区	SP1276 SP1278	D5-E6	40	[30]	16	鐵製器(古代),土師質土器,瓦器,石	SP1277を切る,SK1099に切られる
I区 1-2区	SP1277 SP1279	D5	[34]	[15]	22	土師質土器(小底),瓦器,石	SP1278,SK1099に切られる
I区 1-2区	SP1278 SP1280	D6	34	22	10	土師質土器(小底),瓦器	SP1279を切る
II区 1-2区	SP1279 SP1281	D6	[32]	[26]	14	土師質土器(青磁板等),瓦器,石	SP1278,複数に切られる
II区 1-2区	SP1280 SP1282	D6	40	28	50	土師質土器,瓦器,灰,灰片,石	SP1281を切る
II区 1-2区	SP1281 SP1283	D6	[42]	[14]	12	土師質土器,瓦器	SP1282,複数に切られる
I区 1-2区	SP1282 SP1284	D6	[26]	26	32	土師質土器,瓦器,石	複数に切られる
I区 1-2区	SP1283 SP1285	D6	16	[12]	12		複数に切られる
II区 1-2区	SP1284 SP1286	D5	37	28	18	土師質土器,瓦器	SK1093に切られる
II区 1-2区	SP1285 SP1287	D5-E5	28	24	8		SK1094に切られる
II区 1-2区	SP1286 SP1288	E5	36	32	34	土師質土器(小底)	SK1095に切られる
II区 1-2区	SP1287 SP1289	E5	40	26	12	土師質土器,瓦器	SP1286に切られる
II区 1-2区	SP1288 SP1290	E5	18	16	20		SP1287を切る
I区 1-2区	SP1289 SP1291	E5-E6	65	54	20	鐵製器(中日雙頭ナタケ),土師質土器,瓦器,石,チャート	SK1091,複数に切られる
I区 1-2区	SP1290 SP1293	E6	20	16	8	土師質土器,瓦器	複数に切られる
I区 1-2区	SP1291 SP1294	E5	[38]	[36]	22	土師質土器,瓦器	複数に切られる
II区 1-2区	SP1292 SP1295	E5	30	20	10	土師質(鐵製),瓦器,チャート	
II区 1-2区	SP1293 SP1296	E5	48	35	31	土師質土器,瓦器,灰,瓦	SP1294を切る
II区 1-2区	SP1294 SP1297	E5	23	19	6		SP1295に切られる
II区 1-2区	SP1295 SP1298	E5	41	34	55	土師質土器,梅瓶(唐音器の焼),瓦器,瓦器,石	SP1297,SK1096を切る
II区 1-2区	SP1296 SP1299	E6	30	28	20	土師質土器(灰,灰片),瓦器,石	SP1298に切る,SP1299を切る
II区 1-2区	SP1297 SP1300	E6	[34]	[31]	27	土師質土器,瓦器	SP1296,1297に切られる
II区 1-2区	SP1298 SP1301	E6	22	16	7		
II区 1-2区	SP1299 SP1302	E6	40	34	6		
II区 1-2区	SP1300 SP1303	E7	24	22	14		SP1301を切る

第17表 検出構造一覧表 柱穴・小穴(7)

調査区	遺構番号	位位置	遺構規模(cm)	出土遺物			備考
				長軸	短軸	深度	
I区	1-2区 SP1301	SP1304	E-7	21	16	7	
I区	1-2区 SP1302	SP1305	E-7	30	28	8	
I区	1-2区 SP1303	SP1306	E-7	23	18	10	上部黄土層
I区	1-2区 SP1304	SP1307	E-7	52	37	44	土加賀十郎、瓦器、瓦器、石
I区	1-2区 SP1305	SP1308	E-7	70	[40]	10	石
I区	1-2区 SP1306	SP1309	E-7	42	34	36	上部黄土層、瓦器、粘土
I区	1-2区 SP1307	SP1310	E-7	20	18	16	
I区	1-2区 SP1308	SP1311	E-7	46	44	26	
I区	1-2区 SP1309	SP1312	E-7	18	17	6	土加賀七郎
I区	1-2区 SP1310	SP1313	E-7	42	36	17	土加賀十郎
I区	1-2区 SP1311	SP1314	E-7	26	20	14	上部黄土層、瓦器
I区	1-2区 SP1312	SP1315	D-7	36	35	16	須磨郡、十郎賀土器、瓦器、粘土
I区	1-2区 SP1313	SP1316	E-7, D-7	[24]	31	17	土加賀十郎
I区	1-2区 SP1314	SP1317	D-7	24	20	3	
I区	1-2区 SP1315	SP1318	D-7	46	30	23	須磨郡、十郎賀十郎、瓦器
I区	1-2区 SP1316	SP1319	D-7	34	22	8	SP1317を認める
I区	1-2区 SP1317	SP1320	D-7	33	[28]	15	灰白色、上部黄土層
I区	1-2区 SP1318	SP1321	D-7	22	19	8	SP1316に認められる
I区	1-2区 SP1319	SP1322	D-7	[28]	14	40	土加賀土器
I区	1-2区 SP1320	SP1323	D-7	42	40	16	須磨郡、上部黄土層
I区	1-2区 SP1321	SP1324	D-7	32	21	10	
I区	1-2区 SP1322	SP1325	D-7	38	35	22	灰白色、上部黄土層、瓦器
I区	1-2区 SP1323	SP1326	D-7	44	32	40	須磨郡、十郎賀土器
I区	1-2区 SP1324	SP1327	D-7	32	27	48	土加賀土器
I区	1-2区 SP1325	SP1328	D-7, E-7	[19]	46	48	SP1326に認められる
I区	1-2区 SP1326	SP1329	E-7	26	24	10	SP1325を認める
I区	1-2区 SP1327	SP1330	D-7, E-7	26	26	20	
I区	1-2区 SP1328	SP1331	D-7, E-7	27	22	14	上部黄土層
I区	1-2区 SP1329	SP1332	D-7	34	30	30	十郎賀十郎、須磨、高砂(山崎)、瓦
I区	1-2区 SP1330	SP1333	D-7	32	32	42	須磨郡、土加賀土器、瓦器、瓦器(?)
I区	1-2区 SP1331	SP1334	D-7	[28]	[24]	6	SP1330, SK1056に認められる
I区	1-2区 SP1332	SP1335	D-7	30	24	24	SK1056を認める
I区	1-2区 SP1333	SP1336	D-7	33	26	32	須磨郡、土加賀土器
I区	1-2区 SP1334	SP1337	D-7	25	22	16	上部黄土層
I区	1-2区 SP1335	SP1338	D-4	[44]	43	38	須磨郡、十郎賀十郎
I区	1-2区 SP1336	SP1339	D-4	[64]	34	4	土加賀土器(瓦、瓦等)
I区	1-2区 SP1337	SP1340	D-4	32	28	29	上部黄土層
I区	1-2区 SP1338	SP1341	C-4, D-4	50	44	30	十郎賀十郎、須磨、高砂(山崎)、瓦器、藤井・石
I区	1-2区 SP1339	SP1342	D-4	[44]	[30]	40	土加賀土器、須磨、瓦器
I区	1-2区 SP1340	SP1440	C-4	[45]	[24]	22	土加賀十郎
I区	1-2区 SP1341	SP1342	C-4	36	28	28	土加賀土器、石
I区	1-2区 SP1342	SP1344	C-4,5	24	20	20	上部黄土層、瓦器
I区	1-2区 SP1343	SP1345	C-4,5	32	26	14	土加賀十郎、高砂、瓦器、瓦器、石
I区	1-2区 SP1344	SP1346	C-5	32	26	19	土加賀十郎
I区	1-2区 SP1345	SP1347	C-5	38	26	20	上部黄土層、瓦器
I区	1-2区 SP1346	SP1348	C-5	[50]	45	8	土加賀十郎
I区	1-2区 SP1347	SP1349	C-5	25	[18]	10	土加賀土器(瓦、瓦等)、瓦器(?)
I区	1-2区 SP1348	SP1350	C-5	[50]	[22]	20	上部黄土層
I区	1-2区 SP1349	SP1351	C-5	26	26	24	SK1054を認める
I区	1-2区 SP1350	SP1352	C-5	[65]	[36]	6	土加賀土器、瓦器

第18表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(8)

調査区分	遺構番号	位置	遺構規模(cm)			出土遺物	備考
			長軸	短軸	深度		
I区	1-2区 SP1351 SP1353	C5	40	30	30	土師質土器、石	複数に切られる
II区	1-2区 SP1352 SP1354	C5	25	20	25	土師質土器、瓦器、石	
III区	1-2区 SP1353 SP1355	C5	30	26	14	土師質瓦(漆喰瓦),陶器,瓦器	
III区	1-2区 SP1354 SP1356	C5	34	[24]	31	土師質土器(杯,皿等),瓦器、石	SP1356を切る,複数に切られる
III区	1-2区 SP1355 SP1357	C5	37	28	16	土師質土器(杯,皿等)	SP1356, SK1364を切る,複数に切られる
III区	1-2区 SP1356 SP1358	C5	[40]	32	19	土師質土器(漆喰瓦等),瓦器,チャート(大打石)	SP1354+1356, 複数に切られる
IV区	1-2区 SP1357 SP1359	C5	35	32	20	土師質土器(杯,皿,漆喰瓦等),石,チャート	SP1356を切る,複数に切られる
IV区	1-2区 SP1358 SP1360	C5	44	[34]	20	土師質土器(杯,皿等),瓦器、石	SP1357を切る
IV区	1-2区 SP1359 SP1361	C5	27	19	10	土師質土器(瓦),瓦器(棒)	
V区	1-2区 SP1360 SP1362	C5	36	31	1	漆喰瓦(瓦),土師質土器,埴	
V区	1-2区 SP1361 SP1363	C5	60	40	26	土師質土器	
V区	1-2区 SP1362 SP1364	C5	22	20	24	土師質土器(杯,皿等),瓦器(棒),石	
V区	1-2区 SP1363 SP1365	C5	[34]	[28]	12	漆喰瓦,土師質土器,漆(ガラス),焼き石,石	SP1364を切る,複数に切られる
V区	1-2区 SP1364 SP1366	C5	38	30	22	土師質土器,瓦器,石	SP1364, 複数に切られる
VI区	1-2区 SP1365 SP1367	C5-6	35	32	8	漆喰瓦,土師質土器,瓦器(棒)	SK1366を切る
VI区	1-2区 SP1366 SP1368	C6	[48]	[15]	10	土師質土器	複数に切られる
VI区	1-2区 SP1367 SP1369	C6	31	30	38	漆喰瓦,土師質土器,瓦器(棒)	
VI区	1-2区 SP1368 SP1370	C6	[36]	38	34	土師質土器(杯,皿等),瓦器(皿等),鉄製品	SP1369, SK1365, SK1367を切る
VI区	1-2区 SP1369 SP1371	C6	36	22	16	土師質土器(杯,皿等)	SP1369+1371, SK1366, SK1367を切る
VI区	1-2区 SP1370 SP1372	C-67,D-67	42	30	20	土師質土器(小穴等),壺器(白底純)	
VI区	1-2区 SP1371 SP1373	D6	23	22	4	土師質土器,瓦器	
VI区	1-2区 SP1372 SP1374	D6	32	27	28	土師質土器,瓦器	
VI区	1-2区 SP1373 SP1375	D6	24	24	3		SP1374を切る
VI区	1-2区 SP1374 SP1376	D-67	40	30	40	瓦器(碗),石	SP1373に切れる
VI区	1-2区 SP1375 SP1377	D6	38	36	18	土師質土器	
VI区	1-2区 SP1376 SP1378	D6	22	22	12	土師質土器,瓦器,石	
VI区	1-2区 SP1377 SP1379	D6	20	16	8		
VI区	1-2区 SP1378 SP1380	D6	32	28	14	土師質土器(杯)	
VI区	1-2区 SP1379 SP1381	D6	28	24	10		SP1380を切る
VI区	1-2区 SP1380 SP1382	D6	52	40	23	土師質土器,瓦器	SP1381を切る, SP1379に切れる
VI区	1-2区 SP1381 SP1383	D6	[24]	[19]	16	土師質土器	SP1380, 複数に切られる
VI区	1-2区 SP1382 SP1384	D6	26	14	8		SP1383を切る
VI区	1-2区 SP1383 SP1385	D6	[64]	54	25	焼却土,土師質土器,瓦器,石,チャート	SP1382, 瓦器に切られる
VI区	1-2区 SP1384 SP1386	D6	38	26	12	土師質土器,瓦器,石	
VI区	1-2区 SP1385 SP1387	D6	37	33	8	燒却土(火穴),土師質土器,チャート	
VI区	1-2区 SP1386 SP1388	D6	22	20	34	土師質土器,瓦器	
VI区	1-2区 SP1387 SP1389	D6	50	33	39	土師質土器	SP1388を切る
VI区	1-2区 SP1388 SP1390	D6	38	[20]	15	焼却土	SP1387に切れる
VI区	1-2区 SP1389 SP1391	D-67	64	60	52	焼却土,土師質土器,瓦器(青銅鏡,編籠等),平皿,瓶	
VI区	1-2区 SP1390 SP1392	D7	25	22	6	燒却土	
VI区	1-2区 SP1391 SP1393	D7	42	40	28	土師質土器(小穴等),壺器(口削),瓦器,石	
VI区	1-2区 SP1392 SP1394	D7	[26]	[17]	11		複数に切れる
VI区	1-2区 SP1393 SP1395	D7	[25]	24	34		SP1394を切る,複数に切れる
VI区	1-2区 SP1394 SP1396	D7	[16]	[14]	14	土師質土器	SP1395に切れる
VI区	1-2区 SP1395 SP1397	D7	25	20	27	土師質土器	
VI区	1-2区 SP1396 SP1398	D7	40	[38]	38	土師質土器(杯,瓶等),瓦器(碗)	複数に切れる
VI区	1-2区 SP1397 SP1399	D7	34	[22]	16	土師質土器(手形),瓦器	複数に切れる
VI区	1-2区 SP1398 SP1400	D7	42	[38]	16	土師質土器(手形),瓦器	複数に切れる
VI区	1-2区 SP1399 SP1401	D7	26	24	18	土師質土器(熱帯型の鍋,平行四辺形)	
VI区	1-2区 SP1400 SP1402	C7	26	24	7		

第19表 検出構造一覧表 柱穴・小穴(9)

調査区	遺構番号	位 置	透構規模(cm) 長軸 短軸 深度	出 土 遺 物		備 考
				上部土器層	中層	
1区	1-2E SP1401 SP1403	B5	39 34 22	上部土器層：瓦器(灰、瓦等)、瓦製の器、石、チャート	SP1402を認める	
1区	1-2E SP1402 SP1404	B5	46 [32] 22	底盤部・中層土器層：砂器、陶器(帶前段)	SP1401、既述に切られる	
1区	1-2E SP1403 SP1405	B5	[22] [10] 10		既述に切られる	
1区	1-2E SP1404 SP1406	B5	24 19 12	中層土器層：瓦器		
1区	1-2E SP1405 SP1407	B5	32 30 8	瓦器群(古代)：土器質土器層	SP1406-1407を認める	
1区	1-2E SP1406 SP1408	B5	34 32 18	底盤部・上部土器層：瓦器、石、チャート	SP1405-1406に切られる	
1区	1-2E SP1407 SP1409	B5	[26] [18] 2	中層土器層：瓦器、砂器	SP1405-1406に切られる	
1区	1-2E SP1408 SP1410	B5	39 32 11	底盤部・中層土器層：瓦器、石		
1区	1-2E SP1409 SP1411	B5	30 27 6	上部土器層		
1区	1-2E SP1410 SP1412	B5	54 50 31	底盤部(古代)：上部土器層、瓦器の器(單-初集型)、 瓦器群(11-12段)、瓦器、石、チャート		
1区	1-2E SP1411 SP1413	B5	53 [40] 20	底盤部・土器質土器層(灰、瓦等)、陶器、瓦器、石、チャート	既述に切られる	
1区	1-2E SP1412 SP1414	B5	32 24 22	中層土器層：瓦器、石、チャート	SP1414を認める	
1区	1-2E SP1413 SP1415	B5	[50] [38] 28	底盤部・土器質土器層・における他の陶器、鉄器品、石、チャート	SK1056、既述に切られる、SP1414を認める	
1区	1-2E SP1414 SP1416	B5	42 26 22	上部土器層	SP1412-1414に切られる	
1区	1-2E SP1415 SP1417	B6	[40] [38] 10	十輪脚十足、瓦器、棒頭、瓦器、石、チャート	既述に切られる	
1区	1-2E SP1416 SP1418	B6	50 38 32	土壤質土器層(灰、瓦等)、瓦器(白器)、焼付		
1区	1-2E SP1417 SP1419	B6	24 [22] 2		既述に切られる	
1区	1-2E SP1418 SP1420	B6-C6	29 [28] 8	瓦器群、土器質土器層、瓦器	既述に切られる	
1区	1-2E SP1419 SP1421	B7-C7	34 33 27	土壤質土器層(小瓶等)		
1区	1-2E SP1420 SP1422	B7	20 [16] 13	土壤質土器層(灰、瓦等)	既述に切られる	
1区	1-2E SP1421 SP1423	C7	49 36 32	底盤部・中層土器層(他の器)、石、チャート	SP1422を認める	
1区	1-2E SP1422 SP1424	C7	22 [18] 14		SP1421に切られる	
1区	1-2E SP1423 SP1425	B7	26 22 3	チャート		
1区	1-2E SP1424 SP1426	B7-C7	58 43 14	土壤質土器層(灰、瓦等)、漆器、石		
1区	1-2E SP1425 SP1438	B6	19 [14] 8		既述に切られる	
1区	1-2E SP1426 SP1439	B6	[26] [26] 14	十輪脚七足、瓦器、鉄片	既述に切られる	
2区	3-1区 SP1427 SP1001	G7	55 [24] 31		既述に切られる	
2区	3-1区 SP1428 SP1003	G7	42 40 22	石		
2区	3-1区 SP1429 SP1004	G7	32 30 24			
2区	3-1区 SP1430 SP1005	G7	24 18 10			
2区	3-1区 SP1431 SP1002	G7	30 [12] 18		既述に切られる	
2区	3-1区 SP1432 SP1006	G7	59 34 25		既述に切られる	
2区	3-1区 SP1433 SP1007	G7	21 21 30			
2区	3-1区 SP1434 SP1008	G7	33 32 12			
2区	3-1区 SP1435 SP1009	F8-G8	38 30 24	鐵器群、土壤質土器層、瓦器、石		
2区	3-1区 SP1436 SP1010	F8	26 19 14			
2区	3-1区 SP1437 SP1011	E8	54 37 36		既述に切られる	
2区	3-1区 SP1438 SP1012	E8	[40] [18] 14	中層土器層、神體	既述に切られる	
2区	3-1区 SP1439 SP1013	E7-8	46 [22] 16	土壤質土器層、瓦器(すり抜き)	既述に切られる	
2区	3-1区 SP1440 SP1014	E8	50 41 22	上部土器層・瓦器	SP1441を認める	
2区	3-1区 SP1441 SP1016	E8	44 [31] 16		SP1490-1493に切られる	
2区	3-1区 SP1442 SP1015	E8	63 50 14	土壤質土器層、瓦器	SP1441を認める	
2区	3-1区 SP1443 SP1017	D-8	44 [28] 17	土壤質土器層	既述に切られる	
2区	3-1区 SP1444 SP1029	D-9	58 56 21	上部土器層、石		
2区	3-1区 SP1445 SP1113	D-9	34 不規則 25		SP1444を認める	
2区	3-1区 SP1446 SP1043	E9	19 17 13			
2区	3-1区 SP1447 SP1042	E-9	40 [39] 50			
2区	3-1区 SP1448 SP1044	E-10	26 23 7		SP1449を認める	
2区	3-1区 SP1449 SP1045	E-10	34 32 20		SP1448に切られる	
2区	3-1区 SP1450 SP1046	E-10	34 30 29	上部土器層、瓦器		

第20表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(10)

調査区分	遺構番号	位置	遺構規模(cm)			出土遺物	備考	
			長軸	短軸	深度			
2区	3-1区 SP1451	SP1047	E-10	38	38	44	土師質土器、陶器	
2区	3-1区 SP1452	SP1018	D-9	37	33	30		SP1453に切られ
2区	3-1区 SP1453	SP1019	D-9	36	18	8	土師質土器、陶器、チャート	SP1453に切られ
2区	3-1区 SP1454	SP1020	D-10	36	32	29		
2区	3-1区 SP1455	SP1021	D-10,E-10	34	31	34	土師質土器、陶器、瓦器、瓦、チャート	
2区	3-1区 SP1456	SP1022	D-10	33	33	51	土師質土器、陶器、チャート	SP1457に切られ
2区	3-1区 SP1457	SP1023	D-10	25	[24]	16	上層質土器、石	SP1456に切られ
2区	3-1区 SP1458	SP1024	D-10	34	21	28	土師質土器	
2区	3-1区 SP1459	SP1025	D-10	20	20	8		
2区	3-1区 SP1460	SP1027	D-10	30	25	37	上層質土器	SD1063に切られ
2区	3-1区 SP1461	SP1026	D-10	27	25	20	土師質土器	SD1063に切られ
2区	3-1区 SP1462	SP1033	D-10	36	24	32	上層質土器、瓦	SD1064に切られ
2区	3-1区 SP1463	SP1028	D-10	22	20	23	土師質土器、瓦器、石	SD1064に切られ
2区	3-1区 SP1464	SP1030	D-10	35	32	15	瓦器、土師質土器、瓦器	SD1064に切られ
2区	3-1区 SP1465	SP1031	D-10	70	42	70	上層質土器、陶器、瓶器、瓦	SP1466, SD1065に切られ
2区	3-1区 SP1466	SP1032	D-10	37	28	9		SP1466に切られ、SD1066に切られ
2区	3-1区 SP1467	SP1034	D-10	20	[6]	15		陶器に切られる
2区	3-1区 SP1468	SP1035	D-11	37	[20]	10		陶器に切られる
2区	3-1区 SP1469	SP1036	D-11	22	22	16		
2区	3-1区 SP1470	SP1037	D-11	20	16	9		
2区	3-1区 SP1471	SP1038	E-11	26	24	22	七輪質土器	
2区	3-1区 SP1472	SP1079	G-8	34	28	61	瓦	SP1473に切られ
2区	3-1区 SP1473	SP1080	G-8	38	[30]	38	陶器、瓦、チャート	SP1473に切られ
2区	3-1区 SP1474	SP1081	H-8.9	32	31	44		
2区	3-1区 SP1475	SP1082	H-9	34	25	10		
2区	3-1区 SP1476	SP1083	H-9	34	32	12	上層質土器	
2区	3-1区 SP1477	SP1091	H-9	24	22	20	土師質土器	
2区	3-1区 SP1478	SP1092	H-9	26	24	25		
2区	3-1区 SP1479	SP1090	H-9	29	29	18	上層質土器	SD1080に切られ
2区	3-1区 SP1480	SP1089	H-10	24	22	30	土師質土器、石	SD1089に切られ
2区	3-1区 SP1481	SP1084	G-9	36	28	4		
2区	3-1区 SP1482	SP1085	G-9	32	28	4	石	SD1094に切られ
2区	3-1区 SP1483	SP1086	G-9	36	28	24		
2区	3-1区 SP1484	SP1088	G-10	26	25	26	土師質土器、瓦器、石	SD1088に切られ
2区	3-1区 SP1485	SP1087	G-10	22	19	25	上層質土器、瓦器	SD1088に切られ
2区	3-1区 SP1486	SP1050	F-9	18	14	18		
2区	3-1区 SP1487	SP1048	F-9	20	14	14	瓦器	SP1488に切られ
2区	3-1区 SP1488	SP1049	F-9	16	[14]	9		SP1487に切られ
2区	3-1区 SP1489	SP1104	H-10	23	19	4		
2区	3-1区 SP1490	SP1105	H-10	20	18	9		
2区	3-1区 SP1491	SP1106	H-11	40	26	10		
2区	3-1区 SP1492	SP1115	H-11	23	18	23		
2区	3-1区 SP1493	SP1100	G-10,H-10	36	32	7		
2区	3-1区 SP1494	SP1093	G-10	20	18	9		SD1093に切られ
2区	3-1区 SP1495	SP1094	G-10	32	31	33		
2区	3-1区 SP1496	SP1095	G-10	24	18	14	土師質土器、陶器、瓦器、石	
2区	3-1区 SP1497	SP1096	G-11	44	38	33	土師質土器	SP1498に切られ
2区	3-1区 SP1498	SP1097	G-10,II	30	29	10	上層質土器、瓦	SP1499に切られ
2区	3-1区 SP1499	SP1098	G-10,II	62	34	36		SP1499に切られ
2区	3-1区 SP1500	SP1101	G-11	32	30	6		

第21表 検出構造一覧表 柱穴・小穴(11)

調査区	遺構番号	位 置	遺構規模(cm)	出 土 遺 物	備 考
本報告	調査時	本報告	調査時		
2区	3-I区 SP1501	SP1114	G-II	28 22 31	
2区	3-I区 SP1502	SP1099	G-II	44 42 13	土師質土器、陶器、瓦器
2区	3-I区 SP1503	SP1102	G-II	36 24 17	
2区	3-I区 SP1504	SP1103	G-II,B-II	26 21 15	
2区	3-I区 SP1505	SP1061	F-II	36 36 43	陶器等、上部灰土層
2区	3-I区 SP1506	SP1062	F-II	27 27 47	土師質土器、チャート
2区	3-I区 SP1507	SP1059	F-II	48 30 28	土師質土器、瓦器
2区	3-I区 SP1508	SP1067	F-II	40 30 23	
2区	3-I区 SP1509	SP1060	F-II	36 [20] 29	
2区	3-I区 SP1510	SP1058	F-II	44 38 34	陶器等、土師質土器、瓦器、陶製品、石
2区	3-I区 SP1511	SP1055	F-II	40 34 36	陶器等、土師質土器、石
2区	3-I区 SP1512	SP1056	F-II	24 [21] 25	土師質土器
2区	3-I区 SP1513	SP1054	F-II	44 32 24	土師質土器、石
2区	3-I区 SP1514	SP1053	F-II	22 20 6	
2区	3-I区 SP1515	SP1063	F-II	24 18 11	
2区	3-I区 SP1516	SP1062	F-II	48 41 26	
2区	3-I区 SP1517	SP1063	F-II	37 22 29	
2区	3-I区 SP1518	SP1064	F-II	30 30 29	土師質土器、瓦器、石
2区	3-I区 SP1519	SP1065	F-II	20 18 8	瓦器
2区	3-I区 SP1520	SP1066	F-II	34 24 20	土師質土器
2区	3-I区 SP1521	SP1067	F-II	48 46 24	土師質土器、石
2区	3-I区 SP1522	SP1068	F-II	30 [10] 12	
2区	3-I区 SP1523	SP1069	F-II	26 25 17	陶器等、土師質土器
2区	3-I区 SP1524	SP1070	F-II	27 20 10	土師質土器、石
2区	3-I区 SP1525	SP1071	F-II	34 24 4	土師質土器
2区	3-I区 SP1526	SP1072	F-II,G-II	28 24 19	土師質土器
2区	3-I区 SP1527	SP1073	F-II,G-II	40 24 32	
2区	3-I区 SP1528	SP1074	F-II,G-II	40 [20] 20	
2区	3-I区 SP1529	SP1038	E-13	60 [20] 18	
2区	3-I区 SP1530	SP1046	E-13	44 [20] 16	土師質土器、石
2区	3-I区 SP1531	SP1041	E-13	38 34 22	土師質土器
2区	3-I区 SP1532	SP1075	F-13	[26] 21 14	瓦器
2区	3-I区 SP1533	SP1076	G-13	41 23 35	
2区	3-I区 SP1534	SP1077	G-13	21 22 14	土師質土器、瓦器
2区	3-I区 SP1535	SP1078	G-13	33 21 18	
2区	3-I区 SP1536	SP1112	G-12	33 32 5	
2区	3-I区 SP1537	SP1110	G-12,H-12	29 24 11	
2区	3-I区 SP1538	SP1111	H-12	32 [26] 8	
2区	3-I区 SP1539	SP1109	H-12	30 22 20	
2区	3-I区 SP1540	SP1108	H-11	30 30 22	土師質土器
2区	3-I区 SP1541	SP1107	H-12	30 30 21	
2区	3-I区 SP1542	SP1116	H-12	27 18 20	陶器、瓦器
2区	3-I区 SP1543	SP1117	H-12	24 23 17	土師質土器
2区	3-II区 SP1544	SP1122	F-14	40 32 7	
2区	3-II区 SP1545	SP1123	F-14	26 22 5	
2区	3-II区 SP1546	SP1124	F-14	34 28 11	
2区	3-II区 SP1547	SP1125	F-14	36 [32] 12	
2区	3-II区 SP1548	SP1126	F-14	32 [22] 7	
2区	3-II区 SP1549	SP1127	F-14	26 21 5	
2区	3-II区 SP1550	SP1128	F-14	42 30 15	土師質土器、瓦器、石
					SX1007:壁面に切られる
					SX1007C:切られる
					SX1007D:切られる
					SPI1549を切る、SP1146,SX1007に切られる
					SPI1547,SX1007に切られる
					SX1007E:切られる
					SX1007F:切られる

第22表 検出遺構一覧表 柱穴・小穴(12)

調査区	遺構番号	位 置	遺構規模(cm)	出土 遺物	備 考
本報告	調査時	本報告	調査時		
2区	3-2区 SP1551 SP1129	F-14	28 26 8	上鉢質土器	SX1007に切られん
2区	3-2区 SP1552 SP1120	F-14, G-14	36 21 5		SX10714を切る。SX1007に切られん
2区	3-2区 SP1553 SP1119	G-14	28 24 10		SX10714を切る。SX1007に切られん
2区	3-2区 SP1554 SP1121	F-14	26 22 4	上鉢質土器	SX10729を切る。SX1007に切られん
2区	3-2区 SP1555 SP1137	F-15	32 29 30		
2区	3-2区 SP1556 SP1118	G-14	30 38 14		SX1007, 棚板に切られん。SD1007を切る
2区	3-2区 SP1557 SP1130	G-13-H-14	22 21 11	上鉢質土器	SX1007を切る
2区	3-2区 SP1558 SP1131	G-14	32 31 30		SX1007を切る
2区	3-2区 SP1559 SP1132	G-13	29 22 22	上鉢質土器	SD1021, SX1007, SP1560を切る
2区	3-2区 SP1560 SP1133	G-13	[28] [28]	15	SX1007を切る。SD1022, SP1560を切る
2区	3-2区 SP1561 SP1134	H-13	34 30 24		SX1007に切られん
2区	3-2区 SP1562 SP1135	H-13	22 17 10		SD1023, SX1007を切る
2区	3-2区 SP1563 SP1136	H-13	27 21 7		SD1023, SX1007を切る
3区	2区 SP1564 SP1002	B-2	50 28 40	直底部	SX1075を切る。棟板に切られる
3区	2区 SP1565 SP1003	B-3	32 27 12	土鉢質土器	
3区	2区 SP1566 SP1004	B-3	22 18 9	土鉢質土器	
3区	2区 SP1567 SP1007	B-3	24 [18] 34	土鉢質土器, 石, チート	SP1568に切られん
3区	2区 SP1568 SP1006	B-3	30 27 45	直底部, 土鉢質土器, 破瓶(青釉), 丸器	SP1567, SX1007を切る
3区	2区 SP1569 SP1005	B-3, C-3	22 30 12		SX1076を切る
3区	2区 SP1570 SP1008	C-3	29 26 19	土鉢質土器	
3区	2区 SP1571 SP1001	C-3	40 32 24		腹見に切られん
3区	2区 SP1572 SP1009	C-3	32 24 4	直底部, 土鉢質土器, 丸器	
3区	2区 SP1573 SP1010	C-3	30 26 16	土鉢質土器, 丸器	

第23表 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(1)

査 査 番 号	調 査 区	准 備 書 本 報 告	准 備 書 資 料	准 備 書 本 報 告	准 備 書 調 査 時	器 種	法 量 (cm)	残 存 状 態	成 形 ・ 調 整	施 工	色 調	焼 成 度	備 考	
口徑 (mm)	高 さ (mm)	最 高 (mm)	底 厚 (mm)	重 量 (g)										
1	I区	I-1区	SP1081	SP1077	陶器 皿	(9.3)	(30)	口部の外縁部にクロナフ、底部に薄胎、内縁部にクロナフ、ビスピサス、内縁部にクロナフ、薄胎。	1/8	石	黒SY76-01黄 黒10YGL5-1白 オリーブグリーン	良好	肥前系(鹿津)	
2	II区	I-1区	SP1081	SP1077	陶器 皿	(11.5)	(4.8)	31	9/10	内縁部にクロナフ、底部に薄胎、内縁部にクロナフ、ビスピサス、内縁部にクロナフ、薄胎。	長生	黒2.5YR6-1青灰 黒10YGL5-1白 黄みのグレー	良好	肥前系、対付に茎ねじ式系、灰瓣手
4	I区	I-1区	SP1084	SP1080	陶器 皿	(11.6)	(31)	1/3	外身面に1-2mmのリサイド、内縁部に1-2mmのリサイド、内縁部に1-2mmのリサイド、内縁部に1-2mmのリサイド、内縁部に1-2mmのリサイド。	石	黒10YGL5-1白 黒SY76-01黄 黒SY76-01黄 グリーン	良好	肥前系(鹿津)	
6	III区	I-1区	SE1001	SE1001	十脚質十脚 盤	(5.3)	(1.5)	2/5	外身面に1-2mmのリサイド、内縁部に1-2mmのリサイド、内縁部に1-2mmのリサイド、内縁部に1-2mmのリサイド。	石灰無 水	黒SY76-01黄 黒10YGL5-1白 オリーブグリーン	良好		
7	I区	I-1区	SE1001	SE1001	上脚質上脚 盤	(9.4)	1.5	1/6	外身面にリサイド、内縁部にリサイドの痕跡を有す。 内縁部にリサイド、内縁部にリサイド。	石灰 無 水	黒SY76-01黄 黒10YGL5-1白 オリーブグリーン	良好		
8	I区	I-1区	SE1001	SE1001	十脚質十脚 盤	(10.0)	(2.9)	1/5	外身面にリサイド、内縁部にリサイド。	石	黒SY76-01黄 黒SY76-01黄	良好	わざかけ	
9	II区	I-1区	SE1001	SE1001	上脚質上脚 盤	(10.0)	(2.8)	1/8	内縁部にリサイド、内縁部にリサイド。	石灰 無 水	黒SY76-01黄 黒SY76-01黄	良好	体部正面に一部剥落	
10	I区	I-1区	SE1001	SE1001	陶器 皿?	(9.2)	(2.1)	1/8	内縁部にクロナフ、基盤 内縁部にクロナフ、基盤。	石	黒SY76-01黄 黒10YGL5-1白 内10YGL5-1白 に近い黄	良好	肥前系(鹿津)	
11	II区	I-1区	SE1001	SE1001	陶器 皿	(16.8)	(2.9)	1/12	各舟部に1-2mmのリサイド、 内縁部にリサイド、内縁部にリサイド、内縁部にリサイド。	石	黒SY76-01黄 黒SY76-01黄 黒SY76-01黄	良好	肥前系(鹿津)	
12	I区	I-1区	SE1001	SE1001	陶器 皿	(13.2)	(9.0)	2.6	内縁部にクロナフ、内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド。	石	黒10YGL5-1 に近い黄 黒SY76-01黄	良好	志野手、 I-1区で発見した事例、 変形型	
13	I区	I-1区	SE1001	SE1001	陶器 皿	(4.0)	(2.0)	2/5	外身面にリサイド、内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、内縁部にリサイド。	石	黒2.5YB-1灰 黒SY76-01黄 黒SY76-01黄	良好	肥前系(鹿津)	
14	II区	I-1区	SE1001	SE1001	陶器 皿	(5.0)	(2.8)	1/6	内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド。	石	黒10YGL5-1 に近い黄 黒SY76-01黄 黒SY76-01黄	良好	相模系(鹿津)	
15	I区	I-1区	SE1001	SE1001	陶器 皿?	(31.6)	(4.5)	1/12	内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド。	石灰無 水	黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1	良好	寺町系	
16	I区	I-1区	SE1001	SE1001	陶器 皿?		(8.2)		内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド。	石灰 無 水	黒SY76-01黄 黒SY76-01黄 黒SY76-01黄	良好	肥前系のY組	
17	II区	I-1区	SE1001	SE1001	陶器 皿?	(26.7)	(12.7)	1.13	1/4	内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド。	石灰無 水	黒2.5YB-1灰 黒SY76-01黄 黒SY76-01黄	良好	福知山の灰組
18	I区	I-1区	SE1001	SE1001	陶器 皿	(9.1)	(1.2)	1/7	内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド。	石	黒2.5YB-1灰 黒SY76-01黄 黒SY76-01黄 黒SY76-01黄	良好	志野手(鹿津)	
19	I区	I-1区	SE1001	SE1001	磁器 皿	(13.5)	(1.6)	1/6	内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド。	釉無 水	黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1	良好	肥前系	
20	II区	I-1区	SE1001	SE1001	磁器 皿	(12.9)	(1.7)	1/10	内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド。	釉無 水	黒SY76-01黄 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1	良好	肥前系	
21	II区	I-1区	SE1001	SE1001	磁器 皿	(15.2)	(2.5)	1/6	内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド。	釉無 水	黒SY76-01黄 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1	良好	肥前系	
22	II区	I-1区	SE1001	SE1001	磁器 皿	(10.6)	(4.1)	1/8	内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド、 内縁部にリサイド。	釉無 水	黒SY76-01黄 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1 黒10YGL5-1	良好	肥前系	

第24表 出土遺物観察表 土器・陶製器・土製品(2)

規査番号	調査区	造 構 番 号	器 型	法 量 (cm)	残 存	成 形 ・ 調 整	胎 土	色 调	燒成	備 考	
23	I区 1-1区	SE1001	SE1001	器蓋 縁付立て	(20) (18)	1/11	外コロナガ、施加 内コロナガ、施加	白粉	外250/内250/36 重250/36 すり	良好	施加系(伊万里)
24	II区 1-1区	SE1001	SE1001	瓦 平瓦	(49) (7.6)	40	1/4 外ナガ 内コロナガ、コビナガ	白粉	外250/内250/36 重250/36 すり	良好	
25	I区 1-1区	SE1001	SE1001	瓦 平瓦	(3.0) (0.2)	13	外ナガ、一部スビナガ 内ナガ	石片	外250/内 PG250/1焼	良好	
29	II区 1-2区	SE1002	SE1002	陶器 蓋	(19.2) (3.6)	1/4	外コロナガ、休面下一定部斜面 内コロナガ、施加、足込約1.7cm	白	外230YX7/4 内230YX7/3 重230YX7/3 すり	良好	施加系
30	II区 1-2区	SE1002	SE1002	陶器 輪	(11.6) (4.3)	1/4	外底付内縁付、ビオナガ 外コロナガ、背花、施加 内表面一面口部近辺コロナガ、施加	白粉	外250/内 PG250/1焼 重250/36 すり	良好	
31	I区 1-2区	SE1002	SE1002	陶器 大鉢	(8.7) (7.3)	1/3	外コロナガ、脚付、脚付 内コロナガ、背花、施加 外付脚付内付脚付、高台輪胎付 足込約1.7cm	石片	外230YX4/3 内230YX3/2 重230YX3/2 すり	良好	施加系(唐津)
32	II区 1-2区	SE1002	SE1002	陶器 取手付 碗	(12.6) (8.8)	79	外コロナガ、足部上口縁部施加 内コロナガ、脚付のみ施加	白、 灰 少量含む	外250YX2焼 内230YX2 重250/36 すり	良好	
33	II区 1-2区	SE1002	SE1002	須恵器 こね鉢	(27.0) (5.0)	1/2	外少少一層脚付内付 内コロナガ、背花 内付脚付内付脚付、内コロナガ 足込約1.7cm	石片 砂粉多 多く含む	外250YX2 内250/4 重250/36 すり	良好	施加系 高台輪胎付 足込約1.7cm
34	II区 1-2区	SE1002	SE1002	用器 すり鉢	(29.0) (3.3)	1/2	外底付内縁付コロナガ 内底付コロナガ	白粉 白粉多 多く含む	外250YX2-6 内250YX1 重250/36 すり	良好	施加系 施加水痕
35	II区 1-2区	SE1002	SE1002	陶器 すり鉢	(12.4) (7.1)	1/4	外底付内縁付コロナガ、内コロナガ 内底付コロナガ、内コロナガ 内付脚付内付脚付、内コロナガ 足込約1.7cm	石片	外250YX2 内250YX4 重250/36 すり	良好	施加系V型
36	I区 1-2区	SE1002	SE1002	瓦 丸瓦	14.3 10.5 23		内ナガ、一部スビナガ 内底付コロナガ?	石片半	外250YX2 内250YX2 重250/36 すり	良好	
47	I区 1-1区	SK1001	SK1001	土師質上器 高台付皿	(5.7) (2.1)	2/5	外コロナガ、背花、施加 内底付コロナガ(一部足込付)、内ナガ(邊縁付に付)、足部ナガ (底縁付に付)、足部ナガ	白粉 白粉多 多く含む	外250YX3 内250YX2 重250/36 すり	良好	
48	I区 1-1区	SK1005	SK1004	須恵器上器 輪	(9.2) (2.9)	1/8	外脚輪ナガ 内脚輪ナガ	白 少量含む	外250YX2 内250YX1 重250/36 すり	良好	施加系
49	I区 1-1区	SK1005	SK1004	瓦器 輪	(14.4) (4.5)	1/6	外コロナガ、内底付コロナガ 内ナガ(ハコナガ)、内底付ナガ (底縁付に付)、内底付コロナガ	白 少量含む	外250YX2 内250YX2 重250/36 すり	やや 不良	施加系
50	I区 1-1区	SK1005	SK1004	須恵器 長颈瓶	(9.45) (18.3)	1/4	外底付上部ナガ、下部脚ナガ、 内底付ナガ	白粉 白粉多 多く含む	外250YX2 内250YX2 重250/36 すり	良好	
51	I区 1-1区	SK1012	SK1001	土師質上器 灯明皿	9.9 5.5 1.8	2/3	外底付一層脚付ナガ、 内底付ナガ(一部ナガ)、ナガ 内付脚付ナガ	石片半	外250YX2/3 内250 PG250YX7/4 重250/4 すり	良好	内底付外側に 外側に付ける 灯明皿に適用
52	I区 1-1区	SK1016	SK1011	土師質上器 杯	(0.58) (0.9)	1/8	外コロナガナガ 内コロナガナガ	石片半	外250YX7/4 内250 重250/4 L250/4 すり	良好	施加
53	I区 1-1区	SK1017	SK1012	土師質上器 碗	(10.2) (2.9)	1/8	外コロナガ 内コロナガ	石片半	外250YX7/4 内250 重250/4 L250/4 すり	良好	赤色底土器?
54	I区 1-1区	SK1028	SK1032	陶器 蓋	(16.0) (1.9)	1/2 蓋付	外底付ハコナガナガ 内底付コロナガナガ	白粉	外250YX2 内250 重250/4 すり	良好	薄肉
55	I区 1-1区	SK1028	SK1032	須恵 青磁碗	5.9 (3.7)	2/3	外青磁コロナガ 内青磁コロナガ	白粉 青磁	外250YX5 内250YX5 重250/4 L250/4 すり	良好	青磁窯、坂口 青磁窯半々5種

第25表 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(3)

掲載番号	調査区	遺構番号	本報告調査時	本報告調査時	器種	法基(㎝)	口径(㎝) 厚径(㎝) 最高(㎝) 第二径(㎝)	残存	成形・調整	胎土	色調	他成	備考
底(㎝)	重(㌘)												
56	1区 1-2区	SK1047	SK1059	土器蓋十唇皿	(10.0)	(6.4)	(2.0)		1/8 外側唇一回縁部削除ナダ。 内側唇系9.0-ナダ 内側底一回縁部削除ナダ。 底部削除ナダナダ	石片赤	外10YR2/3 内40YR2/4 内50YR2/4 内50YR2/4	良好	
57	1区 1-2区	SK1048	SK1060	土製品 筒型	4.7	4.6	1.6		小片 内ナダ 内ナダ/ラミガタ?	石片赤	10YR2/5灰	良好	墨小字を記した筒型
63	1区 1-2区	SK1055	SK1070	土器質土器 杯	(8.8)	(5.0)	(3.2)		1/5 外側唇一回縁部削除ナダ。 底部削除し内側の底を削除 内側底ナダナダ	石片赤	外10YR2/4 内40YR2/2 内50YR2/2 内50YR2/2	良好	全体に丁寧な仕上げ
64	1区 1-2区	SK1055	SK1070	土器質土器 羽釜	(16.4)		(5.2)		1/12 外側底平下口タクナ、口縁部一溝部 コロナダ 内側底ナダナダ/内縁部コロナダ	石片赤 石片黒 砂粒多 多く含む	外5.5YR4/1 内40YR2/4 内50YR2/4 内50YR2/4	良好	縦隔壁型、外縁部上 下平底に底付材
66	1区 1-1区	SD1002	SD1002	器皿 白磁碗	(14.0)	(5.4)	(5.8)		1/4 外側唇一回縁部削除ナダ、 内側底ナダ/内縁部コロナダ、 底部コロナダ	砂粒多 黒粘土を含む 内白色/底白色	外7.5YR7/1灰 板30YR8/1灰 内40YR2/2 内50YR2/2	良好	直線端丸脚
67	1区 1-1区	SD1002	SD1002	須恵器 束	(25.0)		(6.3)		1/6 外側底平下口タクナ、腰部一回縁部 削除ナダ、エビナカ 内側底削除ナダ/内縁部コロナダ 口縁部削除ナダ	石片黒 砂粒多 多く含む	外10YR2/1 内40YR2/2 内50YR2/2	良好	須恵器底切刃が 洗成不良のためか 土器質土器を半埋する
68	1区 1-1区	SD1002	SD1002	須恵器 束	(32.4)		(37.5)		1/8 外側底削除ナダナダ、胎底一 回縁部ナダ 内内縁部コロナダ	石片赤	外2.5YR7/2灰 内2.5YR7/2灰	不良	口縁部の内側底付材
69	1区 1-1区	SD1002	SD1002	土製品 筒型	3.5	5.2	4.5		小片 内ナダ	石片赤	外2.5YR8/4 淡青色	良好	光形は仰27cmに合る程度
70	1区 1-1区	SD1002	SD1002	土製品 土錐	(4.1)	11	12.5	500	9/10 内ナダ	石片赤	外2.5YR8/3灰	良好	
71	1区 1-1区	SD1002	SD1002	土製品 土錐	(3.7)	10	0.9	296	4/3 内ナダ	石片赤	外10YR8/3 内40YR2	良好	内部無孔
75	1区 1-1区	SD1003	SD1003	土器質土器 小皿	(9.2)	(7.2)	(1.4)		1/3 外側唇一回縁部削除ナダ。 底部ナダに内側唇削除し底部を削除 内内縁部ナダ	石片赤 砂粒多 多く含む	外2.5YR8/1 内2.5YR8/1 淡青色	良好	丁寧な仕上げ
76	1区 1-1区	SD1003	SD1003	土器質土器 皿	(12.8)	(8.0)	(2.6)		1/3 外側唇一回縁部削除ナダ。 底部ナダに内側唇削除し底部を削除 内内縁部ナダ 内内縁部削除ナダ	石片赤 砂粒多 多く含む	外3YR7/2 内40YR2/2 淡青色	良好	
77	1区 1-1区	SD1003	SD1003	土器質土器 灯明皿	(9.9)		(1.3)		1/8 外側底削除ナダナダ/ 内内縁部削除ナダナダ/ 内内縁部削除ナダナダ	長石赤	外10YR8/3 内40YR2/2 淡青色	良好	口縁部に底付材
78	1区 1-1区	SD1003	SD1003	土器質土器 灯明皿	9.3	5.5	2.3		外側底削除ナダナダ/ 底部底部へ内側唇削除ナダ 内内縁部削除ナダ 内内縁部削除ナダ	石片赤 砂粒多 多く含む	外3.5YR7/2 内40YR2/2 淡青色	良好	口縁部に底付材
79	1区 1-1区	SD1003	SD1003	土器質土器 皿	(10.8)	(7.0)	(1.45)		外側唇一回縁部削除ナダ/ 内内縁部削除ナダ 内内縁部削除ナダ 内内縁部削除ナダ	石片赤	外2.5YR8/1 内40YR2/2 淡青色 内2.5YR8/1 淡青色	良好	墨書き
80	1区 1-1区	SD1003	SD1003	土器質土器 皿	(5.1)		(1.1)		底盤の外側底削除ナダ、底部へ内側唇削除 内内縁部ナダ	石片赤	外2.5YR8/2 内40YR2/2 淡青色 内2.5YR8/3 淡青色	良好	墨書き
81	1区 1-1区	SD1003	SD1003	土器質土器 杯	(4.0)	(0.85)			外側唇一回縁部削除ナダ/ 内内縁部削除ナダ 内内縁部削除ナダ 内内縁部削除ナダ	石片赤	外10YR8/1 内40YR2/2 淡青色 内2.5YR8/4 淡青色	良好	墨書き
82	1区 1-1区	SD1003	SD1003	土器質土器 土鍋	(36.8)		(6.7)		1/10 外側唇一回縁部削除ナダ/ 内内縁部削除ナダ 内内縁部削除ナダ 内内縁部削除ナダ	石片赤	外10YR8/1 淡青色 内2.5YR8/4 淡青色	良好	腹内
83	1区 1-1区	SD1003	SD1003	土器質土器 羽釜	(30.0)		(5.1)		1/5 外側唇一回縁部削除ナダ/ 内内縁部削除ナダ 内内縁部削除ナダ 内内縁部削除ナダ	石片赤 砂粒多 多く含む	外10YR8/2 内40YR2/2 淡青色 内2.5YR8/2 淡青色	良好	腹部外側に墨書き、 新規性既成
84	1区 1-1区	SD1003	SD1003	土器質土器 筒型	(29.8)		(3.4)		1/12 外側唇一回縁部削除ナダ/ 内内縁部削除ナダ 内内縁部削除ナダ 内内縁部削除ナダ	石片赤 砂粒多 多く含む	外2.5YR8/1 内40YR2/2 淡青色 内2.5YR8/7 淡青色	やや 良好	

第26表 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(4)

査定 番号	調査区 名	通 番 号	器 形	法 量 (cm) (幅 (横) 高さ (縦))	重 量 (g)	残存	成 形 ・ 調 整		色 調	焼成	備 考		
							底径	最大径					
85	I区	1-I区	SD1003 SD1003	土器實物 焰壺	(23.4)	(46)	1/6	外唇部へ口部斜面ナラ、 腹部斜面ナラ、内側斜面へテリナラ、 底面ナラ、口部器皿脚ナラ	直筒、 器皿脚を 多く含む	外20YR6-3 に21YR6-2 P21D1H6-2 K2L1H6-2	良好	丸形容 外周脚付身、製作中	
86	I区	1-I区	SD1003 SD1003	瓦器 瓶	(17.1)	(6.7)	(48)	1/6	外唇部へ口部斜面ナラ、 腹部斜面ナラ、内側斜面へココナラ、 底面ナラ、口部器皿脚ナラ、内側斜面 内唇部へ脚ナラ、内側斜面	直筒、 器皿脚を 多く含む	外25Y7/2灰青 P25D7/2灰青	良好	丸形容 瓦器瓶
87	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 碗	(11.8)	(6.1)	1/4	外唇部へ口部斜面ナラ、直筒、 内側斜面へ脚ナラ、底面	直筒、 器皿脚を 多く含む	外10YR5-3 に11YR5-4 P10D5-3 K11A5-4	良好	直筒形 器皿脚付身	
88	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 碗	(10.4)	(5.2)	1/4	外唇部へ口部斜面ナラ、 直筒、内側斜面へラバナラ、直筒、 内側斜面へ脚ナラ、直筒	直筒、 器皿脚を 多く含む	外21YR7/2白 P21D7/2白 K22A7/2白	良好		
89	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 碗	59	(46)	1/3	外唇部、底面へココナラ、 直筒、内側斜面へ脚ナラ、直筒	直筒、 器皿脚を 少し含む	外21YR7/2白 P21D7/2白 K22A7/2白	良好	直筒形	
90	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 碗	(42)	(36)	1/4	外唇部へ口部斜面ナラ、直筒、 内側斜面へココナラ、直筒、 内側斜面へラバナラ、直筒	直筒、 器皿脚を 少し含む	外21YR7/2白 P21D7/2白 K22A7/2白	良好	直筒形、 内側斜面に縮れ有り	
91	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 碗	42	(25)	2/5	外唇部へ直筒、内側斜面ナラ、 内側斜面へココナラ、直筒	直筒、 器皿脚を 少し含む	外21YR7/2白 P21D7/2白 K22A7/2白	良好		
92	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 碗	48	(23)	1/5	外直筒へ脚部傾き方向へのケリ、 直筒、内側、直筒基部 内側斜面へ脚ナラ、直筒	直筒、 器皿脚を 含む	外21YR7/2白 P21D7/2白 K22A7/2白	良好	直筒形、 直筒基部	
93	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 碗	104	6.3	22	外唇部へ口部斜面ナラ、 直筒、内側斜面へ脚ナラ、 内唇部へ脚ナラ、直筒	直筒、 器皿脚を 多く含む	外25Y7/2灰青 P25D7/2灰青	良好	直筒形(古神井)	
94	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 碗	39	(24)	2/3	外唇部へ口部斜面ナラ、 直筒、内側斜面へラバナラ、 内側斜面へココナラ、直筒、 底部へ脚ナラ、直筒	直筒、 器皿脚を 少し含む	外21YR7/2白 P21D7/2白 K22A7/2白	良好	直筒形	
95	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 碗	(7.4)	(36)	1/3	外唇部へ直筒、内側斜面ナラ、 内側斜面へ脚ナラ	直筒、 器皿脚を 多く含む	外21YR7/2白 P21D7/2白 K22A7/2白	良好	直筒形	
96	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 钵	(11.6)	(43)	1/4	外唇部へ口部斜面ナラ、直筒、 内側斜面へラバナラ、直筒、 内唇部へ脚ナラ、直筒	直筒、 器皿脚を 少し含む	外21YR7/2白 P21D7/2白 K22A7/2白	良好	直筒形	
97	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 便利	(9.7)	104	1/3	外口部ココナラ、 内側斜面ナラ	直筒、 器皿脚を 多く含む	外21YR7/2白 P21D7/2白	良好	口縁部に縮れ有り	
98	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 便利	(5.8)	(8.0)	11.4	底径の 1/3	外口部ココナラ、直筒、直筒 内側斜面へ脚ナラ、直筒	直筒、 器皿脚を 多く含む	外21YR7/2白 P21D7/2白 K22A7/2白	良好	直筒形
99	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 大甌	28.0	(10.2)	7.9	3/4	外唇部斜面ナラへ脚部ロコナラ、 斜面、直筒、内側斜面へ脚部 内側斜面へ脚ナラ、直筒、直筒、 足部斜面へ脚ナラ	直筒、 器皿脚を 多く含む	外21YR7/2白 P21D7/2白 K22A7/2白	良好	直筒形(古神井)
100	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 大甌	(32.6)	(9.8)	9.1	1/2	外唇部へ口部斜面ナラ、 斜面、直筒、内側斜面へ脚部 内側斜面へ脚ナラ、直筒、直筒、 足部斜面へ脚ナラ	直筒、 器皿脚を 多く含む	外21YR7/2白 P21D7/2白 K22A7/2白	良好	直筒形
101	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 甌	(41.0)	(6.0)		小片	外口部ココナラ、 内側斜面ナラ		外21YR7/2白 P21D7/2白	良好	直筒形、 直筒中野 偏平大型式
102	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 みずや甌	(33.8)		(5.3)	小片	外口部ココナラ、 内側斜面ナラ	直筒供奉	外21YR7/2白 P21D7/2白	良好	直筒形
103	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 甌		(9.9)		小片	外口部ココナラ、 内側斜面ナラ	外21YR7/2白 P21D7/2白	良好	直筒形	
104	I区	1-I区	SD1003 SD1003	陶器 大甌		(16.1)		小片	外口部ココナラ、 内側斜面ナラ	外24YR7/2白 P24D7/2白	良好		

第27表 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(5)

開 場 番 号	調 査 区	遺 構 番 号	本新告 調査時 本報告 調査時 調査時	器 種	法 量 (cm)	重 量 (g)	残 存	成 形 ・ 調 整	胎 土	色 調	焼成 備 考		
上径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	裏人面	裏									
105	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 すり鉢	27.0	5.2	1/10	外クロロナ 内クロロナ+ナリ	黒褐色を 多く含む	赤Y7/1灰 内35/0白	良好 集落方面	
106	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 すり鉢	27.2	5.3	1/6	外クロロナ 内クロロナ+ナリ(3角/1cm)	石片赤	赤Y7/1灰 内35/0白 内30/4白	良好 集落方面	
107	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 すり鉢	32.0	15.8	14.7	外端部ビサナ+クロナ 内端部クロナ、底部周縁へタリナ ナガル有り 内クロロナ+ナリ	石英赤	内面35/0白 内面3Y8/2白 内35/0白	良好 集落方面	
108	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 皿	13.8	5.2	2.8	外端部一辺端部クロナ 内端部クロナ、底付周縁へタリナ ナガル有り 内クロロナ+ナリ	黒褐色を含む 黒化を含む	黒35/0白 黒35/5白 黒35/0白	良好 耕作(吉伊万里)	
109	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 皿	13.2	3.0	—	外端部クロナ 内端部クロナ、底付周縁へタリナ ナガル有り 内クロロナ+ナリ	黒褐色を 多く含む	赤Y7/1白 黒10/5白 黒35/0白	良好 耕作	
110	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 皿	3.0	0.6	—	外端部クロナ 内端部クロナ 内付輪輪 内端部一辺端部クロナ 内クロロナ+ナリ	黒褐色を含む 黒化を含む	赤Y7/0白 黒22/5白 黒35/5白	良好 耕作	
111	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 皿	13.0	6.4	3.3	外端部一辺端部クロナ 内端部クロナ、底付周縁へタリナ ナガル有り 内クロロナ+ナリ	黒褐色を 多く含む	赤Y7/1白 黒10/5白 黒35/0白	良好 耕作(吉伊万里)	
112	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 皿	12.8	5.3	3.4	外端部クロナ 内端部クロナ 内付輪輪 内クロロナ+ナリ	黒褐色を 多く含む	赤Y7/0白 黒35/5白 黒35/0白	良好 耕作	
113	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 皿	4.2	0.6	—	外端部クロナ 内端部クロナ 内クロロナ+ナリ	黒褐色を含む 黒化を含む	赤Y7/1白 黒10/5白 黒35/0白	良好 耕作(吉伊万里)	
114	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 皿	5.1	0.5	—	外クロロナ 内クロロナ+ナリ	黒褐色を含む 黒化を含む	赤35/8/0白 黒37/5/0白 赤2/5/0白	良好 耕作土器	
115	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 皿	4.6	0.6	—	外端部クロナ 内付輪輪 内クロロナ+ナリ	黒褐色を 多く含む	赤Y7/0白 黒10/5白 黒35/5白	良好 耕作	
116	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 皿	4.8	0.5	—	外端部一辺端部クロナ 内端部クロナ 内付輪輪 内クロロナ+ナリ	黒褐色を 多く含む	赤35/7/0白 黒37/5/0白 黒35/5/0白	良好 耕作	
117	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 青磁碗	12.3	4.2	4.9	外端部クロナ 内付輪輪 内クロロナ+ナリ	黒褐色を 多く含む	赤35/8/0白 黒37/4/0白 黒35/5/0白	良好 耕作土器、 鐵器(吉田編1-5)	
118	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 青磁碗	6.6	0.3	—	外端部クロナ 内付輪輪 内クロロナ+ナリ	黒褐色を 多く含む	赤35/7/0白 黒37/5/0白 黒35/5/0白	良好 耕作土器、 鐵器(吉田編1-5)	
119	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 白磁碗	14.3	4.4	5.5	外端部クロナ 内付輪輪 内クロロナ+ナリ	黒褐色を 多く含む	赤35/8/0白 黒37/5/0白 黒35/5/0白	良好 耕作半分の底跡、 口元?	
120	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 白磁小皿	7.3	—	4.1	口付0 1/4	黒褐色を 多く含む	赤35/8/0白 黒37/5/0白 黒35/5/0白	良好 中?	
121	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 小杯	3.2	0.1	—	外端部クロナ 内クロロナ+ナリ	黒褐色を 多く含む	赤Y7/1白 黒10/5白 黒35/0白	良好 耕作(吉伊万里)	
122	1区	1-1区	SD1003	SD1003	陶器 水滴	—	0.9	—	小片	黒褐色を 多く含む	赤35/7/0白 黒37/5/0白	良好 耕作	
123	1区	1-1区	SD1003	SD1003	瓦 平瓦	14.8	24.3	24	2/3	白ナナ 四ナナナナ?	石片赤	赤35/7/0白 赤37/7/0白	良好 良好
124	1区	1-1区	SD1003	SD1003	瓦 軒瓦	11.0	6.0	0.0	—	黄	赤35/7/0白 赤37/7/0白	良好 良好	

第28表 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(6)

件数 番号	調査区 本報告調査時	通 稿 番 号 本報告 調査時	器種	法 形 (形状) 寸法 (mm) 底径 (mm) 高さ (mm) 底大径 (mm)	残存 率 (%)	成 形・ 調 整	胎 土	色 調	焼 成	備 考
125 1区 1-I区 SD1003 SD1003	瓦 平瓦	16.0 13.9 2.0	凸ナギ 凹板ナギ	石片	外244-08K 内253-08K	良好				
126 1区 1-I区 SD1003 SD1003	瓦 平瓦	27.6 9.7 2.0	凸ナギ 凹板ナギ/ナガニビオサエ	石片	外244-08K 内253-08K	良好				
127 1区 1-I区 SD1003 SD1003	瓦 平瓦	16.3 15.6 1.9	凸ナギリナギ 凹板ナギ/ナビオサエ	石片	外244-08K 内253-08K	良好				
174 1区 1-I区 SD1010 SD1010	土師質土器 蓋	9.6 6.3 1.5	ほぼ 完形	石片 泥炭泥	外237Y2-1 内237Y8-4 浅黄	最良	器面に剥離あり、 瓦筋有り			
175 1区 1-I区 SD1010 SD1010	土師質土器 蓋	(18.0) (6.3)	L型の 1/5	外側無平行タキ、山脚無コナギ 内底無タクナギ/凹板無コナギ	石片 灰	外244-08K 内253-08K 灰	良好	縫隙有り、 外筋に埋付有		
176 1区 1-I区 SD1010 SD1010	土師質土器 皿	(6.4)	6.7	外底無 内底無タクナギ/凹板無コナギ	石片 灰	外237Y6-4 内237Y6-2 灰	良好	縫隙有り、 内底全周、 外筋口部一帯上部に 埋付有		
177 1区 1-I区 SD1010 SD1010	瓦質 羽釜	21.0 6.1	1/8	外底無→口部基部コカグ 内底無→1/3底板コナギ	石片 灰	外247-08K 内254-08K	良好	白縫隙から、 瓦上部全体外周の 一部に剥離有		
178 1区 1-I区 SD1010 SD1010	土師器 蓋	(29.0) (3.8)	1/6	外底無コナギ/ナビオサエ、 内底無タクナギ/凹板無コナギ	石片 灰	外237Y5-6 内237Y5-4 灰	良好	外底口部に剥離有		
179 1区 1-I区 SD1010 SD1010	土師質土器 蓋	61.0 6.6	1/5	外底無コハラ(高さ)、 内底無タクナギ/凹板無コナギ	石片 灰	外237Y2-2 内237Y8-3 浅黄	不良			
180 1区 1-I区 SD1010 SD1010	瓦器 小皿	7.7 3.6 1.4	4/5	斜面部-底面にオサヘル、 口縁無タクナギ/凹板無コナギ 内底無タクナギ、1/3底板コナギ、 底部無ハラ(高さ)、 内底無タクナギ/凹板無コナギ	石片 灰	外242-08K 内253-08K	良好	斜面部-外周に縫隙有り、 瓦上部有り		
181 1区 1-I区 SD1010 SD1010	瓦器 輪	16.0 3.8 4.3	3/5	外底無コハラ(高さ)、 口縁無タクナギ、1/3底板コナギ 内底無タクナギ、底部コナギ/ ユカリコサエ	石片 灰	外237Y4-1NC 内237Y5-1NC	良好	高張度、 高底差、輪厚1-2mm、 外周に輪み有		
182 1区 1-I区 SD1010 SD1010	磁器 合子盤	(4.3)	1.1	小片	外-門脇端面無タクナギ、輪付け、輪筋 内-ローラー、踏板	灰 灰 灰	外238-08K 内238-08K 灰 灰 灰	良好		
183 1区 1-I区 SD1010 SD1010	須恵器 高台杯	61.2 1.7	底径の 1/4	外底無コナギ、 内底無タクナギ、 輪台無 内底無タクナギ	石片	外237Y1-1灰 内237Y1-1灰	良好			
184 1区 1-I区 SD1010 SD1010	須恵器 こね鉢	(27.1)	5.2	1/8	外-底部第一回輪端面コナギ 内-底部-口縁端面コナギ/ナギ 内-底部無タクナギ	石片 灰	外236-08K 内236-08K	良好	米字形、重ね引き出	
185 1区 1-I区 SD1010 SD1010	須恵器 こね鉢	(27.0)	4.8	1/6	外-底部-口縁端面コナギ 内-底部タクナギ/凹板無 1/3底板コナギ	石片 灰	外237Y1-0白 内237Y1-0白	良好	縫隙有	
191 1区 1-2区 SD1015 SD1015	土師質土器 皿	10.0 6.6 2.0	1/3	外底無-口部基部コナギ、 内底無-安全穴-口縁端面の 輪筋が 不規則な凹凸、 内底タクナギ、底部タクナギ	石片 灰	外237Y2-0白 内237Y8-0白 浅黄	良好			
192 1区 1-2区 SD1015 SD1015	土製品 輪の削り	5.0		外-ナギ/ナギ 内-ナギ	石片 灰	外235Y1-0白 内236-08K	良好	外周の一帯に縫隙有り、 底に小片一つ有		
193 1区 1-I区 SX1001 SX1001	土師質土器 小皿	7.4 4.6 1.3	1/6	外底無コナギ、底面無輪筋/切欠 内底無タクナギ、底部タクナギ	石片 灰	外237Y8-3 内237Y8-3 浅黄	良好			
194 1区 1-I区 SX1001 SX1001	土師質土器 皿	6.0 4.0	1/2	外-各部-口縁端面切欠/凹板無 内-底部コナギ/凹板無	石片 灰	外237Y8-3 内237Y8-3 浅黄	良好			
195 1区 1-I区 SX1001 SX1001	土師質土器 小皿	(3.8) (6.6) 1.4	2/5	外-各部-口縁端面コナギ、 内底無タクナギ/凹板無 内底無タクナギ/凹板無 底部コナギ/ナギ	石片 灰	外237Y3-3 内237Y3-3 灰 灰 灰	良好	全体に丁寧な仕上げ		

第29表 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品(7)

周数	調査区	遺構番号	器種	法身(cm)	既存	成形・調整	粘土	色調	焼成	備考
香川	木暮井	底走時	本報告	調査時						
196	1区	1-1区 SX1001	SX1001 十脚金十型 高台付皿	(5.2) (1.2)	1/4	外表面ヨコテ、裏面横付(ヨコナ) 内表面ヨコナ	百万赤	外25/25-6 内25/25-6 内25/25-6	良好	
197	1区	1-1区 SX1001	SX1001 上部質土器 皿	(6.2) (1.1)	1/6	外表面ヨコテ、裏面側面切削/ ハガニス(直筋)、内表面ヨコナ 内表面ヨコテ、裏面ヨコナ	石井赤	外30/30-2 内30/30-2 内30/30-2 内30/30-2	良好	
198	1区	1-1区 SX1001	SX1001 十脚金十型 杯	(8.0) (1.3)	1/3	外表面側面切削/ハガニス 内表面	百万赤	外40/40-4 内40/40-4 内40/40-4 内40/40-4	良好	
199	1区	1-1区 SX1001	SX1001 十脚金十型 杯	(8.0) (1.4)	1/6	外表面ヨコナ(ナ)、裏面側面切削/ ヨコナ	百万赤	外30/30-3 内30/30-3 内30/30-3 内30/30-3	良好	
200	1区	1-1区 SX1001	SX1001 上部質土器 杯	(9.2) (3.2)	1/9	外表面ヨコテ、裏面ナ 内表面ヨコナ	石井赤	外25/25-6 内25/25-6 内25/25-6 内25/25-6	不良	
201	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 小皿	(8.8) (2.6)	1/5	外表面ヨコナ(ナ) ナ、口部横付ヨコナ 内表面ヨコテ、口部横付ヨコナ	石井、 黒井 黒井	外NA/5赤 内NA/5赤	良好	和泉型
202	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 小皿	(9.4) (1.9)	1/5	外口部横付ヨコナ 内表面一辺横付ヨコナ、底基ナ	石井赤	外25/25-4 内25/25-4 内SYNE-4 内SYNE-4	良好	和泉系和泉
203	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 碗	(11.0) (2.7)	1/6	外表面ヨコナ(ナ) ナ、口部横付ヨコナ 内表面ヨコテ、口部横付ヨコナ	石井赤、 黒井	外25VS-5/15 内10VS-5/15	良好	和泉型
204	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 碗	(9.6) (2.4)	1/10	外表面ヨコナ(ナ) ナ、口部横付ヨコナ 内表面ヨコテ/ ハラギナ、口部横付ヨコナ	石井、 黒井	外25VS-10/10 内25VS-10/10	良好	和泉型
205	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 碗	(12.2) (2.4)	1/8	外表面ヨコナ(ナ) ナ、口部横付ヨコナ 内表面ヨコテ/ ハラギナ、口部横付ヨコナ	石井、 黒井	外25VS-10/10 内25VS-10/10	良好	和泉型
206	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 機	(12.2) (2.5)	1/8	外表面ヨコナ(ナ) ナ、口部横付ヨコナ 内表面ヨコテ/ ハラギナ、口部横付ヨコナ	石井、 黒井	外25VS-10/10 内SYNE-10/10	良好	和泉型
207	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 機	(14.6) (2.5)	1/8	外表面ヨコナ(ナ) ナ、ヨコナ(ナ)、裏面ヨコナ 内表面ヨコテ/ ヨコナ(ナ)、裏面ヨコナ	石井、 黒井	外25/25-6 内25/25-6 内SYNE-3 内SYNE-3	良好	和泉系和泉型
208	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 機	(16.2) (3.8)		外表面ヨコナ(ナ) ナ、口部横付ヨコナ(ナ)、ヨコナ(ナ) 内表面ヨコテ/ ハラギナ、口部横付ヨコナ	石井赤	外25/25-5 内25/25-5 内10VS-3 内10VS-3	良好	和泉系和泉系和泉
209	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 機	(4.9) (1.2)	1/3	外表面ヨコナ(ナ) ナ、裏面ヨコナ(ナ) 内表面ヨコテ/ハラギナ	石井、 黒井	外25VS-2/25 内25VS-2/25 内SYNE-2/25	やや 不良	二次加熱受けたか?
210	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 小皿	(9.0) (2.0)	1/5	外表面ヨコナ(ナ) ナ、口部横付ヨコナ 内表面一辺横付ヨコナ(ナ)	石井、 黒井	外NA/5赤 内NA/5赤	良好	和泉型
211	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 碗	(4.4) (1.0)	1/4	外表面ヨコナ(ナ) ナ、裏面ヨコテ/ハラギナ	石井、 黒井	外25/25-3 内25/25-3 内ヨリ5	良好	和泉型
212	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦器 机	(5.2) (0.9)	1/8	外表面ヨコナ(ナ) ナ、裏面ヨコテ/ヨコナ(ナ) 内表面ヨコテ/ハラギナ	石井、 黒井	外NA/5赤 内NA/5赤	良好	和泉型
213	1区	1-1区 SX1001	SX1001 土器 土鍋	(31.0) (6.3)	1/10	外表面ヨコナ(ナ) ナ、ヨコナ(ナ)、裏面ヨコナ 内表面ヨコテ/ハラギナ	石井赤	外30/30-4 内30/30-4 内30/30-4 内30/30-4	良好	外陶コ付青
214	1区	1-1区 SX1001	SX1001 上部質土器 土鍋	(9.0)	1/6	外表面ヨコナ(ナ) ナ、ヨコナ(ナ)、裏面ヨコナ 内表面ヨコテ/ハラギナ	石井赤	外30/30-4 内30/30-4 内30/30-4 内30/30-4	良好	当面下半導月差
215	1区	1-1区 SX1001	SX1001 瓦質 脚付皿	(19.0) (3.1)		外表面ヨコナ(ナ) ナ、ヨコナ(ナ)、裏面ヨコナ 内表面ヨコテ/ハラギナ	石井、 黒井	外NA/5赤 内NA/5赤	良好	外陶系和泉